ＩＳ　―イノウエ　シンカイ―

七四

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　―イノウエ　シンカイ―

【Ｎコード】
Ｎ０１８３Ｗ

【作者名】
七四

【あらすじ】
ＯＲＣＡ旅団Ｎｏ．５、真改。
最初の五人の一人。

多くの人々を犠牲にして人類の未来を開く計画、クローズ・プランを先導する革命家、マクシミリアン・テルミドールの護衛として最後の戦いに挑んだ彼は、多くの未練を残したまま散った。

その未練故か異世界に生まれ変わった彼は、今度こそ悔いなく生き

るために、再び戦うことを決意する。

――世界最強の兵器、ＩＳ（インフィニット・ストラトス）のパイロット、「井上真改」という名の少女として。

プロローグ　終止（前書き）

皆さん、はじめまして。
タイトルから液体を操る力を持つ尽くすタイプの彼を想像した方はごめんなさい。
私、あのゲームやってないんです…。いずれ手を出そうと思ってるんですが…。
この作品の主人公は、作中で４文字しか台詞がないクセに何気に熱い設定を持つ方の彼です。
真改さんのことはＡＣシリーズの中でも特に大好きなんですが、私自身小説を書くのが初めてなこと、原作内の彼が極めて無口な剣豪以外にキャラがほぼ不明なことなどから、「こんなの真改さんじゃねぇ！！」と感じる方も多いとは思いますが（真改さんに限った話ではありませんが）、大目に見ていただけると助かります。
それでは、楽しんでいっていただけると幸いです。

プロローグ　終止

「お前たち、やはり、腐っては生きられぬか」

通信機越しに聞こえる声。

傍らに立つ、巨大な機械仕掛けの鎧を身に纏った男の声。

人類の未来を守るため、現在の人間に犠牲を強いる道を選んだ男の声。

己（おれ）が、守ると誓った男の声。

静かな、しかし様々な想いの込められたその声を聞き、真改は一歩、踏み出した。

――――アルテリア・クラニアム。

汚染された世界から逃れるため人類が移り住んだ、空に浮かぶ揺り籠（クレイドル）にエネルギーを供給するための、巨大な施設。

世界を緩やかに破滅させる猛毒を垂れ流す、人類の罪の具現。

クラニアムに着いたのは、自分達が先だった。

人類の黄金の時代のため、ここを制圧、破壊しようとした矢先に、来客が二人、訪れた。

――――邪魔が入った、とは思わない。

何故ならばその二人は、自分達にとって、クラニアム以上に重要な標的だからだ。

もっとも、自分と相棒は、目的としている相手が違う。彼の相手は、真鍮の乙女（ブラス・メイデン）。かつては友人であり、今では決定的に道を違えた彼女とは、自らの手で決着を付けると、そう言っていた。

ならば彼の邪魔をさせぬことが、彼の剣たる己の役目であり。

真鍮の乙女（ブラス・メイデン）の戦友であるカラードのリンクスとの戦いは、己が望む

ことでもあった。

――かくして。四機の最強（ネクスト）にして最悪の兵器による、人類の未来を賭けた戦いが幕を開けた。

――――――――――

アサルトライフルから撃ち出された弾丸を、クイックブーストで避ける。

避けた先に回り込むように放たれたミサイルを、マシンガンで撃ち落とす。

――強い。

黒いネクスト、ストレイドとの戦いを始めてから数分。

真改は、追い込まれていた。

ストレイドは、中量級二脚機にアサルトライフルとミサイルを装備した、バランスの良い機体だ。

機動力に優れ、装甲もある程度の攻撃には耐えられる。

武装は命中率を重視し、火力不足はアサルトアーマーで補う。

あらゆる戦況、あらゆる相手に対応できる、良く言えば万能、悪く言えば器用貧乏なその機体を、カラードのリンクスは完璧に使いこなしていた。

対する真改の操るネクスト、スプリットムーンは、完全な接近戦特化型だ。

ストレイドと同じ中量級二脚機だが、継続的な機動力よりも短距離、短時間の瞬発力に優れ、武装は牽制用のマシンガン、撹乱用の閃光

弾、そして一撃必殺の威力を持つレーザーブレード。
この機体を見て接近戦を挑んで来る者はまずいない。いるとすればそれはただの阿呆か、スプリットムーンと同じ接近戦特化型の機体を操る者である。
そのどちらでもないカラードのリンクスは、距離をとっての射撃戦に徹していた。
真改にとっては圧倒的に相性の悪い相手。それでも彼は、勝てると考えていた。
己の実力を過信していた訳ではない。彼は自分の非才を十分に理解している。
だからこそ、近付いて斬る、ただそれだけを磨き上げ、他の一切を切り捨てて来た。
その真改にとって、アルテリア・クラニアムという戦場は己に地の利があった。
空のない、限定された空間。さらに、施設内の様々な大型装置が自由な機動を邪魔する障害物となる。
それらに気を取られ、僅かでも動きが遅れれば、その隙に一息に間合いを詰め、斬り伏せる――
それを為すだけの能力が、己とスプリットムーンにはあると、歴戦の猛者である真改は知っていた。

――だが。

「ッ……！」
ミサイルの爆炎を目眩ましに飛来したアサルトライフルの弾丸が、スプリットムーンの装甲を抉る。
即座にクイックブーストを発動、反撃を仕掛けるが、ストレイドは既に剣の届かぬ距離まで後退している。
そこに叩き込まれる、アサルトライフルの連射。
――先程から、この繰り返しだ。

初めこそこちらの間合いを見切るためか、必要以上に距離をとり、命中弾も多くはなかった。しかしほんの数度の攻防で、間合いどころか機動や攻撃のタイミングまで見切られ、以降は防戦一方だ。絶え間ない被弾により、プライマルアーマーも一向に回復しない。無様に逃げ回るだけの己とは逆に、ストレイドは狭い戦場を障害物などまるで無いかのように縦横無尽に飛び回っている。

（……想像以上、か。よもや、これほどとは……）

数多のリンクスを打ち倒して来た敵を、侮っていたわけではない。ただ、この男の強さがヒトの領域を遥かに超えていただけのことである。

（……神話において、力こそ神である、か。ならば、この男は……）

だが、相手が誰であろうと、それこそ神であろうと、真改に退く気は微塵もなかった。

何故ならば。

何故ならばこの男は、己の仲間を、己の仇敵を、葬ってきた男なのだから。

――――――――――

――暴力ではなく、知力でもって戦った、若き謀略家がいた。

自分の命すら駒の一つと見ていた彼は、勝てぬと解っていながら、自ら死地に赴いた。

――理想でも、信念でもなく、友に殉じた大男がいた。

どんな時でも騒がしかった彼は、自らが捨て駒であると解っていながら、最期まで楽しそうに笑っていた。

――誰からの理解も求めず、狂気の思想を掲げた異端者がいた。
無意味な虐殺を行おうとした裏切り者だが、何ら言い訳をせず、自分の思想の為だけに生きた彼のことが、真改は嫌いではなかった。

――かつて宝石と呼ばれ、天才的な実力と気高い魂を持った女性がいた。
戦いの中に産まれ、戦いに生き、戦って死んだ彼女が、その先に何を求めていたのか、結局聞くことは出来なかった。

――若者に未来を託し、ただ一人で戦場に散った老人がいた。
彼は腐り果てて行く世界を決して見捨てることなく、年老いて猛毒に蝕まれた体で、自分達を導いてくれた。

――そして。

目的もなく、ただ与えられた仕事をこなすだけの毎日を過ごしていたころ。
己はまだ、非才を補う経験もない未熟者だった。
弱かった。
あまりにも弱かった。

――強大な敵との戦いに挑む彼女を、ただ見送るしか出来ないほどに。

数日後、彼女の武装の一部と、彼女の最後の戦いの記録が戻って来た。
遺体はない。
優れたリンクスだった彼女の体は、死してなお冒涜としか言いようのない研究に使われた。
彼女と戦い方が似ていた己に武装が引き継がれ、参考資料として戦

闘記録の閲覧を許可されたに過ぎない。

――ディスプレイ以外に明かりの無い暗い部屋の中、彼女の最期を見る。

かつては伝説的なレイブンだったというアナトリアの傭兵と、鴉殺しと呼ばれた彼女の戦いは熾烈を極めた。

お互いの機体は動くことが奇跡と言えるほどに大破しており、ＡＭＳから逆流してくる痛みは常人ならば発狂するほどのものだろう。

それでも彼らは、眼前の敵を滅ぼすべく戦い続ける。

――そして、決着。

振るわれた刃は、届くことなく。

放たれた弾丸は、無慈悲にコアを貫いた。

彼女の機体が、動きを止める。ネクストの機能停止だけでなく、搭乗者も致命傷を受けたのだろう。

一瞬の静寂。

そして、痛みを堪えるような、漏れ出しそうになった悲鳴を噛み殺すような、小さな息遣いのあと。

――彼女の、最期の言葉が紡がれた。

――――――――――

――ガシュン、と、マシンガンと閃光弾をパージする。残弾も少

なく、なにより目の前の相手にこんなものは役に立たない。
ならば、少しでも機体を軽くするために、邪魔な荷物は捨てるべきだ。

――同時に、オーバードブーストを起動。

瀕死の己とは対照的に、ストレイドはほとんど無傷と言っていい。

――独特のチャージ音が、クラニアムの一角に響く。

例え奇跡が起こりレーザーブレードを直撃させたとしても、逆転は不可能だろう。

――背部のブーストユニットに、光が収束する。

もはや、己の敗北は決定していた。もとより、己に勝てる相手ではなかったのだ。

――オーバードブーストが発動する瞬間に合わせ、クイックブーストを発動させる。

だが、それでも。

――総身を砕くほどの凶悪なGの中、歯を食いしばり、彼女の剣を起動する。

最期まで、足掻くのだ。

――我が身を顧みないその加速に、相手は一瞬、反応が遅れ。

（……せめて、一太刀……！）

――紫色の極光の刃が、黒い装甲を切り裂いた。

――――――――――

動かなくなった機体の中、霞む視界にカメラアイから直接映像が送られて来る。

真鍮の乙女（ブラス・メイデン）との決着が付いたのだろう、相棒がカラードのリンクスと戦っている。

彼女の剣はストレイドに大きな損傷を与えたが、やはり倒すまでには至らなかった。

無茶な加速の反動で動きが止まったところに反撃を受け、既にボロボロだった機体は大破。

だが最後の一撃により、相棒も多少は楽になるだろう。

（……ここまで、か……）

意識が薄れて行く。ＡＭＳによりネクストと繋がっているリンクスは、ネクストの機能停止と共に死ぬ。

今、カメラアイから送られて来る映像も消えた。己の命の灯火も、間もなく消えるだろう。

『誇ってくれ。それが手向けだ』

（……アンジェ……）

死の間際に思い浮かんだのは、彼女が最後に遺した言葉。

（……そうか。己は……）

人類の黄金の時代のため。
志半ばで倒れていった仲間達のため。
それらも決して間違いではない。

だがそれらは、ＯＲＣＡの戦士として戦ってきた理由だ。
カラードのリンクスに執着していた理由は、一つだけ。

――己は、証明したかったのか。

彼女を倒したアナトリアの傭兵。そしてそれを打ち倒した、カラードのリンクス。
彼に勝てば、証明できると思ったのだ。
剣に固執した彼女を、不可能に挑み無様に死んだ愚か者だと笑う者達に。
銃に頼らず、只管に剣を振るい続けた彼女の想いが、間違いなどではなかったのだと。
傭兵ではなく、騎士として在りたいと語った彼女の願いが、美しいものであったと。
力こそが全てのこの世界で、自らの信念を貫き通したその生き様が、尊いものであったと。
その彼女に憧れて戦い続けた己が、彼女から受け継いだ剣で人類の未来を切り開くことが出来れば――

――犬死にではなかったと。

証明できると、思ったのだ。

だが、それは叶わなかった。
この大事な局面で自らの我が儘のために戦い、しかし満足のいく結果は得られなかった。
挙げ句その尻拭いを、守ると誓った筈の相棒に押し付けることとなり、その結末すら見届けることが出来ない。

（……何も為せず、何も得られず、何も遺せず、何も守れず……）

このままでは、死にきれない。
彼女の用に、潔く逝けそうもない。
あんなにも憧れていたのに、あの背中を追い掛けて、ここまで来たのに。
彼女のそれにはまるで及ばない、惨めな終わり。
その未練が、寡黙な彼に最期の言葉を紡がせる。

「…無念…」

第1話　再誕（前書き）

ようやく出来た第1話。新生真改の、ある朝の1コマです。
真改さんのキャラはほぼ捏造、設定だけパクったオリキャラと化しております。
それでもいいという寛大な人は、ぜひ読んでいって下さい。

第1話　再誕

ふと、目が覚めた。
枕元の時計を見ると、時間は午前5時の数分前。いつもは5時に起きるので、目覚ましがなくとも習慣で起きる己（おれ）にとっては誤差の範囲である。

（……懐かしい夢を見たな……）

己がまだ「井上真改」という少女でなく、「真改」という男であったころの夢。
主観的な時間では、もう15年も前のことだ。

今日のちょっとした早起きは、昔の夢を見たことが原因かもしれない。そんなことを考えつつ、念のためにセットしてある目覚まし時計を解除する。
ベッドから起き上がり（個人的には布団の方が好みではある）、まずは今日の体調を確認する。夢の中の己の体は、爆発的な加速に耐えられるよう極限まで鍛え抜かれていたが、少女となった今の体はなんとも華奢で頼りない。
しかし今日までに風邪の一つもひいたことがないことを考えると、見掛けによらず頑丈ではあるようだ。どうやら、今日も体調になんら異常はなさそうである。
タンスを開けてジャージを取り出し、寝間着から着替える。
己の服はほとんど妹達が選んでいるのだが、白地に黒のラインが入ったジャージはともかく、薄桃色のパジャマは正直勘弁して欲しい。
己にお洒落とか言われても困る。

（……）

いつまでも考えていたって埒が開かない、もう慣れた（諦めた）ことだ、と無駄な思考を停止する。とにかく、日課を始めよう。タンスに立てかけてある竹刀袋に入ったままの木刀を手に取り外に出ると、入念な準備運動をしてから駆け出した。

――――――――――

「よう、シン。おはよう」

「……」

竹刀袋に入れた木刀を背負って走り込みをしていると、同じように木刀を背負った少年に話し掛けられた。

――織斑一夏。

己とは十年来の付き合いになる、所謂幼なじみである。

「相変わらず無口だなぁ。挨拶くらいはした方がいいぜ」

「……」

返事をしない己に構わず話し続ける一夏を無視し、再び走り出す。

いつもと変わらぬ己の様子に苦笑を浮かべ、一夏も己に続いて走り出した。

こいつはいつからか、こうやって己の鍛錬に勝手に付いて来るようになった。

やめて欲しい。

別に一夏が嫌いなわけではない。むしろこの少年の、真っ直ぐで今

時珍しいくらいに男らしいところは好感が持てる。
問題は、こいつの体質（？）にある。
――モテるのだ。異常なほどに。
こいつの魔の手（無自覚）に掛かった少女は、己達の通う学校だけでなく、周辺の他校にも多数存在する。
そのことに、本人だけが気付いていない。己と一夏の共通の友人である五反田弾などは、一夏のことを朴念神などと呼んでいたが、言い得て妙である。
そんな一夏と行動を共にし、渾名で呼ばれる己には、周囲の女子からの強烈な視線が突き刺さるのだ。話すのが苦手な己が彼女達に上手い説明など出来る筈がなく、そもそもどう説明したところで聞きはしないだろう。
数ヶ月前に祖国に戻ったもう一人の幼なじみは上手く立ち回っていたが、己にはそんな真似は出来ない。
結果己は、一夏に好意を寄せる少女達から理不尽な対応をされ、一夏がそんな己を庇い、少女達の視線がさらに凶悪になる、という悪循環が出来上がっている。そして当然、こいつは自分が元凶であることに気付いていないのだ。
今こうして二人で走っているところを一夏を知る少女に目撃されようものなら、確実に厄介なことになる。
その危険を少しでも減らすべく、最近では走り込みの開始時間をさらに早めることを割と真剣に考えている。

「俺達ももう受験だな。俺は藍越学園を受けるつもりなんだけど、シンはどうするんだ？」
「……ＩＳ学園……」

走りながらの一夏からの質問に、素直に答えた。無視してもこいつは繰り返し尋ねて来るだろう。学校で聞かれることだけは避けなくてはならないので、このタイミングで聞かれたことはむしろ幸いと

言える。

「ＩＳ学園？すごいな、シンは。剣もめちゃくちゃ強いし、シンならきっと受かるよ。」

「……」

根拠のイマイチわからない信頼を寄せてくる幼なじみに、呆れを含んだ視線を送るが、気付いた様子は皆無である。

「人気あるもんな、ＩＳ学園。女の子はみんなあそこを目指すもんなのか？」

「……」

まるで己が世間の流行に乗って進路を決めたかのような言い方。

確かにＩＳ学園には世界中から多くの受験者が集まり、倍率は凄まじいことになっている。

ＩＳは、元々は宇宙開発を目的に開発され、その戦闘力の高さから軍事転用され、今ではスポーツとしての側面が強くなっている。

また、女性しか乗れないという特殊性、ＩＳの世界大会であるモンド・グロッソの出場者達のほとんどが、実力だけでなく容姿にも優れていたことなどから、ＩＳをファッションのように、ＩＳ操縦者をアイドルのように視る風潮は、次第に強くなっている。それがＩＳ学園の受験者の増加、ひいてはＩＳ学園の生徒達の能力を更に高めることに繋がっているのも事実ではある。

だが己がＩＳ学園入学を目指す理由は、そんなミーハーなものではない。

己がＩＳ学園を受験する理由は、主に二つある。

一つは、ＩＳ学園で優秀な成績を収めれば、将来がほとんど約束されること。幼い頃に両親を失い、孤児院に引き取られて生活している己は、孤児院に恩返しがしたいと常々考えていた。アルバイトを

すると申し出たこともあったが、

「子供はそんなことを考えなくていい。今は今しか出来ないことをしなさい。その手助けをするのが私たちの仕事なのだからね」と一蹴された。論戦で己に勝ち目などあろう筈もなく、己の歳では保護者の承諾なしにはアルバイトはできないので、早々に諦めることにした。

そこで考えた次の策が、ＩＳの操縦者となることである。世界の軍事バランスそのものと言えるＩＳの操縦者には、一般人には到底得られないほどの富と名誉が与えられる。ＩＳの世界大会、モンド・グロッソで優勝でもすれば、あらゆるものが手に入るだろう。

当然、そこに至るまでの道は険しいものだ。捕らぬ狸の皮算用と笑われても仕方ないが、戦うしか能がない己には、これくらいしか思い付かなかったのだ。

もう一つは、単純に力を求めてのことだ。

なにかしらの問題があったとして、暴力でもってその対処にあたるのは愚の骨頂である。暴力は問題の根本的な解決は出来ず、それどころかさらなる問題を生み出す要因となる可能性が極めて高いからだ。

――だが、暴力に対抗できるのは、暴力だけだ。力無き者がいくら声を上げようと意味はない。

暴力でもって我欲を満たそうとする者から大切なものを守るためには、相手を超える暴力が必要となる。

そしてこの世界における最大の暴力は、言うまでもなくＩＳである。かつて自身の無力により大切なものを失った己が、それでも尚無力でいるなど許されない。

ＩＳという「力」は、必ず手に入れなければならないのだ。

――だがここで、一つ大きな問題がある。

並走する一夏に気付かれないよう、そっと視線を落とす。
走るリズムに合わせて揺れる、ジャージの左袖。
その中には、本来あるべきものがない。

（……こんな体で、どこまでやれるものか……）

一夏はこの話題になると、途端に元気をなくすのだ。これは己が勝手にやったことの結果であり、一夏が気に病むことではないと繰り返し言ってはいるが――

――そんな言葉に頷くような輩ならば、初めから罪悪感に苛まれはしない。

（……これも、己の無力が招いた結果か……）

思えば、剣道を学んでいる一夏が稽古に一層熱を入れ始めたのも、己が左腕を失ったころだ。
まるで自らを罰するかのように稽古に打ち込む姿には鬼気迫るものがあり、剣の腕も異常な速度で上達している。
普段は普通にしているが、見えないところでどれだけ無茶な鍛錬をしているか、わかったものではない。

『俺、強くなるから。シンのことも、千冬姉のことも、みんなのことも守れるくらいに、強くなるから』

病院のベッドに臥せる己の隣で、懺悔するように紡がれた、誓いの言葉。
一夏が己の鍛錬に付いて来るのは、己を守るには己よりも強くなら

なくてはいけないと思っているからなのかもしれない。
あまりに純粋で優しい、この少年らしい思いではあるが、己には一つ、懸念がある。

――お前の言う「みんな」とは、どれだけの人々を指しているのか。

全てを守ることなどできはしない。
己を倒した男も、あれほどの圧倒的な力を持っていながら、「現在」を守るために「未来」を生贄に捧げた。
どれほどの力があろうと、全てを守ることは不可能だ。
だが一夏は、それを本気で目指しているように見える。
そして、不可能を追い続けた者の末路を、己は――

『――誇ってくれ――』

「――ン？おい、シン！！」
「ッ……！」

焦ったような声で、意識を現実に引き戻される。
目の前には、心配そうな幼なじみの顔。

「大丈夫か？どうしたんだよ、突然ぼーっとして。なんか顔色も悪いし、今日はもう切り上げて――」
「……無用……」

――不覚。
一夏に呆けた顔を見られた、ことではない。
己は今、「彼女」のことを――

「ッ……！」

頭を振り、先程の考えを掻き消す。
己の「彼女」に対する思いは、今もなお微塵も色褪せてはいない。
あの頃と変わらず、己は「彼女」の背中を追い続けている。
銃弾やミサイル、レーザーが飛び交う戦場を、剣でもって切り抜けてきた「彼女」。
時代遅れの戦い方にこだわり続け、傭兵でありながら決して企業に媚びることなく、自らの魂にのみ従った「彼女」の人生に憧れ、己は剣を振り続けている。
しかし五体満足でも「彼女」の足下にも及ばない己が、片腕で「彼女」に追い付くことができるのか。
そんな不安が、「彼女」を侮辱するような考えを呼び起こした。

（……ふざけるな……）

左腕のことは後悔していないなどと言いながら、こんなにも未練があるではないか。
そんなものは何の役にも立たない。
悩む暇があるのなら、失った左腕を補うだけの鍛錬をしなければならないというのに。

（……何を、弱気になっている……）

かつて自分達が駆ったものとは似て非なる未知の兵器に片腕で挑むことが、そんなにも恐ろしいか。
嵐の様な銃撃にも臆することなく切り込んだ己が、なんたる体たらく。
屈強な肉体を失った今、精神すらも錆び付けば、己に何が残ると言

うのだ。

無様な最期を迎えた昔の夢を見たせいか、どうにも思考が悪い方に流れてしまう。

――こういう時は、走るに限る

「……競争……」

「へっ？て、おいちょっと待て、卑怯だぞシン――――！！！」

目的地は、毎朝素振りをするのに使っている公園。

自らを叱咤するべく、いまだに心配そうな顔をしている一夏を置き去りにして、全力疾走を開始した。

第1話　再誕（後書き）

真改さんの背負うハンデは、全開だと少し強すぎると思ったからです。
なにせ本人は参加していないとはいえ、たった２６機で世界中の国家を解体した兵器のパイロットだったわけですから。
彼女が一夏くんと一緒にＩＳ学園に入学するのは、もう少し先です。

第2話　ある朝のこと（前書き）

第2話は、1話の一夏視点です。
一夏から見た真改さんは、無口でカッコいい剣士。
コミュニケーション能力皆無な真改さんと、立てた旗の数も折った旗の数も天下一の一夏くんは、もしかしたら結構いいコンビかもしれません。

第2話　ある朝のこと

「よう、シン。おはよう」
「……」

日課である早朝のランニングをしていると、俺と同じように走る幼なじみの姿を見つけた。
俺の挨拶に一瞥をくれただけで返事もせずに走り続けるこの少女の名は、井上真改。
重要文化財に指定されるほどの大業物を鍛え上げた、江戸時代の刀工と同じ名前である。
彼女の親が一体何を考えて娘にそんな名前を付けたのかはわからないが、この寡黙で質実剛健を地で行く少女には似合っているように思う。

「相変わらず無口だなぁ、挨拶くらいはしたほうがいいと思うぜ」
「……」

初めて出会ってからの１０年間、何度も言い続けて来たことだが、いまだにこいつから「おはよう」と言われたことはない。
変わらない幼なじみの様子に苦笑を浮かべて、結構なペースで走り続ける背中を追い掛ける。

真改は、俺こと織斑一夏の幼なじみであり、俺は彼女のことをシンと呼んでいる。
背は俺より少し低いくらいで、同年代の少女の中では高めだ。
体つきは華奢だが、猫科の猛獣のような瞬発力を秘めている。
腰まで真っ直ぐに伸びた綺麗な黒髪を本人は邪魔に思っているが、彼女の妹達により、いまだに切られることなく良く手入れされてい

る。
整った顔立ちに、刃のような鋭い眼差しが印象的で、十分美少女と言える容姿なのだが、その寡黙に過ぎる性格からか浮いた話は全く聞かない。

「俺達ももう受験だな。俺は藍越学園を受けるつもりなんだけど、シンはどうするんだ？」
「……ＩＳ学園……」

正直答えが返ってくるとは思ってなかったが、答えの内容そのものはそれほど意外なものではない。
ＩＳ学園は女子に非常に人気があり、剣士として並外れた技量を持つシンが、それを活かすためにＩＳ操縦者を目指すのは自然な流れだろう。

「ＩＳ学園？すごいな、シンは。剣もめちゃくちゃ強いし、シンならきっと受かるよ」
「……」

そう、シンは強い。
俺は小学生の時に学んでいた剣術を一旦は辞めたものの、中学生になってから改めて剣道部に入った。俺と千冬姉にはシンとはまた違った事情で両親がいないが、第１回モンド・グロッソ優勝者である千冬姉のおかげで、経済的にはかなり恵まれている。
いずれ自分の力で金を稼げるようになるために卒業後の就職率が高い藍越学園を受験するが、今は自分の目的のため甘えさせて貰っている。
人一倍鍛錬に打ち込んで来た自負はあるが、才能にも恵まれていたのだろう。去年と今年、剣道の全国大会で二連覇を果たし、高校生相手でもそうそう負けはしない。

それでも、シンにはまるでかなわない。
毎日のように打ち合いをしているが、まだ一度も勝てていない。
シンは千冬姉と並ぶ、俺の目標の一つなのだ。

「人気あるもんな、ＩＳ学園。やっぱり女の子は、みんなあそこを目指すもんなのか？」
「……」

やっぱり返事をしないシンに一方的に話し掛けながら、陸上選手もびっくりなスピードで走り続けるシンに付いて行く。

（まったく、そんな細っこい体のどこにそんなスタミナがあるんだよ）

俺の目標であり、憧れでもあるシンが、世界最強の兵器であるＩＳを学ぶため、ＩＳ学園を受験する。
嬉しくないわけではない。シンが自分の望みを話してくれることなど、滅多にないのだから。

――だが。

（どんどん遠くに行っちまうなぁ）

ＩＳは、女性にしか反応しない。
男である俺には、どう足掻いたところで動かせはしない。世界を変えるほどの最強の力、それを俺は、決して手に出来ないのだ。

（シンを守るって大口叩いといて、情けねえなぁ……）

追い続けた目標が、絶対に手の届かないものとなった。目標は高い

方がいいとは言うが、ものには限度ってものがある。
だがそれでも、諦めるつもりはない。
シンがＩＳ学園を目指すのは、予想していなかったわけではないし、なによりも――

――その程度で折れるほど、柔な決意をしたつもりもない。

俺は俺にやれることをやるだけだ、その内希望も見えてくるさ、と、自分でも楽天的と思うことを考えていたら、ふと、シンがどこか上の空なことに気付いた。
心なし、表情もいつもより険しい。

「シン？おい、シン！！」
「ッ……！」

心配になって顔を覗き込むと、珍しく驚いたようなするシン。

――ちょっと可愛い、と思ったのは秘密だ。

「大丈夫か？どうしたんだよ、突然ぼーっとして。なんか顔色も悪いし、今日はもう切り上げて――」
「……無用……」

心配はいらない、ということだろうか。
シンはほとんど喋らないし、喋ってもかなり短いが、それだけで大体の意味は通じる言葉を口にする。
一言で足りる場面でしか話さないとも言うが。

とにかくいつもの様子に戻ったシンは、

「……競争……」

と呟くと、突然ダッシュを開始した。

一瞬呆ける俺。

そして、今の言葉をようやく頭が理解した。

「へ？て、おいちょっと待て、卑怯だぞシン――――！！」

目的地は恐らく、いつもの公園だろう。

そこで素振りをしてから再び走って帰る、というのが、いつもの朝の流れである。

若干フライング気味に走りだしたシンを慌てて追い掛けながら、俺の顔は自然と笑っていた。

剣の技量では足下にも及ばないが、純粋な体力勝負で女の子に負けるなど、男の意地（プライド）が許さない。

（絶対に、勝つ！！）

体も大分温まって来た。

ここはひとつ、全力勝負といこうじゃないか――――！！

――――――――――

（４９８、４９９、５００、５０１、５０２、……）

シンとの競争のゴール、名前も知らない小さな公園に着いた俺達は、

それぞれが背負っていた竹刀袋から木刀を取り出し、素振りを始めた。
先ほどの競争は、僅差でシンが勝った。
シンはフライングしたからな、同時に走り出してれば俺が勝ってた、と男らしくない言い訳はしない。しないったらしない。
俺が使う素振り用の木刀は特注品で、芯に鉛が仕込んであり、かなり重い。
これを使い始めたころはふらついていたが、慣れた今は普通に振れるようになった。
部活の仲間が俺を化け物でも見るような目で見るようにもなった。

（６２２、６２３、６２４、６２５、６２６、……）

黙々と素振りを続けながら、ちらりとシンを見る。
シンが使っているのは普通の木刀だが、女の子の細腕、それも片腕で振るには十分重いはずだ。
だがその切っ先には微塵もブレはなく、見事な剣閃を描いている。
素振りひとつとってみても、技量の違いがこれほどはっきり出る。
シンに追い付くのは、まだ遥か先のことになるだろう。

（７０４、７０５、７０６、７０７、７０８、……）

眩い朝日が、二人しかいない公園を照らす。周囲の家からは少しずつ朝の生活音が聞こえ始め、木刀が風を切る音に混ざる。
実に清々しい朝。今日は、きっと良く晴れるだろう。

（……８００、８０１、８０２、８０３、８０４、……）

一振りごとに鋭く息を吐き出し、必殺の意思を込める。
素振りをする際には剣の軌跡や足運びだけでなく、一振りに込める

気迫こそが重要だ。
どんなに上手いフェイントも、そこに殺気がなければ達人相手には容易く見切られる。
命を懸けた遣り取りでは、お互いの体力、技術、そして精神が勝敗を分けるのだ――
というのが、シンからの受け売りである。

（９０８、９０９、９１０、９１１、９１２、……）

両腕はもうパンパンで、握力も限界が近い。
歯を食いしばりながら素振りをする俺とは対照的に、シンは相変わらずの無表情だ。

――いや、良く見ると、その口元が、ほんの少しだけ緩んでいる。
十年の付き合いがある俺でも、どうにかわかる程度の表情の変化。
これがシンの笑顔であり、彼女が笑うのは剣の稽古をする時と、彼女が育てている花壇の世話をするときくらいだ。
無口・無表情・無愛想の三拍子が揃っているのが、井上真改という少女なのである。

「……１０００！ぶはぁ、どうだ、ようやくこいつを千回振ったぞ！！」
「……次は二千……」
「ドＳ（スパルタ）ですね真改さん！？」

特注品の木刀を千回振ることは、シンからの宿題である。
数ヶ月前にこの木刀を作ったとき、シンは感触を確かめるように一回振ると、ぼそりと

「……千回振れ……」

と言ったのである。

正気かコイツ、とも最初は思ったが、いざ初めてみると振れる回数がみるみるうちに多くなり、同時に腕も引き締まって行った。

そして今日、念願の宿題達成と相成ったわけだが、真改先生は褒めるどころかさらなる宿題を出して来た。

（この調子で一万回振れとか言い出さねぇだろうな……）

シンなら言いかねない。彼女は割と精神論者なのである。

「さてと、もういい時間だし、そろそろ戻ろうぜ」

「……」

俺はこれから帰ってシャワーを浴び、朝食を作って食べ、学校に行く準備をしなくてはならない。

シンは料理はしないし出来ないが、毎朝花壇の手入れをしている。

彼女が住む孤児院の花壇はそれなりの広さがあって見事に花が咲いており、近所では評判になっている。

当然、手入れにはそれなりに時間を掛けるので、あまり帰るのが遅くなると学校に間に合わなくなる。

「よい、しょっと」

疲労からかいつも以上に重い木刀を竹刀袋にしまうと、背中に背負って走り出す。

息は多少荒いが、来たときよりも速いくらいのペースでしばらく走り、いつもの場所でくるりとシンの方を向き、

「じゃあ、また学校でな」
「……」
いつもの別れの挨拶をして、それぞれの家に帰って行った。

第2話　ある朝のこと（後書き）

真改さんが花を育ててる理由はまたいずれ。
次回はＩＳ世界における真改さんの初陣です。

第3話　入試（前書き）

真改の入学試験。
試験会場については捏造です。

第3話　入試

「……すげぇ大きさだな」
「……」

己と一夏が並んで見ているのは、本日それぞれが受験するＩＳ学園と藍越学園、その他多くの学校の入学試験が行われる多目的ホールである。
なぜこんなにも巨大な場所を用意する必要があったのかは不明である。
まず目的の試験会場に辿り着くことが第一の試験とでも言うのか。

「うし、じゃあ行くか。お互い、頑張ろうぜ」
「……」

試験前最後の１ヶ月間は朝の鍛錬をせず、お互いの勉強に集中していた。
もっとも己は実技試験があるので、その訓練は続けていたが。
そして一夏も、１ヶ月も鍛錬を削って作った時間を無駄にすることなく猛勉強を続けていた。

「……一夏……」
「んぁ？」

流石に緊張しているのか、どこかそわそわしている様子の一夏に声を掛ける。
己に名前を呼ばれたことがそんなに意外だったのか、間抜けな声を出す一夏に向けて、拳を突き出す。

「……勝ってこい……」
「……ああ！！」
ガツン、と互いの拳をぶつけ合い、それぞれの会場へ歩いて行った。
――――――――――
（……ここか……）
手元の試験案内と目の前の扉のプレートを見比べる。
己が今日受けるのは実技試験。
筆記試験は先日済ませており、手応えも十分だ。
生まれた時から精神的に成熟し、コツコツと勉強を続けていた己からすれば当然の結果ではある。
ネクストのパイロット、リンクスにも、ＩＳのそれに匹敵する知識が求められるのも理由の一つだ。
扉のノブに伸ばした掌にうっすらと汗が滲んでいるのを見て、自分が柄にもなく緊張していることを知る。
（……一夏のことは言えんな……）
深呼吸をひとつしてから、扉をノックする。
「……入ります……」
面接試験ならば絶対にＮＧな声で断りを入れ、ガチャリ、とノブを

回して扉を開けた。

「あ、受験生の子？それじゃあ、向こうで準備して。すぐに試験が始まるから、急いでね」

「……」

受付と思われる女性に言われるまま、準備を始める。

中学校の制服からＩＳスーツに着替え、起動準備状態のＩＳ、打鉄に向き合う。

打鉄は、日本のＩＳ開発業者、倉持技研が開発した第二世代型量産機だ。

防御重視のバランスの取れた性能に、様々な距離と状況に対応出来る充実した武装。

クセがなく扱い易いので、ＩＳパイロットの育成を主に世界中で使われている、デュノア社製のラファール・リヴァイブと並ぶ名機である。

己も何度か乗る機会に恵まれてはいるものの、本格的に動かすのは今回が初めてだ。

打鉄に乗り込み、機体に背中を預ける。

かしゅ、という空気の抜けるような軽い音と共に、装甲が体に密着する。

パワードスーツであるＩＳは、パイロットの体に連動して動く。当然、左腕のない己は打鉄の左腕を動かすことはできない。

――実技試験の内容は、ＩＳ学園の教官と戦うこと。

『なるほど、適性はあるようだな。

――認めよう。

今この瞬間から、君はリンクスだ――――』

かつて、異世界における最強の兵器、ネクストを操っていた己の、生まれ変わってから最初の戦いが始まる。

――――――――――

「始まる、な」

ＩＳ学園の試験会場を一望できる採点者席から、これから始まる戦いの様子を眺める。

対戦カードは、私の後輩にして元日本代表候補生、山田真耶と、私の実の弟、織斑一夏の幼馴染みである、井上真改。

山田君の実力は良く知っているが、井上については未知数だ。

井上に初めて会ったのは十年前。親のいない私達姉弟は孤児院経営者の唐沢さんに招待され、私はそれを受けた。

一人で一夏を育てる決意をした私は、一夏を親のいない子供達と触れ合わせて一種の情操教育をすると同時に、一夏を育てていくためのアドバイスをしてもらおうと考えたのだ。

唐沢さんは世間を知らない小娘の身の程知らずな決意を笑うことなく、むしろその思いに真摯に応え、将来に向けた様々な助言をくれた。

余裕を無くし、触れたもの全てを切り裂く抜き身の刀のようになっていた当時の私にとって、その数時間の会話はまさに救いだった。

「今日はありがとうございました」
「こちらこそ、また来てくれると嬉しいな。若い子の話はすごく参考になるし、楽しいからね」

孤児院の玄関を開けると、夕暮れの中、元気にはしゃいでいる子供達の姿。
両親を失い、行き場を見失って心に深い傷を負った幼い子供達が、あんなにも楽しそうに笑っている。
人の心を癒やすことがどれだけ難しいか、私は身を持って知っている。
あの子達の傷も完全に癒えたわけではないだろうが、ああして笑えるというだけで、その成果は素晴らしいものだ。

と、そこで、孤児院前の広場の一角にある花壇で土いじりをしている、弟と同じくらいの歳の黒髪の少女を見つけた。

自分でも、その子に何を感じたのかはわからない。だが、なんとなく気になったのだ。

「あの子は井上真改。先月、交通事故で家族を亡くしてね。うちで引き取ったんだ」

広い花壇を、時折肥料を混ぜながら、小さな手に持った熊手で一心に耕しているその少女に、何を感じたのか。
私は、思い切って声を掛けてみることにした。

「こんばんは」
「……」

返事がない。

無視されているわけではなく、少女は一旦手を止めてこちらを一瞥してから、視線を戻してまた土いじりを始めた。

「ええっと……。
私は、織斑千冬という。君の名前は？」
「……」

やはり、答えは返ってこない。
私は不安になった。
この子は、その事故のショックで、言葉を失ったのではないか。

「この子は、もしかして……」
「いやあ、君が考えてることは、多分違うと思うよ。
真改はたまにだけど、ちゃんと話すし。」

唐沢さんの言う「たまに」というのは、本当に稀なことなんだろうと、根拠もなく確信した。

「多分、私が君に名前を教えたのが聞こえてたんじゃないかな。
知っていることを改めて聞くな、ってことだと思うよ」
「そう、ですか……」

そんなことを話していると、子供達と遊んでいた一夏がとことこ走って来た。

「千冬姉、もう帰るの？」
「え、ああ、そうだな、そろそろ暗くなるし、もう帰るか……」
「そっか……。
あれ、アイツは？」
「ああ、あの子は……」

私が答えるより早く、一夏は少女のところに走って行く。

「おい、イチ――」

「まあまあ、子供同士の会話は大事だよ。ちょっと見ていよう」

見る人を安心させる、ほんわかとした笑顔を浮かべながらそんなことを言う唐沢さん。

その言葉に従い、しばらく見守ることにする。

「なあ、お前、なにしてるんだ？」

――まずは自己紹介から始めんか！！

あまりにもあんまりな第一声に怒りと呆れが湧いてくるが、ここは我慢だ。

ちなみに唐沢さんは、はっはっはっ、と笑っている。

「なんだこれ、花壇か？なにか植えるのか？」

「……」

「向こうでみんなと遊ばないのか？。一人じゃつまんないだろ？」

「……」

「なんか言えよな。返事はちゃんとしなさいって、千冬姉が言ってたぞ」

「……」

話し続ける一夏に対し、無言を貫く少女。

無口にもほどがあるだろう。

「あ、そういえば、初めて会う人にはまず自己紹介しなさいって、千冬姉に言われてたっけ」
「……」

「俺は、織斑一夏。」

真っ直ぐに少女を見て、一夏が名乗りを上げる。

「お前は、なんて名前なんだ？」

続く問いに、少女は作業を止め、一夏を真っ直ぐに見返して、自らの名を口にした。

「井上真改」

それが、私達織斑姉弟と、井上真改との出会いである。

――――――――――

（ここまで付き合いが続くとはな）

あの頃から、容姿以外はまるで変わらない。
極めて無口な性格からは想像もつかないほどに熱い魂を秘める井上

が、「力」を求めていたことは知っている。
その理由を語ろうとはしないが、想像するのは容易い。
生身での戦闘技術においてはすでに私と並ぶほどであり、私が井上に勝てているのは体格差と、井上が片腕だからでしかない。

（だが、ＩＳでは生身のようにはいかんぞ）

眼下には、動作を確かめるように、機体各部を動かしている井上の姿。
右手にはやはり、接近戦用のブレードを持っている。

（見せてもらうぞ、お前の力を）

そして、試験開始のアナウンスが響き渡った。

――――――――――

『それでは、試験を開始してください』

試験開始のアナウンスが響くが、すぐには攻撃しない。
今回の受験生は千冬先輩の弟さんの幼なじみで、剣の腕前はあの千冬先輩が褒めるほどらしいが、ＩＳでの戦闘は今回が初めてと聞く。
しかしＩＳでの戦闘経験がある受験生なんてどこかの国家代表候補生くらいのもので、ＩＳに触ったこともないという受験生の方が多いくらいだ。
なので、まずは様子見、受験生が多少は操作に慣れてきたころを見

計らって、小突くような攻撃から始めるのが私の試験である。

目の前の少女は、最初に私を一瞥しただけで、今はこちらを見もせずに機体の調子を確かめている。

展開したブレードを振ったり、軽くスラスターを噴かせてみたり。

そんな様子を見ていると、ひとつ気付いたことがある。

（本当に、左腕がないんだ……）

ふと、少女がこちらを見、不意打ちぎみに突撃して来た。

いきなりの挙動に少し驚くが、ブレードを展開している以上接近戦を挑んでくることは予想済みなので、下がりながらアサルトライフルを撃つ。数は少ないが、狙いは正確に。

受験生の対応を見るための攻撃だ。

さて、この子はいったいどうするのか。

銃弾を避けるか、装甲まかせな突撃か、それとも判断が間に合わずに、棒立ちになるか。

大抵は、そのいずれかだった。だが目の前の、刃のような鋭い瞳で私を見る少女は、全く予想外の行動をとった。

――あろうことか、ブレードで銃弾を切り落としたのである。

「え、えぇ！？」

当たらない弾は完全に無視、当たる弾だけを切り捨てながら、一層速度を上げて突っ込んでくる。

いまだかつて見たことのないトンデモない対応にびっくりして動きを止めてしまった私は、あっという間に間合いを詰められ――

――ブレードの一撃が、ラファール・リヴァイブの装甲に叩き込

まれた。

――――――――――

（……浅い……）

銃弾を切り落とすという、動作の精密さの確認を兼ねた行動で試験官の驚愕を誘い、その隙に接近、一撃を見舞ったまでは良かったが

――――

（……やはり、貫けぬか……）

ＩＳのパワーアシストを片腕分しか受けられない己では、どうしても攻撃が軽くなる。

既存の兵器の中でも飛び抜けた防御力を誇るＩＳの皮膜装甲（スキンバリアー）を破るには、片腕の斬撃では足りない。

そして先ほどの奇策は、二度は通用しない。

（……もとより、策を練るほどの頭もない……）

ならば、実力で近付いてみせよう。

驚愕から立ち直り、油断のない眼で己を見る試験官。

己には様子見など無用と判断したのだろう、向けられる銃口はふたつに増え、そこに込められているのは、紛れもなく戦意である。

（……ここからだ……）

己は何を為せるのか。
己は何を得られるのか。
己は何を遺せるのか。
己は何を守れるのか。

――己の剣は、果たして「彼女」に届くのか。

全ての答えは、この道の先にあるかもしれない。
この一戦は、スタートラインに立つためのものでしかない。

（……必ず、勝つ……）

放たれる弾丸は、苛烈にして精密。
スラスターを噴かせて回り込みながら、己は二度目の突撃を開始した。

――――――――――

（さっきのは驚いたけど……）

ブレードの直撃を受けたにもかかわらず、シールドエネルギーはそれほど減っていない。
やはり片腕では、攻撃力に限界がある。

（銃が得意だったなら、また違ったんだろうけど……）

手に持てる銃器はひとつだけだが、そのひとつを大型のものにしたり、他にも肩に装着するタイプのものもある。
いずれにせよ、剣一本よりはやりようがあったはずだ。

――あるいは。

（片腕のハンデを補うくらい強力な武器があれば、もしかしたら……）

思い出すのは、私が尊敬し、憧れる先輩の姿。
彼女の振るう剣は、触れただけで相手に致命的なダメージを与える、絶対的な威力があった。
あれに類する武器をこの少女が手に入れたら、きっと凄まじい使い手になるだろう。

とにかく、この少女を相手に油断は禁物だ。

試験だからと気を抜いていると、負けるのは私のほうだ。
受験生は試験官に負けても合格できるが（というより勝つ者はほとんどいない）、この試験は先輩も見ているのだ。
無様なところは見せられない。

左右の手に持ったアサルトライフルを連射する。
井上さんは、蛇が地を這うような機動で銃弾を回避し、時にブレードで弾丸を切り捨て、あるいは弾きながら接近してくる。
私は下がりながら撃ち続けるが、足止めにもならない。

――接近、剣の間合い。

「くぅ……！」
「……」

一撃でダメなら連撃、そう言わんばかりの猛攻。
私も咄嗟に展開した接近戦用ブレードで応戦するが、剣の技量では相手にならない。
どうにか凌げているのは、彼女が片腕だからに過ぎない。

（なんとか、距離をとらないと……！）

グレネードを展開し、足元に発射する。
爆風と破片でダメージを受けるが、それは井上さんも同じだ。
爆風に押される形で間合いが離れ、その勢いのまま距離をとる。
武装をマシンガンとショットガンに変更、正確さよりも弾幕で接近を阻む戦術。

その武器を見た、井上さんの判断は一瞬だった。
避け切れないとみるや、多少の被弾を気にせず、最低限の回避と防御で一気に突っ込んで来たのである。

（そんな、なんて強引な……！）

だが、理に適っている。
近付かなければならない以上、どこかでダメージを受ける覚悟が必要になってくる。
ならばそれは、少しでも消耗が少ない、早い方がいい。

（それにしたって、弾幕に飛び込むことを少しも躊躇わないなんて……）

人は傷付くことに対し、本能的な恐怖を持っている。
いくら装甲に守られているからといって、銃火器という十分過ぎる殺傷力を持つ兵器に対し身を晒す恐怖は、私でも拭いきれない。

――それをこの少女はやってのけた。

死や痛みを恐れない狂人でも、根拠もなく自分は大丈夫と考えている愚か者でもない。
死ぬことの恐ろしさも、傷付く痛みも良く理解した上で、それでも勝つためにあえて危険を犯す――

――彼女は、戦士だ。

（だけど、私だって！）

確かにその剣技や判断力は凄まじいが、ＩＳの扱い自体はまだ未熟だ。
近付くにつれて、被弾率が上がっている。
着弾の衝撃に機動を阻害され、前進も回避も鈍くなっている。
マシンガンとショットガンの集中砲火を受け、井上さんの機体にダメージが蓄積していく。
グレネードの爆発によるものと合わせれば、そろそろ限界が近いはずだ。
それでも、井上さんはかなり距離を詰めてきている。
もう一度だけ、彼女の猛攻を凌がなければ、私の負けだ。
グレネードをいつでも展開出来るように準備する。
さっきと同じ方法が通用するとは思えないが、正攻法で凌げるものでもない。

（さあ、最後の……！？）

井上さんは、連撃を仕掛けて来る。

片腕しか使えず、十分なパワーアシストを受けられない以上、一撃ではＩＳの防御力を突破できないからだ。

――その認識は、余りにも甘かった。

銃弾を受けながらも突撃して来た井上さんは、間合いに入る直前、背中と両足のスラスターを使い、前進しながら高速で回転し始める。

機体の重量、突進の勢い、回転の遠心力、スラスターの推進力。

それらが、左腕を補って余りある威力をブレードに与え。

「ッ……！」

私の首目掛けて、刃が振り抜かれた。

――――――――――

己の最後の一撃は、試験官が刃の軌道上に咄嗟に滑り込ませた銃身に威力を減殺され、仕留めるには至らなかった。

無茶な機動の反動で硬直している隙に、ひしゃげて使い物にならなくなった銃に変わって取り出した二丁のアサルトライフルの連射を浴び、シールドエネルギーが底をついた。

（……昔、似たような負け方をした気が……）

あと一歩まで追い詰めたが、結局は負けた。
己は、スタートラインに立つことすら出来なかったのだ。

「お疲れ様でした！井上真改さん、でよかったですよね？すごく強いですね！」
「……」
試験官が晴れやかな笑顔で話し掛けて来るが、己にはもう関係ない。
さてこれからどうするか、と考えていたら、

「左腕のことがあるので心配でしたけど、これならきっと合格ですよ！」

試験官のその言葉で思考が停止した。

「あ、あれ、どうしたんですか？
そんなに驚いた顔して……」
「……負けた……」

己の返答に、試験官はキョトンとして、

「試合の勝敗で合格不合格が決まるわけじゃないですよ？
まあ当然、勝ったほうがいいですけど」

え、そうなの？

「ＩＳを学ぶためのＩＳ学園の入学条件が、ＩＳ学園の教官に勝つことじゃ本末転倒じゃないですか」
「……」

……言われてみれば、確かに。

じゃあなんだ、己は勝つ必要のない勝負に、あんなに必死になっていたのか？
初撃に姑息な奇襲まで使って？

「け、けど、井上さんは腕のこともありますし、評価は他の受験生より厳しくなりますから、あれくらいの試合内容のほうが……」

「……」

己の様子から心境を正確に読み取ったのだろう、試験官が慰めの言葉を掛ける。
なるほど確かに、片腕というハンデがある以上、アピールポイントは多いにこしたことはない。
どうにか気を取り直した己に、試験官が笑顔で告げる。

「試験はこれで全て終了です。
お疲れ様でした、合格発表は後日になります。今日は帰って、ゆっくり休んでください。途中、事故などに気を付けてくださいね、家に帰るまでが試験ですから」

「……」

お決まりの台詞を口にする試験官に頭を下げ、試験場を後にする。
やれることは全てやった、後は結果を待つだけだ。

妙な達成感のある疲労を感じながら、己は帰り支度を始めた。

――――――――――

「すごいですね、彼女。さすが、織斑先生が言うだけはある」

隣で先ほどの井上の戦いぶりを評価している同僚の言葉に、私も同意する。

「私も、まさかこれほどとは思っていませんでした」

井上の剣の腕は知っていたが、あの動きは鍛錬や才能だけでは到底説明が付かない。ＩＳか生身かは別にして、銃火器で武装した敵との戦闘経験が、豊富にあることは確実だ。

孤児院暮らしの少女が、いったいいつどこでそんなものを身に付けたのか。

（お前は、何者なんだ）

弟と仲のいい少女。

元世界最強という私のことを考えれば、一夏の利用価値は計り知れない。

自然、一夏の交友関係には気を配っている。そんな一夏の幼なじみであり、普通の人生を送ってきた筈の少女が、初の戦闘で歴戦の戦士を追い詰めるほどの戦いを見せた。

――疑うなというほうが、無理がある。

心情では、私は井上を信じたいと思っている。

思い出すのは、数年前。

第２回モンド・グロッソ決勝戦直前で、一夏が誘拐されたという報せを受け、一夏が捕らわれているという廃工場に向かったとき。

そこには、一夏と一緒にモンド・グロッソの観戦に来ていた、井上真改の姿があった。
周囲には銃で武装した男達が倒れていた。一夏誘拐の犯人達だろう。
そして、気絶している一夏を背に庇い、彼女が立っていたのだ。
左腕を失い、激痛と大量の出血で一時的に視力をほとんど失っていたのだろう、その瞳は焦点が定まっておらず、突然現れ、ＩＳ〔暮桜〕に乗った私を敵だと思ったようだった。

そしてそんな、今にも死んでしまいそうな体で。
いまだ幼く、なんの武器ももっていないその身で。
世界最強の兵器の前に、立ちふさがったのだ。

井上が、その生涯のほとんどを剣に捧げてきたことを、私は知っている。
彼女が左腕を失うことで受けた痛みは想像を絶する。
それでも彼女は、いまだに一夏の良き友人でいてくれている。

そんな彼女を、私は疑わなければならない。

（こんなことなら、見なければよかった）

そうすれば、まだ彼女を信じ続けていられたのに。

「次の受験生が来ましたよ。時間からすると、これが最後ですね」
「ええ、そうで、す……ね……」

同僚の声で意識を現実に戻し、試験場を見た私は絶句した。

なぜならそこには。

女性にしか動かせないはずのＩＳを動かしている、私の弟の姿が――

「……ハァァァアアアアァァアァァァア！！！？！？？！？？」

採点官全員の悲鳴が、観戦席にこだました。

第3話　入試（後書き）

ｖｓ山田先生は真改の負け。
ｖｓ首輪付きに続き2連敗です。
千冬さんの回想シーンで出てきた真改の孤児院の経営者ですが、名前はもちろん、アレからですｗｗｗ。
次回、いよいよＩＳ学園入学。
一夏と真改の新たな活躍にご期待下さい。

第４話　初日（前書き）

ＩＳ学園初日の午前のお話。
女子高生真改の登場です。

第４話　初日

前の席に座る、幼なじみの背中を見る。
教室中から視線が集まりかなり居心地が悪そうだ。
かくいう己も、一夏の背中に視線を送っている一人である。視線に込める思いは他とは大分違うが。

（……馬鹿が……）

２ヶ月ほど前、己と一夏はお互いの合格を約束し合い、高校の入学試験に臨んだ。
二人とも合格だったので、一応、約束は果たしたと言えるが――

（……まさか、会場を間違えるとは……）

馬鹿だと知ってはいたが、認識を改める必要がある。

――こいつは、大馬鹿だ。

「全員揃ってますねー。それじゃあＳＨＲはじめますよー」

壇上の副担任が明るい声で話している。己の入学試験の試験官だった女性だ。
あの時は歳不相応に幼い外見からは想像も付かないほどの覇気を発していたが、いまではそれもなく、己達と同年代と言われれば信じるだろう。
名前は、山田真耶と言ったか。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

はにかみながらの元気な挨拶には好感がもてるが、返事はない。
残念なことに、現在この教室内の興味は、己の前の馬鹿が独占していた。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

本日教え子になったばかりの生徒達から総スルーを受けるという惨劇にもめげず、なんとか流れを作り出そうとする山田先生。流石に今回は無視されず、生徒達は自己紹介を始めていった。
『あ』から順番にいけば、『井上』の番はすぐに来る。
山田先生に促された己は覚悟を決めて立ち上がり、教室をぐるりと見回してから言った。

「……井上真改……」

着席。
うむ、どうやら最初の関門は突破したか。

「「「「「「「……」」」」」」」
「……」
「……ええっと、じゃ、じゃあ、次の人お願いします！」

全方位から突き刺さる「なんだそれは」という思いが込められた視線をものともせず沈黙し続ける己に恐れを成したのか、山田先生は次の生徒を指名した。

そして一夏の番になったが、なにやら考え事をしているのか、反応がない。

ほう、教師からの指示を無視か、己ですら名前（だけ）を名乗ったというのに、良い度胸じゃないか。

「うひぃ！？」

思わず漏れ出た殺気にあてられ、一夏が奇声を上げる。
途端に、教室のあちこちから聞こえる、くすくすという笑い声。

「ご、ごめんなさい、あの、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、ご、ゴメンね？自己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」
「いや、あの、そんなに謝らなくても……っていうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」
「ほ、本当？本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ。絶対ですよ！」
「ええ、ホントにしますから、もう謝らないで下さい」

山田先生とのコントを終えた一夏は立ち上がると、その場で振り向いた。
教室の中央最前列の席に座る一夏は、後ろを向けば教室内の生徒全員を見渡せるのだ。

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

ぺこりと頭を下げる一夏に、続きを期待する視線の十字砲火が浴びせられる。
その物理的な圧力すら感じさせる視線に気圧されて口を開いた一夏に、皆の期待が一瞬高まった。

――――彼女達は知らない。この織斑一夏という男は、己の眼力を持

ってしても計りきれない、大馬鹿者であるということを。

「――以上です」

がたたっとずっこける音がする。

それに、教室の入口を開ける音が混じっていることに気付いた。

見れば、クラスメイトの反応が意外なのか不本意なのか、微妙な顔をしている一夏の後ろに、見慣れた長身の美女の姿が。

――パアァン！！

一夏の頭から、凄まじい音がした。

その衝撃に覚えがあるのだろう、驚愕と困惑が入り混じった顔でゆっくり振り向いた一夏は、

「りょ、りょ、りょ、呂布だァーーーッ！？」

「誰が飛将だ、馬鹿者」

ドパアァァァンッッ！！

さっきにも増して凄まじい轟音が響き、一夏が悶絶する。

そんな実の弟に構わず山田先生と言葉を交わし、壇上に移動した、スーツ姿の美女――織斑千冬は、威風堂々と話し始めた。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。

私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るま

で指導してやる。
私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

まるで暴君のようなその言葉に対する返事は、なぜか黄色い歓声だった。

「キャーーー！千冬様、本物の千冬様よ！」
「ずっとファンでした！」
「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」
「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」
「私、お姉様のためなら死ねます！」

……千冬さんの人気は知っていたつもりだが、これほどとは思わなんだ。
一夏の真後ろ、つまり教室中央2列目に座る己の背中に、津波のように押し寄せる声。
千冬さんのうんざりした顔も、無理からぬと言える。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。
それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

本心から言っているのだろう、千冬さんの顔はかなり嫌そうだった。

「きゃあああああっ！お姉様！もっと叱って！罵って！」
「でも時には優しくして！」
「そしてつけあがらないように躾をして～！」

……なにこれこわい。

千冬さん相手に怯みもせずにテンションを上げ続けるクラスメイトに戦慄していると、千冬さんは一夏に視線を向けた。

「で？挨拶も満足に出来んのか、お前は」

――――己の自己紹介の時に居なくて良かった……。

「いや、千冬姉、俺は――――」

パァン！

スナップの効いた一撃。

流石千冬さん、腕は衰えていないようだ。

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

その遣り取りで、二人の関係に気付いたのだろう。

教室がにわかにざわついた。

「え……？織斑くんって、あの千冬様の弟……？」

「それじゃあ、世界で唯一男でＩＳを使えるっていうのも、それが関係して……」

「ああっ、いいなあっ。代わってほしいなぁっ」

そうか、己は遠慮したい。

と、そこでチャイムが鳴り響いた。

一時間目の授業が始まる直前、己は一夏を見る、もう一人の幼なじみの様子に気付いた。

（……素直になればいいものを……）

どうやら、訓練以外にもやることは山積みのようである。

――――――――――

「……ちょっといいか」

一時間目の授業が終わり、休み時間。

私は去年、剣道の全国大会で約五年半ぶりに再会した幼なじみに声を掛けた。

「……箒？」

「……」

呆けた顔で私の名前を呼ぶ幼なじみ――一夏に、自分でもよくわからない苛立ちを感じて睨みつける。

「廊下でいいか？」

その苛立ちを振り払うように歩き出すが、一夏はまだ席で呆けたままだ。

――ふと、一夏のすぐ後ろの席に座るもう一人の幼なじみと目が合った。

彼女は六年前と変わらない無表情で、私を促すように、コクリと頷いた。

「早くしろ」
「お、おう」

もう一度一夏に声を掛け、再び歩き出す。
私の前にいた女子たちが、ざあっと左右に分かれる様子にちょっと怯むが、今更後には退けない。

しかし、連れ出したはいいものの、どうにも切り出せない。
私が逡巡していると、一夏の方から話し掛けて来た。

「全国大会ぶりだな。元気してたか？箒」
「……ああ」

去年の全国大会、私と一夏は五年以上の空白を経て再会した。
だがその時、私は一夏とまともに向き合うことが出来なかった。

決勝に勝った興奮が冷め始めたころ、私は気付いてしまったのだ。

剣を振るっている間、私が感じていた高揚は、剣士として強敵と戦える喜びでも、少女として仲間の声援に応えたいという願いでもなく――――

――――ただ、暴力に酔っていたのだと。

愕然とした。
なんと浅ましい。
それは、人として最も恥ずべき行為だと思っていたのに。

自分のあまりにも醜い本性に気付き呆然としていた時、男子の部の

決勝開始のアナウンスが聞こえ、決勝に進出した二人の内の一方が、懐かしい名前であることに気付いた。

白熱する声援に誘われるように、ふらふらと決勝戦の試合場が見える観客席に行く。

五年以上会っていなくても、面を着けていてもわかった。

あそこにいるのは、一夏だ。

昔と変わらず強く在り続けていてくれたことに嬉しく思い、それも束の間、一夏の戦いぶりを見て、すぐに気付いてしまった。

一夏の剣は、綺麗だ。

技の問題ではない。

真っ直ぐで、とても強い信念を感じさせる、私が理想とする剣士の姿が、そこにあった。

私の剣など、一夏の剣とは比べるべくもない。

一夏は見事勝利を収め、対戦相手と健闘を称え合う握手を交わし、表彰台に立った。

そんな一夏と並んで立つことに強い罪悪感を感じ、私は一夏をまともに見ることが出来なかった。

結局、ろくな会話もせずに一夏と分かれ。

あの日のことは、私の心に、深い傷として残った。

政府によりＩＳ学園に強制的に入学させられ、再び一夏と出会ったことは、まるで自分の罪を突き付けられているような気持ちを私に

与えた。
本当なら、こうしていることも辛いくらいなのに、それでも一夏を連れ出したのは、どうしても聞きたいことがあったからだ。
深呼吸をひとつ。
意を決して、その問いを口にする。
「……真改の、ことなんだが――」
キーンコーンカーンコーン。
休み時間終了の鐘。
ようやく聞けたのに、という思いよりも、安堵のほうが強かった。
――なぜならば。
私の言葉を聴いた一夏が、ひどく辛そうな顔をしたから。
――――――――――
休み時間が終わって、二人の幼なじみが帰ってきた。
どちらも、なにやら顔色が優れない。
（……ふむ……？）
廊下でどんな会話があったのかはわからないが、あまり良い結果は

得られなかったようだ。

（……ままならん、な……）

前途多難な予感がするが、まあ、己は己にやれることをやるだけだ。

今はとにかく、二時間目である。

予習は綿密に行っているが、己の頭はあまりよろしくない。

授業内容を聞き逃すわけには行かないのだ。

前を見れば、一夏が必死に授業内容をノートに取っている。

あの量の参考書の内容をたったの一週間で理解するのは流石に無理だったようだが、それでも食らいついている一夏の様子に感心する。

この調子ならば、大丈夫だろう。

「織斑くん、何かわからないところがありますか？」

そんな一夏のやる気を見て取ったのか、山田先生からの質問。

「あ、えっと……」

頭の中を整理するためか、ノートを見直す一夏。

数秒して、

「……大丈夫、です、多分。わからなくなったら、後で改めて聞きます」

「わかりました、その時は遠慮なく聞いてくださいね！

私は先生ですから！」

胸を張る山田先生。

一夏の思いの他真面目な様子に、感心しつつ喜んでいるようである。

「では、次は――」

そして、休み時間。

ノートのまとめと復習に一生懸命な一夏の席に、鮮やかな金髪縦ロールの少女が近付いていく。

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」

突然声を掛けられて、呆けた声と顔の一夏に対し、金髪縦ロールは高飛車に話し続ける。

「訊いてます？お返事は？」

「あ、ああ、訊いてるけど……どういう用件だ？」

「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」

「……」

唖然とする一夏。

ＩＳが開発されてから、その絶大な性能と女性にしか動かせないという特殊性から、女性の立場は急激に向上した。

ＩＳ操縦者が世界の軍事バランスの要であることは確かだが、だからと言ってすべての女性が偉いわけではない。

ないのだが、そういう考えが、今の世では常識になっており、女というだけで男を奴隷のように扱う者も多い。

その歪みを一夏は嫌っており、まさにその典型とも言える態度の少

女に対し、良い感情を持たないのは当然と言える。

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

「おう、知らん」

代表候補生とは、国家を代表するＩＳ操縦者候補として選出される、所謂エリートである。

だが所詮は候補であり、実際に国家代表になれるかはまた別の話だ。

そんな候補生、しかも他国の者の名前までいちいち覚えろというのは、些か無理がある。

（……しかし、国家か……）

――その国家の悉くを解体し尽くした２６人の内の一人である「彼女」が聴いたら、なんと言うだろうか。

「ふん、所詮は極東の島国ですわね。このわたくしのことさえ知らないだなんて。

本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか。それはラッキーだ」

「……馬鹿にしてますの？」

一夏はまともに相手をする気はほとんどないようで、セシリアという少女も言いたい事だけ言っている感じだ。

「ＩＳのことでわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれた

ら教えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

ほう、倒したのか。

やるな。

「入試って、あれか？ＩＳを動かして戦うってやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

「あれ？俺も倒したぞ、教官」

「「は……？」」

セシリアと己の驚きの声が重なる。

幸い、己の声が一夏に聞こえた様子はない。

しかしこいつ、教官を倒したのか……。

結構ショックだな……。

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「女子ではってオチじゃないのか？」

「つ、つまり、わたくしだけではないと……？」

「いや、知らないけど」

「あなた！あなたも教官を倒したって言うの！？」

「うん、まあ、たぶん」

「たぶん！？たぶんってどういう意味かしら！？」

そこのところは己も聞きたい。

「えーと、落ち着けよ。な？」

「こ、これが落ち着いていられ――――」キーンコーンカーンコーン

三時間目開始のチャイムがなり響き、セシリアはまるで三下が逃げ

る時のような台詞を残して席に戻って行った。
入れ替わるように、千冬さんが教室に入って来た。
「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」
いきなり授業に入る千冬さん。山田先生はノートを持ち、メモを取る態勢だ。
豊富な知識と経験がありながら勉強を怠らないその姿勢は素晴らしい。
「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」
クラス代表者とは、分かり易く言えばクラス長である。
クラス対抗戦以外にも、生徒会の会議や委員会への出席などが仕事となる。
実戦経験は積めるだろうが、己が会議に参加するのは無理があるので、他の者に押し付けるとしよう。
そんなことを思っていると、
「はいっ。織斑くんを推薦します！」
「私もそれが良いと思いますー」
「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」
そこまでいってようやく気付いたのか、一夏が立ち上がった。

「お、俺！？」
「織斑。席に着け、邪魔だ。
さて、他にはいないのか？いないなら無投票当選だぞ」
「ちょっ、ちょっと待った！俺はそんなのやらな――」
「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。
選ばれた以上は覚悟をしろ」
「い、いやでも――」

往生際の悪い一夏の言葉を、甲高い声が遮った。

「待ってください！納得がいきませんわ！」

バンッと机を叩く音。
振り向くと、そこにはセシリア・オルコットの姿が。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！
わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

一年程度も耐えられないとは、軟弱な忍耐だな。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までＩＳ技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

流石に頭に来たのか、一夏の肩がぴくりと動いた。

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれ

はわたくしですわ！」

セシリアのテンションに比例するように、一夏の怒りも増幅していることが良く分かる。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で――」

そして、ついに。

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「なっ……！？」

――そこからは売り言葉に買い言葉、あれよと言う間に二人の決闘が決まった。

「それで、イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットに無謀にも挑む無知な極東のお猿さんには、どれくらいハンデをつければいいのかしら？」

「そんなもんいるか。お互い全力でやってこそ、勝つってことは意味があるんだ」

嘲笑を浮かべるセシリアを、一夏は真っ直ぐに睨み付ける。

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑とオルコットはそれぞれ用意をしておくように。」

千冬さんはそう言ってから、少し考えるような仕草をして頷き、

「ふむ、ならば調度いいかもしれんな。井上」
「……」
突然名前を呼ばれた。今の話の流れに己の名が出てくるような所はなかったように思うが。
「先ほど連絡が来たんだが、お前の入試を見た如月重工の社長が、お前に興味を持ったそうだ」
如月重工とは、元技術者が社長を務める、日本では倉持技研と双璧をなすＩＳ開発企業だ。
極めて高い技術力を誇り、如月重工製のパーツはどれも高性能なのだが、クセが強すぎてまともに扱えないようなイロモノが多い。
勤務する技術者は社長を筆頭に頭にマッドが付く連中ばかりで、所謂変態企業として世界にその名を轟かせている。
……なにやら嫌な予感がする。
「現在如月重工で開発中の新型ＩＳを、データ収集のためにお前に使って欲しいそうだ。つまりはテストパイロットだな。」
「……」
――テストパイロット、か。
「そこで、お前用に機体を調整するために、お前の戦闘データがいる。〔打鉄〕で構わないから、一度戦って欲しい、というのが先方からの要求だ。
テストパイロットを引き受けてくれるのならば、交換条件として、

その間その新型ＩＳをお前の専用機として使っていいと言って来ている。
どうする？」
「……」
正直、それは願ってもない条件だ。
専用機と量産機では性能がまるで違うし、機体を量子化することで常に身に付け、いつでも起動できる。
無論法律や規則による制約はあるが、有事の際に即応できるのは極めて大きい。先方が如月重工ということに不安がないでもないが、それでも己は躊躇うことなく頷いた。
「決まりだな。先方にはこちらから伝えておく。
データ収集のための戦闘は三日後の木曜、時間と場所はさっきと同じだ。相手は、オルコット、それもついでにお前がやれ」
「えぇ！？しかし、織斑先生、わたくしは――」
「……」
「不満か？相手はＩＳの操縦は初心者だぞ。インターバルも三日間ある。それくらいのこともこなせないで、国家代表を名乗るつもりか？」
「う……わかりましたわ」
「……」
「ふん！ならそのお猿さんとの決闘の前哨戦ですわね。せいぜい逃げないで――」
「……」
「ええと……あなた、訊いてます？」
「……」
こくりと頷いて、右手を出す。

「……井上真改……」

正直セシリアの第一印象はあまり良くないが、こちらの事情に付き合ってもらうのだ。
礼は尽くさねばなるまい。

「……感謝する……」
「ふ、ふん！そんなことをしても、当日は容赦しませんわよ！」
「……」

なにやらそっぽを向いて言うセシリアに、黙って右手を差し出し続ける。

「……」
「う……セ、セシリア・オルコットですわ」
「……」

根負けしたのか、己の右手をとり、握手をするセシリア。

「……」
「や、やりづらいですわね……」

かくして、一夏の前に己がセシリアと戦うことになった。
いきなり波乱の幕開けだが、このチャンスを物にしない手はない。
セシリアの実力と機体がどれほどのものかはわからないが、己はただ、寄って斬るだけだ。
せいぜい、一週間後の一夏の初戦のため、手本くらいにはなれるような戦いをしなくてはな。

第４話　初日（後書き）

この作品はフィクションであり、作中に登場する企業は、某ロボットゲームシリーズに登場する企業とは関係ありません。

本作の一夏は真改の影響を受け、強くなることに一生懸命です。必要なら勉強も頑張ります。

第5話　再会（前書き）

真改と箒、六年ぶりの再会。
片腕しかない真改の姿を見て、箒は何を思うのか。

くそう、筆が進まない、私だって早く月光出したいのに……！

第5話　再会

昼休み。一夏が声を掛けて来た。

「なあシン、飯行こうぜ」

「……」

教室中の視線が、今度は己に集まった。

「井上さんって、織斑くんと知り合いなの……？」

「今、渾名で呼んだよね……？」

「井上さん、如月重工の社長にスカウトされたって……」

「入試で興味持ったって言ってたよね……？」

「どんなことしたんだろう……？」

「私も欲しいなぁ、専用機……」

……まずい、このままでは己の平穏な学園生活がっ。

「箒も一緒に……て、あれ？いない？」

「……」

箒なら昼休みになって早々に出て行ったぞ。

「しょうがない、二人で行くか」

「……」

促され、席を立つ。

どうせ飯は食いに行かなければならないのだ、腹をくくろう。

そうして場所は食堂に移る。
一夏は和食セット、己は日替わり定食である。

「おお、美味い。流石にでかいだけあるなぁ」
「……」

確かに中々の味だが、それをじっくり味わう余裕はない。
己には今、八方から好奇の視線が浴びせられている。
内容は誰に問わずともわかる、「あの子織斑くんとどういう関係？」だ。

まあＩＳ学園は本来女子校であり、ＩＳ学園に入学するのはＩＳ関連の授業を科目に取り入れている女子校の出身者が多いので、ほとんど関わったことのない男という生き物に興味があるのはわかるのだが。

「しかし、セシリア・オルコットか。
代表候補生ってくらいだし、強いんだろうなぁ、やっぱ」
「……」

己を生贄に捧げることで視線の猛攻から逃れることに成功した一夏は、平常心を取り戻していた。
己にそんな話をするのは、初の戦闘の相手が強敵である不安からか、それともその強敵と戦うことになった己を心配しているのか。
この男のことだ、おそらく後者だろう。

「けどやっぱシンはすごいな。入学早々専用機貰えるなんてさ。如月重工ってのは知らないけど。お前、入試でなにしたんだよ」
「……」

入試の試験会場を間違えるようなやつにそんなことを言われたくはない。

「ごちそうさまでした」「……ご馳走様でした……」
「うし、じゃあ戻るか。午後の授業の予習しねぇと……」
「……」

己と一夏が席を立つと、それに合わせるように周囲も一斉に立ち上がった。
そして始まる行進。この異様な光景はいつまで続くのか。早くもうんざりしてきたんだが。

（……やれやれ……）

――――――――――

そして放課後。
忘れないうちに復習とノートまとめをすると言う一夏を残し、教室を出る。
はて、己の寮の部屋は何号室だったかと考えていると、深刻そうな表情で己を見詰める幼なじみを見つけた。

「――真改」
「……」

――篠ノ之箒。
六年前まで己と一夏が通っていた剣術道場兼神社の娘で、ＩＳの開発者である篠ノ之束の実妹である。

「……聞きたいことが、ある」
「……」

何を聞かれるか、予想はついていた。
躊躇いがちに、箒は言葉を紡ぐ。

「お前の……左腕の、ことなんだが」
「……」

やはり、か。
己が左腕を失ったのは、最近のことだ。
箒と最後に会ったのはその数年前のことであるから知る筈もなく、去年箒と会った一夏が軽々しく話すとも思えない。

「初めは一夏に聞こうとした。だが聞けなかった。お前の名前を出した途端、一夏がつらそうな顔をしたからだ」
「……」

「左腕をなくしたことと、一夏は関係しているのか？」

箒は詰め寄ってくるが、理由は話せない。
己だけでなく、一夏も、千冬さんも関係している。
己と箒、二人だけのこの状況で話す訳にはいかない。
だから、心情だけを口にした。

「……悔いてはいない……」

己の言葉を聞いた箒は、俯いた。
その肩が、声が、震えているのがわかる。

「……なぜだ」
「……」
「なぜお前は、そんなことを言える」
「……」

箒が顔を上げ、睨むように己を見る。

「だって、お前は……！」

叫ぶように。
血を吐くように。
絞り出すように、箒は言う。

「お前は、あんなに……！」

箒の眼に涙が浮かぶ。

「どうして、そんなに簡単に諦められるんだっ！！」
「……」

それは、慟哭だった。

共に剣術を学んでいた箒は昔、己の剣を綺麗だと言ってくれた。
その己が左腕を失ったことは、箒にとっても辛いのだろう。
そこまで己のことを想ってくれることが嬉しくもあり、心苦しくも

あった。

「……すまない……」

「何で、お前が謝るんだ……！」

「……」

涙を流し続ける箒に、己はどうすればいいのか。

「う、く、ぐす……」

「……」

泣き続ける箒を見詰めて、かつて一夏に語ったものと、同じ言葉を紡ぐ。

一夏も箒も、今はこの場にいないもう一人も。

己の大事な、幼なじみだ。

己の想いだけは、知っておいてくれ。

「……一夏は、一人……」

「……？」

「……腕は、二本……」

「……ッ！」

「……惜しくはない……」

「……う、うぅぅ、うぇぇ……うあぁぁぁぁぁぁぁ……！！」

――――これでも、孤児院の年長者だ。

泣き止まない子供の世話は、なれている。

だから己は、ただ黙って、泣き続ける箒のことを抱き締めた。

「しん、かいぃぃ……！」
「……すまない……」

幼子のようにしゃくりあげる箒と、それを慰める己との抱擁は、

「……なにしてんだよ？」
「うあぁぁぁぁぁぁ！！！？？」

教室から出てきた一夏が、空気を読まずに声を掛けてくるまで続いた。

――――――――――

所変わって、ＩＳ学園学生寮。
一夏は帰っていった。
女子校であるＩＳ学園は学生寮も当然女子寮であり、一夏はしばらく自宅から学園に通うことになっている。
色々と不便なのでその内部屋の都合をつけるだろうが、今日明日の話ではないだろう。

（……だが、何故か嫌な予感がする……）

多分気のせいだ。そうに違いない。

「さっきはすまなかったな、取り乱して……ショックだったんだ。お前の剣は、私の、憧れだから」

「……」

少し恥ずかしそうに言う箒。

己の剣などまだまだ「彼女」には遠く及ばないが、それでも「彼女」を目指して鍛錬を積み重ね、昔より遥かに強くなった。

誰かに憧れ、その背中に追い付きたいという思いは、人を大きく成長させる。

ならば前を往く者の務めとは謙遜することではなく、高く分厚い壁として在り続けるために、精進を欠かさぬことだ。

「……箒……」

「うん？」

何故己から自発的に話すと皆驚いたような顔をするのだ。

いずれ問い質す必要があるな。

「……誇りに思う……」

「そ、そうか、そう言ってもらえると、私も嬉しい」

感謝の言葉と気付いたようで、照れたように笑う箒。

随分長い間会っていなかったが、どうやら絆はいまだ健在のようでなによりである。

「ここがお前の部屋か？」

「……」

己に振り分けられた寮の部屋に着いた。

寮は二人部屋なので、己にもルームメイトがいるわけだが、そいつには同情する。

己のような無口な者と生活していては、楽しくないだろう。

箒のように気心の知れた相手ならばまた違ったかもしれないが、そこまでは望めまい。

「私の部屋は１０２５号室だ。お前さえよければ、いつでも来てくれ。
じゃあ、また明日」
「……」

泣いてすっきりしたのか、箒の心も少しは晴れたようである。
小さな笑みを浮かべてから立ち去る箒を見送り、己は今日から住むことになった自室の扉を開けた。

「……」
――広い。
テレビでしか見たことはないが、それなりに高級なホテルの部屋がこれくらいだったような気がする。
流石はＩＳ学園、こんな所にも金がかかっている。

「……」
ルームメイトはまだ来ていないようだ。
さっさと挨拶を済ませたかったが、仕方ない。先に荷物を整理してしまおう。

己は部屋の隅にある、「井上真改」と書かれたダンボールを開け、事前に送っておいた荷物を取り出す。
量は少ない。服はジャージと部屋着の他私服が数着。妹たちは己にやたらと色々な服を着させたがるので、気付かれる前に準備した。
その後かなりふてくされていたが。
その他細々とした生活用品に、木刀２本と大きな鉢植えがひとつ。
鉢植えは厳重に梱包したおかげか土がこぼれた様子はなく、花――

―真っ白なパンジーも無事だ。

花壇は弟妹たちに任せてきた。普段から一緒に世話をしているので、己が居なくても大丈夫だろう。

荷物をしまって鉢植えをベランダの日当たりが良さそうな所にセットし、さてダンボールを畳むかというところで扉が開く。

入って来たのは、サイズの合ってないぶかぶかの制服を着た少女。

「お～、広い～。ホテルみたいだね～」

「……」

「あ～、ルームメイトのひと～？

わたしはね～、布仏本音っていうんだ～。よろしく～」

なんだかやけに間延びした話し方をする娘だ。なんというか、彼女だけ時間の流れが違う気がする。

「……井上真改……」

「知ってるよ～、今日すごかったもんね～。

いのっちのことは、もう有名になってるよ～」

己は戦慄した。

ひとつ。もう噂になっているのか、いくらなんでも早すぎるだろう。

ふたつ。こいつ、己の左腕に全く触れてこない。普通は気になると思うのだが。

みっつ。いのっちってなんだ。

「すごいなぁ～、もう専用機貰えるなんて～。

いのっちって、なにかやってるの～？」

「……剣を……」
「おお～、かっくいいな～。うんうん、確かにいのっちって、そんな感じだよね～」
「……」
初めて会う人種（タイプ）に戸惑う。
「なんていうか～、侍とか、武士とか～、そんな感じ～」
「……」
にへら。
「いのっちと同じ部屋だなんて、ラッキーだな～、わたし。ね～ね～、いのっち、入試でなにしたの～？」
「……戦った……」
「う～ん、もっと具体的に～」
「……斬った……」
「もっと詳しく～」
「……寄って、斬った……」
「もっと微に入り細を穿って～」
「……避けて、寄って、斬った……」
左腕がなく、極めて無口な己に話し掛けてくる者など中学校にはほとんどいなかったが、本音は馴れ馴れしいくらいに気安く話し続ける。
不思議なのは、それに付き合うことが不快ではないことだ。
己が要領の得ない答えを返すたび、本音は楽しそうに笑い、すぐに次の質問をしてくる。
どれも他愛のない、正しく雑談である内容。

己とそんな会話をするのは、幼なじみくらいのものだったが。

（……不思議な娘だ……）

己との会話の何がそんなに面白いのかはわからないが、はしゃぐ本音の姿は見ていて飽きない。

（……ラッキーだったのは、己の方か……）

まあ、本音が何を考えているのかはわからんが。

とりあえず、仲良くやっていけそうだ。

「……布仏……」

「んん？なになに、いのっち？わたしのことは、本音でいいよ～？」

「……本音……」

「……これから、よろしく……」

第5話　再会（後書き）

箒は心のつっかえがひとつ取れました。
そして真改のルームメイト、のほほんさん。強烈なオーラを常時展開している真改を相手にまるで怯みません。ある意味最強。
ちなみにＯＲＣＡのメンバーでは、真改とよく話していたのはヴァオーという独自設定。
「どうした、シンカアアァァイ！
そんなに暗いと、幸せが逃げるぜぇぇぇ！？」
「……」
こんな感じ。

第6話　旧交（前書き）

第5話の翌日の話です。
早くもサブタイトルに詰まってきた……

第6話　旧交

朝。

己は一夏と箒と合流し、食堂で朝食を取っていた。

一夏は世界で唯一ＩＳを動かせる男ということで、保護、監視その他諸々の事情から急遽寮に入ることが決定した。

したのだが、本当に急なことだったので部屋が準備出来ておらず、なんと箒と同部屋になったという。

――――それでいいのか、ＩＳ学園。

「これうまいな」

和食セットを食べながら言う一夏の頭には、見てわかるくらいに巨大なタンコブがある。

一夏のことだ、何があったか大体の想像が付く。箒もかなり不機嫌だし。

「お、織斑くん、隣いいかなっ？」

「へ？」

突然、三人の女子が声を掛けてきた。

「ああ、別にいいけど」

箒が更に不機嫌な顔になった。一夏は気付かないが。

「織斑くんって、篠ノ之さんと井上さんと仲がいいの？」
「篠ノ之さんと同じ部屋だって聞いたけど……」
「井上さんとは、昨日も一緒にご飯食べてたよね」
「ああ、まあ、二人とも幼なじみだし」

一夏が言った瞬間、周囲から驚きの声が聞こえた。
……かなり遠くからも聞こえたぞ。どれだけ聞き耳を立ててるんだ。

「え、それじゃあ――」
「いつまで食べている！食事は迅速に効率よく取れ！遅刻したらグラウンド十周させるぞ！」

ＩＳ学園のグラウンドは一周五キロ。十周で五十キロ。
朝からそれはなかなかきついものがあるので、それは勘弁願いたい。
己は残っていた朝食（日替わり定食）を食べ、教室に向かった。

――――――――――

「というわけで、ＩＳは宇宙での作業を想定して作られているので、操縦者の全身を特殊なエネルギーバリアーで包んでいます。また、生体機能も補助する役割があり、ＩＳは常に操縦者の肉体を安定した状態へと保ちます。これには心拍数、脈拍、呼吸量、発汗量、脳内エンドルフィンなどがあげられ――」
「先生、それって大丈夫なんですか？なんか、体の中をいじられてるみたいでちょっと怖いんですけども……」

ＡＭＳによってネクストと繋がるために、体を一部機械化していたリンクスからすれば大したことではないのだが、普通の生活をしていた少女からすればやはり恐ろしいだろう。

「そんなに難しく考えることはありませんよ。そうですね、例えばみなさんはブラジャーをしていますよね。あれはサポートこそすれ、それで人体に悪影響が出ると言うことはないわけです。もちろん、自分にあったサイズのものを選ばないと、形崩れしてしまいますが――」

そこで山田先生と一夏の目があった。
途端に赤くなる山田先生。

「え、えっと、いや、その、織斑君はしていませんよね。わ、わからないですね、この例え。
あは、あははは……」

ちなみに己もわからん。サラシ派だからな。
片腕だけで巻くのは初めは大変だったが、慣れてしまえばどうということはない。

クラスに唯一の男子生徒を意識してか、女子たちが微妙な雰囲気を出し始める。

「んんっ！山田先生、授業の続きを」
「は、はいっ」

このままでは授業が進まないと察してか、千冬さんが咳払いで授業を促す。

「そ、それともう一つ大事なことは、ＩＳにも意識に似たようなものがあり、お互いの対話――つ、つまり一緒に過ごした時間で分かり合うというか、ええと、操縦時間に比例して、ＩＳ側も操縦者の特性を理解しようとします」

――ほう

「それによって相互的に理解し、より性能を引き出せることになるわけです。ＩＳは道具ではなく、あくまでパートナーとして認識してください」

――それは、ネクストにはなかった特性だ。
リンクスはネクストと繋がり、自分の体のように操る。
ネクストからもリンクスに情報が送られてくるが、それは機体ダメージや外部の状況などであり、ネクスト自体に意志などない。

――ネクストは絶大な破壊をもたらす兵器であり、同時に、どこまで行っても兵器でしかないのだ。

キーンコーンカーンコーン

授業終了の鐘。
先ほどのＩＳの意識云々のくだりから恋人の話に発展し始めたクラスメイトたちは、そのままの勢いで一夏に詰め寄った。

「ねえねえ、織斑くんさあ！」
「はいはーい、質問しつもーん！」
「今日のお昼ヒマ？放課後ヒマ？夜ヒマ？」

――――最後のはまずくないか？

押し寄せる女子たちは、一夏だけでなく千冬さんについても質問しだした。

それに答えようとした一夏の頭に、出席簿が振り下ろされる。

パァンッ！

「休み時間は終わりだ。散れ」

ドスの効いた声に、自分の席に逃げ帰るクラスメイトたち。

「ところで織斑、お前のＩＳだが、準備まで時間がかかる」

「へ？」

「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそうだ」

「？？？」

「せ、専用機！？一年の、しかもこの時期に！？」

「つまりそれって政府からの支援が出てるってことで……」

「ああ～。いいなぁ……。私も早く専用機欲しいなぁ」

自分が専用機を与えられる。

その意味に気付いた一夏の気配が変わる。

刃のように、鋭く。

「わかっているようだな。ＩＳの中心であるコアは、製作者本人以外には作れない。そして今は、その製作者もコアを作っていない。コアの数が限られているため、本来なら、ＩＳ専用機は国家あるいは企業に所属する人間しか与えられない。が、お前の場合は状況が

状況なので、データ収集を目的として専用機が用意されることになった。
井上と違い、実力を認められたわけではない。自惚れるなよ」
「……はい、わかってます」

一夏は、大切なものを守るために、強大な「力」を欲している。
その「力」が、手に入る。
だが一夏の声にあるのは、喜びではない。

――――決意だ。
与えられた「力」に頼るのではなく、それを振るうに値する強者になると、そう新たな誓いを立てた声だ。

今の一夏がどんな顔をしているのか、己の席からは見えないが、一夏の横に座る女子の顔が赤いので大体想像が付く。

「あの、先生。ＩＳのコアって、篠ノ之博士が作ったんですよね？もしかして、篠ノ之さんって篠ノ之博士の関係者なんでしょうか……？」
「そうだ、篠ノ之はあいつの妹だ」

ちらりと箒を見ると、見るからに不機嫌そうな顔。

「えええええーっ！す、すごい！このクラス有名人の身内がふたりもいる！」
「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人！？やっぱり天才なの！？」
「篠ノ之さんも天才だったりする！？今度ＩＳの操縦教えてよっ」

そんな箒の様子に気付かないのか、クラスメイトたちが興奮した様子で箒に殺到する。

箒の我慢は、早くも限界を迎えた。

「あの人は関係ない！」

突然の大声。
それがまるで悲鳴のように聞こえたのは、己だけだろうか。

「……大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃない。教えられるようなことは何もない」

そう言って、箒は窓の外に顔を向ける。
流石にそれ以上箒に詰め寄る者はおらず、皆自分の席に戻った。

「さて、授業をはじめるぞ。山田先生、号令」

「は、はいっ！」

そうして授業が開始されるが、一夏はいまいち身が入っていない様子だ。
箒のことが気になっているのか。

（……ふむ……）

また、話を聞いてみるか。

――――――――――

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど」

昼休みになるや、セシリアが一夏に話し掛けてきた。

「訓練機だろうが専用機だろうが、使いこなせなきゃ意味ないだろ」

「あら、よくわかってますわね。そう、ＩＳで大事なのはＩＳとのシンクロ。イギリスの代表候補生であるわたくしは、わたくしの専用機と完璧にシンクロしています。ＩＳ初心者のあなたには、万に一つも勝ち目はありませんのよ？」

「関係ねぇよ。俺は強くならなきゃならないんだ。勝っても負けても経験は積める。強くなれる」

セシリアを睨み付ける一夏。

「悪いが、糧になってもらうぜ――――セシリア・オルコット」

「く……！あ、あなた――――」

「おーい、箒ぃ。飯行こうぜ」

がらりと態度を入れ替えた一夏。呼ばれた箒は無視を決め込んでいるが、セシリアは先ほどの授業でのことを思い出したのか、今度は箒に話し掛けた。

「そういえばあなた、篠ノ之博士の妹なんですってね」

その話題を振るとは、こいつには学習能力がないのか？

「妹というだけだ」

案の定、箒はセシリアを射殺さんばかりに睨み付ける。

その眼力に気圧されたのか、セシリアは小さく呻いて一歩退いた。

「ま、まあ。どちらにしてもこのクラスで代表にふさわしいのはわたくし、セシリア・オルコットであるということをお忘れなく」

ぱさっと髪を払い、立ち去っていくセシリア。

一夏はその姿をなにやら呆れたような顔で見送ってから、再び箒に声を掛ける。

「箒」

「……」

「篠ノ之さん、飯食いにいこうぜ」

箒は頑なに沈黙を続ける。

そんな箒を心配してか、一夏は周りを見回して、

「他に誰か一緒に行かない？」

「はいはいはいっ！」

「行くよ～。ちょっと待って～」

「お弁当作ってきてるけど行きます！」

己も立ち上がり、二人の下へ行った。

「……私は、いい」

「まあそう言うな。ほら、立て立て。行くぞ」

「お、おいっ。私は行かないと――――う、腕を組むなっ！」

「なんだよ歩きたくないのか？おんぶしてやろうか？」

「なっ……！」

一気に赤くなる箒。素直になればいいものを。

「は、離せっ！」
「学食についたらな」
「い、今離せ！ええいっ――――」

箒が一夏の腕をとり、投げようと動くが、

「おっと」

一夏はするりと抜け出して箒と向き合う形になった。

「いきなり何すんだよ」
「お、お前が強引に連れ出そうとするからだっ！」

一夏は溜め息をひとつつくと、今度は逃げられないように箒の手を強く掴んだ。

「ほら、行くぞ」
「お、おいっ。いい加減に――――」
「黙ってついてこい」
「む……」
「よーし、じゃあしゅっぱーつ！」
「お待たせ～、準備おっけ～」
「ああ、織斑くんとご飯……！」
「……」

さて、学食に行くか。

―――――――――

六人でぞろぞろと学食に来たはいいが、かなり混雑している。
奇跡的に空いていた四人掛けのテーブルをふたつくっつけて、席に着いた。

「「「いただきます」」」
「いただきま～す」
「……いただきます」
「……いただきます……」

食事を始めてすぐに、己たちについて来た少女の一人――己のルームメイトである本音が話し掛けてきた。

「む～、やっといのっちとご飯食べれるよ～。朝いのっちすぐいなくなっちゃうんだもん～」
「……」

今朝も鍛錬をしていたのだが、シャワーを浴び終わっても本音は寝ていた。
一応揺り起こしてから出てきたのだが、本音は不満だったらしい。

「いのっちって、おりむーと仲いいんだね～。学校が同じだったの～？」
「……幼なじみ……」
「おお～、やっぱいのっちはすごいね～」

なにがだ。

それと状況から判断したがおりむーとは一夏のことでいいのか。
そしてその袖でどうして箸が持てる。

ちらりと一夏を見ると、箒にＩＳの操縦を教えてくれと頼んでいた。
今朝は己に頼みに来たのだが、箒に頼めと追い返した。
幼なじみの恋は応援してやらねば。

「じゃあさ～、小さいころのおりむーって、どんな感じだったの～？」
「……変わらない……」

鯖の塩焼きを口に運びつつ答える。
本音の友人と思われる二人も一夏の昔に興味があるようだが、己と話すのは気が引けるのか、質問は本音任せだ。
と、そこで、

「ねえ。君って噂のコでしょ？」

突如現れた三年生が一夏に話し掛けて来た。優しげな笑顔を浮かべて一夏にＩＳの教示を買って出ているようだが、下心が透けて見える。
だがそういったことに疎い一夏は気付かず、その申し出を受けようとしていた。

仕方ない、追い払うか、と考えて、視線に力を込めようとしたら――

「結構です。私が教えることになっていますので」（……ほう……）

箒が名乗りを上げた。

本音と二人の少女も、突如始まった修羅場（？）に興味津々である。

「あなたも一年でしょ？私の方がうまく教えられると思うなぁ」

「……私は、篠ノ之束の妹ですから」

自分からそれを言うとは、成長したな、箒。

「そ、そう。それなら仕方ないわね……」

すごすごと引き下がって行く三年生と、それを残念そうに見送る一夏。お前は本当に馬鹿だな。

「なんだ？」

「なんだって……いや、教えてくれるのか？」

「そう言っている」

……あとは、その態度が直ればな。

「今日の放課後」

「ん？」

「剣道場に来い。お前の腕を直接見てやる」

「いや、俺はＩＳのことを――」

「見てやる」

「……わかったよ」

これで己の放課後の予定も決まったな。

箒の腕が六年前からどれだけ上達しているか興味もある。

だが今は、午後の授業に備えて昼食をとることに専念するとしよう。

「なんか面白そうなことになったね～いのっち～」
「……」
そして彼女たちの予定も決まったようである。

――――――――――

「ハァァッ！」
「ゼェイッ！」
裂帛の気合い。
竹刀がぶつかり合う音。

二人の剣舞が始まってから十分。
試合は白熱していた。
初めは興味本位で集まって来た観客たちも、今では試合に見入っている。

「二人とも、すごい……」「さすが全国大会優勝者なだけあるわね……」

剣道部員は二人を知っているようだ。
箒は有望な新入部員候補としてチェックしていたのだろうが、男子である一夏のことも知っているのは、一夏が中学二年生の時と合わせ、二連覇の偉業を果たしているからだろう。

二十分が経過し、流石に二人とも疲れてきた。
当然だ、いくら体力があろうと、人間が全力で動き続けられる時間は長くない。

決着は一瞬。

「小手ェェェッ！」

篝が鋭く小手を放つ。
一夏はそれを、腕を竹刀ごと振り上げてかわした。

――上段、面打ちの構え。

「……ッ！」

篝の対応は速かった。
空振りした竹刀の切っ先をくるりと回し、頭の上にかざす。

素晴らしい反応だが、しかしそれこそが一夏の狙いだった。
膝をたたみ、腰を低く落とす。
振り上げた竹刀を、振り下ろすように横に薙いだ。

「胴オォォォッ！」

――パァンッ！
勝負有り。

「……見事……」
「きゃあああーっ！織斑くんカッコいい！」

「篠ノ之さんもすごいねー！」
「おお～、おりむー強～い」

観客たちが爆発し、口々に両者を称える。
剣道もいいものだな。人殺しの業である己の剣では、こうは人の心を掴めまい。

「ッくは！ゼェッ、ゼェッ、……ふう、強いな、箒」
「はあ、はあ、一夏こそ、はあ、更に腕を上げたようだな。……私の、負けだ」

二人の顔は晴れやかだ。
言葉にできずとも剣で語る、そんな在り方が、不器用な幼なじみたちには似合っていた。

「全国大会のあとも、稽古は続けていたようだな」
「まあ、剣道部は引退しちまったけどな。シンと一緒に、よくやってたぜ」

――そこで己の名を出すヤツがあるかっ！！

「何ィッ！？」

クワッ！と箒が己を見る。その目は裏切り者を見る目だった。

「真改、お前もか……！」

待て、落ち着け箒。お前が考えているようなことは何もなかった。
あるはずがないだろう。

「ふ、ふふふ、そうかそうか、よし真改お前の腕も見てやろう」
しかし箒に己の思いは届かない。
一夏が持っていた竹刀を引ったくり、己に向けて突き出した。

「さあ、剣を取れ真改っ！」
「……はあ……」

思わず溜め息が漏れるのも仕方ない。
こうなった箒は人の話を聞かないのだ。
無闇に煽る観客たちもいるしな。

「じゃあ防具は――――っと、そうだな、私が着けてやるから、更衣室の――――」
「……無用……」

防具を着ければ動きが鈍る。片腕しかなく、非力な己にはその足枷は重すぎる。
どうせ竹刀だ、当たったところで死にはしない、そういう判断による言葉だったのだが――――

「ほう……私如きが相手では、防具など必要ないと？」

しくじった。
箒は更に怒気を強め、そろそろ気炎が目に見える領域である。
これ以上は余計なことを言わず、さっさと済ませるとしよう。

「いのっち～、がんば～」

気の抜ける声援をよこす本音に軽く手を振って応え、箒の前に立つ。

そして、試合開始の掛け声が響いた。

――――――――――

結果から言うと、怒りに任せて荒い攻撃を繰り出してくる箒に勝ち、そのまま一夏を叩きのめした（八つ当たり）。

一夏と激闘を演じた箒は剣道部員から称賛され、クラスにも少しは馴染めたようである。

問題はそのあとで、翌日から己のファンを名乗る者が現れ出したのだ。

別に何をするというわけではないのだが、やたらと熱い視線を己に浴びせてくる。

何故だ、この役割は、一夏のものではなかったのか。

「……不可解……」

第6話　旧交（後書き）

真改が左腕を失ってから、一夏は強くなると決意しました。
自分がＩＳを使えることがわかり、願ってもなかった「力」を手に入れた一夏が、これからどう成長していくのか……。
そして私の文章力がそれに追い付けるのかｗｗｗ
次回、いよいよ真改ｖｓセシリアです。

第7話　星光（前書き）

真改ｖｓセシリア。
戦闘描写むずい。
他のことが上手く書けるわけじゃないけどな！

今回の話の中の「真逆」という字は「まさか」と読んでください。
はい、某ゲームのパクリです、ごめんなさい

第7話　星光

己とセシリアの対戦当日、その放課後。

己、一夏、箒、本音、山田先生、千冬さん、そしてスーツを着た見知らぬ男が一人、第三アリーナＡピットに集まっていた。

「やあやあはじめまして、僕が如月重工社長の如月だ。君が井上君だね？今日はよろしく頼むよ」

「……」

やたらと馴れ馴れしい態度で話し掛けてくる如月社長に無言を返す。どうにも苦手な人種だ。

「ふむ、相手はイギリス代表候補生、セシリア・オルコット君か。申し分ないね。」

「……」

「今回のデータ収集は君のテストも兼ねている。もし入試での戦いぶりがまぐれなようだったら、この話はご破算だ。頑張ってくれたまえよ」

その言葉を聞き、千冬さんが口を挟む。

「待って下さい。そんな話は聞いていませんが？」

「うん？言ってなかったかな？まあ、今言ったからいいだろう」

睨み付ける千冬さんの眼力をものともしない。

この男、なよなよした外見に似合わず相当な胆力だ。

「なにせ僕は技術者、戦闘に関しては素人だ。井上君の実力は見ただけじゃわからないからね。
だから僕にもわかるデータがいるんだよ」

なるほど、話はわかった。

「続けるよ。今回井上君には、ＩＳ学園の訓練機、打鉄を使ってもらう。データ収集のためのプログラムを入れてる以外は普通の打鉄だから、安心してくれていいよ」
「どこがだよ。左腕が付いてないじゃねぇか」

一夏が不機嫌そうな顔で言う。

「え？だっていらないでしょ？」

まあ確かに要らんが。動かないうえ中身が入ってないクセに弾が当たるとシールドエネルギーが減るし重いから、むしろ邪魔なくらいだ。
だが一夏はその発言が気に入らないようで、如月社長を睨み付けている。
千冬さんに気付かれ叱られているが、それがなければ殴りかかっていたかも知れないほどの怒りようだ。

――まだ、引き摺っているのか。

「武装は君が好きに選んでくれていいよ。僕らからの要求は、君が全力で戦うことだけだからね」
「……」
「別に勝てとは言わない。たとえ負けたとしても、内容次第で採用だ。

まあ、僕はあまり心配していないけどね」

やるからには勝ちに行くが、負けてもいいと言われれば多少気が楽になるのが人情である。

入試の時のような無様は晒さないようにしよう。

「さて、そろそろだね。井上君、準備を始めてくれ」

「……承知……」

言われて、白い制服を脱ぐ。

ＩＳスーツは予め制服の下に着ている。

しかしこの、所謂スクール水着のようなデザインはどうにかならんのか。

顔に出ないと言うだけで、己にも羞恥心くらいあるのだが。

ノースリーブなせいで、普段は夏でも長袖を着ることで隠している左腕が顕わになる。肩と肘の中間から下がなく、その上から鎖骨近くまでを醜い傷に覆われたその左腕を見て、箒と本音、山田先生が息をのんだ。

如月社長は全く気にした様子はなく、千冬さんは顔を僅かにしかめただけに留めた。

――そして、一夏は。

「……っ」

自らが犯した罪を見せ付けられたような顔で、しかし決して目を逸らそうとはしない。

たとえどれだけ重くとも、その罪を背負うと決めているのだ、この

少年は。

（……馬鹿者が……）

打鉄を起動し、武装を選ぶ。

銃火器は全て解除し、空いた容量に近接ブレードをありったけしまい込んだ。

「うふふ、君も大概だねぇ、井上君」

「……」

如月社長が何か言っているが無視する。

打鉄の調子を確かめ、不備がないことを確認。流石はＩＳ学園の整備班、優秀だ。

確認を終えて、歩き出す。

一夏の下へ。

「……シン……」

「……」

――――そんな顔をするな。

泣きそうな顔で己を見る一夏の前に跪く。

ＩＳを装着している今では、それで目線の高さが合った。

「俺……」

「……よく、見ておけ……」

何かを言おうとする一夏を遮り、告げる。

「……己の、剣を……」
「……ああ。見ててやるから、負けんじゃねえぞ、シン」
「……ほざけ……」

気力を取り戻した一夏の顔を見て、立ち上がる。
これから戦うのは己だと言うのに、お前が心配させてどうするのだ。

――全く、手の掛かる幼なじみを持つと、苦労する。

思わず口元に浮かんでしまった笑みを、誰にも見られなかったのは、幸いだった。

――――――――――

「このわたくしを相手に訓練機で挑もうなんて、馬鹿にしていますの？」
「……」

これしかないんだ、仕方なかろう。
ピットを出て飛び上がった己を待っていたセシリアが、優雅な仕草で腰に手を当てる。

「まあ、そんな機体で逃げずに来たことは褒めてさしあげますわ」
「……」

己のデータ収集のための対戦ということを理解しているのだろうか、こいつは。

「んんっ！まあ、あなたの都合に快く付き合ってあげるわたくしの優しさに少しでも感謝しているのなら、わたくしの引き立て役になるくらいには頑張って下さいな」

「……」

自信の現れなのか、自分の存在に誇りを持っているのか。
セシリアの語り口はいつも熱を持っている。
大半の者にとって、その態度は傲慢と映るだろう。
そしてその多くは、彼女を快くは思うまい。

だがその在り様は、かつての己の相棒と、どこか似ていた。

「……あなた、本当に無口ですわね……」

「……話すのは、苦手だ……」

どうにも嫌いになれない少女に、返事をする。
セシリアはひとつ溜め息をつくと、気を取り直して大仰な仕草でぐるりと観客席を見渡す。

「ふふ、わたくしの勇姿を一目見ようと、こんなにも人が集まりました。
あなたはそんな剣一本で、わたくしにどんな芸を見せてくれるのかしら？」

セシリアの問に、彼女に剣の切っ先を向け、力を込めた視線と共に答える。

「……寄って、斬る……」

そうだ。

相手が誰であろうと、それこそ神であろうと。

己には、井上真改には、もとより――

「……他に、能がない……」

「――いいでしょう。なら、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットと、ブルー・ティアーズの奏でる円舞曲（ワルツ）で！」

――いいだろう、貴族（ノーブル・レディ）のお嬢さん。

華のない、無骨な剣舞でよろしければ、一曲お相手仕る――！

――――――――――

セシリアのもつ、全長ニメートルを超える長大なレーザーライフル、スターライトｍｋ？の銃口から閃光が放たれる。

――回避。

狙いを外れたレーザーが、アリーナを覆う遮断シールドに当たる。

観客席から悲鳴が聞こえたが、今はそちらに割く意識の持ち合わせはない。

「あら、わたくしの初撃をかわすだなんて、なかなかの反応ですわね」

「……」

セシリアは己に銃口を向けたまま余裕に満ちた口調で言うが、そこに油断はない。
自分で言った通り、射撃には自信があるのだろう、その自分の銃撃を初見で完全に回避した己を、油断ならない相手と判断したようだ。

「ですがそれも、いつまで続くかしら？」
「……ッ！」

射撃、射撃、射撃。
雲霞の如く押し寄せる、閃光の乱舞。
スラスターを噴かし、まずは回避に専念する。

セシリアの武装、スターライトｍｋ？は、その巨大さに見合った威力を誇る。
山田先生との戦いでやったような装甲任せの突撃ではこちらが保たない。
加えて、弾速も驚異的だ。打鉄は防御力重視のバランス型であり、機動力はそれほど高くはない。近付くには被弾を覚悟せねばなるまいが、その被弾を少しでも減らすためにはセシリアの「クセ」を掴む必要がある。

「ええい、ちょこまかと……！」

一向に当たらないことに流石に焦りが出てきたのか、セシリアの射撃に乱れが生じる。

――――好機。

スラスターを全開にし、突撃を仕掛ける。

「こ、この……！」

上下左右だけだった機動に前後の動きが加わり、照準の修正が出来ていない。

最短距離を真っ直ぐ進んでいるだけだが、当たらない。

間合いまであと一息、というところで、セシリアの顔に浮かぶ笑みに気付いた。

「お行きなさいっ！ブルー・ティアーズ！」

（……なに……！？）

瞬間、四方から浴びせられる閃光。

打鉄のシールドエネルギーが大きく削られる。

状況もわからず突撃を続けるのはまずい、一旦距離を取らねば。

「驚きまして？これがブルー・ティアーズの真の武装、これこそが本来ブルー・ティアーズと呼ばれるもの。

この機体は、ブルー・ティアーズを搭載した実験機として同じ名前を与えられているにすぎませんの」

（……自立機動兵器……！）

セシリアの周囲に浮かぶ、四機の砲台。

フィン状のパーツに直接特殊レーザーの銃口が開いたそれらが、狩人に従う忠実な猟犬のように己を狙っている。

成る程、己はまんまと罠にかかった獲物というわけか。

「先ほどの動きには驚きましたが、このブルー・ティアーズを起動した以上、同じようには行きませんわよ？」

「……」

流石にスターライトｍｋ？と同等の威力はないだろうが、銃口の数は五倍になった。

あれだけの射撃技術だ、大抵の相手は容易く仕留められるだろう。

「ここからが本当の始まりですわ。せいぜい、わたくしを楽しませてくださいな」

「……」

オーケストラの指揮者のように、セシリアが高々と銃を掲げる。

それを受け、ブルー・ティアーズが多角的な直線機動で己に近付いてくる。

囲まれるのはまずい。包囲を逃れるべく、己はスラスターを噴かした。

――――――――――

「シン……！」

シンが操る打鉄を囲もうと、四機のビットが動く。

シンもアリーナ内を縦横無尽に動き回りビットに包囲されるのを防いでいるが、それでも五対一だ。

ビットのうち何機かはシンの背後や頭上、足下といった、ハイパーセンサーで見えていても反応が遅れる「死角」に入っている。

今もまた、死角から放たれたレーザーが装甲を掠めた。

――このままじゃ、ジリ貧だ。

「くそ、あいつ、強い……！」

シンも何度かブレードを投げつけて反撃しているが、当たらない。
ＦＣＳの恩恵を受けられない投擲では、高速で動き回るＩＳは捉えられない。
そして投擲の隙を突いて、セシリアが持つ巨大な銃からレーザーが放たれる。
その一撃はすんでのところでかわせたが、無理な回避で体勢が崩れた。

――そして、ついに。

「やばい、囲まれた……！」

「真改……！」

いよいよ激しさを増す、閃光の雨。
シンは絶えずスラスターを噴かし続けているが、巧みな射撃でどうしても包囲を抜けられずにいる。

「畜生、まるでなぶり殺しじゃねぇかよ……！」

――セシリアは、強い。
あのシンが、ここまで一方的にやられている。
なら俺は、そのシンに十年経ってもまるでかなわない俺は、果たして本当に強くなれるのか？

「くそ……！」

追い掛け続けた親友が、まるで歯が立たずに傷付いていく姿を見ていられず、思わず俯いてしまう。

――――パァンッ！

「何をしている、馬鹿者」

「ち、千冬姉……？」

思わずそう呼んでしまい、しまった、と思うがしかし、頭に二度目の衝撃は来なかった。

「あいつはお前になんと言った？」

「それ、は……」

『……よく、見ておけ……』

『……己の、剣を……』

「そうだ、ならば目を逸らすな。あいつの、真改の戦う姿を、一瞬たりとも逃さず目に焼き付けろ。

……それが、今のお前の役目だ、一夏」

「千冬姉……」

そう言う千冬姉も、シンから目を離さない。

箒も山田先生も、決してシンから目を離そうとしない。

「それに～、いのっちが負けるって、決まったわけじゃないよ～？」

「え……？」

「ほら～、いのっち、さっきから一回も当たってないよ～？」

「……！」

――そういえば。

危ないところは何度もあったし、掠ることも多かったが、さっきの一斉射撃以外、直撃は一度もない。

「きっといのっちは今、チャンスを待ってるんだよ。一発逆転の、チャンスを」

「のほほんさん……」

「だから～、おりむーも、いのっちのこと信じてあげよ～？」

……なんてこった。俺だけが、シンのことを信じてなかったってのか？

「ようやく気付いたか、馬鹿者め。お前は一体、十年間も、あいつのなにを見てきたんだ？」

そうだ、シンはいつだって、黙って道を切り開いてきた。

俺を守って左腕をなくしたときも、一切泣き言を言わず、片腕で剣を扱う鍛錬を始めた。

そんなシンだから、俺が憧れ、あの千冬姉も認めたんだ。

――そうだ、心配することなんか何もない、俺はただ、シンの勝利を信じればいい。

「っはは」

思わず笑いが漏れる。全く、自分が情けない。

親友のことも、信じていなかったなんて。

ばちん、と、両手で頬を張って気合いを入れる。

体を反らして限界まで息を吸い、腹筋に力を込める。

親友が必死に戦っている。

見ているだけなんて耐えられないなら、やることはひとつだけだ。

轟音が鳴り響くアリーナに、届くとは思えない。

それでも言わないと。

だって、それが応援ってものなんだから。

「いっけぇぇぇぇっ！！シィィィィンっ！！」

――――――――――――

（……馬鹿者が……）

ハイパーセンサーが拾った幼なじみの声援に、苦笑しそうになる。

それほどまでに、今の己は窮地に見えるのか。

確かに一方的に攻められてはいるが、よく見ればわかる。

焦っているのは、己よりむしろセシリアのほうだ。

「そんな、どうして……！」

――――当たらないのか。

理由は簡単だ。イギリスの代表候補生であるセシリアは戦闘経験も豊富だろうが、その相手は自分と同じＩＳだ。

つまりは、一対一なのである。

そしてその相手も当然一対一の戦いを多く経験しており、だからこそ死角からの攻撃は効果的だった。

唯一の敵が目の前にいる以上、死角から撃たれることなどないのだから。

だが己は違う。リンクスとして戦場を駆け抜けていたころは、一対一の戦闘などほとんどなかった。それこそ、前から撃たれるほうが稀なほどだ。

だから、見える。

たとえ死角に回り込もうと、その動きを察知し、攻撃に対応できる。

機動力の問題でビットを追い切ることは出来ず、反撃も出来ていないが、その問題は今解決する。

ビットが一機、己の背後を取った。

今度こそと、セシリアがビットに指示を出す。

――ロックオン。

銃口からレーザーを放たんとするその瞬間に、己は後ろ手にブレードを投げた。回転しながら飛翔する刃がビットを貫き、爆散させる。

「なぁっ！？」

驚愕するセシリア。

投げたブレードが当たるわけがないと、心のどこかで思っていたのだろう。

当然だ、そう思わせるために、外れるとわかっていながら今までブレードを投げつけていたのだから。

確かにＦＣＳによるロックオンが出来ない投擲攻撃では、高速かつ変幻自在な機動力を持つＩＳは捉え切れない。
逆に言えば、止まってさえいれば投擲の技術次第で当てることも出来るということだ。

――例えば。射撃体勢に入り、発射する直前のブルー・ティアーズとか。

セシリアがビットを操作するには、多大な意識を割く必要があることは気付いていた。
四機もの自立機動兵器を同時に操るのだ、並大抵の集中で出来ることではない。
だから命中率を上げるため、発射の瞬間、ビットの動きを止めて安定させることにも気付いた。

あとは簡単だ。攻撃を回避し続けることでセシリアの焦りを呼び、故意に隙を作ることでビットを背後に誘い込んだ。
セシリアは自ら罠に飛び込んだとも気付かず、必中を期してビットを空中に固定する。

ここまでくれば、ビットにブレードを投げ当てるなど容易い。

（……借りは、返した……）

では、反撃を開始しよう。

「……ッ！」

「な、く、ブルー・ティアーズ！」

突撃してくる己を迎え撃つべくビットに指示をだすが、驚愕により集中が切れたのか、ビットの動きは明らかに精彩を欠いていた。

これならば問題なく追える。

ブレードを振るい、全てのビットを切り捨てた。

「そ、そんな……！」

スラスターを全開にし、セシリアに向け一直線に加速する。

セシリアも距離をとるべく後退するが、加速していた己の方が速い。

あと一歩でこちらの間合いというところで、セシリアが動く。

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは六機あってよ！」

――それがどうした。同じ手が二度通じるとでも思ったか。

セシリアのスカート状のアーマーから突起が外れミサイルとなり、己を目掛けて飛んで来る。

己は脚部のスラスターを上へ、背部のスラスターを下へ、それぞれ噴かす。

前方宙返りをするように大きく回転し、直近で放たれたミサイルを回避した。

「な――――」

驚愕の連続で、今度こそセシリア自身の動きが止まる。

このまま退がり続けていれば、一回転した勢いのままにブレードを打ち込めたのだが、これでは回りきれない。

――ならば。

セシリアの両肩を踏みつけ、全てのスラスターを下向きに全開で噴かすと同時、蹴り抜く。

「キャアアァァッ！」

混乱しているところに強烈な一撃を受け、アリーナの地表まで落ちていくセシリア。
己は再びスラスターを噴かし、追撃をかける。

ブレードを逆手に持ち替え、セシリアを目掛け、一直線に落ちる。

「隙だらけ、ですわ……！」
衝撃から回復したセシリアが、レーザーライフルを持ち上げる。

構わない、己にも打鉄にも、もう余力は残っていないのだ。
この機を逃せば、どちらにせよ後はない。

（……一撃だけでいい……）

銃口に光が集まる。
警告、危険。

（……耐えてくれ、打鉄……！）

そして己は、閃光に飲み込まれ。

「……終止……」

セシリアの胸に、ブレードを突き立てた。

――――――――――――

『試合終了。勝者――――井上真改』

アナウンスを聞き、茫然とする。

――――負けた？このわたくしが？

井上さんの最後の一撃、打鉄の全重量にスラスターの推力と重力を加えたその一撃は、確かにわたくしのブルー・ティアーズの絶対防御を発動させ、シールドエネルギーを枯渇させるだけの威力はあったでしょう。

ですがそれは、あの落下の勢いを維持できたらの話です。

最後の瞬間、わたくしは確かに、井上さんにスターライトｍｋ？の銃口を向けました。

この銃の威力は、井上さんも見ています。ボロボロの打鉄で受けきれるかは、賭けだったはず。

なら回避するか、そうでなくとも多少は怯んで、スラスターの勢いを弱めるだろうと思っていたのに。

なのに、彼女はほんの僅かも怯まなかった。

光を放つ銃口から、顔を背けることさえしなかった。

（……強い、ですわね）

機能停止し、ＩＳが解除されていく。背中に土の冷たさを感じ、わたくしは自分の敗北を実感しました。

（……負けて……しまいましたのね）

負けるわけにはいかなかったのに。

たとえどんな勝負でも、わたくしは負けるわけにはいかなかったのに。

オルコットの名を、家を守るために、わたくしは、勝ち続けなければならなかったのに。

そのために、努力をしました。

勉強も訓練も必死にこなして、祖国の代表候補生となり、ＩＳ学園に首席で入学しました。

――けれど。訓練機に乗った、片腕というハンデを持つ、ＩＳについては素人と大差がない少女に、負けてしまいました。

この報せをうけたら、イギリス政府はどう思うでしょう。

見込み違いだったと、わたくしから代表候補生の立場を剥奪するでしょうか？

もし、そうなったら――――わたくしはどうやって、オルコットを守ればいいのでしょう。

（……無様、ですわね……）

アリーナを包む歓声が、ひどく遠く聞こえます。
代表候補生を破った一年生の女の子を称える歓声が、わたくしが受けなければならなかった歓声が、とても、とても遠く感じます。

（このアリーナが、こんなに、広かっただなんて……）

わたくしを守るＩＳが消えて、自分がとてもちっぽけな存在になってしまったかのように錯覚しました。
あるいはそれは、錯覚ではなかったのかもしれませんが。
ふと、わたくしは自分が涙を流していることに気付きました。
負けた悔しさではありません。
なにか大事なものをなくしてしまったような、そんな悲しみを感じたからです。

（自分ではなにも持っていない、与えられたもので着飾っていただけですのに）

もういいです、今日はもう疲れました。
明日からどうなるのか、そんなわたくしの未来ですらも、今はどうでもいいんです。
だから今は、眠らせて下さい。

なのに。

ざりっと、わたくしのすぐ近くから、土を踏む音が聞こえました。
今このアリーナの中にいるのは、わたくしを除けば一人しかいません。
敗者のせめてもの礼儀として、わたくしに勝った女の子の顔を見ようと、鉛のように重い瞼を開けます。

「……井上さん」
「……」

そこにいたのはやはり、わたくしを倒した少女。
とても無口で、片腕のない女の子。

ＩＳを解除した井上さんが、倒れているわたくしを見下ろすように、立っていました。

「……わたくしを、笑いに来たの？あれだけのことを言っておいて負けた、このわたくしを……」
「……真逆……」

小さく首を振り、井上さんがわたくしの言葉を否定します。
では、いったいなにを……？

「……セシリア・オルコット……」

わたくしを真っ直ぐに見詰めて、話すのが苦手な井上さんが、しかしこれだけは伝えなくてはと、その眼で語って。

「……お前に、勝てたことを……」

「誇りに思う」

――衝撃、でした。

あれだけ強かった井上さんが、与えられただけのわたくしと違い、全てを自分の力で手に入れてきたであろう彼女が、わたくしに勝ったことを、誇ってくれているのです。

――わたくしに勝つこと、それ自体に価値があったと、そう言ってくれたのです。

嘘を言っているのではないと――嘘を言える人ではないと、簡単にわかります。

無口だからではありません。

井上さんは、こんなにも真っ直ぐに、わたくしを、イギリスの代表候補生でも、オルコットの当主でもない、セシリアという一人の人間を、見てくれているのですから。

「……」

無言のままに差し出された手を、思わずとります。

ごつごつと固く、冷たく、醜い、岩のような手。

少女らしい柔らかさも、暖かさも、繊細さも、全て失ってしまった手。

けれどもその手は、わたくしが知るどんな手よりも、綺麗で貴く見えました。

露出の多いＩＳスーツを着ているせいで顕わになった、左腕の惨い傷跡も、きっととても大事なものを守ったための結果だと、根拠もなく確信しました。

わたくしの手をとった井上さんが、その細腕からは想像もつかないほど力強く、わたくしを引き上げます。

「あ……」

「……」

疲労で足に力が入らずふらついたわたくしを、井上さんは優しく抱き留めてくれました。

眼から、ポロポロと涙が零れます。

先ほどの、悲しさから流れたものではありません。

嬉しくて、わたくしをわたくしとして見てくれることが嬉しくて、そのうえでわたくしを認めてくれることが嬉しくて、溢れてしまった涙です。

「井上さんかっこいいーーー！」

「オルコットさんもすごかった！感動したよ！」

「ああもう、なんで二人とも一組なのよ！？どっちかよこせー！」

さっきまであんなに遠かった歓声が、今はこんなに近い。

そしてその中には、敗者であるわたくしを称えてくれる声も多くあることに気付きました。

（わたくしが気付かなかっただけなのね。オルコットを守るためと、プライドや虚勢、そんなもので自分を覆って、なにも見えなくなっ

ていた）

それを、この人は気付かせてくれた。

言葉ではなく行動で、口で語らずともその眼で、そして――

――たった一言に込めた、その想いで。

「……？」

わたくしが笑顔を浮かべながら涙を流していることを不思議に思ったのか、井上さんがキョトンとした顔をしました。

（そんな可愛い顔も出来るんですのね）

思わずくすりと笑いが漏れて、自分がどんな顔をしているか気付いたのか、井上さんはまた無表情に戻ってしまいます。

それがまた可愛らしくて、けれどちょっと残念で。

「……ありがとうございます、井上さん」

「……」

突然わたくしに感謝されて、井上さんが怪訝そうな顔をします。

きっとこの人は、今日わたくしを救ってくれたことに、ずっと気付かないでしょう。

それならそれで構いません。

知られてしまうのも、なんだか恥ずかしい気がしますし。

ですがわたくしも、これだけは貴女に伝えないと。

「……わたくしも」

「……」「……わたくしも、貴女と戦えたこと、誇りに思います――真改さん」

――――――――――

「いやあ、お見事お見事！文句無しに合格だよ井上君！」

セシリアとの試合を終え、シャワーで汗を流し、一夏たちの所に行く。

扉を開けると、如月社長がものすごく嬉しそうに声を掛けてきた。

「うんうん、実にいいデータが取れた！いやあ楽しみだなあ、どんな機体が出来上がるのかなあ！！」

「……」

なんだろう、凄まじく嫌な予感がするんだが。

「こうしちゃいられない、僕は早速社に戻るよ！みんな喜ぶぞぉ、今日は徹夜だ！！」

夏休みに突入した小学生のようにはしゃぎながら、嵐のように去っていく如月社長。不安が加速度的に強くなっていく。

「よう、シン。お疲れさん」

「流石だな、真改。素晴らしい試合だった」

「いのっちかっこ良かったよ～。どうしたらそんなに強くなれるの

〜？」

学友たちが口々に労ってくれる。
帰りを出迎えてくれる仲間がいるのは、いいものだ。

「おめでとうございます、井上さん！やっぱり強いですね、私、感動しました！」
「とりあえず、おめでとうと言っておこう。今日はもう戻って休め。明日も授業は通常通りだ、遅刻するなよ」
「……」

流石に疲れたので、お言葉に甘えさせてもらい、今日はもう部屋に戻ろう。
己が踵を返すと、本音がとことことついて来た。

「帰り道で倒れたりすんなよ？」
「……」

余計なことを言う一夏を睨みつけ、言うべきことを言っておく。

「……お前の声……」
「へ？」
「……届いたぞ……」
「んな……！？」

羞恥からか、顔を真っ赤にする一夏。
それを見た箒が急にうるさくなったが、今はそれに付き合う余裕はない。

とにかく、帰って寝よう。明日からまた、覚えなければならないこ

とが山ほどあるのだから。

第7話　星光（後書き）

真改のムーンライトと、セシリアのスターライト。
近距離白兵戦特化の真改と、中距離射撃戦特化のセシリア。

そういや乙樽も輝美も中距離射撃型だったなぁ……。

そんな経緯から、今回の話は産まれました。

第8話　翌日（前書き）

サブタイトル通り、前回の話の翌日の話です。
激戦を制したことで、真改の日常が少しずつ変化していきます。

第8話　翌日

朝。
5時ちょうどに目が覚めた。

「……」

目覚まし時計は鳴っていない。
今日は昨日の疲れを癒やすべく鍛錬を軽いものにしようと思い、いつもより三十分遅く目覚ましをセットしていたのだが、習慣とは恐ろしいものである。

「……」

若干体が怠いが、二度寝するのもどうかという時間なので、仕方なく起きる。

隣のベッドで眠る本音を起こさないように、タンスからジャージを取り出し、着替える。
タンスに立てかけてある竹刀袋を手に取り、外へ。

今日もまた、いつもと変わらぬ一日が始まった。

――――――――――

と、思った己が甘かった。

「お、おはようございます、井上さん！」
「今日もいい天気になりそうですね！」
「お弁当作ってみたんです！よかったら、朝ご飯に食べてください！」
「……」

――なんだ、これは。

「おはよ――てなんだこれ？なんでこんなにいるんだ？」

己に聞くな。

「誰だ、彼女たちは？真改の友達か？」

そんなもの、己にいるわけなかろう。

先日の剣道場での一件から朝の鍛錬を共にするようになった一夏と箒が話し掛けてくる。
この状況については知らん。己が聞きたい。

「あの、えっと、私たち、昨日の試合を見て……」
「感動しました！」
「それで、井上さん、いつもこの時間に走ったりしてるって聞いて」
「……」

つまり、己を待っていたというわけか。

「真改のファンということか？」

「大人気だなぁ、シン」

他人事だと思って気楽に言う一夏を睨んでから、少女たちの方を向く。

「……」

「あの、ご一緒してもいいですか？」

「邪魔はしませんから！」

「お願いします！」

「……」

……どうしよう。

全く予想していなかった事態に、思考が追い付かない。

「あの……ダメ、ですか？」

「……構わない……」

「やったあ！」

「ありがとうございます！」

すごい喜ばれようだ。

己などのどこがいいのか。

「なにやら妙なことになったな……」

「うし、じゃあ今日はよろしくな」

「はい！」

「織斑くんと篠ノ之さんもよろしくお願いします！」

「私、お二人の試合も見てました！」
「……」

急に騒がしくなった朝の鍛錬風景。
まあ、走り始めれば彼女たちも考えを改めるだろう。
己の朝の走り込みは、陸上部員にもきついと言われるほどのペースだ。
軽い気持ちで来ているようなら、すぐに音を上げるだろう。

――――――――

と、思った己は大甘だった。
彼女たちは三人とも、疲労困憊になりながらもついて来たのである。
まあ良く考えればここはＩＳ学園、誰しも体を鍛えているのは、当然と言えば当然である。
しかし当初の目論見は外れたものの、彼女たちは本当に邪魔はしなかった。
己たちが木刀を取り出し素振りを始めると、休憩すると言って素振りの様子を大人しく眺めているだけだった。流石に木刀までは用意出来なかったようだ。

だがその熱っぽい視線は止めて欲しい。
どうにも落ち着かないんだが。

そうして素振りも終え、さて帰るか、という段階になると、

「お疲れさまでした！」
「タオルとスポーツドリンク持ってきましたよ！」
「はい、織斑くんと篠ノ之さんの分です」
「お、おお、ありがとう」

まるで運動部のマネージャーのような手際に、流石の一夏も少し引いている。

「あ、あの、井上さん、これ、お弁当です」
「……」

朝からか。
5時の鍛錬に間に合うように作ったとなると、この娘は一体何時に起きたんだ？

「……ありがとう……」
「は、はい！」
「……明日からは、いらない……」
「え……」

途端にしゅんとなる少女。
どうしろと言うのだ、この己に。

「シンは、朝飯作るのは大変だろうからいい、て言ってるんだよ」
「え？」
「それに明日からは、てことは、また来てもいいってことだ。だろ？シン」
「……」

一夏の振りに答えず、帰り支度を進める。特に否定もしなかったが。

「まあ、真改はこんなやつだからな。分かりにくいことも多いだろうが、めげずに仲良くしてやってくれると、私も嬉しい」

続いて箒。お前たちは己の保護者かなにかか。

「はい！頑張ります！」

「じゃあ、戻るか。タオルとドリンク、ありがとな」

一夏の仕切りで解散し、寮へ戻る。

……明日はさらに増えていないだろうな。

――――――――――

「お、いのっちお帰り～」

「……」

驚いた。本音が起きている。ＩＳ学園に来てから初めてのことだ。

「む～、わたしだって早起きくらい出来るよ～」

「……」

念のために言っておくが、今起きても別に早起きと言えるほどではない。

「とにかく、シャワー浴びといで～」

己の呆れ顔に気付いた本音が促す。
まあいい、何故本音が起きているのかはわからないが、とりあえず汗を流そう。

シャワーを浴びていると、扉の向こうから本音が尋ねてきた。

「あれ～？いのっち、このお弁当どうしたの～？」
「……もらった……」
「ふ～ん。昨日のいのっち、かっこよかったもんね～。ファンがいっぱいできるかも～」
「……」

勘弁してくれ、騒がれるのは苦手なんだ。

シャワーを終え、体を拭き、下着を身に付ける。
サラシを巻き、ＩＳスーツを着たところで、本音が包帯のような布を持って来た。

「じゃあいのっち、そこに座って～」
「……？」

言われるままに座ると、本音は己の左腕に持ってきた布を巻き始めた。
己の傷跡を、隠すように。

「いのっちも女の子なんだから～、ちょっとは気にしないと～」
「……勲章……」
「う～ん、そういうとこも、いのっちらしいけどさ～」

そこで本音は一度、言葉を止めて。

「いのっちの傷跡見たとき、おりむー、泣きそうだったよ」

「……」

以前から思っていたが、本音はぼーっとしているようで、周りを良く見ている。

そして大事なことを無意識に見抜き、気負うことなく言葉に出来る。

きっとこの少女は、そうやって多くの人の心を癒やしてきたのだろう。本人が気付いているとは思えないが。

（……唐沢さんに、似ているな……）

もっともあの人は天然の本音と違い、孤児たちと暮らしていくうえで必要だから身に付けたわけだが。

「ほい、出来上がり～。じゃあ次は、髪梳くよ～」

「……」

何気に上質そうな櫛を取り出し、己の髪を梳き始める。

ＩＳ学園に来る前は、妹たちがしていたことだ。

「ちょっと傷んでるね～、こんなに長くて綺麗なのに～。いのっち、誰かにやってもらってた～？」

「……妹……」

「へ～！いのっち、妹さんいたんだあ～！」

「……孤児院暮らし……」

「あ……」

本音の手が止まる。

こんな足りない言葉から、聡い本音は、己の身の上を理解したのだろう。

「……ごめんね、いのっち」

「……」

静かに首を振る。

それに合わせ、腰まである黒髪も揺れる。

「……無用……」

「……うん。ありがとう、いのっち」

再び、髪を梳く本音。

その手付きは、妹たちのそれに劣らず優しいものだった。

――――――――――

「おはようございます、真改さん」

「……」

次はこいつか。

まだＳＨＲも始まっていないというのに、早くも疲れて来たぞ。

「昨日はお疲れさまでした。実に素晴らしい試合でしたわね」

「……」

昨日までとは１８０度違う態度のセシリアに、ここ数日で学習した己は悟った。

――――懐かれた。

「真改さんの視界の広さ、反応の速さ、心の強さは十分に見せていただきましたわ。
ですがＩＳの扱いはまだまだ荒削り。動きに無駄があります」

「……」

言われなくともわかっている。
生身ともネクストとも勝手が違うＩＳの操縦に、己はまだ習熟していない。
所謂天才と呼ばれる者たちのように、感覚で操るような真似は己には出来ない。
時間をかけ、回数を重ねてこの身に技を刻み込むしかないのだ。

「ですがわたくしも、貴女のおかげで自分の弱点の重大さに気付きました。
そこで、わたくしと真改さんで訓練をすれば、お互いの足りないものが鍛えられると考えましたの」

「……」

別にお互いでやる必要はない気がするが、まあ、野暮なことは言うまい。

「ですから、真改さんの専用機が完成しましたら、二人で訓練をしませんか？」

「……構わない……」

断る理由もないので、その申し出を受けた。

「……！そ、そうですか、さすがは真改さん、よく分かっていますわね！
それでは、専用機の完成を楽しみにしていますわよ！」

スキップでもしそうな足取りで自分の席にもどるセシリア。
分かり易すぎる。

「……なんだったんだ？あれ」
「……」

己に聞くな、一夏。

――――――――――

昼休み。
いつもの三人で学食に行くと、いつにも増して視線が多い。
飯抜きでもいいから帰りたくなった。

「なんかすげえ見られてる気がする……」
「そうだな……」
「……」

昨日までは主に一夏に向いていた視線が、今日は己と一夏で半々といったところか。

試合ひとつでここまで注目を集めることになるとは思わなかった。
ここは来週の一夏の試合に期待するしかあるまい。

「あの子が昨日の……」
「代表候補生に勝ったって子？私も見に行けばよかったなあ……」
「あ、私映像もってるよ。千円でどう？」

おい、誰に断って商売している。

「あ、買う買う」
「昨日見たけど、買おうかな」
「私も、部屋でもっかい見よーっと」
「まいどーっ」

千冬さんに言いつけるぞ。

周囲の雑音を気にしていると身が持たない。
とにかく飯を食おう。

「しかし強かったなぁ、あいつ。俺、勝てるのか？」
「弱音を吐くな。男らしくないぞ、一夏」
「分かってるよ。だからＩＳの使用申請書出したんだろ。練習しないと、話にならねぇからな」
「そういえば、一夏の専用機はいつ来るんだ？」
「わかんねぇ。早いとこ来てくれないと、このままじゃぶっつけ本番になりそうだよな」

一夏とセシリアの試合は三日後。
それまでの訓練機の使用許可はでているが、一夏が本番で使うのは専用機だ。

格上の相手と不慣れな機体で戦うのは不安があるだろう。

「まあ、やれることをやるだけさ」

「う、うむ、そうだな、どうしようもないことで悩んでも仕方がない」

「……」

気負わず、しかし頼もしい表情で言う一夏に、箒の顔が赤くなる。

「「ごちそうさまでした」」

「……ごちそうさまでした……」

食事を終え、席を立つ。

そう、一夏の言う通り、己たちはやれることをやるだけだ。

さしあたっては勉強である。

さて、午後の授業はなんだったか……

――――――――――

一日の授業の締めくくり、ＳＨＲ。

教壇に立つ千冬さんから、驚愕の事実が告げられる。

「井上の専用機が完成した」

「「「「「「「「「「えええええええええええええ！！！？！！？」」」」」」」」」」
「データ取ったの昨日ですよ！？」
「いくらなんでも早すぎませんか！？」
「如月重工が一晩でやってくれましたっ！」
「流石変態企業！私たちに想像もできないことを平然とやってのける！」
「そこに痺れる！憧れるゥ！！」

パニックに陥る教室。かく言う己も驚いている。
まさか一日で出来上がるとは。

バァァン！！

千冬さんが教卓を叩く。
静まる教室。

「落ち着け、馬鹿者共」

険しい顔で言う。
頭痛でもするのかこめかみを揉みながら話を続けた。

「機体は昼過ぎに完成し、各種チェックを済ませ、今学園に向けて搬送中だ。あと三十分ほどで到着するらしい」

「……」
「先方はすぐに起動させたいと言っている。場所は第三アリーナ。井上、準備しておけ」
「……はい……」
かなり予想外ではあったが、早くて困ることはない。
如月重工の仕事振りに感謝するとしよう。

――――――――――

と、思った己は胸焼けするほど甘過ぎた。
「やあやあ一日振りだねえ井上君！また会えて嬉しいよ！」
如月社長はかなり興奮している。
昨日の別れ際に言っていた通り完徹したのだろう、その目は血走っていた。
その様子に、己について来たクラスメイトたちが一歩引く。
「……随分早かったですね」
「もともと七割方出来てたからねえ」
千冬さんの問いに即答する如月社長。
しかしそれだと単純計算でＩＳ一機を四日で開発できることになるのだが。

「じゃあ最終調整を始める前に、うちの開発主任を紹介しとこうか。彼は僕が学生だったころから一緒に研究をしている、網田君だ」

如月社長に促され、白衣を着た男が前に出る。

「はじめまして、井上さん。如月重工開発主任の網田です」

不気味な笑みを浮かべ、妙に甲高い声で話す網田主任は、無遠慮に己をじろじろと見る。

「いやはや、昨日の映像を見たときから思っていましたが、実物はさらにお美しい。特にその左腕！まるでミロのヴィーナスのようだ！」

「……」

何故だろう、褒められている筈なのに、全く嬉しくない。己の後ろにいる一夏が殺気じみた怒りを発しているからか？

「さあ、紹介も終わったことだし、早速始めよう！すぐ始めよう！網田君、やってくれたまえ！」

子供のように目を輝かせながら、如月社長が指示を出す。

「では御披露目といきましょう！これが我々如月重工ＩＳ開発部が総力を結集して作り上げた第三世代型ＩＳ――」

第三アリーナのピットに搬入されたコンテナが、重々しい音をたて、ゆっくりと開く。

そこに在ったのは、淡い銀の輝きを放つ機体。

己の、専用機。

「――――朧月（おぼろづき）ですっ！」

集まっていたクラスメイトたちが、息をのむ。

コンテナから現れた銀色のＩＳ、朧月。

まず目を引くのは、当然と言うべきか、その左腕だ。

正確にはそれを腕とは呼べまい。

それは重厚な装甲で形作られた、機械の翼だ。

「順に説明しましょう。まずはこれ、左腕のない井上さんに合わせて、腕の代わりに取り付けた大出力特殊スラスター、その名も月輪（がちりん）。左右の推力バランスをあえて崩すことで、複雑かつ変則的な機動を可能にします」

いきなりイカレた装備。

流石如月、という声がそこかしこから聞こえる。

「それだけではありません！この月輪はこれ自体を刃として使える、スラスターを兼ねた武器でもあるのです！」

クラスメイトたちが、うわぁ、と呻く。

「続きまして、背部の大型スラスター、水月（すいげつ）。これはエネルギー噴射による推進だけでなく、噴射口の下にあるユニットに特殊な炸薬が装填されており、瞬間的、爆発的な加速を生み出します」

操縦者に与える反動をまるで考えていないかのような、正気の沙汰とは思えない代物である。
もはや言葉を失うクラスメイトたち。

「次は、左肩のガトリングガン、月影（つきかげ）。射角が広く、精密な射撃よりも弾幕を張るのに向いています」

ようやくまともなものが出てきた、とクラスメイトたちが一息つくが、

「牽制を目的としていますので、弾頭は散弾を採用しました」

それは罠だった。

いずれ劣らぬ変態装備の数々に皆が戦慄している中、己は機体の右腕に取り付けられた武器に、全ての意識を奪われていた。

朧月を見たその瞬間から、「それ」以外は視界に入っていなかった。

「それ」は細長い、菱形の板のような形をしており、一見しただけでは武器とは思うまい。

だが、己にだけは分かった。
なんの説明も受けず、それどころかろくに見もせず、まるで最初から知っていたかのように、「それ」がどのようなものであるかを理解していた。

「ううん？さすが井上さん、目の付け所が違いますね。
そう、今まで説明してきた朧月の装備は、「それ」を最大限活かすための、言わば引き立て役でしかありません。」

そんなことは分かっている。
ここにいる誰でもなく、如月社長でも、網田主任でもなく、この己こそが、「それ」のことを最も深く理解している。

「これこそが、朧月が持つ最大にして最強の武器、膨大なエネルギーを極狭い範囲に収束させることで絶大な破壊力を生み出す、光の剣――」

――だって「それ」は、あまりにも――

「――月光ですっ！」

――「彼女」の剣に、似ているから。

第8話　翌日（後書き）

ようやく登場、ムーンライト！
やっぱこれがなくちゃ真改じゃないですよね！
真改の専用機、朧月は、性能的にはスプリットムーンと似た感じです。武装はだいぶアレですが。

第9話　朧月（前書き）

朧月の実戦テスト。
変態っぷりがどれだけ表現できているかが心配です。

第9話　朧月

「というわけで、早速実戦テストをしよう！！」

全くテンションを落とすことなく、それどころか天井知らずに上げながら叫ぶ如月社長。
クラスメイトのうち数名が怯えだした。

「さあ、頼むよオルコット君！」
「えぇっ！？」

突然振られてうろたえるセシリア。

「いえ、ですがわたくしの――――」
「早くしてくれたまえ、もう待てそうもないんだ！さあ！さあさあ！！さあさあさあ！！！」
「ひ――――」

如月社長の余りの剣幕に涙目になる。
無理もない、あれは恐すぎる。目が完全に狂人のそれだ。

仕方がない、今の如月社長と関わるのはかなり嫌だが、本当に嫌だが、助け舟をだそう。

「……社長……」
「なんだね、井上君？僕の我慢もそろそろ限界なんだ、早く朧月の勇姿を魅せてくれ！」
「……」

如月社長の注意を引きつけながら、セシリアに目線を送る。
幾分余裕を取り戻した彼女は頷き、口を開いた。

「如月社長、残念ですが、わたくしのブルー・ティアーズは、昨日のダメージからまだ回復しきっていませんの」
「え、そうなの？使えないなぁ」

セシリアのこめかみにビシリと血管が浮かび上がるが、如月社長は全く気にしていない。

「うーん、じゃあ訓練機は？」
「事前に使用申請書を提出していた生徒たちに、全て貸し出しています」
「教師権限でどうにかならない？」
「授業中や緊急時ならともかく、今はただの放課後です。申請が通るまで時間と手間がかかりますから、無理矢理取り上げると生徒から不満が出るでしょう」

如月社長の問いに淀みなく答える千冬さん。
実に頼もし――

「……しょうがない、生身相手で我慢するかな……」

――待て、今なんて言った。

正気とは思えない独り言が聞こえたところで、すっ、と誰かが手を挙げる。

「――あの」

その誰かは、一夏だった。

「俺、今日――――訓練機の使用許可、貰ってます」

――――――――――

「いやさすがはブリュンヒルデの弟君だ！では頼むよ織斑君！」

アリーナ内に響く如月社長の声。

一夏の顔が一瞬嫌そうなものになるが、すぐに気を取り直して己に向き合った。

「まあどっちにしたって、訓練するつもりだったしな。最終調整とかいうのも、ついでにやっちまおう」

「ついでじゃ困るんだよ、織斑君。僕らにとってはそちらが本題なんだ、君の訓練なんかどうでもいいんだよ」

「「……」」

頼むから、空気を読んでくれ。

怒りを鎮めるように一度深呼吸した一夏が、己に話し掛ける。

「ＩＳでシンと戦うのは初めてだな。

手ぇ抜くなよ、俺も本気でいくぜ」

「……」

悪いが、生身だろうがＩＳだろうが、一夏にはまだ負ける訳にはい

かない。
己の今の役目は一夏の目標で在り続けることだ。
千冬さんでもいいのだろうが、彼女は大人だ。負けても仕方ないと、心のどこかで思ってしまう。
だから、己のような同い年の者――所謂ライバルと呼べる者のほうが、一夏の成長には必要だ。

「こちらの準備は整いました。それでは、始めてください！」

網田主任の声を合図に、一夏が近接ブレードを展開し、青眼に構える。
剣道でも剣術でも使われる、基本にして正道の構えだ。
対して己は、右足を一歩引いて左半身になり、月光が取り付けられた右腕を目線の横まで持ち上げ、切っ先を一夏に向ける。
多少変則的だが、古流剣術に使われる、霞の構え。

「――行くぜ」
「……来い……」

一夏がスラスターを噴かし、一気に突撃してくる。
くん、とブレードを振り上げ、まずは唐竹の一撃。

「シッ！」

鋭い呼気に見合った見事な一撃を、月光で受ける。
月光はかなり頑丈に作られており、これ自体を盾のように使うことも可能だと、網田主任は言っていた。
その言葉に偽りはなく、ブレードの強烈な一撃を真っ向から受けても傷ひとつない。

「はぁっ！」

初撃を受けられた一夏は、突撃の勢いを殺さずに胴を薙ぎ、駆け抜ける。

それを受けつつも、淀みない、流れるような二連撃に幼なじみの成長を実感する。

だが、まだ足りない。

すれ違うようにして己の背後に回る一夏を追うべく、月輪を起動。

片方だけから噴射するエネルギーが、朧月を高速で回転させる。

再びブレードを振り上げ三撃目を打ち込もうとしていた一夏が、そのあまりの速さに目を剥く。

「く……！」

刃と刃の噛み合う音。

打鉄の近接ブレードと朧月の月輪が火花を散らす。

このタイミングで反応し、かつ反射的に振り下ろしたブレードで初撃に劣らぬ太刀筋を描いて見せた一夏に感嘆する間もなく、驚愕する。

――出力が強すぎる。

打鉄ごとブレードを弾き返した月輪は、そのまま朧月を三回転させた。

なるほど、光を放ちつつ回転するその様は、確かに真円の満月の如くだろう。

その中心にいる己はたまったものではないが。

「すっげぇ衝撃。冗談だろ、推力だけでこれかよ……」

「……」

二人して戦慄する。
この月輪、性能は申し分ないが、じゃじゃ馬過ぎる。
扱い難いどころではない、下手に使えば、すぐに敵を見失うだろう。

「せいっ！」

再び突撃、今度は突きを放つ。
月光でいなし、そのまま立ち止まっての打ち合いへ。

「オオオォォッ！」
「……ッ！」

雄叫びを挙げ、一夏が連撃を繰り出す。
スラスターを併用し、推進力を上乗せした剣戟は重く、己の右腕を痺れさせる。

「ゼェィッ！」

片腕では抑えきれず、右腕を弾かれた。
その隙を逃さず一歩踏み込む一夏に、起動した月影の銃口を向ける。

「……」

三連装の砲身が回転し、散弾の雨を吐き出した。
想像を超える反動に照準がブレたが、この距離と散弾の攻撃範囲なら関係ない。
関係ないが――

「うおおぉぉぉっ！？」

堪らず退がる一夏。その顔は涙目だ。

「ざっけんな！なんだそれ！？恐すぎるぞ！！」

「……すまん……」

思わず謝る。

ただでさえ強力な散弾を、毎秒三十発という驚異的な速度で連射するのだ。

轟音と共に降り注ぐ散弾に打ち据えられ、打鉄の全身から火花があがる様は、撃ったこちらも驚くほどだった。

「それもう近くで撃つなよ！絶対に撃つなよ！？」

「……」

相手に恐怖心を植え付けることが出来るという点では破格の性能。

だが弾が少ない。体積の大きい散弾を使っているので仕方がないが、要所を見極めなくては、瞬く間に弾切れだ。

……牽制用なのに無駄弾が撃てないのか。本末転倒だな。

「……」

月影を警戒してか、一夏が距離を取る。

どうやら間合いを計っているようだ。

（……ならば……）

ガコン、という音を立て、水月に特殊カートリッジが装填される。

撃針が信管を叩く。

自身を弾丸として撃ち出す狂気の機構が、その力を見せ付けた。

「がっ……！？」

肩甲骨を鈍器で殴られたような衝撃。

一瞬で一夏に接近するが、己は加速の衝撃で体勢が崩れ、一夏はあまりの速さに反応出来ていない。

――――結果。

「うおわぁっ！」

「……ッ！」

衝突。

もつれ合って、地面に落ちる。

「ぐ……おい、大丈夫か、シン！？」

「……」

体を動かそうとすると、肩に激痛が走った。

折れてはいないようだが、少し傷めたようだ。

「おい、中止だ！早くシンの手当てを！」

悲鳴のように一夏が叫ぶ。

それを受けて、治療班が慌てて駆けつけ、ＩＳを解除した己を運び出していく。

「シン、大丈夫か？」

「……無用……」

ついて来た一夏が心配そうに声を掛けてくる。
今は己の怪我を気にかけているが、それが収まれば次はその顔を怒りに歪めるだろう。
如月社長に、殴りかからなければいいが。

――――――――――

「なるほど、水月の威力が強すぎる、と。それくらいならすぐに調整できるかな」
「ええ、肩甲骨周辺の保護機能を改良しましょう。社に戻れば、一時間もあれば出来るかと」
「それじゃ、早速データをまとめといてくれ」

診察の結果、怪我は大したものではなかった。
だが二、三日は出来るだけ肩を動かさないように、とのことである。
そうして一夏と共にピットに戻ると、如月社長と網田主任が先の会話をしていたのだ。

「おや、井上君。もう少し待ってくれたまえ、今データの解析中だから」
「……てめえ」

全身から怒りを発し、一夏が一歩前に出る。
放っておけば何をするかは明白だ。

なので、一夏の手を掴んで止めたが、

「離せよ。あの野郎、一発ぶん殴ってやる」

「……」

全く止まる様子もなく歩き続けようとする。

自然と右手を引かれる形になり、肩が痛んだ。

「……っ」

「ご、ごめん。大丈夫か？」

途端に怒りを霧散させて、己の方を向く一夏。

……少し、卑怯だったか。

「どういうつもりですか、如月社長」

「うん？なにが？」

今度は千冬さんが怒った様子で、如月社長に話し掛ける。

「操縦者に怪我をさせるようなＩＳを作ったことについてです」

「だから今そこを調整しているんじゃないか」

「そういうことでは――」

「……」

このままでは千冬さんの怒りが加速していくだけだと思ったので、

視線で止める。

「ふむ、朧月はどうだったかね？井上君」

「……気に入った……」

「そうだろうとも！いやあ、君ならそう言ってくれると思ったよ！」

確かに朧月はとんでもない代物だったが、その性能は申し分なかった。
水月は流石に調整してもらうが、あとは己が朧月を使いこなせるよう訓練すればいい。

「……いいのか、井上」
「……」

心配そうに尋ねてくる千冬さんに、頷いて答える。

「……本人がそう言うなら、私からは何も言わん」
「……」
「話はまとまったかな？なら今日から、この朧月は君の専用機だ！要望があったらすぐに、遠慮なく言ってほしい。二十四時間、３６５日受け付けるからね！」
「……」

周囲からの目を全く気にせず、上機嫌な如月社長。
この人相手に気を使う必要があるとは思えないので、遠慮なく頼らせてもらおう。

「さすがに今日はこれ以上は無理かな？まあ、怪我が良くなったころにまたくるよ。その時はもう一度頼むよ、井上君」
「……承知……」

朧月のデータ解析をしていた網田主任に声を掛けて、帰り支度を始める如月社長。
その姿を、一夏は最後まで睨み付けていた。

―――――――――

「いのっち、肩痛くない～？」
「……平気……」

今己は、お互いに打鉄を装着して打ち合っている一夏と箒を眺めている。
箒が使っている分の打鉄は本来己に対して許可が出ていたものだが、流石に今日はもう使えないので、山田先生に頼んで箒が使えるようにしてもらった。

「はぁっ！」
「せいっ！」

剣の腕はほぼ互角の二人だが、ＩＳの腕も同程度のようだ。
どちらも最初はぎこちない動きをしていたが、少しずつ良くなって来ている。

「……あの機体で、ほんとにいいの～？」
「……」

心配そうに尋ねてくる本音に頷いて返す。
確かに色々と問題のある機体だが、流石は如月重工の技術力といったところか、性能自体は高い。
基本的に接近戦しか出来ない己には、あれくらい突き抜けた機体の方が都合がいい。

――ただ、月光の威力を試せなかったのは少々残念だ。

「無理だけはしないでね～、いのっち」

「……」

それは出来ない相談である。

必要なら、己はいくらでもこの身を危険に晒すだろう。

――己には、この命くらいしか、懸けるものがないから。

「こういう時は～、うそでも「うん」って言っとくんだよ～」

「……」

呆れたように言う本音に、申し訳なく思う。

だがそれ以上に、この少女とは、守れない約束はしたくなかった。

「じゃあさ～、せめて怪我した時は、すぐに、正直に言うんだよ～？」

「……承知……」

どうせ本音のことだ、己が隠したところですぐにバレるだろう。

なら始めから正直に言ってしまった方が、かける心配は少なく済む筈だ。

己の返答に満足そうに頷いて、本音は二人の訓練に視線を移す。

一夏の攻めに、箒の守りにいちいち感嘆の声をあげてはしゃいでいる少女の背中に、聞こえないように声をかけた。

「……有難う……」

「え～？なにか言った～？いのっち～」
「……」
不思議そうな顔をする本音に、無言を返す。
首を傾げてから前に向き直り、再びはしゃぎ始める本音の背中を見ながら、想う。
――お前がルームメイトで、良かった。

第9話　朧月（後書き）

如月重工は大変なものを作っていきました。
楽しみにして下さっていた皆さん、ごめんなさい！月光の出番はもう少し先です！
けどきっとド派手にデビューさせて見せますから、もう少し待っていて下さい！

第１０話　一夏（前書き）

クラス代表決定戦です。
戦闘描写まじむずい。全然文字数が稼げない。
ヴァオー並みの装弾数が欲しいです。
作者「まだまだ書けるぜ、メルツェェェェェルッ！！」
はいごめんなさい無理です

第１０話　一夏

月曜日。
今日は一夏とセシリアによる、クラス代表決定戦が行われる。
その準備のため、今、己たちは第三アリーナ・Ａピットにいるのだが――

「……こねぇな、ＩＳ」
「……そうだな」
「……」

そう、政府から支給されるという、一夏の専用機がまだ来ていない。

「……急に決まったことだからな。準備に時間がかかっているんだろう」
「けどシンのＩＳは一日で出来たぞ」
「あれは如月重工がおかしいんだ。普通はＩＳの開発にはかなりの時間がかかる」
「……あんな変態どもでも、腕は確かってわけか」
「……」

如月重工の話になった途端に不機嫌になる一夏。
よほど嫌いなようだ。

「どうすんだよ、これじゃ練習どころか、一次移行（ファースト・シフト）も出来ないぞ」
「わ、私に言うなっ！」

ＩＳ、特に専用機には、コアに残っている以前の操縦者の情報を消去する初期化（フォーマット）、新しい操縦者に合わせてコアを調整する最適化（フィッティング）とい

う機能が備わっており、それらを合わせて一次移行（ファースト・シフト）という。
この一次移行を済ませて、初めてそのＩＳは操縦者の専用機となるのだ。
しかしセシリアとの試合はもう間も無く始まる。一次移行をする時間は、もうないだろう。

「お、織斑くん織斑くん織斑くん！」
「まあまあ先生、まずは落ち着いて。深呼吸です、ほら、ヒッヒッフー、ヒッヒッフー」
「ヒッヒッフー……て、これは違いますよぅ！」
「目上の人間には敬意を払え、馬鹿者」

一夏の頭に出席簿が振り下ろされる。
呆れ顔の千冬さんの登場である。

「千冬姉……」

再び振り下ろされる出席簿。

「織斑先生と呼べ。学習しろ。さもなくば死ね」
「そ、そ、それでですねっ！来ました！織斑くんの専用ＩＳ！」
「……！」

――――漸く、か。

「織斑、すぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶっつけ本番でものにしろ」
「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えてみせろ。一夏」

一夏は二人の言葉にも生返事をするばかりで、ピットの搬入口から

目を離そうとしない。

――聴こえる。

その重厚な防壁扉の中から、重々しい駆動音が響く。

――それはまるで、忠誠を誓った主のもとへ馳せ参ずる、甲冑を身に纏った騎士の足音のようで。

――そして、一切の飾り気のない、純白の機体がその姿を顕した。

「これが……」

「はい！織斑くんの専用ＩＳ、白式（びゃくしき）です！」

心此処にあらずといった様子の一夏が、白式に近づいて行く。

親を探す幼子のように伸ばされた手が、白式に触れた。

「背中を預けるように、ああそうだ。座る感じでいい。後はシステムが最適化をする」

一夏が白式に体を任せると、白式の装甲が閉じる。

かしゅっ、という空気の抜ける音が響き、一夏と白式が一体化した。

「ＩＳのハイパーセンサーは問題なく動いているな。一夏、気分は悪くないか？」

千冬さんの声が僅かに震えていることに、一夏も気付いたのだろう。

その口元を僅かに緩ませて、安心させるように、言葉を紡ぐ。

「大丈夫、千冬姉。いける」

「そうか」

ほっとしたような声。

そんな姉弟の遣り取りを、なんと言葉を掛けていいか迷っている様子で、箒が見詰めている。

――その不安げに震える肩に、そっと手を置いた。

「真改……」

「……」

黙って頷く。

己が言うことではないだろうが、言葉にしなければ伝わらない。

だから、言わないと。

「……ありがとう」

「……」

己に小さく微笑みを浮かべてから、箒が一夏を見る。

その瞳を、真っ直ぐに。

「――勝ってこい、一夏」

「任せろ」

力強く答える一夏に、箒も安心したようだった。

――全く。どいつもこいつも、素直じゃない。

「シン」

「……」

ピット・ゲートの前まで移動し、今まさに飛び立とうというところで、一夏が己に声を掛けて来た。

「俺の剣、良く見とけよ」

「……ぬかせ……」

いいだろう、見せてみろ、この己に。

お前が、どれほど成長したのかを。

「――行くぜっ！」

そうして、一夏は飛び立った。

――敵が待つ、戦場へ。

――――――――――

「ようやく来ましたのね。待ちくたびれましたわ」

「そりゃ悪かったな。けど遅刻したのはこいつだぜ、俺のせいじゃない」

腰に手を当てるポーズをしながら言うセシリアに、軽口で答える。

余裕があるわけじゃない。緊張を紛らわせようとしているだけだ。

「試合を始める前に、聞きたいことがあります」
「なんだよ」
「あなたは、真改さんの幼なじみだと聞きましたが？」
その言葉で、聞きたいこととやらの察しがついた。
シンに関わったやつは、大抵そのことが気になるからだ。
「……あの方の左腕のこと、どこまでご存知で？」
――やっぱり、な。
正直、辛い。
シンの左腕は、俺の罪だ。
それを突き付けられて気分がいいはずがない。
だけど、俺は「力」を手に入れた。
まだまだ扱いきれるとは思えないが、それでも俺の目標に向けた足掛かりとしては、この上ない「力」を。
――だから、いい加減、覚悟を決めないと。
「――全部知ってる。俺が、もぎ取ったようなもんだからな」
「――な」
セシリアの顔が驚愕に歪む。
次いで、怒りに。
「あなたが、真改さんの腕を……？」
「ああ、俺のせいだ。無知で無力で無謀な俺を庇って、あいつは左腕を失なくしたんだ」

セシリアの怒りは凄まじい。
もはや俺を睨み殺そうとしているかのように、その眼に殺気を載せている。

「だから、俺は強くならなきゃいけないんだ」
「……は？」

突然話が飛躍して、付いて来れないのだろう。セシリアがポカンとした顔をする。

――――構うもんか、これは俺の「決意」だ。まずは言葉にしないと始まらない。

「シンは初めて会った時から強かった。腕を失くす直前じゃあ、あの千冬姉と、生身でなら互角に戦えるくらいにな。
――――信じられるか？まだ小さな女の子がだぜ？」

当時のことを思い、苦笑が浮かぶ。
あれは度肝を抜かれたもんだ。

「腕を失くしてからも、強かったよ。強かったけど、それでもどうしても弱くなった。千冬姉には、勝てなくなった」

当たり前だ。実力が拮抗している二人のうち、片方だけが大きなハンデを負えば、その勝負は目に見えている。

「シンがＩＳ学園を受験するって聞いた時、思った。やっぱシンはすげぇなって。シンなら、たとえ右腕しかなくても、もしかしたら千冬姉と同じ、「ブリュンヒルデ」になれるんじゃないかって」

左腕がないなら、右腕だけで剣を振ればいい。
そんな当たり前で、だけど無謀とも言えることを、シンは黙ってやって見せた。

「けどさぁ、そうなったらどうなる？シンの左腕は？無知で無力で無謀な、なんの役にも立たない男のクソガキを庇って失くして――そんな馬鹿なことのために大事な左腕を捨てたなんていう、汚点になっちまうんじゃないか？」

片腕だけでも最強なら、両腕が揃っていたならばどれほどだったろう。
世間の関心はそこに向くに決まっている。
そして事実を知って思うのだ――なんて勿体無いことをしたんだ、と。

「――認めねぇ。認められるか、そんなこと……！」

総身を怒りが満たす。
今目の前に鏡があったら、そこに写る愚か者の顔を、俺は即座に叩き割るだろう。

「ずっと憧れてた。今だってそうだ。そのシンが、俺のせいで、あんな目にあった」

生涯忘れることはないだろう。
病院のベッドの上で、生命維持装置に繋がれ、眠り続ける少女の姿を。

――包帯で覆われた、欠けてしまった左腕の、その様を。

「シンは気にするなって言う。自分は平気だからって。
……そんなわけあるか。あいつは剣士で、女の子だ。それが腕一本失くして、あんな傷こさえて、平気なわけがねぇだろうが」

だから誓った。
次は俺が守ると。
そのために強くなると。
けれどシンはそんなこと求めてなくて、俺の助けなんか必要なくて、だから、どうすればいいのかわからなくなった。

「俺がＩＳを動かせるって分かった時、決めた」

シンを守る。
シンだけじゃなく、俺の大切なものは、全部守る。
その誓いは今も変わらない。
そしてそこに、もうひとつ、新たな誓いを立てた。

「俺が証明する。強くなって、シンにも、千冬姉にも負けないくらい強くなって、証明するんだ。
――織斑一夏は、井上真改が左腕を捨ててまで守るほどに、価値のある存在だってな」

だから、そのために。

「俺の糧になってもらうぜ――セシリア・オルコット」

――――――――――

アリーナ中に響き渡った一夏の決意。
それを全観客に聞かれたという羞恥も忘れて、己は呆然としていた。
――――だって、一夏のその決意は。
（……己と、同じ……？）
かつて「彼女」の生き様を世界に肯定させるために戦った、己ととても良く似たものだったから。
「……一夏……」
達成感に似た喜びが、心を満たす。
一夏が「彼女」を知る筈はないが、それでも、一夏は「彼女」を認めてくれる、そう確信した。
己のかつての夢を、叶えてくれたのだ。
（……それが、お前の答えか……）
お前の友であることを、誇りに思う。
ならば己も、その決意に見合う強者となろう。
――――お前の目標として、胸を張れるように。
だが今は、目前の戦いをしかと目に焼き付けなければ。
一夏の決意を聞いたセシリアが表情を引き締める。

手に持ったレーザーライフル、スターライトｍｋ?を一夏に向け、四機のブルー・ティアーズを展開する。
セシリアの必殺の布陣。どうやら彼女は、一夏を「敵」として認めたようだ。

「いいでしょう、ならその決意、まずはわたくしに証明してみなさいっ！」
「言われるまでもねぇ。行くぜ、セシリア・オルコット！」

放たれる光の雨を、大きく回避。
ビットによる包囲を防ぎつつ、接近を図る。
己とセシリアの戦いから学んだのだろう、一夏は直撃を受けることもあったが、その数は多くない。
なによりセシリアからの直接攻撃は全て避けている。警戒するべき順位は分かっているようだ。

「うおおおぉぉぉっ！」
「この……！」

白式の性能は高い。
装甲も機動力も、打鉄を大きく上回っている。
この分ならパワーも相当なものだろう、近付ければ、勝機はある。

「ブルー・ティアーズ！」
「ちぃっ！」

だがセシリアも流石と言うべきか、その巧みな射撃で、一夏の接近を許さない。
徐々に追い詰められていく。

「このくらいで……！」

だが次第に、一夏の動きが良くなってきている。
機体に慣れてきたのか、攻撃が見えるようになってきたのか、被弾も減っている。

一夏はセシリアのレーザーライフルを警戒しつつ、その目はビットを必死に追っていた。
あれは、攻撃を察知しようとしているのではない。
動きを見極めようとしているのだ。

――――そして、ついに。

「ぜぁあっ！」

一閃。
一夏の刀がビットを捉え、切り捨てる。

「く……！」
「シンとの試合で見せすぎたな！ビットの動きは、もう見切ったぜ！」

言葉通り、背後に抜けようと動くビットに鋭く反応し、追う。
その後部スラスターを切り落とし、二機目を撃墜。

「これなら……！」

薄くなった包囲を突破し、セシリアとの間合いを詰める。
あと一息、というところで、セシリアがミサイル型のブルー・ティ

アーズを起動した。

「それも――――」

しかし、一夏は臆さない。

「――――見たぜっ！」

バレルロールに似た動きで回避した、その瞬間。

「――――かかりましたわ」

二機のビットから放たれた閃光がミサイルを撃ち抜き、白式の間近で起爆させた。

「一夏っ……！」

爆炎に包まれる幼なじみの姿に、箒が悲鳴のように名前を呼ぶ。

消耗したところにあの爆発だ、タダでは済むまい。

――――普通なら。

「――――ふん。機体に救われたな、馬鹿者め」

「――――うおおおぉぉぉっ！」

「なっ……！？」

自らの勝利を確信していたセシリアの顔が、驚愕に歪む。

爆発の黒煙を切り裂いて、純白の機体が駆けた。

一次移行を終え、機体の損傷を回復し、一夏の専用機として真の姿を顕した白式が、セシリアに迫る。

「おおぉぉらあああぁぁぁぁっ！」

手にした刀の形が、先ほどまでとは変わっている。

――――覚えがある。あれは、千冬さんの――――

（……そんなところまで……）

――――己に、似るとは。

一夏の持つ、かつて千冬さんが振るっていた、雪片に良く似た刀が光を放つ。

――――零落白夜。自身のシールドエネルギーを引き替えに、ＩＳのバリアーを含むあらゆるエネルギーを喰らい尽くす、諸刃にして必殺の剣。

「チェェエストオォォァァアッ！」

大上段に構えたそれを、裂帛の気合いと共に振り下ろす。

当てることが倒すことと同義である、その刃を前に、セシリアは――――

「はあぁぁぁぁっ！」

二機のミサイル型ブルー・ティアーズ、手にしたスターライトｍｋ？を盾にすることで、紙一重で回避した。

切っ先が僅か数ミリ掠めただけで、シールドエネルギーの大半を奪い去って行った一撃に戦慄しながら、しかし決して怯まない。

「お行きなさい――――」

得物を失ったことで空いた両手を、左右に大きく広げる。
自らの子供たちを自慢する、母親のように。

「――――ブルー・ティアーズッ！！」

一夏の背後、最後の突撃の際に残してきた二機のブルー・ティアーズが、閃光を放つ。
一夏は必死に回避しようとしたが間に合わず、白式の背中を光に撃ち抜かれ――――

「……すまねぇ、白式。お前は頑張ってくれたのに、上手く、使ってやれなかったな……」

『試合終了。勝者――――セシリア・オルコット』

一夏の敗北が、宣告された。

――――――――――――

「あれだけの啖呵を切っておいてこの様か、大馬鹿者」
「はい、すいません」

千冬さんのお叱りを受けてうなだれる一夏。

己も一夏の暴露話を観客たちに聞かれたことを思い出し、今更ながら恥ずかしくなってきたので、一夏を責めるように睨み付ける。

「動きに無駄がありすぎる。決められる確信もなく、後顧の憂いを残したまま突撃するなど愚の骨頂だ。明日からは訓練に励め。暇があればＩＳを起動しろ。いいな」

「はい、分かりました」

容赦ない指摘にますますヘコむ一夏。いい気味だ。

「えっと、ＩＳは今待機状態になってますけど、織斑くんが呼び出せばすぐに展開できます。ただし、規則があるのでちゃんと読んでおいてくださいね。はい、これ」

どさっ、と音を立てて置かれたその「ＩＳ起動におけるルールブック」なる本の分厚さに、一夏が辟易したような顔になる。

「何にしても今日はもうおしまいだ。帰って休め」

そう言って、山田先生を引き連れ立ち去る千冬さん。

「帰るぞ」

箒、もう少し優しい言葉を掛けてやれ。

今一夏は落ち込んでいる、好感度を上げる好機だぞ。

「……」

「……な、なんだよ」

寮への帰り道、一夏を睨み付ける箒。

尋ねられ、むすっとした顔で返す。

「負け犬」

「ぐはぁっ！？」

一夏が胸を押さえてへたり込んだ。

致命的なダメージを受けたようだ。

「一夏」

「……なんだよ」

「その……負けて、悔しいか？」

「……悔しいさ。悔しいに決まってる」

「……そうか」

その心情を感じ取ったのだろう、箒もそれ以上一夏を責めることはなかった。

「すげぇなぁ……あんな強いヤツに、シンは訓練機で勝ったのか」

「……そうだな」

「……」

沈んで行く夕日を眺めながら、三人で歩く。

その静けさが、己には心地良かった。

「……明日からは、あ、あれだな、もっと本格的に訓練しないといけないな」

「？まあ、そうだな」

「そ、そうだろう。そこでだ、これからも、わ、私がＩＳについて教えてやってもいいぞ？」

一生懸命に言葉を紡ぐ箒。微笑ましい。

「そりゃありがたい。よろしく頼むぜ、箒」
「う、うむ！そこまで言われては仕方がない、この私が特別に――」
「シンも教えてくれるだろ？」
「……！！」

お前はあれか、わざとやっているのか？
見ろ、箒が縋るような目で己を睨んでいるぞ。

「……不可……」
「ええ、なんでだよ？」
「……手一杯……」

まあ嘘ではない。己は己で、朧月の扱いを身に付けなければならないからな。

「……」

箒に頷いてやると、ぱあっと嬉しそうな顔になる。
……その顔を、己でなく一夏に見せてやればいいものを。

「うむ、真改にも都合があるだろう、仕方がない、私が二人きりで教えてやる！」
「あ、ああ。ありがとう……？」

何故疑問形。
イマイチ進まない幼なじみたちの関係に溜め息をつきながら、己たちは寮へ帰っていった。

熱いシャワーを浴びながら、先ほどの試合を思い返します。

――――――――――――

――初めは、「彼」を問い詰めようと思っていました。
強く、気高く、美しい「彼女」が、どうして左腕を失ったのか。
「彼女」に聞いても答えが返ってくるとは思えないので、卑怯だとは思いましたが、「彼女」の幼なじみだという「彼」に聞くことにしたのです。

――次に、「彼」に対して強い怒りを覚えました。
「彼女」の腕を奪ったのは自分だと、自分のせいで「彼女」は腕を失ったのだと、堂々と言い放つ「彼」に、殺意すら抱きました。

――そして、「彼」の決意がどれほどのものか、見たくなりました。
失われた「彼女」の左腕に相応しい存在になるのだと、そのために強くなるのだと、そう語った言葉が果たして本物なのか、知りたくなったのです。

――最後に、「彼」に勝った時にこの胸を満たしたのは、大きな喜びでした。
どれだけ傷付いても力強さを失わない瞳、どれだけ追い詰められても決して折れない心、拙い技でなお挑み、最後まで足掻き続けた、その姿……。

それが、「彼女」に重なって。

勝ちたい、と。

純粋に、強く、そう思いました。

だからわたくしも、最後まで諦めず、戦うことが出来たのです。

だからこそ、そうして得た勝利が、こんなにも嬉しいのです。

（これが……勝利を誇る、ということ……）

わたくしを解き放ってくれた、「彼女」の言葉。

その意味を、わたくしも知ることが出来た。

「彼」――織斑一夏という、男の子によって。

わたくしの父親、いつも母の顔色をうかがってばかりいて、情けない姿ばかりが記憶にあるあの人とは真逆の、とても男らしい男の子。

――「彼」のことを、もっと知りたい。そして、「彼女」のように、強くなりたい。

織斑一夏と、井上真改。

あの二人のことを思うと、トクン、と、胸が高鳴りました。

第１０話　一夏（後書き）

セシリアさん二股疑惑。けど今のところどっちも片思い。
果たして彼女の命運はいかに……！？

第１１話　代表（前書き）

一夏がクラス代表に決定しました。
真改は有名人になりました。
二人の平穏な日常が終わりました。

第11話　代表

クラス代表決定戦が終わった翌朝。
己と箒は剣道場にいた。一夏は昨日の試合の疲れからか、まだ寝ているそうだ。

「肩の調子はどうだ？」
「……十全……」

本来なら剣道部が朝練に使うここに、元々剣道部員である箒はともかく、部外者の己がいるのには訳がある。
肩の怪我は昨日医者の許しを貰い、ではひとつ手合わせでもしようか、となったのだが、どうせなら剣道場でやろうと箒が言い出した。
邪魔になるのではないかと思ったのだが、

「剣道部の先輩たちからお前を連れて来てくれと言われている。もう一度、お前の剣を見たいそうだ」

己の邪剣のどこがいいのか。
少なくとも、剣道家には参考にならんと思うのだが。

ともかく、そういった経緯で今己は箒と対峙している。
剣道着を着込み、防具を身に着けた箒に対し、己はジャージ姿のままだ。
少なからず失礼かとも思ったが、

「井上さんの動きやすい格好でいいよ。そのほうが参考になるし」

という剣道部部長の言葉に甘えることにした。

「前回は頭に血が上って、ろくに戦えなかったからな。今日こそ、お前の剣を見せてもらうぞ」

「……」

今の箒には前回のような隙はない。面具の下から、油断なく己を見据えている。

「それでは――始め！」

審判役を買って出た剣道部員の声。

それを受け、青眼に構えた箒がじりじりと距離を詰める。

己は竹刀を肩に担ぎ、箒の接近を待つ。

箒が一足一刀の間合いに入った瞬間、前に倒れ込むようにして、体重を乗せた袈裟切りを放った。

「ッ！」

箒はそれを防ぐが、無論一撃で終わる筈がない。

前傾姿勢になることで関節にバネのように力を溜め、一気に解放。

体を跳ね起こしつつ、竹刀を叩きつける。

箒は素早く反応して防ぎ、即座に反撃してきた。

だがそこには既に己はいない。二撃目を防がれた瞬間、後ろに跳んで距離をとっている。

己は基本的に、受け太刀をしない。

体重を乗せた一撃は片腕では受けきれないからだ。

――故に、避ける。

「はあぁっ！」

再び間合いを詰めて来た箒の繰り出す連撃を、間合いからは逃げず、体捌きのみで避け続ける。

唐竹は半身になり、袈裟切りは上体を逸らし、横薙は身を屈めて、動くたびに靡く髪にさえ触れさせない。

「せいっ！」

鋭く踏み込んでくる箒。

その足を払った。

「うわっ！」

踏み出した足が床を踏みしめる瞬間に払われたことで、勢いのまま倒れる箒に、竹刀を振り下ろす。

「くっ！」

ぎりぎりのところで追い打ちを防ぎ、転がって間合いをとる箒。立ち上がって、己を睨む。

「足払いとは卑怯だぞ――――と言いたいところだが、あれだけ見事に決められると、なにも言えんな」

「……」

己は一夏や箒のような正道の剣士ではない。

剣に対するこだわりはあるが、戦う時は蹴りも投げも使う。

当然、隙あらば足払いをしかけ、倒れた相手に追撃をかけることに

躊躇はない。

「まるで戦場の技だな……お前らしいと言えば、お前らしいが」

「……」

呆れ半分、感心半分といった様子で言う箒。

だから言ったろう、剣道家には役に立たんと。

「仕切り直しだ、行くぞ！」

言って、今度は一気に間合いを詰めてくる。

「胴ォォォッ！」

素速い足運びから繰り出される胴打ちを、身を屈めてくぐり抜ける。

箒とすれ違い、振り向き様に一撃。

それは防がれたが、そのまま駆け抜けて距離をとる。

体捌きは鈍っていないことは確認できた。次は足腰を診るとしよう。

反転した箒に向き直る。距離、約三間。

一歩で最大速度に達し、二歩目で地を這うかのように低く身を沈める。

己の動きを追って、箒が視線を下げた。

――瞬間、跳ぶ。箒の頭上を越えるほど、高く。

「なぁっ！？」

その高さに驚き反応が遅れる箒の頭を目掛け、全体重を乗せて竹刀

を振り抜く。

「くぅっ！」

箒は半身になることでかろうじてその一撃を避けたが、体勢を崩した。

そこに、空振りしたことで流れた体の勢いを利用して蹴りを放つ。

「くあっ！」

側頭部に命中。加減はしたが、衝撃にふらつく箒。

着地し、そのまま連撃へ。

「ちぃっ！」

剣道のそれとは違う、体重の乗った剣。

特に己は、片腕というハンデを補うために全身の筋力を使って剣を振る。

体当たりじみた、剣を体ごと叩きつけるようなそれは、生身であればこそ出来る芸当だ。足の形や宙に浮いている関係から、ＩＳで再現するのは難しいだろう。一夏はスラスターを使って似たようなことをしていたが。

「むぅ……！」

「……ッ！」

箒は良く凌いでいるが、その身に馴染んだ剣道のそれとは別物の攻撃に対し戸惑っている様子だ。

しかしこの技は、体力の消耗が激しい。

一撃ごとに全身運動をするのだから当然のことであり、つまり長期

戦に向いていない。
今のように相手に粘られると、厳しい戦いになる。

――まあ、まだまだ余裕はあるが。

「せぇっ！」

現状を打開すべく、箒が鋭く竹刀を振り上げ、面打ちを放つ。
己の連撃の隙を見切り、そこを突いた一撃。
今己は右腕を振り抜いた直後であり、体が大きく開いている。箒の面打ちを防ぐことは出来ない。

――故に、防御でも回避でもなく、攻撃を仕掛ける。

腰を低く沈め、一歩、大きく踏み込む。
振り上げた竹刀の下に潜り込み、箒の胸に左肩を叩きつける。
左腕がなくとも、こういう使い方ならば問題ない。

「ぐ……！」

当て身を受け、よろめく箒。竹刀を振り下ろし損ね、がら空きになったその胴に、横薙の一閃を打ち込んだ。

「……胴有り……」

――――――――――

「ふぅ……流石だな、真改」
「……」
改めて認識したが、一夏だけでなく箒の才能も凄まじい。
己が数十年掛けて体得した剣技に、この年で既に追い付きつつある。
非才の身には羨ましい限りだ。
もっとも、まだまだ負けてやるつもりはないが。
「お疲れさん。いやあ、いいもん見せてもらったよ」
審判役を務めていた三年生が話し掛けてくる。
「技もそうだけど、凄いジャンプ力だねぇ。どう鍛えりゃあんなこと出来んのさ」
「……」
そんなことを言われても、ただ日々の鍛錬としか答えようがない。
「ま、あんたさえ良けりゃ、これからもちょくちょく遊びにおいでよ。部長にゃあたしから言っとくし、みんなも喜ぶからさ」
「……」
気が向いたら来ることもあるかもしれんが、先ほども述べた通り、己の剣は邪剣だ。未来ある若き剣道家たちが見るべきものではない。
……今は己のほうが年下だが。
「だから、気が向いたらでいいって。気長に待ってるからさ」
「……」

けらけらと笑いながら気さくに話す先輩に礼をし、剣道場を後にする。

その内また来てみるのもいいかと、考えながら。

―――――――――

そんなことがあった朝のＳＨＲ。壇上には山田先生の姿。

「では、一年一組の代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでいい感じですね」

教室中から歓声があがる。いちいちノリの良い連中だ。

「先生、質問です」

「はい、織斑くん」

「俺、昨日の試合に負けたんですが、なんでクラス代表になってるんでしょうか？」

一夏の質問ももっともだ。試合に勝った方がクラス代表になる、という取り決めだった筈だが。

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

張りがあり良く響く声が聞こえたと思ったらセシリアだった。

相変わらず元気なヤツである。

「まあ、勝負はあなたの負けでしたが、しかしそれも考えれば当然のこと。何せこのわたくし、セシリア・オルコットが相手だったのですから。それは仕方のないことですわ」

この娘の自信が一体どこから湧いてくるのか、気になるところだな。

「それで、まあ、わたくしも大人気なく怒ったことを反省しまして」

しかし反省するのはいいことだ。失敗を活かせるかどうかは、まずそこから始まるのだから。

「一夏さんにクラス代表を譲ることにしましたわ。やはりＩＳ操縦には実戦が何よりの糧。クラス代表ともなれば戦いには事欠きませんもの」

要所にポーズを挿みながらのセシリアのセリフ。演劇でも見ているような気分になってきた。

……しかしこの娘、今、「一夏さん」と言ったな。またか、一夏。

「そ、それでですわね。わたくしのように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がＩＳ操縦を、真改さんのような達人が剣術を教えて差し上げれば、それはもうみるみるうちに成長を遂げ――」

己を巻き込まないでくれないか。セシリアとの訓練は承諾したが、そこに一夏も加わるとなれば、確実に厄介なことになるんだが。

「あいにくだが、一夏の教官は足りている。私が、直接頼まれたからな」

思ったとおり、箒がセシリアを牽制する。
しかし以前はその眼力に怯んでいたセシリアだが、今はしっかりと箒と目を合わせている。

「あら、あなたはＩＳランクＣの篠ノ之さん。Ａのわたくしに何かご用かしら？」
「ら、ランクは関係ない！頼まれたのは私だ。い、一夏がどうしてもと懇願するからだ」

ちなみに己もＩＳランクＣだ。つくづく才能に恵まれない。

「え、箒ってランクＣなのか……？」
「だ、だからランクは関係ないと言っている！」

一夏は確かランクＢだった筈。束博士の妹である箒が自分よりランクが低いことが意外だったのかもしれん。

バシンバシン！

「座れ、馬鹿ども」

連続する打撃音と共に、千冬さんが現れた。箒とセシリアは頭を押さえて悶絶している。

「お前たちのランクなどゴミだ。私からしたらどれも平等にひよっこだ。まだ殻も被れていない段階で優劣を付けようとするな」

流石は元世界最強、言うことが違う。

「代表候補生でも一から勉強してもらうと前に言っただろう。くだらん揉め事は十代の特権だが、あいにく今は私の管轄時間だ。自重しろ」

表情を厳しく引き締めて言う千冬さんに、私生活でのだらしなさは微塵も伺えない。

「織斑、今何か無礼なことを考えていただろう」

己と似たようなことを考えていたのだろう、一夏が千冬さんに睨まれているが、生来の無表情のおかげか、己の思考に気付かれた様子はない。

……いや、一夏が分かり易過ぎるのか？

「そんな、めっそうもございません」

「ほう」

パァンッ！

「すいませんでした」

「分かればいい」

千冬さんはふん、と鼻を鳴らしてから、

「クラス代表は織斑一夏。異存はないな？」

一夏を正式に、クラス代表に決定した。

―――――――――

「ではこれよりＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、井上、オルコット。試しに飛んでみせろ」

千冬姉の指示を受け、俺の専用機になった白式を展開しようと意識を集中する。

ちなみにシンの専用機、朧月はすでに調整を終えて戻って来ている。とりあえずあのイカレたスラスターを使っても怪我するようなことはなくなったみたいだが、あの変態どもが作った機体だ、まだなにか問題があるんじゃないかと心配してしまうのも仕方ないと思う。

「早くしろ。熟練したＩＳ操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

その言葉を聞き、目指す場所までの道のりの長さを垣間見る。

ＩＳは一次移行を済ませると、ずっと操縦者の体にアクセサリーの形状で待機している。セシリアは左耳のイヤーカフス、俺は右腕のガントレット。

普通はアクセサリーなはずなのに、俺の場合はなぜか完全に防具なのは、この際どうでもいい。

――問題は、シンのＩＳの待機状態だ。

「……」

最近、包帯で左腕を隠すようになったシンの首にかけられているのは、細い銀の鎖。そしてその鎖を中に通してシンの胸元に提げられ

ているのは、鎖と同じ銀色の指輪だ。

『朧月は井上君のパートナーだからね。これはいわゆる、結婚指輪（エンゲージ・リング）ってやつさ。洒落が効いてるだろう？』

変態代表の言葉を思い出して、勝手に苛立つ。あの野郎、どこまで人を馬鹿にしてやがるんだ。

「集中しろ」

千冬姉にせかされる。

まずい、殺気でも漏れてたか、と思ったがどうやらそうではなく、単にまだ展開出来ていないのが俺だけになったようだ。

右腕を突き出し、ガントレットを左手で掴む。色々試して、このポーズをするとＩＳが展開されるのをイメージできるようになった。

瞬間、光の粒子が俺の体から溢れ、再集結してＩＳ本体になり、俺の体を包み込む。

「よし、飛べ」

言われて、三人同時に飛び立つ。

しかしシンとセシリアはあっという間に空に上がって行ったのに、俺の上昇速度は明らかに遅い。

「何をやっている。朧月はともかく、ブルー・ティアーズよりは白式の方が出力は上だぞ」

通信回線から聞こえる千冬姉のお叱りの声。

ＩＳの操縦にはイメージが大事なのだが、空を飛ぶイメージという

のが俺にはどうにも掴めていなかった。

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索する方が建設的でしてよ」

「そう言われてもなぁ。うーん、イメージか。シン、なにかコツとかないのか？」

俺の質問に、シンは首を振って答えた。

「……無意味……」

「ええ、なんでだよ」

「……人により、違う……」

確かに、イメージなんて人によって違うもんだ。

けどそれを踏まえた上でのコツを教えて欲しかったのに、そんな一刀両断しなくてもいいじゃないか。

そんな俺とシンの遣り取りを、セシリアは楽しげに眺めている。

「一夏さん、よろしければまた放課後に指導してさしあげますわ。そのときは真改さんと三人で――」

「一夏っ！いつまでそんなところにいる！早く降りてこい！」

いきなり通信回線から怒鳴り声が響く。

みれば、遠くの地上には山田先生からインカムを強奪した箒の姿が。

……千冬姉に怒られるぞ。

「織斑、井上、オルコット。急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地表から十センチだ」

「了解です。では一夏さん、真改さん、お先に」

言って、すぐさまセシリアは地上に向かう。一気に加速し、地上スレスレで一気に減速、難なく完全停止をクリアーして見せた。

「……見事……」

「うまいもんだなぁ」

さすが、普段から代表候補生であることを自慢しているだけはあるってことか。

「……先に行く……」

セシリアに続いて、シンも地上に降りて行く。

一気に加速、一気に減速したまでは良かったが、減速のタイミングがちょっと遅かったみたいだ。

シンは完全停止には失敗し、地上に足を着けてしまった。

「お前の番だぞ。降りて来い、織斑」

深呼吸をひとつして、意識を集中。

背中の翼状の突起からロケットファイアーが噴出しているイメージを思い描く。それを傾けて、一気に地上へ。

「速っ……！」

イメージよりもかなり速い降下速度に驚く。気付けば地上はもう目の前だった。

「やば……！」

――ズドォォンッ！！！

慌てて減速したが、もう遅かった。すごい音を立てて墜落し、グラウンドに埋まる。

（……は、恥ずかしい……）

クラスメイトたちのくすくす笑いが俺の心を容赦なく抉る。

その威力たるや、ＩＳの皮膜装甲も絶対防御も貫くほどである。

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴を開けてどうする」

「……すみません」

とにかく、いつまでも埋まったままじゃあ格好がつかないので、穴から出る。

（まだまだ練習しなきゃなぁ……）

――――――――――

「織斑、武装を展開しろ。それくらいは自在にできるようになっただろう」

なぜか喧嘩を始めたセシリアと箒を押しのけて（首を傾げた俺を見て、シンが呆れたような顔をした。なぜだ）、千冬姉が俺の前に立

って言った。

「では、はじめろ」

「はい」

言われて、横を向く。

正面に人がいないことを確認してから、武装を展開するために、両手を左腰に持って行く。

空を飛ぶイメージとは逆に、こちらはすぐに出来るようになった。

イメージするのは数年前、巻き藁を前に正座する、シンの姿。

真剣を収めた鞘を左手で持ち、柄を右手で持つ。

正座から立ち上がると同時に踏み込み――

――一閃、両断される巻き藁。

太刀筋は、全く見えなかった。

なのに、その居合いの美しさは理解出来た。

あの光景は今も俺の目に焼き付いていて、集中するまでもなく思い描ける。

――それを、再現するように。

腰に佩いた刀を抜くようにして、白式の唯一の武装、雪片弐型が現れる。

「――」

千冬姉が、かなり珍しいことに、驚いた顔をしている。

まあ実の弟である俺でもどうにか気付けるくらいの微妙な表情の変化だったが。

「……オルコット、武装を展開しろ」

おい、ノーコメントかよ。

「はい」

返事して、セシリアは左手を肩の高さまで上げ、真横に腕を突き出す。

一瞬、爆発的な光を放ったと思えば、その手には全長ニメートルを越えるレーザーライフル、スターライトｍｋ?が握られていた。

「さすがだな、代表候補生――ただし、そのポーズはやめろ。横に向かって銃を展開させて、誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ」

「ですが、これはわたくしのイメージをまとめるために必要な――」

「直せ。いいな」

「――、……はい」

セシリアはみるからに不満がありそうな顔をしているが、さすがに千冬姉には逆らえないのか、素直に頷いた。

「オルコット、近接用の武装を展開しろ」

「えっ。あ、はっ、はいっ」

今、頭の中で文句を並べてたろう、セシリア。気をつけろ、千冬姉は人の心が読めるぞ。

銃を収納し、新たに近接用の武装を展開しようとするセシリア。け

れど手の中の光はなかなか像を結ばず、くるくると空中をさまよっている。

「くっ……」

「まだか？」

「す、すぐです。――ああ、もうっ！インターセプター！」

ヤケクソ気味に武器の名前を叫んで、ようやく武器が展開される。しかし武器の名前を呼ぶのは、いわゆる初心者用のやり方だ。やはり接近戦は苦手なんだろうか？

「……何秒かかっている。お前は、実戦でも相手に待ってもらうのか？」

「う……すぐに展開できるように練習します」

「分かればいい」

試合では俺とシンの両方に接近を許したからか、近接武器の重要さはよく分かっているんだろう。

悔しそうにしながらも素直に頷くセシリアだった。

「では井上、次はお前だ。武装を展開しろ」

「……」

言われた次の瞬間には、右腕に細長い菱形の板のような武器、月光が展開されていた。

「ほう、早いな。近接武器の扱いはお手のものか。飛行もそれくらいできるようにしろ」

「……」

徹底的に誉めない方針の千冬姉であった。

「さて、時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ」

それはつまりこの穴を埋めろってことか。

チラッと箒を見ると、フンと顔を逸らされた。手伝ってはくれないらしい。

シンとセシリアは――――もういなかった。

わかったよ、どうせ俺の自業自得だ、一人で片付けりゃいいんだろ。

溜め息をつきながら、グラウンドの整備を始める。ＩＳの操縦をものにするには、まだまだ時間がかかりそうだ。

――――――――――

「というわけでっ！織斑くんクラス代表決定おめでとう！」

「「「「「おめでと～！！」」」」」

夕食後の自由時間。

食堂を貸し切って、「織斑一夏クラス代表就任パーティー」なる馬鹿騒ぎが行われている。

一夏は即席のパーティー会場の中心で、クラスメイトたちから口々に祝いの言葉を贈られていた。

全くめでたくない顔の一夏だが、女子に囲まれているその姿が、箒

には気に入らないようだ。先ほどから不機嫌そうに茶を飲んでいる。

「はいはーい、新聞部でーす。話題の新入生、織斑一夏君に特別インタビューをしに来ました～！」

オーと盛り上がる一同。要は騒ぎたいだけなのだろう。

「あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部副部長やってまーす。はいこれ名刺」

「あ、どうも」

「ではではずばり織斑君！クラス代表になった感想を、どうぞ！」

「えーと……」

一夏にそんなことを期待するだけ無駄だ。

「まあ、なんというか、がんばります」

「えー、もっといいコメントちょうだいよ～。俺に触るとヤケドするぜ、とか！」

もう一度言おう。

一夏にそんなことを期待するだけ無駄だ。

「自分、不器用ですから」

「うわ、前時代的！」

黛先輩の台詞も相当に前時代的だと思うが。

「じゃあまあ、適当に捏造しておくからいいとして……ああ、セシリアちゃんもコメントちょうだい」

「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、

仕方ないですわね」

嘘を吐け、準備万端だったろうが。

「コホン。ではまず、どうしてわたくしがクラス代表を辞退したかというと、それはつまり――」

「ああ、ながそうだからいいや。写真だけちょうだい」

「さ、最後まで聞きなさい！」

「いいよ、適当に捏造しておくから。あとは……あ、真改ちゃん！」

まずい、見つかった。

「こないだの試合で一気に有名人になったわけだけど、それについてコメントお願いしまーす！」

ひゅばっ！と己の前に移動する黛先輩。凄まじい歩法である。

「……」

「なにかコメントちょうだい！」

「……」

「えーと、コメントを……」

「……」

「えっと、その……」

「……」

「ごめんなさい」

勝った。しかしそれは虚しい勝利だった。

黛先輩は気を取り直してカメラを構える。

「じゃあ写真でいいや。ほらほら、三人並んで」

「えっ？」
「注目の専用機持ちだからねー。ほら、なんかポーズとかしてみてよ」
「そ、そうですか……。そう、ですわね」
己と一夏をちらちらと見てくるセシリア。その姿はまるっきり恋する乙女だ。
……その対象は一夏だけだと願いたい。
「あの、撮った写真は当然いただけますわよね？」
「そりゃもちろん」
「でしたら今すぐ着替えて――――」
「時間かかるからダメ。はい、さっさと並ぶ」
己たちを強引に近付ける黛先輩。
「それじゃあ撮るよー。３５×５１÷２４は～？」
わかるか。
「え？えっと……２？」
「ぶー、７４．３７５でしたー」
パシャッとデジタルカメラのシャッターが切られる。その直前、フレームに収まるべく滑り込んでくるクラスメイトたち。
「なんで全員入ってるんだ？」
箒を含めた一組の全員が、一瞬で集まっていた。雀蜂をも凌駕するチームワークである。

「あ、あなたたちねえっ！」
「まーまーまー」
「クラスの思い出になっていいじゃん」
「わ～い、いのっちと写真～」
「先輩！その写真、あとで絶対くださいね！」

再び騒ぎ始めるクラスメイトたち。そのエネルギーが一体どこから供給されているのか、「織斑一夏代表就任パーティー」は、夜の十時まで続いた。

第11話　代表（後書き）

真改は努力の人。つまりは何度も失敗しながら技術を身に付けていきます。

次回、いよいよあの子が登場！

けど一夏と最初に会ってるのが真改なので、ファースト、セカンドの呼称が使えません。

……盲点だったぜ。

第１２話　鈴音（前書き）

ついにあの子が登場です。
これで幼なじみが全員そろいました。
この先どんどん書くのが難しくなっていきそうです。

第１２話　鈴音

「ふうん、ここがそうなんだ……」

まだ暑くなり始める前の四月、あたしはＩＳ学園に転校してきた。
今日はもう夜だから、授業に参加するのは明日からだ。

「えーと、受付ってどこにあるんだっけ」

上着のポケットからメモ紙を取り出す。
そこには〔本校舎一階総合事務受付〕と書かれていた。

「だからそれどこにあんのよ。地図くらい持たせなさいよね」

紙に文句を言ったって返事があるはずもなく、あたしはイライラと一緒にメモ紙を上着のポケットにねじ込んだ。

「自分で探せばいいんでしょ、探せばさぁ」

ぼやきながら歩き出したものの、このＩＳ学園、バカみたいに広い。
誰かに道を聞こうにも、時間も八時を過ぎてるから、外を出歩いてる人影もない。

「あーもー、面倒くさいなー。空飛んで探そうかな……」

一瞬、名案を思い付いたと思ったけど、やめておく。
あたしはまだ転入の手続きが終わってないので、今はまだ正式なＩＳ学園の生徒じゃないのだ。そんなあたしが学園内でＩＳを起動させたら、外交問題まで発展しかねないのだ。

そこまで考えて、それだけは本当にやめてくれ、と何度も頼んできた政府高官の情けない顔を思い出した。

（ふっふーん。あたしは重要人物だもんねー。自重しないとねー）

ちょっと気分が良くなった。お気に入りのボストンバックを担ぎ直して、再び歩き出す。

「だから……でだな……」

すると、ＩＳ訓練施設から人が出てくるのを見つけた。

（ちょうどいいや。場所聞こっと）

小走りで近づいて行くと、今度は知っている声にすごくよく似ている声が聞こえてきた。

「だから、そのイメージがわからないんだよ」

――――一夏だ。

（あたしってわかるかな。わかるよね。一年ちょっと会わなかっただけだし）

けど、もしあたしだってわからなかったらどうしよう。

（大丈夫。大丈夫！それにわからなかったら、あたしが美人になったからだし！）

「いち――――」

声をかけようとしたところで、一夏がふたりの女の子と一緒にいることに気づいた。
そのふたりの内、ひとりは問題ない。

１７０センチくらいある長身は、スラリと長い脚にピンと伸びた背筋のおかげでさらに高く見えた。
腰まで真っ直ぐに下ろした髪は黒曜石を糸にしたみたいで、夜の暗さの中でもよく映える。
刃のように鋭い眼は瞳が深い黒色で、見詰めていると吸い込まれそうで。
滅多なことじゃ小揺るぎもしない無表情だけど、顔立ちはとても綺麗だ。

日本刀みたいな美人と言われている、あたしのもうひとりの幼なじみ、井上真改だ。

シンが一夏と一緒にいるのはいい。
同じ中学校にいたときは弾を含めた四人でよくつるんでたし、シンのことだからＩＳ学園を受けることは不思議じゃない。
片腕で合格したことはむしろシンならそれくらいできて当然だと思う。

――――けど、もうひとりは。

「一夏、いつになったらイメージが掴めるのだ。先週からずっと同じところで詰まっているぞ」
「あのなあ、お前の説明が独特すぎるんだよ。なんだよ、「くいって感じ」って」
「……くいって感じだ」
「だからそれがわからないって言って――――おい、待てって箒！」

早足で去っていく女の子を、一夏が追いかけていく。シンは呆れたように溜め息をついてから、ふたりについて行った。

――あの子、誰？なんであんなに仲良さそうなの？っていうかなんで名前で呼んでんの？

――ああそう、そーいうこと、よくわかったわ一夏。あたしという幼なじみがいながら、女の子ばっかのＩＳ学園で、早速ウハウハしちゃってるワケね？

（――上等。その根性、叩き直してあげるわよ――！）

――――――――――

「織斑くん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

朝。一夏が席に着くなりクラスメイトが話しかけている。

入学から数週間、流石に一夏も、それなりに女子と話せるようになってきた。

「転校生？今の時期に？」

一夏の疑問も当然だ。四月に、それも一年に転入するなど、普通は有り得ない。

しかもこのＩＳ学園は、所謂親の仕事の都合などで転入出来るほど、

条件は甘くない。
難しい試験を突破する知識と実力に加え、国の推薦が必要になる。
つまり――

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」
「ふーん」

何とも気合いの入らない返事をする一夏。
しかし、中国か。

「いのっちも、転校生が気になる～？」
「……」

とことこ近付いて来た本音からの質問。
己は代表候補生というより、中国という言葉に反応しただけだ。

「……中国に……」
「ん～？」
「……友人がいる……」
「お～、グローバルだね～」
「……」

日本にＩＳ学園が出来てからというもの、日本国内の外国人の数は爆発的に増えた。
外国人の友人がいるくらい、珍しくはないと思うが。

「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？来月にはクラス対抗戦があるというのに」
「そう！そうですわ、一夏さん。クラス対抗戦に向けて、より実戦的な訓練をしましょう。ああ、相手ならこのわたくし、セシリア・

オルコットと真改さんが務めさせていただきますわ。なにせ、専用機を持っているのはまだクラスでわたくしたちだけなのですから」

だから己を巻き込むな。今一夏は機動について練習中なのだから、己は必要なかろうに。

「織斑くん、がんばってねー」
「フリーパスのためにもね！」

フリーパスというのは、クラス対抗戦の優勝賞品である、学食デザートの半年フリーパスのことだ。
己には必要ないな。

「今のところ専用機を持ってるクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ」
「――その情報、古いよ」

教室の入り口から、聞き覚えのある声が聞こえる。ちょうど今考えていた、中国に帰ってしまった友人の声。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」
「鈴……？お前、鈴か？」
「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音（ファン・リンイン）。今日は宣戦布告に来たってわけ」

小さな体に溢れんばかりの活力を漲らせた、幼なじみの姿がそこにあった。

―――――――――

「お前のせいだ！」
「あなたのせいですわ！」
「なんでだよ……」

昼休み。
あの後一夏が鈴に余計なことを言ったり箒とセシリアが一夏に詰め寄ったり箒とセシリアが授業に集中しておらず千冬さんに叩かれたりしていたが、それ以外には特に何事もなく昼休みである。
最近クラスメイトたちもついてくるようになり、十人近い人数でぞろぞろと学食に行くと、ツインテールの小柄な少女が待っていた。

「待ってたわよ、一夏！」

食券の自動販売機の前にラーメンの丼をのせたお盆を持って仁王立ちしているのは、もはや言うまでもなく鈴である。

「なにしてんだよ、そんなところで。他の人が食券買えないだろ」
「わ、わかってるわよ！」

一夏にもっともな指摘を受けた鈴は恥ずかしそうに道を空けた。

「またラーメンか？」
「いいでしょ、好きなんだから」
「なら早く食べりゃいいのに。麺伸びるぞ」
「そ、そんなのあたしの勝手でしょ！」

鈴の行動の意味に、一夏は全く気付かない。不憫な。

とりあえず空いてる席を見つけ、座る。

「久しぶりだな、一年ぶりくらいか？元気してたか？」

「ま、まあね。アンタこそ、たまには怪我病気しなさいよ」

「どういう希望だよ、そりゃ……」

鈴なりの照れ隠しにも一夏は気付かない。本当に不憫な。

「いつ日本に帰ってきたんだ？おばさん元気か？いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばっかしないでよ。アンタこそ、なにＩＳ使ってるのよ。ニュースで見たときびっくりしたじゃない」

己も鈴と会うのは一年ぶりだ。聞きたいことが色々あるのはわかるが、今はやめておけ。

何故ならば――

「一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

「そうですわ！一夏さん、まさかこちらの方と付き合ってらっしゃるの！？」

いやそれはない。

「べ、べべ、別にあたしは付き合ってるわけじゃ……」

「そうだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼なじみだよ」

セシリアの質問を一刀両断する一夏。

斬鉄剣もかくやという切れ味であった。不憫すぎる。

「幼なじみ……？」

「あー、えっとだな。箒が引っ越していったのが小四の終わりだっただろ？鈴が転校してきたのは小五の頭だよ。で、中二の終わりに国に帰ったから、会うのは一年ちょっとぶりだな」

説明して、箒と鈴に面識がないことに気づいたようだ。

一夏が鈴に箒を紹介する。

「こっちが箒。ほら、前に話したろ？小学校からの幼なじみで、俺の通ってた剣術道場の娘」

「ふうん、そうなんだ……初めまして。これからよろしくね」

「ああ。こちらこそ」

そう挨拶を交わしながら、火花を散らす幼なじみたち。

ちなみに箒は鈴の目を真っ直ぐに睨んでいるが、鈴はちらりと箒の胸を見て表情が険しくなった。

「ンンッ！わたくしの存在を忘れてもらってはこまりますわ。中国代表候補生、凰鈴音さん？」

「……誰？」

「なっ！？わ、わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットでしてよ！？まさかご存知ないの？」

「うん、あたし他の国とか興味ないし」

「な、な、なっ……！？」

怒りのあまり顔を赤くし、言葉に詰まるセシリア。

この娘は本当に見ていて飽きないな。

「い、い、言っておきますけど、わたくしあなたのような方には負けませんわ！」
「そ。でも戦ったらあたしが勝つよ。悪いけど強いもん」
そこまで言って、鈴は己を見てきた。
「当然、アンタにもね、シン。生身じゃ相手にならないけど、ＩＳならあたしの方が強いんだから」
「……」
ふむ、それは楽しみだ。鈴のことだ、口先だけではないだろう。しかしその言葉に、またしてもセシリアが食ってかかった。
「お待ちなさい！真改さんに挑むのなら、まずはこのわたくし、セシリア・オルコットに勝ってからにしなさい！」
「だからあたしが勝つって言ってるじゃん……ていうかアンタ、なんでそんなに反応するの？」
「えっ！？いえ、それは、その……」
ごにょごにょと口を濁し、先ほどとは違う理由で赤くなる。
……やめてくれ、周囲の視線が痛い。
「まあ、シンは昔から女の子に人気あったもんねぇ……」
ニヤニヤ笑いを浮かべながら言う鈴。
……本当にやめてくれ、一緒に食事に来たクラスメイトだけでなく、周囲の席に座る連中まで聞き耳を立て始めたぞ。
「ねえねえ、その話、もっと詳しく！」
「中学生のときの井上さんってどんな感じだったの？」

「なんか面白いエピソードとかない？」
「そうね、色々あるわよ。例えば……」
「……」

――――ベキィッ！

む？どうしたことだ、己の箸が勝手に折れたぞ。
どうした、鈴？そんなに怯えたような顔をして。

「と、ところで一夏！アンタ、クラス代表なんだって？」
「お、おう。色々都合もいいしな」

何故か鈴が突然話題を変えた。
聞き耳を立てていた女子たちも食事に専念している。
己も備え付けの割り箸を取って食事を再開した。

「あ、あのさぁ。ＩＳの操縦、見てあげてもいいけど？」

一夏をちらちらと見ながら、しかし顔は横に向けながらの言葉。この娘も相当に分かり易いが、それが報われたことはない。

「一夏に教えるのは私の役目だ。頼まれたのは、私だ」
「あなたは二組でしょう！？敵の施しは受けませんわ」

うむ、この鯖の塩焼き、美味いな。塩加減、焼き加減、どちらも申し分ない。

「あたしは一夏に言ってんの。関係ない人は引っ込んでてよ」
「か、関係ならあるぞ。私が一夏にどうしてもと頼まれているのだ」

ほう、味噌汁もなかなかだな。料理の心得がない己でも、並のものとは違うとわかる。

「一組の代表ですから、一組の人間が教えるのは当然ですわ。あなたこそ、後から出てきて何を図々しいことを――」

「後からじゃないけどね。あたしの方が付き合いは長いんだし」

「そ、それを言うなら私の方が早いぞ！それに、一夏は――」

む、この浅漬け、市販のものではないな。こんなところにまでこだわるとは、流石ＩＳ学園、侮れんな――

――――――――――

そして放課後。

第三アリーナに己たちは集まっている。

最近の日課である一夏の訓練だ。

「箒、やっと申請が通ったのか。」

「ああ。今日は私も訓練に参加するぞ」

「くっ……このままではわたくしのアドバンテージが……」

「……」

以前から出し続けていたＩＳの使用申請が漸く通り、箒に打鉄が貸し出された。

ＩＳ学園には訓練用に大量のＩＳが配備されているが、生徒の数を考えれば全く足りていない。

故に申請が通るまで時間がかかるのだ。

「では一夏、はじめるとしよう。刀を抜け」

「お、おう」

前置き無しに、箒が戦闘態勢に入る。

漸く一夏と訓練出来るということで張り切っているのだろう。

――――だが。

「では――――参るっ！」

「お待ちなさい！一夏さんのお相手をするのはこのわたくし、セシリア・オルコットでしてよ！？」

予想通りの展開。だから一夏を交えての訓練はしたくなかったのだ。

己の時間まで削られる。

「ええい、邪魔な！ならば斬る！」

「訓練機ごときに遅れを取るほど、優しくはなくってよ！」

そうして始まる女の戦い。

放置される己と一夏。

……何をしに来たんだ、お前たちは。

「はあああああっ！」

「甘いですわ！」

二人の戦いは白熱しており、しばらくは終わりそうもない。

かといって己が一夏と訓練を始めれば事態はさらに混迷を極めることだろう。

……腹が立って来た。

「さあ、踊りなさい！」

「まだまだぁ！」

――ドゴゴゴゴゴゴゴゴンッ！！

「きゃあああああっ！？」

「うわあああああっ！？」

起動した月影の銃口から吐き出された散弾の嵐。

このままでは埒が開かないという判断に基づいての行動である。

「い、い、い、いきなり何をする！？」

「そ、そうですわ！危ないじゃ――」

「……」

――ギュィィィィィン……

「「ごめんなさい」」

「……」

月影の砲身を回転させると途端に謝る二人。

一夏もなにやら青い顔をしている。

……この月影、よほど怖いようだ。

「……時間の無駄……」

アリーナを使える時間は長くない。無駄には出来ないのだ。

「……二対二……」

そう言ってセシリアの横に並ぶ。

己とセシリア対一夏と箒。

実力に多少の偏りがあるが、この組み合わせが一番揉めないだろう。

「そ、そうですわね。せっかく四人いるんですもの、チーム戦の訓練をするのも悪くありませんわ」

「う、うむ。一夏はまだまだ未熟だからな、私がしっかりとリードしてやろう」

「お、おお。よろしく頼むぜ」

「……はあ……」

ごたごたはあったが、どうにか訓練を始められそうだ。

……これからも同じようなことが続くのだろうか。

――――――――――

一夏と箒は、流石にまだ己とセシリアを相手に出来るほどではなかったようで、数十分防戦で粘った末、撃沈した。

個人の実力差もあったが、連携が上手く出来ていなかったことが大きいだろう。

対して己とセシリアは白兵戦と射撃戦にそれぞれ特化した機体であり、セシリアの得意とする戦闘距離が己のかつての相棒に近いこと

もあって、なかなかの連携が取れていた。

「ふふ、わたくしと真改さんは、なかなか相性がいいようですね」

「……」

ピットに戻り、帰り仕度をしている時にセシリアが嬉しそうに話しかけてくる。

「わたくしの射撃と真改さんの剣技が合わされば怖いものなしですわ」

しかしセシリアには悪いが、その言葉には頷けない。

世の中には、数の差や相性の良し悪しをものともしない、人の域を超越する力を持つ者が、確かに存在しているのだ。

「……実戦は……」

だから、言っておく必要がある。

イギリス代表候補生であるセシリアは、いずれは戦場に駆り出される可能性があるのだから。

「……そこまで、甘くない……」

「……真改さん……」

今は包帯で隠されている、己の左腕に視線を向ける。

セシリアは己の左腕を見ているので、この包帯の下がどうなっているのかは知っている筈だ。

「貴女は、本当の戦いを知っているのですね……」

「……」

彼女の言う戦いと己の知る戦いは別物だろうが、命を懸けたものであることに違いはない。
現に己は左腕を失い、瀕死の重傷を負ったのだから。

「一夏さんも言っていましたが、わたくしも、真改さんを守ります。貴女が戦う時は、わたくしも貴女の隣で戦います」
「……」
「ですから、わたくしを頼ってください。このセシリア・オルコット、きっと真改さんの左腕役を務めてみせますわ」
「……」

つくづく、己は――――才能には恵まれないが、人には恵まれるらしい。
ならばこの少女が、かつての己の仲間たちのように、戦場に散ることがないように。
己も、もっと強くならねばなるまい。

――――――――――

夜。
自室のベランダで本音と共に花の世話をしていると、扉を蹴破るような勢いで鈴が部屋に入って来た。

「……？」
「お～、りんりん～？」

本音がつけた妙な渾名は置いておくとして、部屋に入ってきた鈴を見る。

――その眼から流れる、涙を。

「う、ううぅ、うううぅぅぅ……！」

歯を食いしばって必死にこらえているようだが、涙が止まる様子はない。

むしろその勢いはどんどん強くなっている。

「シンぅぅぅ……！」

「……」

手にしたボストンバックを握り締め、絞り出すように己の名を呼ぶ幼なじみ。

その姿に、常の快活さはない。

「……」

とにかく話を聞こう。土に汚れた手を拭き、鈴に近付く。

「い、い、いちか……」

「……」

泣きじゃくる鈴の前で立ち止まる。

「いちか、おぼえてなかった……」

「……」

頭に手を置いて、出来るだけ優しく、撫でた。

「やくそく……おぼえて、なかったよぅ……！」

「……」

約束とやらがどんなものかは知らないが、とても大事な約束だったのだろう。

鈴は己に抱き付いて来て、そのまま泣き続けた。

――――――――――

「なるほど～、それはおりむーが悪いね～」

「でしょぉ！？まったく、信じらんない！女の子との約束忘れるなんて！」

「……」

十分ほどして泣き止んだ鈴は己に一夏への不満をぶちまけ始めたので、聞き役を本音に押し付けて撤退した。

今は花の手入れに戻っている。

「ひどいよね～。女の子が勇気出して、プロポーズしたのに～」

「ぶふぅぅーーーっ！！？」

本音の直球に鈴が吹き出した。

話を要約するとこうだ。
鈴は一夏に、「あたしが料理が上手になったら、毎日酢豚を作ってあげる」と言った。
しかし一夏が覚えていたのは、「鈴が料理が上手になったら、毎日酢豚をおごってくれる」というものだった。
……確かにプロポーズの言葉だな。そして一夏、後でシメる。

「そ、そ、そんなんじゃないわよ！」
「ええ～、違うの～？」
「え！？いや、その、えっと……」

言葉を濁す鈴を、本音は楽しげに見ている。
その様子に気付いた鈴が咳払いをひとつ、話題の変更を図ってきた。

「シン、相変わらず花育ててるのね」
「……」
「やっぱりいのっち、前からやってたんだ～」
「……いのっち？」

話しながら、二人が己の近くまで歩いて来て、鉢植えの前にしゃがみこんだ。

「綺麗に咲いてるわね～。やっぱ育て方がいいのかな？」
「うんうん～、いのっち、お花の世話、一生懸命だからね～」
「……」

どうでもいいが、少し離れろ。手元が見づらい。

「アンタ、ほんとに花が好きなのね」

「……」

好きなのかどうか、己にもわからない。
だが花に対する思いが、どこからくるものかはわかっている。

己には、所謂前世の記憶というものがある。
それが本物なのか、それともただの妄想なのかはわからないしどうでもいいが、その記憶の中にある世界は――死にかけていた。

大地は枯れ果て、海は腐り、空すらも汚染され。人々は穢れの届かない、遥か上空に浮かぶ揺り籠の中で、いずれ訪れる滅びから目を背けて生きていた。
そんな世界では、当然、植物などろくに育たない。
僅かに生きている土で作られるのはほとんど全てが食用の作物であり、それすらも十分な量とはとても言えない状態だった。
そんな世界で、果たして花など見かけることがあるだろうか？

――答えは、否だ。

だから、心が震えた。
緑溢れる世界、色とりどりの花々が、あまりにも美しかったから。

だから、その花を、自分でも育ててみたいと思ったのだ。

「正直アンタのイメージには合わないと思うけど、あたしは好きよ、シンの育てた花。どれも綺麗だし、一生懸命咲いてる感じがするし」
「お～、りんりんわかってるね～」
「……」

そう言ってもらえると有り難い。剣以外のことなど、まるで経験が

なかったからな。

「……ありがと、シン。それと本音も。……ちょっと、すっきりした」

「……」

「泣きたくなったら、またおいで～。いのっちはいつでも貸し出すよ～」

「あはは、ありがと。……それじゃ、あたし部屋に戻るね。また明日、シン、本音」

そう言って立ち上がった鈴は、いつもの鈴に戻っていた。
そのうち機会を見つけて、一夏を叩きのめすことだろう。

「……鈴……」

「？なに？シン」

「……また会えて、嬉しい……」

鈴はキョトンとして、次いでニカッと笑って言った。

「あたしも嬉しいわよ――――シン」

第１２話　鈴音（後書き）

鈴は真改が左腕をなくした経緯をある程度知っています。
また真改は数少ない一夏に惚れてない女友達なので、二人の関係は良好です。

そして次回あたり、アレの出番が……！？

第１３話　月光（前書き）

一夏ｖｓ鈴。
そして一夏＆鈴ｖｓゴーレムたん。

強敵との二連戦を一夏はどう切り抜けるのか？
楽しんでいただければ嬉しいです。

第13話　月光

鈴が己の部屋を訪れた翌日、生徒玄関前廊下に〔クラス対抗戦日程表〕が張り出された。
一夏の一回戦の相手は二組――つまり、鈴である。

「なんか、波乱の予感がするな……」
「……」

頬に赤い手形をつけた（昨日鈴に叩かれたのだろう）一夏が不安そうに言う。

「昨日怒らせちまったしなあ……」
「……」

鈴を怒らせたことはわかっているようだが、しかし怒らせた理由には思い至らない。それが織斑一夏という男なのだ。

「あ、鈴だ」

噂をすれば影。
一夏がぼやきながら廊下を歩いていると、曲がり角の先から鈴が現れた。

「お、おはよう、鈴」
「……」

一夏の挨拶を完全に無視して通り過ぎる鈴。
どうやらかなりご立腹の様子だ。

「……はあ、わっかんねぇな。何をあんなに怒ってるんだよ……」
「……」
鈴が怒っている理由など一夏が鈴との約束を覚えていないから以外になく、鈴の怒りを鎮めるには約束の内容を正確に思い出すのが最も確実だ。
だがその解決は最も有り得ないだろう。
「直接聞いたほうが早いか？」
「……馬鹿が……」
「なにぃ！？シンまでそんなことを言うのか！？」
他に何を言えと言うのだ。
「決めた。鈴が理由を教えてくれるまで、謝らない」
「……」
一体どのような思考回路をもってすればそんな解答を導き出せるのか、是非ともご教示願いたいものだ。
「だってそうだろ。理由もわからずに頭を下げられるか」
一夏の美徳のひとつ、世の男たちから失われて久しい〔男の意地〕が、今回は悪い方に働いたようだ。
「とにかく、俺は謝らない。鈴が理由を言うまではな」
「……」
そして一夏は、結構頑固なところがあるのだった。

――――――――――

それから数週間が過ぎ。

「一夏、来週からいよいよクラス対抗戦が始まるぞ。アリーナは試合用の設定に調整されるから、実質特訓は今日で最後だな」

箒の言う通り、放課後にアリーナが使えるのは今日で最後だ。なので今日は、今までに練習したことの復習が主な内容となるだろう。

「ＩＳ操縦もようやく様になってきたな。今度こそ――」

「まあ、わたくしが訓練に付き合っているんですもの。このくらいはできて当然、できない方が不自然というものですわ」

「ふん。中距離射撃型の戦闘法が役に立つものか」

――この二人がいてまともに訓練になればの話だが。

相変わらず視線で火花を散らしながら言い合う二人は、今日までの訓練時間の内、四分の一を潰して来た。

いい加減にして欲しい。

言い合いを続ける二人を放っておいて、第三アリーナのＡピットに向かう。

厳重なセキュリティに守られた扉を開け、中に入ると、そこには――

「待ってたわよ、一夏！」

鈴がいた。

昨日までの不機嫌振りはどこへやら、不敵な笑みを浮かべながら腕組みなどしている。

「貴様、どうやってここに――――」

「ここは関係者以外立ち入り禁止ですわよ！」

「はんっ。あたしは関係者よ。一夏関係者。だから問題なしね」

意味不明な理論を展開する鈴を、箒とセシリアが睨み付ける。

「ほほう、どういう関係か、じっくり聞きたいものだな……」

「盗っ人猛々しいとさまさにこのことですわね！」

しかし鈴はそんな二人を全く相手にせず、一夏に話し掛けている。

「それで、一夏。反省した？」

「なにがだよ」

「だ、か、らっ！あたしを怒らせて申し訳なかったなーとか、仲直りしたいなーとか、あるでしょうが！」

「ないぞ」

一夏も不機嫌な顔で言い放つ。

鈴の表情が変わった。

「謝りなさいよ！」

「だから、なんでだよ！」

「なんで！？そんなこともわかんないの！？」

「わかんねぇから聞いてるんだろうが！理由もわからず謝れるか！」

次第に興奮していく二人。

「あったまきた。どうあっても謝らないっていう訳ね！？」

「だから、説明してくれりゃ謝るっつーの！」

「せ、説明したくないからこうして来てるんでしょうが！」

話は平行線だ。このままでは埒が開かない。

「じゃあこうしましょう！来週のクラス対抗戦、そこで勝った方が負けた方に何でも一つ言うことを聞かせられるってことでいいわね！？」

「おう、いいぜ。俺が勝ったら説明してもらうからな！」

売り言葉に買い言葉。しかしそこで、鈴が急に赤くなる。

「せ、説明は、その……」

ごにょごにょと言葉を濁す鈴。それを好機ととったのか、一夏が言う。

「なんだ？やめるならやめてもいいぞ？」

「だ、誰がやめるのよ！あんたこそ、あたしに謝る練習しておきなさいよ！」

「なんでだよ、馬鹿」

「馬鹿とは何よ馬鹿とは！この朴念仁！唐変木！鈍感！織斑一夏！」

最後のは悪口なのか？

「うるさい、貧乳」

――馬鹿が、それは禁句だ。

ドガァァンッ！！！

相当に頑丈な筈の部屋が揺れる。

右腕の指先から肩までをＩＳ装甲化した鈴が壁を殴ったことによる衝撃だ。

――否。鈴の拳は、壁には全く届いていない。

ならば、この衝撃は――？

「い、言ったわね……。言ってはならないことを言ったわね！」

鈴は自分の、同年代の少女たちと比べて幼い体つきをとても気にしている。

中でも胸は特に気にしている。

鈴の胸を馬鹿にした者は、例外なく悲惨な目に遭っているのだ。

「――覚悟しときなさい。手加減なんか絶対してやらないから。

――全力で、叩きのめしてあげる」

殺気じみた気配を撒き散らしながら去っていく。

流石に一夏も後悔を滲ませた顔で鈴を見送ったが、己は冷静に壁の破壊痕を分析していた。

特殊合金製の壁に、直径三十センチものクレーターを作り出す威力。

「――近接格闘型。それも、相当なパワーですわね……」

どうやらセシリアも同じ結論に達したようだ。
鈴の腕がどれほどのものかはわからないが、少なくとも、近付けば勝機はあるなどと楽観的なことは言えないだろう。

――――これは、厳しい戦いになるな。

――――――――――――

試合当日。
場所は第一アリーナ。客席は超満員で、通路まで立ち見の生徒に埋め尽くされ、会場入りできなかった生徒や関係者は、リアルタイムモニターで鑑賞するらしい。

――――まあ今の俺には、そんなことを気にしている余裕はないが。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスに従い、俺と鈴は空中で向かい合う。
距離は五メートル。ＩＳにとってはあってないような距離だ。

「泣いて謝るなら、痛めつけるレベルを下げてあげるわよ」

開放回線（オープン・チャネル）で鈴が話しかけてくる。
その鈴が装着しているＩＳは甲龍（シェンロン）。肩の横に浮いた非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）が特徴的な、中国製第三世代型ＩＳである。

「そんなのいらねぇよ。全力で来い」

そうだ、勝負は全力でやらなきゃ意味がない。
どちらか片方だけでも手を抜けば、どちらが勝っても、その勝者は「勝利を誇る」ことができないのだから。

「一応言っておくけど、ＩＳの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる」

それはつまり、「殺さない程度にいたぶることは可能である」ということだ。
そして鈴は、それができるだけの実力があるのだろう。

――だが。

「それがどうした。俺が怪我すると思ってんのか」

雪片弐型を展開し、その切っ先を鈴に向ける。
これから始まるのは戦いだ。

――ならまずは、宣戦布告をしないとな。

「戦場で、敵同士が、甲冑着込んで武器持って向き合ってるんだ。――なら、やることはひとつだけだろうが」

手加減無用、情け無用、問答無用。
それだけが、「戦の礼儀」だ。

「もう一度言うぜ――――全力で来い。俺も、全力で行く」
「――――上等。もう謝ったって、絶対に許さないから――――！」

――――そして、開戦の狼煙が上がる。

『それでは両者、試合を開始してください』

――――――――――――

――――ガギィンッ！！

雪片弐型と、鈴が持つ異形の青竜刀がぶつかり合う。
明らかに質量で負けているその巨大な刃を相手に、白式も雪片弐型も一歩も退かない。

（頼もしいぜ、相棒！）

「へえ、甲龍のパワーを正面から受けきるなんて、やるじゃない」
「はっ！機体は互角って訳だ、なら負けたら操縦者のせいだよなあ！？」

闘争心に火がつき、心が高ぶる。
一合でわかった。鈴は強い。
少なくとも接近戦は互角以上、そしてまだ隠し玉がありそうだ。

「なら、これでどう！？」

柄の両端に巨大な刃が付いた青竜刀を、バトンのように振り回す。

ただでさえ重い得物に遠心力が加わり、手数も増えた。縦横斜めから襲ってくる刃を一度でも捌き損ねれば、俺の負けが決まるだろう。

「器用なことしやがって……！」

尚も回転を上げ続ける青竜刀を受けながら、勝機を探る。
一眼二足三胆四力。
全てを見切る眼こそがもっとも大事だと、昔の人も言っている。

（見極めろ……！）

完璧なものなど存在しない。鈴の連撃にも、どこかに付け入る隙があるはずだ。
厄介なのはあの回転。あれを崩さなきゃ、最後の一歩が踏み込めない。

（力ずくじゃだめだ）

重さに加え、今や速度でもこちらを上回っている。
今真っ正面からぶつかったところで、弾かれるだけだ。

――なら。

（押して、ダメなら――！）
「引いてみろ、てなぁ！」
「うわっ！」

遠心力がのった袈裟切りに合わせ、逆袈裟を放つ。
狙いは青竜刀の背の部分。

――打ち落とし。

崩せないなら、自分で崩れてもらう。

ただでさえ大きな力が加わり続けているところに新たな力が加わったことで、鈴が前につんのめるようによろめいた。

「取った――――！」

逆袈裟からの切り上げ。雪片弐型の刃が鈴に迫り――

――鈴が、笑っていることに気付いた。

見れば、鈴の肩アーマーが開き、中心の球体が光っている。

まずい。

何かはわからないが、これはまずい。

慌てて回避しようとするが、しかし間に合わず、見えない拳に殴り飛ばされた。

「ぐあっ！」

シールドバリアーを貫くほどの衝撃。

弾き飛ばされ、せっかく詰めた距離が開く。

「ほら、もう一発行くわよ！」

「くっ！」

再び肩の球体から〔何か〕が放たれるが、何も見えない。

勘だけでなんとか避ける。

――解析。武装の正体は〔衝撃砲〕。空間に圧力をかけ砲身を形成、余剰で生じる圧力それ自体を砲弾として撃ち出す、第三世代型兵器――

「よくかわしたわね。〔龍咆〕は砲身も砲弾も見えないのが特徴なのに」

これは厄介だ。砲弾が見えないのはまだいい。
だが砲身が見えなければ、鈴がどこを狙っているのか、いつ撃ってくるのかがわからない。

「さあ、いつまでかわせるかしらね？」
「ちぃっ！」

再び放たれる衝撃砲を避ける。
勿論見えているわけではなく、言わば当てずっぽうの回避行動。
当然避けきれはせず、数発の直撃を受ける。

「ぐうっ……！」

避けにくさもそうだが、威力も相当なものだ。
このまま直撃を受け続ければ、数分と保たず敗北する。

（どうする？砲弾は見えない、砲身も見えない、ならどうやってかわす？）

ランダムな三次元機動を繰り返す。攻撃をかわすのではなく、狙いを付けさせないための機動。
効果はあり、直撃を受けることはなくなったが、消耗がかなり激しい。

このままでは次第に動きが鈍くなり、いずれは捉えられる。

（――集中しろ。砲弾が見えないのなら、砲身が見えないのなら、それ以外を全部視ろ）

鈴は衝撃砲を撃ち続けている。あれだけの性能を持っていながら、燃費まで優れているらしく、エネルギー切れになる様子はない。

（鈴の目線は？甲龍の姿勢は？球体の光は？周りの空間は？――見切るんだ。一つ残らず、一つも余さず、見極めろ）

慣れてきたのか、無駄な動きをしなくても被弾しなくなってきた。
だがまだ足りない。
このままではまだ近付けない。
もっと正確に、的確に見極めないと。

（タイミングだ。狙いは大分見えるようになって来た。あとはいつ撃って来るかだ）

鈴の余裕は崩れない。俺があと一歩を踏み込めないことに気付いているのだろう。
近接武器しか持たない俺が近付けないということは、つまりは絶対に勝てないということだ。

（見ろ、見ろ。目を逸らすな顔を背けるな、まだなにか、在るはずだ――）

何十度目かの砲撃。
肩の球体が光り、鈴の眼が俺を捉える。
あの光は衝撃砲のチャージ状況の現れで、発射タイミングと直接関

係はない。
鈴の意志で好きな威力で撃ち出せるし、チャージ速度も調整できる。

（――意志？）

そうか。
こんなに簡単な答えだったのか。
砲弾が見えないのなら。
砲身が見えないのなら。

――俺も、見えないものを見ればいい。

「――視えた」
「な――」

ただ半身になるだけで、衝撃砲をかわす。
無駄な動きが一切ない、理想的な回避。
鈴が攻撃の瞬間に放った気配――〔殺気〕を感じとったからできた反応。

（実戦以上の訓練はない、てか。確かにこの感覚は、練習じゃ味わえないな）

状況は依然俺の不利。なにせたった一発避けただけだ。
だがそれだけで、俺に不敵な笑みを浮かべさせるには十分だった。
それを見た鈴の表情が変わる。

「ふん！まぐれで一回かわしたくらいで、いい気にならないでよね！」
「ああ、今のはただのまぐれさ。けどな、どれだけ馴染んだ技も、

最初の成功はまぐれなもんだろ？」

今はまぐれでも、その内そうじゃなくなる。

それがわかっているのか、鈴の顔に焦りが浮かんだ。

「感謝するぜ、鈴。お前のおかげで、一歩、目標に近付けた」

「――――このあたしを踏み台呼ばわり？上等じゃない。今のセリフ、すぐに後悔させてあげる！」

「やってみろよ。俺も、とっておきを見せてやるぜ！」

ここ数日練習していた技能、瞬時加速（イグニッション・ブースト）。

ＩＳが持つ、慣性を無効化する機能、ＰＩＣ（パッシブ・イナーシャル・キャンセラー）を最大限に使って、一瞬で最大速度に到達するこれは、使い方次第で代表候補生とも戦える技だ。

事実千冬姉は、この瞬時加速と零落白夜を極めて世界一の座についていた。

（仕掛けるなら、今しかない！）

瞬時加速の発動タイミングを図る俺に、鈴が衝撃砲を向ける。

意識を集中、もう一度見切ってかわし、瞬時加速で接近、今度こそ反撃する。

鈴の衝撃砲が不可視の砲弾を放ち、俺が雪片弐型を振り上げつつ回避しようとした、その瞬間。

眼を焼くほどの閃光が、俺たちの戦いに割って入った。

ズドオオオンッ！！！

「な、なんだ！？」

突然の出来事に混乱する。
そんな俺に、鈴からプライベート・チャネルが飛んできた。

『一夏、試合は中止よ！気をつけなさい、アンタ、狙われてる！』

――ステージ中央に熱源。所属不明のＩＳと断定。ロックされています。

白式からの警告。どうやら鈴の言葉は事実らしい。

「マジかよ……！」

ＩＳ学園に殴り込みをかけてくるなんて、度胸があるどころじゃない。
しかもコイツは、アリーナを覆う遮断シールドをぶち抜いてきやがった――！

『とんでもないわね。一体どんな威力よ』
「目的はなんだ！？なんでこんな――」
「そんなもん、あたしが知るわけないでしょうが！！」

プライベート・チャネルの開き方がわからず、オープン・チャネルで聞く俺に鈴が怒鳴り返す。
状況は全くの不明だが、ひとつだけわかることがある。

このままじゃ、観客席のみんなが危ない――！

「みんな逃げろ！遮断シールドじゃ、コイツの攻撃は防げないぞ！」

相手の正体も目的もわからないが、いきなり乱入してくるようなヤツだ。友好的な相手とは考えにくい。
俺の声を聞いて、観客のみんなが避難を始める。
「一夏、学園の先生たちが来るまであたしが時間を稼ぐわ。アンタは逃げなさい」
――逃げろ？今逃げろって言ったか？選りに選って、この俺に？
「――ふざけろ。大事な幼なじみを置いて逃げられるか。そんなことしたら、たとえ命が助かっても、俺の魂はそこで死ぬ。
――逃げるくらいなら、腹切ったほうが万倍マシだ」
「――アンタなら、そう言うと思ってたわよ」
ニヤリとお互いに不敵な笑みを浮かべる。
万全とはとても言えないが、戦意は微塵も衰えていない。
「！来るぞ！」
最初の攻撃で巻き上げられた煙の中から、熱線が放たれる。
左右に散開して回避。
「ビーム兵器かよ……。しかも威力が半端じゃない」
「直撃したら、絶対防御があってもタダじゃ済まないわね。最悪――」
――死ぬ。
「なら尚更、逃げる訳には行かねえな」

死ぬのは怖い。それは人間として当然の感情であり、恥ずべきことは何もない。
だが大事な幼なじみに死なれるのはもっと怖いと思うところが、感情の難しいところだ。

「また来た！」

煙を晴らすかのようにビームの連射が放たれる。
それをどうにかかわすと、その射手たるＩＳがふわりと浮かび上がってきた。

「なんなんだ、こいつ……」

姿からして異形だった。
つま先よりも下まで伸びている、異常に長く、ビーム砲口が左右二門ずつある腕。
首のない、肩と一体化したような、センサーレンズが不規則に並んだ頭。
そして全身を隙間なく覆う、灰色の装甲。

「お前、何者だよ」
「……」

返事はない。こちらの問い掛けに応えるつもりはないらしい。

『織斑くん！凰さん！今すぐアリーナから脱出してください！すぐに先生たちがＩＳで制圧に行きます！』

山田先生からのプライベート・チャネル。
いつもと違って先生らしい威厳のある声だが、その言葉には頷けな

い。

「それまで俺たちで食い止めます。こいつを放っておいたら、観客席に被害がでるかもしれない」

『織斑くん!?だ、ダメですよ!生徒さんにもしものことがあったら――』

言葉はそこまでしか聞けなかった。

正体不明のＩＳが、体を傾けて突進して来たからだ。

「おっと!」

避け様に雪片弐型を振る。

しかしその完璧なタイミングの筈だったカウンターを、敵はスラスターを噴かして避けた。

「なんだよ今の動き!?」

「スラスターの出力までとんでもないわね……」

攻撃力、機動力、どちらも尋常じゃない。

あの全身装甲（フル・スキン）だ、おそらく防御力も相当なものだろう。

――それでも、負ける訳にはいかない。

「援護するわ!突っ込みなさい、一夏!」

「了解だ!俺に当てんじゃねえぞ、鈴!」

「はん――誰に口聞いてんのよ!」

覇気に満ちた鈴の言葉。

恐ろしい強敵も、味方になれば頼もしい。

俺は万の援軍を得たような気持ちで、突撃を仕掛けた。

――――――――――

「くっ……！」

斬撃が空を切る。
必殺の間合いから放たれた一撃は、しかし敵に届かない。

「離れて！」

鈴の警告に反応し、即座に離脱。
その瞬間、敵がコマのように回転しながら、ビーム砲撃をしてくる。
その熱線が、俺を捉えようとしていた。

「やらせないわよ！」

鈴が衝撃砲を放つ。
敵は回転を止め、その長い腕で衝撃を叩き落とした。

「助かったぜ」
「貸しにしとくわ。……それより、どうするの？これじゃ埒が開かないわよ」
「ああ、しかも観客席のみんなが避難できてない。先生たちも、もうとっくに来てたっていいはずだ」
「……扉がロックされてる？これもアイツの仕業ってわけ？」

「さあな。だけどそうだとしたら、俺たちだけでやらなきゃならない。……鈴、あとエネルギーはどのくらい残ってる？」
「１８０ってとこね。一夏は？」
「６０切ったよ」
文句を言うわけじゃないが、さっきまでの鈴との試合が響いている。零落白夜を使えるのは、よくてあと一回だろう。
――だが。
「ふうん。そんだけあれば――」
「――十分だ」
零落白夜の威力は絶大だ。一撃あればこと足りる。
だからあとは、当てるだけだ。
「しかしアイツの動き、なんか違和感がある。まるで人間じゃないみたいだ」
「どういうことよ？」
突然の俺の呟きに、鈴が訝しげに質問で返す。
「攻撃しても、対応が毎回同じだ。それに死角からの攻撃にもかなり正確に反応してくる。あれじゃまるで――」
――機械みたいだ。
「――確かに、言われてみればそうね。けどそんなこと有り得ない。ＩＳは人が乗らないと絶対に動かないんだから」

それは俺も教科書で読んだ。だが千冬姉はこうも言っていた。

――ＩＳは未完成の兵器だ、と。

「つまり、どこかの誰かが極秘裏にＩＳの無人機の開発に成功しても、不思議じゃないってこと？」

「まあ、そういうことだな」

「けどそれがなんだっていうのよ。仮にあれが無人機だとしたらどうなるのよ」

「決まってるだろ。――やり過ぎる心配はない、ってことさ」

零落白夜は相手のバリアーを無効化し、強制的に絶対防御を発動させるものだ。

その威力は全ＩＳ中トップクラスで、操縦者にまで致命傷を与えかねないほどである。

しかし相手が無人機なら、遠慮する必要は全くない。

「ならあとはどう当てるかね。一夏、なにか考えはある？」

「あるぜ。俺が合図したら、アイツに向かって衝撃砲を撃ってくれ。最大威力で」

「？いいけど、当たらないわよ？」

「いいんだよ、当たらなくても」

だから言ったろ――考えがあるって。

「じゃあ、早速――」

「一夏ぁっ！」

突然の大声。

アリーナのスピーカーから響いた、ハウリングが尾を引くほどのそ

の声は、箒のものだった。

「な、なにしてるんだ、お前……」

中継室を見る。

おそらく箒がやったんだろう、審判とナレーターがのびていて、箒ははぁはぁと肩で息をしている。

怒っているような、焦っているような、そんな不思議な表情で、もう一度、叫ぶように声をあげた。

「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする！」

――それは、箒なりの、箒に出来る、精一杯の応援だった。

セシリアと戦うシンに、俺が送ったように。

「！一夏っ！」

鈴の声で視線を戻す。

敵ＩＳが、今の館内放送の発信者である箒に興味を持ったようで、じっと箒を見ている。

「逃げ――――」

――ダメだ、間に合わない。

敵ＩＳはすでに腕のビーム砲口を箒に向けていた。

あれを生身で受ければ、一瞬で蒸発するのは目に見えている。

「やめろぉぉぉっ！！！」

喉が張り裂けんばかりに叫ぶ。
しかし当然、そんなものに意味はない。

熱線が放たれる。
それが、ひどくゆっくりに見えた。

――ふざけるな。

守るって、誓ったのに。

俺は、また――

「箒ぃぃぃぃっ！！！」

箒は茫然と、自分に迫る「死」を見ている。
逃げても間に合わない。
たとえ今この瞬間に敵を倒したところで、それはもう意味がない。

そして禍々しい閃光が、為す術なく立ち尽くす箒を飲み込む――
その、直前に。

箒を守るように。
三年前、攫われた俺を、助けたように。

銀色の装甲と、紫色の極光が、箒の前に立ちふさがった。

―――――――――

箒がいない。

ピットからリアルタイムモニターで、敵と戦う一夏と鈴を見ていた己がそれに気付いたのは、正体不明のＩＳが二人の試合に乱入し、戦闘を始めてから数分が経ってからだった。

（……どこへ……？）

――なにか、ひどく嫌な予感がする。

鈴と戦う一夏の姿を不安げに見ていた箒が、試合ではなく、本物の戦いに巻き込まれた一夏に何を思ったのか。

――決まっている。自分にも何か出来ないかと、そう思ったに違いない。

「……」

駆け出す。

箒のことだ、居ても立ってもいられず、きっと無茶なことをするだろう。

そしてその行動は、最悪の事態を招く恐れがある。

あのＩＳは、恐らく無人機だ。

ただプログラムに従って動くだけの特徴的な行動パターンは、昔良く見たものに酷似していた。

そしてあのＩＳには、高度なＡＩが搭載されている可能性が高い。
ただ戦うだけでなく、一夏と鈴の遣り取りを興味深い様子で見ていたことから、それが伺える。

だがＡＩは所詮ＡＩだ。人間とは考え方が違う。
プログラム外の事態に対しどういった行動に出るか、分かったものではない。

「一夏ぁっ！」

箒の声。
アリーナ全体に響きわたるそれは――

（……中継室か……！）

全力で、駆ける。
最悪の想像はいよいよ己の思考を埋め尽くしていた。

「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする！」

叫ぶようなその声は、箒から一夏への声援だ。
彼女らしい、叱責のような言葉だが、その声に込められた想いは一夏の身を案じるものだ。

中継室に飛び込んだ己の目に映ったのは、肩で息をする箒の姿と、今まさに箒に向け熱線を放たんとする、異形のＩＳの砲口だった。

――首から提げられた指輪を掴む。

この瞬間、己の心を満たしていたのは、幼なじみの命を害そうとする敵への怒り――――では、なかった。

――――己の意志に応じ、己の専用機、朧月が展開される。

大切な幼なじみを、目の前で失ってしまうかも知れないという恐怖――――でも、なかった。

――――右腕を振り上げ、そこに取り付けられた月光を起動。

不謹慎なことに。この瞬間、己の心を満たしていたのは――――歓喜だった。

――――拡張領域（バススロット）の八割を食い潰しているふたつの装置、膨大なエネルギーを貯め込むコンデンサー、神無月（かんなづき）と、そのエネルギーを一気に送り込む供給ライン、神在月（かみありづき）が、月光にありったけのエネルギーを叩き込む。

ただ奪い、壊し、殺すことしかしてこなかった、この己が。

――――溢れ出る、紫色の光の粒子。それが一瞬で、ニメートルを超

える極光の剣となる。

夥しい量の血に濡れ、悍ましいほどの業に塗れた、この腕で。

――――箒の前に躍り出る。眼前に迫った「死」を切り払うべく、月光を振り下ろした。

誰かを守れるなどと。

願ったことすら、なかったのだから。

「オオオオォォォォアアアアアッ！！！」

――――――――――

朧月を装着したシンが、普段の彼女からは想像も付かないような咆哮をあげて、熱線と真っ向からぶつかり合う。

あの紫色の光の剣はおそらく、朧月の初期装備（プリセット）、月光だろう。

あれだけの熱量を持つビームを切り裂くその威力は凄まじく、俺の零落白夜と比べても遜色ない。

だが数秒も続いた砲撃は、朧月に大きなダメージを与えた。
ビームが止むと同時にＩＳが解除され、力尽きたように、シンが崩れ落ちる。

「「――ぶっ潰す」」

殺意を剥き出しにした俺の声に、鈴の絶対零度の声が重なる。
もはや言葉を交わすまでもなく、二人の思いは一つになった。

「鈴、やれ！」

衝撃砲を構える鈴の前に躍り出る。
俺の意図を一瞬で読み取った鈴が、獰猛な笑みを浮かべて吼えた。

「あたしの分まで、痛めつけてきなさい！」
「言われるまでもねぇ！」

背中に巨大なエネルギーの塊――最大威力の衝撃砲の砲弾を受ける。
そのエネルギーを内部に取り込み、圧縮。
そうして得たエネルギーを放出し、一気に加速。

――瞬時加速。

よくも箒を狙いやがったな。
よくもシンを傷つけやがったな。
お前が無人機であることを心から願うぜ。
でないと、本当にやり過ぎちまいそうだ――！

敵ＩＳが眼前に迫る。

零落白夜を発動、眩い光を放つ剣を、渾身の力を込めて振り抜いた。

「――オオオッ！」

正中線を狙った一撃は、反応した敵ＩＳが振り上げた右腕を切り落とした。

即座に刃を翻し二撃目を叩き込もうとしたが、敵のほうが一瞬速い。

左拳に殴られ、さらに接触面から熱源反応。

零距離からのビーム砲撃。

零落白夜を使ったことで、白式のシールドエネルギーはほとんど空だ。

これを受ければ、まず間違いなく死ぬだろう。

――撃てれば、の話だが。

「真改さんは――」

よく通る声。

同時に、零落白夜によって破壊された遮断シールドの隙間から、六機のビットが飛び出してくる。

「あなた如きが傷つけていい方では、なくってよ！」

ブルー・ティアーズ全機による、レーザーとミサイルの一斉射撃。

零落白夜でシールドエネルギーを失ったところにそれを受け、ひとたまりもなく墜落していく敵ＩＳ。

――だが、まだだ。

――敵ＩＳの再起動を確認。警告。ロックされています。

「悪いがさっきのは、鈴に頼まれた分だ」

白式の警告通り、片方だけ残った左腕を最大出力形態（バースト・モード）に変形させたＩＳが、地上から俺を狙っていた。

「そしてこれが――」

今までと比べても圧倒的な熱量を持つビームが迫る。

俺はその光の中に、ためらいなく飛び込んで――

「俺の、分だあああぁぁぁっ！！」

今度こそ。

敵ＩＳの装甲を、真っ二つに切り裂いた。

――――――――――

「よう。目、覚めたか？」

幼なじみの声。

顔を横に向ければ、三人の幼なじみと、セシリア、本音の姿があった。

「中々起きないから心配したわよ、シン。」

「具合はいかがですか？真改さん」
「お疲れさま～、いのっち」

口々にかけられる、労りの言葉。
己は、どうにか生き残ったらしい。

「……真改」
「……」

俯いた箒の声。
それを聞き、安堵と喜びに心を満たされる。

――守れた。

「……済まなかった。私のせいで、お前は危うく――」
「……怪我は……？」
「え……？」

箒は一度キョトンとして、

「あ、ああ。真改のおかげで、怪我はない」
「……なら、いい……」
「……ありがとう」

箒の声が震えている。

――また、泣かせてしまったか。

「ありがとう、真改……！」

再び俯き、泣き始めた箒の顔に手を伸ばし、その眼から流れる涙を拭う。

「……無事で、良かった……」

「それは、私の台詞だ……！」

箒は己の手を取って、さらに泣き出してしまった。

震える箒の肩を、慰めるように一夏が優しく叩く。

「それで、大丈夫か？どこか痛むとこないか？」

「……」

朧月が守ってくれたのだろう、疲労はあるが、体に怪我はない。

――ああ、そういえば、ひとつだけ。

「……喉……」

「「「「「は？」」」」」

「……喉が、痛い……」

「「「「「……」」」」」

一瞬の静寂。

「……ぷ、あははは！」

「た、確かに、あはは、すごい声出してたもんねぇ、アンタ！」

「し、真改さん、ふふふ、ここは、笑いをとる場面ではありませんわ！」

「ふふ、真改、お前というやつは、ふふふ……！」

「あはは～、いのっち、普段喋んないからだよ～」

「……」

……納得がいかない。

痛む所はないかと聞かれたから、正直に答えたというのに。

……だが、まあ。

重くなった雰囲気も和らぎ、なにより箒も笑っているので、善しとしよう――――

第１３話　月光（後書き）

第一巻分、完！

ようやく終わった……。

小説家ってすげぇな、こんなのをオリジナルで書いてるのか……改めて尊敬します。

ひと区切りついたので、もしかしたら次回は外伝になるかもです。

その場合の主人公は、モチロン……

外伝　ヴァオー・ザ・ガトリングモンスター（なんちゃって予告風）（前書き）

ノリと勢いだけで書いたシロモノです。
設定適当、展開むちゃくちゃ、けどごめんなさい、書き始めたら止まらなかったんです……

外伝　ヴァオー・ザ・ガトリングモンスター（なんちゃって予告風）

世界最強にして女性にしか扱えない兵器、ＩＳの操縦を学ぶためのＩＳ学園の入試会場に、どういうわけか、二人の男子がいた。
一人は日本人らしい黒髪黒眼、中肉中背で中々に整った顔立ちの少年。手に持った紙と睨めっこしながら、あーでもないこーでもないと、ぶつくさぼやいている。
そしてもう一人は、少年と呼ぶのが憚られる、２５０センチはあろうかという長身を、岩の塊のように鍛え上げた巨人である。

「迷っちまったなあ、イィィチカァァァァッ！！」
「うるせえよ！？こんなところでそんなことを大声で言うな、この単純馬鹿！！」
「ハッハー！」

日本人の少年は織斑一夏。
そして大柄（どころの話ではない）な少年（？）はヴァオー。
藍越学園（アイエツ）を受験するつもりでＩＳ（アイエス）学園に迷い込んだ、馬鹿二人である。

「オレの名前はヴァオーだ！よろしく頼むぜぇ、みんなぁぁぁぁ！！」
「やかましい！お前は普通の声量で喋れんのか！？」
「そいつは無理ってモンだぜ、千冬さぁぁぁぁん！」
「織斑先生と呼べ！」
「ハッハー！」

振り下ろされる出席簿。普通にやっても届かないのでジャンプする

姿がちょっとラブリー。

「わたくしを知らない？このイギリス代表候補生、セシリア・オルコットを！？」

「悪ぃな、オレぁ人の名前覚えるのが苦手なんだ！」

「んなこと胸張って言うんじゃねぇよ！」

少女たちとの出会い。

「決闘ですわ！」

「上等だぁ！分かり易いのは、嫌いじゃあないぜぇ！？」

そして（何故か）戦い。

「これがヴァオーくんの専用ＩＳ、〔グレディッツィア〕ですっ！」

それは異形だった。

操縦者の少年（？）に合わせたのか、高さ五メートルはあろうかという巨躯。

隙間なく施された白い全身装甲（フル・スキン）は見るからに分厚い。

武装は右腕に巨大なバズーカ、左腕に二門、両肩に三門ずつ、計八門もの六連装大型ガトリングガン。

この怪物を見た誰もが思った。

これはＩＳではない、要塞だ。

「あら、逃げずに――――ってなんですのその機体！？」
「見りゃあわかんだろうが！オレの専用機だぜぇ！？」
「そんなＩＳ、見たことも聞いたこともありませんわ！」
「ハッハー！細けぇこと気にしてるとハゲるぜぇ！？」
「ハゲ……！？レ、レディになんてことをおっしゃいますの！？」

少年（？）にはデリカシーなどない。

「くっ、なんという弾幕……！ですが、この程度で墜ちるわたくしとブルー・ティアーズではありませんわ！！」
「ハッハー！望外だぁ！悪くないぜぇ、セシリアァァァァッ！！」

あるのはただ、無尽蔵の弾薬と、無限の闘争心のみ。

「久しぶりだなぁ、リィィィン！相っ変わらず小せぇなあ！？」
「うっさいわね！？アンタがデカ過ぎんのよ、この単純馬鹿！！」

幼なじみとの再開。

「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする！」

「そうだぜ、イチカァァッ！オレのダチなら、きっちり決めろぉぉ！！」
「馬鹿野郎……んなこと言われたら、是が非でも気合い入っちまうじゃねぇか！」
弾丸が届かぬのなら、せめてこの声を。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」
「ハッハー！嫌われたモンだなぁ、イィチカアァァァ！」
「うるせえ、ぶん殴るぞてめえ！今明らかにそういう雰囲気じゃねぇだろ！？」
「な、なんだ貴様！？」
軍人すらビビらせる威圧感。

「織斑くんのグループに入れて～！」
「デュノアくん、よろしく！」
「私は織斑くんと！」
「デュノアくんで！」
「織斑くん！」
「デュノアくん！」
「織斑くん！」
「デュノアくん！」
「オレもいるぜぇぇぇぇ！？」
「「「「「「「いや、生身でＩＳより大きい人はちょっと……」」」」」」」

「そりゃあないぜイィィチカァァァッ！！」
「俺に言うなっ！」
大は小を兼ねないこともある。

「じゃあ、射撃武器の練習をしてみようか」
「なんならオレのを貸すぜぇ！？イチカァァァ！」
「そんなデカいので練習になるか！？」
「あはは、二人は仲いいんだね」
もう一度言おう、大は小を兼ねないこともある。

「ねえねえ、第三アリーナで専用機同士が模擬戦してるよ！」
「ほんと！？誰と誰？」
「片方はわからないけど、もう片方はすごく大きかったから、多分ヴァオーくんだよ」
「「「……え？」」」
何だろう、嫌な予感がする。

「このシュヴァルツェア・レーゲンの停止結界の前では、実弾兵器など無力だ」
「ハッハー！なら止めてみせろぉ！弾ならまだまだ、腐るほどあるぜぇぇぇぇ！？」

「え、ちょっ、おま、いくらなんでも多すぎ――――」

毎秒百発の大口径ガトリングガンが八門、合計毎秒八百発。

故人曰わく、数は力なり。

「あいつ、ふざけやがって！ぶっ飛ばしてやる！」

「落ち着けぇ、イチカァァァ！！」

「……お前に言われると、なんか落ち着いたな」

「そりゃオレを馬鹿にしてんのか？……とにかく、白式はもうエネルギー切れだ、このまま行っても死ぬだけだぜぇ？」

「じゃあどうすんだよ、あの偽物野郎が先生たちに制圧されんのを、黙って見てろってのか？冗談じゃねえ、あいつは、俺がぶっ飛ばさねえと気が済まねえ」

「んなこたぁ分かってるぜぇ、イチカ。エネルギーがないなら、オレのを分けてやる。グレディッツィアはこのガタイだ、白式のエネルギーくらいなんともないぜぇ！」

姉を真似る黒いＩＳに、生身で挑もうとする親友を支える。

その体は、伊達に大きい訳ではない。

「白式は展開出来た。……そっちは大丈夫か？ヴァオー」

「ハッハー！当っったり前だ！！誰に口聞いてやがんだよぉ！！――――まだまだ行けるぜ、イィィチカアァァァァァッ！！！」

「ったく、頼もし過ぎるぜ、お前は――――！」

その巨躯は、仲間を守る城壁であり、災厄を打ち砕く鉄槌である。

『強さっつーのは心の在処。己の拠り所。自分がどうありたいかを常におもうことじゃないかと、俺は思う』

少女は少年に問う。

「強さ」とは、なんであるかを。

『強くねえよ。俺は、まったく、強くない。けれど、もし俺が強いっていうのなら、それは――』

『強くなりたいから、強いのさ。それに強くなって、誰かを守ってみたい。自分の全てを使って、ただ誰かのために戦ってみたい』

その答えを聞き、少女は、もう一人の少年にも問うた。

「強さ」とは、なんであるかを。

『強さだあ？んなモン、オレが知る訳ねえだろうが』

『オレは戦うしか能がねぇんだよ。他のこたぁ、なーんも、出来ねぇんだ』

『だからせめて――なんのために戦うのか、誰のために戦うのかくれぇは、自分で決めてぇんだよ』

『まあそれも、言うなりゃ自分のためだけどなあ、ハッハー！』

『だからオレは戦ってる。強さとかなんだとか、そんなモンはどうでもいいんだよ』

『人間なんざぁ、いつ死んじまうかわかんねぇからなあ。――だからいつ死んでも悔いが残らねぇように、オレぁオレに出来ることを、いつだって全力でやってるだけさ』

『だからオレは戦ってるのさ。なにせオレぁ、戦うくらいしか能がねぇ、単純馬鹿だからなあ！！ハッハー！！！』

その答えを聞き、少女は思う。
これもまた、ひとつの「強さ」の形なのだろうと。

「お、お前は私の嫁にする！決定事項だ！異論は認めん！」
「……嫁？婿じゃなくて？」
「おいおいラウラァァァァッ！オレにはチューはねえのかよおぉぉぉっ！？」
「え、だって届かないし……」

けどやっぱり大は小を兼ねないこともある。

臨海学校。
黄金の太陽、青い海、白い砂浜、色とりどりの水着に身を包んだ年頃の少女たち、そして戦艦と見紛うほどの巨躯。

「うぅぅぅぅみぃぃぃぃだぁぁぁぁぁっ！！！」
「うるせえええ！？海なのに山彦が返ってきそうだぞ！？」
「ハッハー！上手いこと言ったつもりか、イィィィチカァァァァァ

！？」

「だからいちいち叫ぶんじゃねぇよ！」

「……お前ら、旅館では静かにしろよ、頼むから」

教師はなにかを諦めた。

「この料理旨ぇなあぁ！！」

「だからいちいち叫ぶなっ！騒ぐと千冬姉が――――」

「お前たちは静かに食事をすることができんのか。どうにも体力があり余っているようだな。よかろう。それでは今から砂浜をランニングしてこい。距離は……そうだな。五十キロもあれば十分だろう」

「しゃあねぇ、さっさと済ませようぜぇ、イィチカァァァ！」

「走るのかよ！？ていうか俺を巻き込むなあ！！」

単純馬鹿には冗談も脅しも通じない。いろんな意味で。

「久しぶりだなぁ、束さぁぁぁぁん！！」

「久しぶりだねぇ、ヴァーくぅぅぅん！！」

「……なんだこれ」

感染しました。

そして事件は起きる。

洋上を高速で移動する敵機を討ち取るべく、少年と新たな「力」を

手に入れた少女が飛び立つ。

「きなくせえなあ。なんかある気がするぜ」
「どうしたヴァオー。やけに静かだな」
「……ホウキ」
「？なんだ？」
「帰ってこいよ」
「？妙なことを言うヤツだな。心配せずとも、私と一夏なら問題ない。紅椿もあるしな」

少女は気づかない。
巨躯の少年が、何を案じているのか。
そして、その不安は現実となった。

「白式と紅椿、第四世代型ＩＳ二機を相手にして、難なく勝利、か……どこぞの首輪付きを思い出すなあ、メルツェル」
「ヴァオー？何を言ってるの……？」
「なんでもねぇよ、シャル。……さあ行こうぜぇ！イチカの弔い合戦だあ！！」
「一夏は死んでいない！」
「縁起でもないこと言ってんじゃないわよ！」
「ハッハー！」

そして巨躯の少年と少女たちは戦いに赴く。
傷付き倒れた仲間のために。

一度は追い詰めた。
しかし敵は真の力を顕し、反撃の牙を剥く。
その圧倒的な力に次々と倒れていく少女たち。

「ダメだ、このままじゃ……！」

戦うと誓った。
しかし絶対的な力の差に、心が折れそうになる。
されど忘るるなかれ、戦っているのは少女たちのみに非ず。
巨躯の少年もまた、己の存在意義を賭け、戦っているのだ。
かつて守れなかった戦友たちに、報いるためにも。

「どこ見てやがる！！てめえの相手は、このオレだあぁぁぁ！！」
「ヴァオー！」

戦うと決めた。
こんな自分を必要だと言ってくれた友を守れなかったから。
こんな自分に付き合ってくれた友を守れなかったから。

――こんな自分と共に笑ってくれる友を、守りたいから。

それだけが、戦うことしか出来ない自分の、たったひとつの、願いだから。

たとえ腕がもげようと。
たとえ足が千切れようと。
たとえ眼を灼かれようと。
たとえ心臓を抉られようと。

他でもない、自分のために。

悔いなど無いと、笑いながら逝くために。

この命、尽きるまで。

戦い抜くと、決めたのだ。

「ヴァオー、無理だ！退がれ！」

だから、それは聞けぬ。

自分は少女たちを守るために、ここにいるのだから。

「退がれだあ？相手見てもの言えよ、オレにそんな頭のいいこと、出来る訳がねぇだろうがあぁぁぁ！！」

だから、安心して欲しい。

これが、これこそが、巨躯の少年の望みなのだから。

「ハッハー！まだまだ行けるぜ、ホウキィィィィィ！！」

少年が目を覚まし、新たな力を手に戦場へ駆けつけた時。

ただ一機、白い装甲が、不破の城壁の如く堅牢さでもって、敵の前に立ちふさがっていた。

「わりい、遅れたな」

「ハッハー！もうちょい遅けりゃ、オレが見せ場を独り占めしちまってたぜぇ！？」

「そいつは良かった。ならまだ、俺の分も残ってるってことだよな」

「くれてやるぜぇ、イチカ。後ろは気にすんな、流れ弾は全部吹っ

飛ばしてやるからよぉ！！」
「はっ、マジで頼もしいぜ、ヴァオー！！」

巨躯の少年は、自らの全身を覆う装甲に感謝した。
負けられぬ戦いに赴く親友に、深く貫かれた胸を、見られずに済んだのだから。

（目が霞んできやがった……へっ、ここまでか。だがまあ、どうにか守れたみてぇだし）
「悔いはねぇ。……楽しかったぜ、イチカ」

そう、悔いはない。
何故ならばこんなにも、安らかな気持ちで逝けるのだから。

こうして。
かつて友のために戦い、友と散った男は、今度こそ友を守り切った誇りを胸に、二度目の生を終えたのであった。

外伝　ヴァオー・ザ・ガトリングモンスター（なんちゃって予告風）（後書き）

とりあえず一言。
ヴァオー書くのすげぇ楽しい。
けど妄想してたネタはあらかた出し尽くしてしまいました。

第１４話　平穏（前書き）

お待たせしました。
日常パート、真改の休日です。

第１４話　平穏

六月頭の日曜日。
一夏が久しぶりに家に帰ると言うので、今日の訓練はない。
最近ずっと訓練続きだったから、たまには休みも必要だろう。
折角だから己も家に帰ることにした。

「あ、おかえりー、シン姉ちゃん！」
「姉さん帰ってきたの？」
「やあ姉さん、お帰りなさい。久しぶりだね。」
「姉ちゃん、たまには電話くらいしろよなー」
「……」

弟妹たちが迎えてくれる。
うむ、やはり帰る家があるのは素晴らしい。

「お帰り、真改。元気そうで何よりだよ」
「……」

柔らかい笑みを浮かべる五十歳くらいの男性、この孤児院の経営者である唐沢さん。

この人は己の無表情から体調や気持ちを見抜くことが出来る、数少ない人の一人である。

「ＩＳ学園での調子はどうだい？」
「……順調……」
「それは良かった。友達はできたかい？」
「……数人……」

「うんうん、学園生活を楽しんでるみたいだね」

心から嬉しそうに頷く姿は、正しく父親のそれだ。
多くの孤児たちから信頼され、心の傷を癒やしてきた実績は伊達ではない。

「君の花壇は巴と円が一生懸命世話していたよ。お姉ちゃんに褒めてもらうんだーって」
「……」

巴と円はこの孤児院で暮らす双子の姉妹である。
花壇の世話は皆と一緒にやっているが、この二人は特に率先して手伝ってくれる。

「いつまでも玄関で話すのもなんだね。ほら、早く上がりなよ。少し早いけど、お昼にしよう」
「……」

促され、靴を脱いで中に上がる。

――帰って来た、な。

「……ただいま……」
「うん。お帰り、真改」

――――――――――

「おう、シン姉、帰って来たのか」
「……」
己の姿を見て、居間でテレビを見ていた少年――ひとつ下の弟、宗太が声を掛けて来た。
「メシは？もう食ったか？」
「……否……」
「んじゃ、ちょい早いけど作るとしますかね」
「……」
言って、立ち上がる宗太。
コイツは料理が上手く、孤児院での食事担当だ。
宗太の手伝いを他の者が日替わりで行うのが、当孤児院の料理事情である。
「なんにするよ？肉も野菜も魚もあるけど」
「……任せる……」
「そーいうのがいっとう困るっての。……あー、じゃあ無難に、チャーハンでも作っか」
頭を掻きながらエプロンを身に着け、厨房に向かう宗太。
コイツは粗暴な言動とは裏腹に繊細な味付けをする。
将来は自分の店を持つことが夢らしく、その料理の腕前は五反田食堂の店主である厳さんも認めるほどだ。
「ちょい待ってろよ。すぐできっから」
「……」

手際良く肉や野菜を切り、卵を溶く。何故か大火力のコンロに点火し、白米と具を炒め、卵を流し込む。味付けは塩のみというのがこだわりらしい。

「うっし。じゃあみんなを呼んで来てくれ」

「……承知……」

ついでに帰ってきた挨拶もしてこよう。

久しぶりの再会だ、顔くらい見せなくてはな。

――――――――――

「ちょっと姉さん！私が買った服置いていったでしょ！」

「……」

妹の一人、小夜からの言葉。

己を着せ替え人形にしようと企む妹は複数いるが、コイツはその筆頭である。

「いい！？可愛い女の子は着飾らなくちゃいけないの！それが持って産まれた者の義務なのよ！」

「……」

耳にたこが出来るほど聞かされた小夜の持論。

己の容姿が整っているかどうかはわからないが、コイツに言わせると「すげぇ」らしい。

成る程、わからん。

「まあいいわ。姉さんの部屋に送るから」

「……無駄……」

送られて来た荷物を受け取り拒否すればいいだけだからな。

「一夏さん経由で届けてもらうことになってるわ」

「……！」

おのれ一夏！裏切ったな！

「と・に・か・く！！ちゃんとお洒落に気を使いなさい！私のお小遣いも使ってるんだからね！」

知るか。お前が勝手にやっていることだろう。

――――――――――

「あ、シンお姉ちゃんおかえりー！」

「おかえりー！見て見て、桔梗（ききょう）がきれいに咲いたよー！」

「……美事……」

花壇に行き、仲良く土いじりをしている同じ顔の少女たち――巴と円に声を掛ける。

花壇には青紫色の美しい花が咲いている。
己がＩＳ学園に入学する前、二人と一緒に植えた桔梗である。

「ちゃんと毎日お世話したよ！」
「お姉ちゃんにお願いされたからね！」
「……ありがとう……」
「「えへへー」」

咲き誇る桔梗にも負けない、花のような笑顔で胸を張る二人の頭を撫で、礼を言う。

「……飯……」
「あれ、もう？」
「すぐ行きまーす」

手早く片付けをし、とことこと歩いて行く二人。

「……手を洗え……」
「「はーい」」

うむ、素直でよろしい。

――――――――――

「「「「「「「「「「いただきまーす」」」」」」」」」」
「……いただきます……」

「たっぷり食えよ。おかわりあるからな」

己を含めると、今この孤児院には十二人の子供たちが生活している。それだけの人数分の食事をまとめて作りながら、味はかなりのものだ。宗太の将来が楽しみである。

「そういやシン姉、イチ兄から聞いたけど、専用機もらったんだって？」

「……」

昔からよく孤児院に遊びに来る一夏は皆から兄のように慕われているが、しかしいつ連絡したんだ。

「シン姉に電話しても聞かれたことしか答えねーからよ、いつもイチ兄に聞いてんのさ」

「……」

適切な判断ではある。

あるが一夏よ、なんでもかんでも話してはいないだろうな。

「たまには声だけでも聞かせなさいよねー。姉さん、しょっちゅう無茶するんだから」

「……善処する……」

どうやら心配していてくれたようだ。

電話は苦手だが、たまには連絡するようにせねばな。

「ねえ宗太お兄ちゃん、専用機ってなに？」

「あーっと、そうだな、つまりシン姉は、偉い人から頼まれて手伝いをしてるんだよ」

「へー！すごーい！」
「さすがシンお姉ちゃん！」
「……」
「けど如月が作ったんだってね？……大丈夫かい？」
「……問題ない……」

どうやら一夏はかなり詳しく話しているらしい。
己がＩＳ学園を受験すると言い出してから、ＩＳについて調べている唐沢さんが、心配そうに聞いてくる。
この様子だと、怪我したことも知られているかもしれん。

「そうか。けど、無理だけはしないように。君になにかあったら、私はもちろん、ここにいるみんなが悲しむからね」
「……」

暖かい言葉。
聞く者に安らぎを与える声色。
この人を心配させていることを思うと、心が痛む。

「……食事中にする話じゃなかったね。うん、今は宗太の作ってくれたチャーハンに集中しよう。いつもより美味しいしね。久々に真改が帰って来たからかな？」
「んな！？なななにを言ってんだよ！？」
「あれ～？宗太、顔赤いよ～？」
「あ、赤くねぇよっ！！」
「や～い、真っ赤～」
「宗太お兄ちゃん、顔真っ赤～」
「だから赤くねぇよっ！！」
「はっはっは、若いっていいなぁ」
「うるせぇ！てめえら全員、晩飯抜きだあ！！」

「「「「「「「「「「あはははは！！」」」」」」」」」」
「……」

騒がしいのは苦手だ。
苦手だが――――決して、嫌いじゃあない。

――――――――――

昼食を食べ終えると、すぐに孤児院を出る支度を始めた。

「姉ちゃん、もう行っちゃうのか？」
「もう少しゆっくりしてきゃいいのに」
「……やることがある……」

訓練は休みだが、朧月の調整がある。
如月重工に頼んで、新しい装備を送ってもらうことになっているのだ。

「……また、帰ってくる……」
「うん、ここは君の家なんだから、遠慮はいらないよ。ただ小夜も言ってたけど、たまには連絡が欲しいな」
「……承知……」
「「行ってらっしゃーい」」

孤児院の皆に見送られ、外に出る。
己の家はここだけだ。

年長者として、皆の姉として、この家を守れるよう、まだまだ精進せねばな。

――――――――――

「やあやあ井上君、久しぶりだねぇ！折角の休日を僕らのために使ってくれてありがとう！」

「……」

いつも思うのだが、なぜわざわざ社長が出張って来るのだろう。

「うちの技術者たちはみんなコミュニケーション能力に難があってねぇ。それ以外の職員たちは技術的な理解がない。僕が来るのが一番確実なのさ」

「……」

己が言うことではないが、社長は性格に難があると思う。

「それでは早速装備の説明に入らせてもらうよ。今回井上君のご要望の通り、対ＩＳ用の閃光弾を作ってみた」

展開された朧月の右肩に、右腕の動きを阻害しない形の小型の発射装置が取り付けられている。

「名前は月蝕（げっしょく）。ただ光るだけじゃ面白くないからね、特殊なパルスを出してＩＳのハイパーセンサーに干渉、全方位から強烈な光を浴

びてるように認識させるんだ」
「……」
……なにもそこまでのものは要求していなかったのだが。
「だけど効果は短いよ。もって数秒、それも弾から離れれば離れるほど、時間はさらに短くなる」
数秒あれば十分だ。
朧月の機動力と月光の威力ならば、仕留めるのは容易い。
「ようし、じゃあ早速、月蝕の威力をご覧にいれよう！」
スチャッと懐から取り出したサングラスをかける社長。
そして小さな箱を床に置き、手に持ったスイッチを――おい待て、まさか！
「ぽちっとな」
カッ――――――！
瞬間、ハイパーセンサーから送り込まれてくる光の奔流。
社長の言う通り全方位から襲いかかってくるそれは、瞼を閉じてもなお己の目を灼いた。
「……！！」
「どうだい、すごいだろう！発射された弾は好きなタイミングで起爆できるから、直接当てる必要もないよ！！」
「……」

ＩＳの保護機能により、視界は二秒で回復した。
ハイパーセンサーから送られてくるのはあくまで「情報」なのだろう、目にもなんら異常はない。
だが何故己で試した。
「こういうのは井上君本人が威力を知っておかないと。おかげで月蝕のことが良くわかっただろう？」
「……先に言ってほしい……」
「まあまあ、後遺症は残らないから」
「……」
そういう問題ではない。いずれ治るからと言って、怪我をすることに何も感じない者はそうそういない。
「あとは朧月のハイパーセンサーを調整して、月蝕に反応しないようにすれば完成だ。ああ、心配しなくても、この対月蝕用の処理は僕らだからできるんだ。他のとこじゃ、そう簡単にはいかないよ」
「……」
そこは流石の如月重工、技術力では他の追随を許さない。
「今回はこの月蝕だけだね。……う～ん、やっぱつまらないなあ。井上君、他になにかないのかい？」
「……ない……」
今回頼んだ閃光弾は、敵に切り込む際により確実に仕留められるよう、隙を作るための手段として欲したものだ。
基本的に己には剣以外に取り柄がなく、あまり妙な物を寄越されて

も扱えない。
今のところ朧月に不満はないので、しばらくは追加装備を頼むことはないだろう。

「仕方ないなあ、それじゃ僕はもう戻るよ。ところで、学年別個人トーナメントは今月だったよね？その時こそ、朧月の勇姿を見せてくれたまえよ」
「……承知……」

学年別個人トーナメントとは、ＩＳ学園の全学生強制参加で行われる一大イベントである。
一週間かけて行われ、特に三年生にとってはＩＳ関連の企業、あるいは政府や軍に自分をアピールする最大の見せ場であり、かなり大規模なものになる。
正式ではないとは言え、如月重工のテストパイロットである己が結果を残さない訳にはいかない。

「じゃあ、トーナメントのときに、また。けどなにか要望があったらすぐに言ってくれたまえよ、うちの連中は、みんな朧月をいじりたくて仕方ないんだから。もちろん、僕もね」
「……」

うふふ、と笑いながら言う社長からは、何やら不気味な気配が漂っている。
今回の月蝕は良い意味で予想を裏切ってくれたが、如月重工に頼っているといずれとんでもない代物を掴ませられる気がする。
……要求する品は、よく考える必要があるな。

―――――――――

「おかえり～、いのっち」
「……」

自室に戻ると、本音がベッドの上で寝転んでいた。服装はすでにサイズの合ってないパジャマである。というかコイツは制服以外はいつもパジャマだ。

「それじゃあ、ご飯行こっか～」
「……」

むくりと起き上がって言う本音に頷き、手洗い、うがいをしてから部屋を出る。

……と、目の前に、一夏と鈴がいた。

「お～、おりむーだ～」
「うわ！ええと……のほほんさん？」

一夏に子犬のように引っ付く本音、突然のことに少し困惑する一夏。

「ちょっと本音！離れなさいよ！」
「わ～、りんりんもいる～」
「だからその呼び方やめなさいっての！」

すぐさま鈴が引き剥がしにかかるが、マイペースの究極形である本音を相手に苦戦している。

ちなみに鈴は小学校の時、その名前と中国人ということで男子にからかわれたことがあった。
確か、『リンリンってパンダの名前だよなー。笹食えよ、笹』だったか。
……それを聞いた一夏が激昂し、四人を相手に大立ち回りを始めようとしたのを飛び膝蹴り（シャイニングウィザードと言うらしい）で鎮めたのはいい思い出である。

「二人も飯か？ちょうどいいや、一緒に行こうぜ」

そしてコイツも大概マイペースである。

「な！？ちょっと、一夏！」
「わ～い、おりむーとご飯～」
「……馬鹿が……」

己の呟きが聞こえた様子はない。どちらにしても本音が既にその気になっているので、結局は一緒に飯を食うことになるだろう。

鈴に近付き、他に聞こえないように耳元で言う。

「……すまん……」
「はあ……別にいいわよ、シンのせいじゃないし。本音のことも嫌いじゃないしね」
「……」

諦めたように溜め息をつき、一緒に食事をすることを了承してくれた。
……本当にすまん。今度、甘味でも奢ろう。

―――――――――

「ねえねえ聞いた？」
「聞いた聞いた！」
「え、何の話？」
「だから、あの織斑君の話よ」
「いい話？悪い話？」
「最上級にいい話」
「聞く！」
「まあまあ落ち着きなさい。いい？絶対これは女子にしか教えちゃダメよ？女の子だけの話なんだから。実はね、今月の学年別トーナメントで――」

いつも賑わっている食堂が、いつにも増して騒がしい。
特に奥のテーブルには数十人が集まり、なにやら話込んでいる。
……どうも、一夏関連の話題のようだが。

「えええっ！？そ、それ、マジで！？」
「マジで！」
「うそー！きゃー、どうしよう！」

まあどうせろくでもないことだろう。一夏にはよくあることだ。

さて、今日の己のメニューはいつも通り日替わりランチである。
相変わらずかなりの味だが、個人的には宗太の料理のほうが好みだ。
慣れ親しんだ味だからというのもあるかもしれんが。

「一夏、なんか年寄り臭いこと考えてんでしょ」

突然の鈴の言葉に一夏を見ると、目を細めていた。
確かに一夏がこういった表情をする時は妙に年寄りじみたことを考えていることが多い。
それをからかうのはいいが――

「……鈴……」
「なに？」
「……行儀が悪い……」

箸で人を指すのはいただけない。
食事とは命を食べることであり、その命に感謝を込めて、食事中の礼儀は守らなくてはならない。
己も「いただきます」と「ごちそうさま」は必ず言っている。

「う……き、気を付けます」
「鈴ってさあ、シンの言うことはわりかし素直に聞くよな」
「う、うっさいわね。そんなのあたしの勝手でしょ」
「そりゃまあ、そうだけど」

言って、ずずっと味噌汁をすする一夏。
……また目を細めているぞ。

「いのっちはみんなのお姉ちゃんみたいだね～」
「え？ ああ、まあシンは――」

一旦言葉を切り、一夏がちらりと己を見る。

――大丈夫だ。本音には話してある。

「孤児院じゃ今一番年上だからな。弟と妹が十人以上いりゃ、そりゃあお姉さんになるさ」

「ほほ～、いのっちに妹さんがいるのは知ってたけど、そんなにいっぱいいたんだ～」

「あれ、隆さんは？もう卒業したの？」

「ああ、去年の四月に就職したよ。やっと恩返しが出来るって、張り切ってたぜ」

隆さんは以前の年長者であり、唐沢さんを心から尊敬し、子供たちの世話を一生懸命にこなしていた人だ。

彼が就職し、孤児院を卒業する時には盛大な見送りパーティーが催され、一夏と千冬さんも招かれた。

ちなみに藍越学園出身である。

「ふむふむ、色々なことがあるんだね～」

「……」

うんうん頷いている本音だが、コイツは自分から己のことをあまり聞こうとはしない。

己に興味が無いのではなく、己の身の上に気を使っているのだろう。

……本当に、聡い娘だ。

「そういえば今日、弾の家に行ったんだけどさ」

「へー、そういえばアイツとはまだ会ってなかったわね。元気だった？」

「うるさいくらい元気だったよ。でさ、蘭が来年、ＩＳ学園を受けるらしいんだよ」

「……へー」

鈴の表情が曇る。

中学時代に良く四人でつるんでいた五反田弾の妹、五反田蘭は、鈴とは一夏を取り合う仲であった。

……一夏のことさえなければ、普通に仲がいいのだがな。

「で、入学したときは俺が面倒見ることになったんだよ」

「ふーん……って、なんでよ!?」

バンッとテーブルを叩いて立ち上がる鈴。

「……行儀が悪い……」

「う……」

着席。

「あんたねえ、いい加減女の子と軽く約束するのやめなさいよ!責任も取れないのに安請け合いして、バカじゃないの!?つうかバカよ!バカ!」

「お～、りんりんすごい迫力～」

……本音はもしかしたらかなりの大物なのかもしれない。

「いや、その、だな?鈴、すまん」

「謝るくらいなら約束を――」

「あ」

「あ」

「あってなによ、あって――あ」

揃って間抜け面をしている二人の視線を追うと、そこには同じように間抜け面をしている箒の姿が。

「……」
「……」

なにやら気まずい雰囲気である。

「よ、よお、箒」
「な、なんだ一夏か」
「……」
「……」

先月箒が部屋を移動して以来、この二人はこんな感じだ。
一夏は色々話しかけていたが、箒の方がそれを避けている。

「何、アンタたち何かあったわけ？」
「「いや！別になにも！」」

それは「何かあった」と自白しているようなものだ。

「なにその「明らかに何かありました」って反応。わざとやってんの？」
「そんなわけないだろ……」

一夏の言い訳じみた言葉を聞いた箒は途端に不機嫌そうになって、早足に去ってしまった。

「あー……」

一夏もこの状況をどうにかしたいようだが、どうすればいいかわからない、といったところか。

――ふむ。

「……みんな食い終わったし、そろそろ戻るか」
「戻るか～」
「……ごちそうさまでした……」
「鈴、今日は誘ってくれてありがとな」
「……たまにはアンタから誘いなさいよ、まったく……」
「うん？」
「なんでもない。じゃあね」

そうしてそれぞれの部屋に戻って行く。

しかし、その前に。

「……本音……」
「んん～？」
「……先に戻れ……」
「……りょうか～い。も～う、いのっちは優しいな～」
「……」

まったく――本当に、聡い娘だ。

――――――――――

皆と別れた後、己は食堂から出てきた箒を人気のない所に連れ出した。

「話とはなんだ？」

「……一夏と、何があった……？」

ただ部屋が別々になっただけでは、流石にあそこまでよそよそしい態度はとるまい。鈴の言う通り、二人の間になにかあったと考えるのが妥当だ。

「えーっと……その、だな……」

「……」

顔を真っ赤にしてごにょごにょと言葉を濁す箒。

そして、意を決したように、

「い、一夏に……こ、こ、こ、交際を、申し込んだ」

「……」

――――ほう。ほうほうほう。それは、それはそれは。

「……おめでとう……」

思わず箒の頭を撫でる。箒にしては、随分頑張ったものだ。

「いや、へ、返事はまだなんだ。学年別トーナメントに優勝したら、という約束で……」

「……」

顔を真っ赤にし、視線をあちらこちらにさ迷わせ、両手の人差し指をつんつんとつつき合わせる姿は、その整った容姿と合わせれば世の男たちには効果覿面だろう。

「……手伝わせてもらう……」

「え？」

「……訓練……」

そう、学年別トーナメントは過酷だ。

一年には己を除いても専用機持ちが四人いる。箒は訓練機で彼女らと戦わなければならないのだ。

――ならば、相応の実力を身に付けねば。

「……申請は……？」

「もう済ませてある。今から行っても間に合わないだろうから、事前にな」

ふむ、抜かりはないということか。

学年別トーナメント直前では皆訓練機の使用申請を出すので、通るかどうかは運次第になってしまうからな。

「……早速、始めよう……」

「今日から付き合ってくれるのか？」

「……無論……」

学年別トーナメントまでもうあまり日がない。

今日はＩＳの訓練はしない予定だったが、こうなったら一日たりとも無駄には出来ん。

「……ありがとう、真改」
「……無用……」

大事な幼なじみの、六年越しの想いがついに成就するかもしれないのだ。
その大願の前には己の事情など些細なものである。

「では行くか。よろしく頼む、真改！」
「……」

一度部屋に戻り、準備をしてからアリーナへ向かう。

この時己は、箒の才能を引き出すにはどうすればいいかということばかり考えており、失念していた。
そして後に後悔する。

――箒がどんな言葉で一夏に交際を申し込んだのか、聞いていなかったことを。

第１４話　平穏（後書き）

次回はあの二人の登場です。
さてどうするか、悩みどころですね。

前回の外伝ですが、反響がすごくて、「面白かった」といった内容の感想もたくさんいただきました。
ありがとうございます。
今後の予定としましては、一巻分終わるごとに外伝を書くつもりです。
しかし外伝の主人公はヴァオー以外のキャラにする、というか毎回変える予定なので、予めご了承ください。

それでは、読んでくださってありがとうございました。

第１５話　不穏（前書き）

みんなのアイドルが登場です。
だんだんキャラクターが増えてきて、頭の中がこんがらがってしまいます。

第１５話　不穏

学年別個人トーナメントを目前に控えたある日。
この日は朝から大事件が起きた。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも二名です！」
「え……」
「「えええええっ！？」」

これには己も少なからず驚いた。
事前に全く噂になっていなかったというのもあるが、転校生が同時に二人、しかも同じ組になど、通常ならば考えられない。
しかし冷静になってみれば、通常とは言えない要素がふたつある。

ひとつは、ここがただの高校ではなく、世界各国の思惑が入り乱れるＩＳ学園であるということ。

そしてもうひとつは、言わずもがな、己の前の席に座る幼なじみ、世界で唯一人ＩＳを動かせる男、織斑一夏の存在である。

一夏の利用価値は計り知れない。どの国も、コイツはなんとしても手に入れたいことだろう。

――まだ幼ささえ残る少女を使って、篭絡せしめんとするほどには。

（……反吐が出る……）

というわけで、盛り上がるクラスメイトたちを余所に己は朝から機嫌が悪かった。

「それじゃあ、入って下さい」
「失礼します」
「……」

教室の扉を開けて、転校生が入ってくる。
一人は白に近い銀髪を腰まで伸ばし、左目に眼帯をした小柄な少女。
そして、もう一人は――

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

にこやかな顔で礼儀正しく挨拶し一礼する転校生、シャルル・デュノア。
その姿を見て、クラスメイトの誰かが呟いた。

「お、男……？」
「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて、本国より転入を――」

思わず漏れたのだろう呟きにも丁寧に答えようとしたシャルルだが、それは最後まで言えなかった。
何故ならばここは、ＩＳ学園の一年一組だからだ。

「きゃ……」
「はい？」
「きゃあああああーーーっ！！」
「……」

耳が痛い。
衝撃波じみた黄色い叫び声は、己の鼓膜に大きなダメージを与えた。

「男子！二人目の男子！」
「しかもうちのクラス！」
「美形！守ってあげたくなる系の！」
「地球に生まれて良かった～～～！！」

すかさず追撃が入る。二段構えとは侮れんな。耳だけでなく頭痛までしてきた。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

かなり面倒くさそうにぼやく千冬さん。
彼女は昔からこういったノリが嫌いなのである。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから～！」

必死な山田先生の様子にどうにか静まるクラスメイト。
そう、転校生はもう一人いる。さきほどから身じろぎもせずに口を閉ざし続けている、銀髪の少女である。

「……挨拶をしろ、ラウラ」
「はい、教官」

態度を急変させ、敬礼でもって返事をする、ラウラと呼ばれた少女。
その洗練された敬礼と千冬さんを「教官」と呼んだことから、恐らくラウラはドイツ軍人だろう。
千冬さんは以前、一年ほどドイツで軍隊教官をしていた時期がある

からだ。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

敬礼こそ止めたものの、姿勢は相変わらず、見事なまでの「気を付け」である。

それを見た千冬さんがまた面倒くさそうな顔をしたことに気づいた様子もなく、ラウラはクラスメイトたちに向き直った。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「……」

……なんだろう、既視感というやつか？前にも一度似たようなことがあった気がする。

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

いや、気のせいではない。確かにこれと同じような場面を、己は経験している。しかしいつ、どこで？

――ああ、己の自己紹介の時か。山田先生の泣きそうな顔を見て思い出した。

そんな事を考えていると、突然不穏な気配を感じた。

それの元を探すと、一夏を睨み付けるラウラの姿が。

「貴様が――」

つかつかと歩いてくるラウラ。
一夏の前で立ち止まると同時、右手を振り上げ――――
――――そこに、殺気を感じた。
「……ッ！」
ガタンッ！
咄嗟に、前に座る一夏の襟を掴み、後ろに引く。
勢いが付き過ぎて、一夏が己の机に頭をぶつけた。
「いってえ！？」
「……貴様」
己の行動によって平手打ちを空振りしたラウラが、怒りに目を細めてこちらを睨む。
「おいシン、いきなり何すんだよ！」
「……」
一夏が何かを言っているが、今は耳に入らない。
睨んで来るラウラを、こちらも睨み返す。
この娘は、一夏を殴ろうとした時、確かに殺気を放っていた。
徒手空拳ではあったが、そんなモノは己を安心させる要素足り得ない。
ＩＳ学園に転入できる者が国家代表候補生にほぼ限られている以上、

ラウラも代表候補生であり、専用機持ちであると考えられる。
つまりは平手が当たる直前にＩＳを部分展開すれば、一夏の首から上が吹き飛ぶという訳だ。
当然、己が一夏とラウラの間に割って入ったところで盾にもなるまい。
だから、一夏を後ろに引くことで回避させたのである。

「なんのつもりだ？」
「……」
「お前こそ、なんのつもりだよ」

己の様子に何かを感じ取ったのか、一夏もラウラを睨み付けている。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」
「――――てめえ」

その言葉に一夏も殺気立つが、ラウラはひとつ鼻を鳴らすと殺気を霧散させ、教室の前へと戻って行った。

「……」
「あー……ゴホンゴホン！ではＨＲを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でＩＳの模擬戦闘を行う。解散！」

ぱんぱんと手を叩いて千冬さんが行動を促す。
一夏は怒り心頭といった様子だが、しかし着替えとなればのんびりしてはいられない。
なにせここはＩＳ学園、一夏が着替えを行うような空間など限られており、それは少なくとも教室ではない。
というか教室は一夏の着替え場所としては最悪の選択である。なに

せクラスメイト――つまりは女子と一緒に着替えを行うことになるからだ。

「おい織斑。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」

千冬さんの言葉を受け、シャルルが一夏を見る。

「君が織斑君？初めまして、僕は――」

「ああ、いいから。とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるから」

そう言ってシャルルの手を取り走り出す一夏。

……しばらくすると廊下から黄色い声が聞こえてきたが、まあいつものことである。

そんなことより――また、厄介なことになりそうだ。

――――――――――

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はい！」

二組と合同ということで、今日は返事に気合いが入っている。

まあ二組の連中は一夏と中々接点を持てないからな。今日からはシャルルもいることだし。

「真改さん」

「……」

ふと、隣に立つセシリアが声を掛けてくる。
視線だけ向け、続きを促した。

「さっきのことですが……あの人は、一夏さんと何かあったのですか？」

「……」

知っているわけではないが、ラウラの言動から大体の想像はつく。
しかしそれは己が語ることではない。
沈黙する己からそれを感じたのだろう、セシリアはなにかを決意した表情で言った。

「必要でしたら言ってくださいな。このセシリア・オルコット、必ずや真改さんのお役に立って見せますわ」

「……すまん……」

必要なら、頼らせてもらおう。
出来ればそんな事態にはなって欲しくはないが。

「今日は戦闘を実演してもらおう。――――凰！オルコット！」

「はい！」

「は、はい！」

鈴の返事が若干遅れたな。
……一夏の真後ろにいたのか。何をしていた？

「専用機持ちならすぐに始められるだろう。前に出ろ」

「「はい！」」

二人、前に出る。
鈴はともかく、セシリアは妙に気合いが入っていた。

「それで、相手はどちらに？わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが」
「言うじゃない。返り討ちにしてあげるわよ」
「慌てるな馬鹿ども。対戦相手は――」

キィィィン……。

なにやら空気を裂く音がする。
音の方向に目を向けると、一夏に真っ直ぐ向かってくる影が。

「あああああーっ！ど、どいてください～っ！」
「うおおぉぉっ！？」
ドカーン！

際どいタイミングで白式を展開した一夏に、飛んで来た影――山田先生が操るラファール・リヴァイヴが激突した。
勢いのままにゴロゴロと転がって行く二人。

「ふう……。白式の展開がギリギリ間に合ったな。しかし一体何事――う？」
「あ、あのう、織斑くん……ひゃんっ！」

妙に艶のある悲鳴。
体を起こそうとした一夏が、過失だろうが、山田先生の胸を鷲掴んだことによるものである。

ブワリと殺気が放たれた。発信源は言うまでもない。

「そ、その、ですね。困ります……こんな場所で……。いえ！場所だけじゃなくてですね！私と織斑くんは仮にも教師と生徒でですね！……ああでも、このまま行けば織斑先生が義姉さんってことで、それはとても魅力的な――」

……あなたはなにを言っているんだ。

そして一夏、お前はなにをしているんだ。早く離れろ。死ぬぞ。

「――ハッ！？」

いよいよ臨界点を超えた殺気が現実に具現したかのように、セシリアが展開したスターライトｍｋ？からレーザーが放たれた。

日頃の訓練の賜物か、どうにか避ける一夏。

「ホホホホホ……残念です。外してしまいましたわ……」

そのレーザーはライフルからでなく目から出たのではないかというくらいに凄まじい目つきで笑うセシリア。

落ち着け、皆怯えているぞ。

ガシーン！

続いて鈴。

二振りの巨大な青竜刀、双天牙月を連結し、振りかぶる。

この武器は双剣としても両刃としても使える便利な代物であり、今の両刃状態だと投擲武器としても使えるのである。

「うおおおっ！？」

首目掛けて飛んできた双天牙月をのけぞって避ける。
しかし体勢を崩したのは拙いな、双天牙月は投げればブーメランのように返ってくるぞ。
案の定、一夏は避けきれないと察したのか、絶望的な顔をしている。

「はっ！」
ドンッドンッ！

突然の鋭い掛け声と二発の銃声。その発信源は山田先生と、彼女が展開した五十一口径アサルトライフル、レッドバレット。
倒れたまま上体だけを起こした不安定な姿勢で放たれた弾丸は、しかし正確に双天牙月の両端に命中し、その軌道を変えた。

今の山田先生の雰囲気は普段のそれではなく、入試の際に己と戦った時のものだった。
しかし己以外はそんな山田先生の様子を初めて見るのか、皆唖然としている。

「山田先生はああ見えて元代表候補生だからな。今くらいの射撃は造作もない」
「む、昔のことですよ。それに候補生止まりでしたし……」

それはそうだろう。当時の日本代表は千冬さんだったのだから。

「さて小娘ども、いつまで呆けている。さっさと始めるぞ」

その言葉にセシリアと鈴が困惑する。

「え？あの、二対一で……？」
「いや、さすがにそれは……」
「安心しろ。今のお前たちならすぐに負ける」
……けしかけるのが上手いな、二人のプライドを見事に逆撫でした。
先程までの困惑した様子はどこへやら、今はその瞳に闘志をたぎらせている。

「では、はじめ！」
「手加減はしませんわ！」
「さっきのは本気じゃなかったしね！」
「い、行きます！」

そして始まる戦闘。
しかし千冬さんはそれを見ようともしていない。

「さて、今の間に……そうだな、ちょうどいい。デュノア、山田先生が使っているＩＳの解説をしてみせろ」
「あっ、はい」

空中での戦闘を見ながら説明を始めるシャルル。
だがその内容は既に知っているものだったので、己は戦闘の方に集中することにした。

「ちょっと！さっきから全然当たってないわよ！」
「鈴さんこそ！わたくしの射線に入らないでくださる！？」
「なによ、あたしが悪いっての！？」
「そう言ったのがわかりませんの！？」
「……」

ギャーギャー言い合いながら戦う二人は全く連携が取れていない。
むしろ互いに足を引っ張り合っている。
……うむ、見る価値はないな。精々が反面教師になるくらいか。

「「きゃあっ！」」

ついには衝突する。
すかさず山田先生がグレネードを投擲、二人をまとめて撃墜した。

「……無様……」

思わず呟いた己を一体誰が責められようか。
否、誰も責めはしないだろう、もし責めるとすれば当の本人たちくらいだろうが、セシリアと鈴は負けた責任をなすりつけ合うことに忙しく、聞こえていない。

「さて、これで諸君にもＩＳ学園教員の実力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

今日ここにいる者たちは山田先生の実力だけでなく、有能な敵より無能な味方の方が厄介だということも理解したことだろう。

「専用機持ちは織斑、井上、オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、凰だな。では八人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？では別れろ」

千冬さんが言い終わるや否や、一夏とシャルルに人が殺到した。
……と思ったら何人かこっちに来た。

「い、井上さん！よろしくお願いします！」

「……」

クラスメイトである己に敬語で話し掛けるこの娘は、己たちの朝の鍛錬に付いてくる、〔井上真改ファンクラブ〕なる組織の会員である。

……いつの間にそんなものが出来たのか、己は知らない。

このままでは大変気疲れする実習になってしまうと思ったが、千冬さんから救いの声が。どうやら女子が一夏とシャルルに集中し過ぎてグループ分けが進まないようだ。

「この馬鹿どもが……。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はＩＳを背負ってグラウンド百周させるからな！」

瞬間、ざざざ、と動き始める女子たち。

グループ分けに掛かった時間、二分。

そして己は絶望した。己のグループになった者たちの半数以上が、〔井上真改ファンクラブ〕の会員だったからだ。

「お、お願いします！」

「やったあ！神様ありがとう！」

「……」

別に彼女たちが嫌いなわけではない。ただそのテンションについて行けないだけだ。

「ええと、いいですかーみなさん。これから訓練機を一斑一体取りに来てください。〔打鉄〕と〔リヴァイヴ〕が三機ずつありますので、好きな方を班で決めてくださいね。あ、早い者勝ちですよー」

己の班は打鉄に決まった。己にはリヴァイヴより打鉄の方が似合うらしい。
……いや、己が乗る訳ではないのだが。

「じゃあお願いしまーす！」
「……」

とりあえず一人目はファンクラブの会員ではなかったので、普通に実習が進んだ。
打鉄を起動、装着し、歩行する。

「よっ、ほっ、と。……むむ、案外難しい……」
「……慎重に……」

ＩＳは通常浮いているものなので足は少々バランスが悪く、歩くというのはそれなりに難しい。
特にこの機体は操縦者に最適化されていないので尚更である。
だからこそ練習になるとも言えるが。

「……ここまで……」
「ふう、ありがとう、井上さん」

一人目が終わり、いよいよファンクラブ会員の番になる。
とそこで、一人目と二人目の間でアイコンタクトが交わされた。
なんだと思う暇もなく、一人目がＩＳから降りる――――ＩＳを立たせたまま。

「ああー、ついうっかりー」
「……」

なんとわざとらしい。なんだ、何が狙いだ。

「あー、コックピットが高い位置で固定されてしまった状態ですね。それじゃあ仕方ないので井上さんが乗せてあげてください」

「……」

「ふっ、計画通り」

聞こえているぞ。そうか、それが狙いか。

どうやら彼女らはなにかしらの取引をしていたようだった。

「じゃあ、あの、その、井上さん、よろしくお願いします」

「……はあ……」

相変わらずのチームワークを発揮する少女たちに溜め息が漏れる。

仕方ない、実習は進めなければならないからな。

「……」

朧月を起動し、ファンクラブ会員第一号――かつて朝の鍛錬で己に弁当を作ってきた少女、菊池日向子の前に跪く。

「……掴まれ……」

「は、はい！お願いします！」

日向子の腕がしっかりと己の首に回されたことを確認してから、日向子の膝の裏に右腕を通し、抱え上げる。

……所謂「お姫様抱っこ」というやつである。

「わわ！……わぁ……」

「……」

顔を真っ赤にした日向子を極力気にしないように、しかし決して落とさないように注意しながら、打鉄まで運ぶ。
コックピットに乗りやすいよう、一メートルほどの高さまで浮かび上がった。

「……気を付けろ……」
「は、はい！」

どうにか装着は出来たが、フラついている。
危なっかしいので、右手を差し出した。

「……支える……」
「あ、ありがとうございます！」

感動したような面持ちで己の手を取る日向子。転倒しないように、ゆっくりと導く。

「……慎重に……」
「うん、しょ……よい、しょ……」

……自転車に初めて乗った子供の練習に付き合っているような気持ちになってきた。

どうにか歩行を終え、降りる段階になった時、日向子が三人目とアイコンタクト。
振り向けば餌を待つ雛鳥のような顔でこちらを見ているファンクラブ会員たちの姿。

――結局、それ以降の全員を抱えてＩＳに乗せることになった。

――――――――――

実習が終わり、昼休み。

一夏が食事に誘って来たが断った。今日は箒が朝早くから弁当を作っていることを知っていたからだ。

（……頑張れよ……）

箒には箒の戦いがある。相手が一夏では苦戦は必至だろうが、健闘を祈っているぞ。

というわけで己は本音と学食へ向かう。今日は噂の転校生――――ＩＳ学園創設以来二人目となる男子生徒、シャルル・デュノアを一目見ようと、いつも以上に混雑している。

「お～、今日は混んでるね～」

「……」

ふむ、これほどの混雑になると午後の授業にはギリギリになるが、逆に好都合だ。普段弁当を持って来ている者や購買で買って済ます者も学食に来ているということだからな、今日は屋上には殆ど、上手くすれば誰もいないだろう。

一夏と箒の二人きりの昼食。図らずもその状況を作り出してくれたシャルルには感謝せねば。

大分待って食券を買い、日替わり定食を受け取って学食に入る。
さて、どこかに空いている席は――

「デュノアくんいないね」
「ちぇー、せっかく学食来たのに」
「どこ行ったんだろ？」
「……」

――なに？シャルルがいない？どういうことだ？

学食を見回す。確かにシャルルがいない。一体どこに――待て、シャルルだけではない、良く見ればセシリアと鈴もいない。

「……」

普段仲の悪い二人が、揃って同じ行動を取る。こういう時は大抵――というかほぼ間違いなく一夏絡みだ。

「……」

さて、考えてみよう。
箒は一夏のために早起きして弁当を作り、一緒に食べようと屋上に連れ出した。
これは箒にとって、ちょっとしたデートの誘いと言って過言ではあるまい。

「……」

だが一夏はそうと考えるだろうか？

否、一夏に限ってそれはない。有り得ない。

「……」

そしてシャルルもいないという。

転校してきたばかりの人間、しかも注目度の極めて高い男子生徒が、他に気付かれずに行動するには協力者が必要だろう。

ではその協力者とは誰か？――――言うまでもない。

「……」

右も左もわからないシャルルを気遣って昼食に誘ったであろう一夏。

学食にいないセシリアと鈴。

ここまで来れば、あとは己の頭でも答えがわかる。

……いい加減にしろよ、一夏。

というわけで、朝から続き午後も己は不機嫌だった。

――――――――――――

放課後。

己は急用が出来たと言って、一夏たちとの訓練への参加を断ってきた。

昨日も訓練を休んだばかりだからか、シャルルの引っ越しの手伝いを後回しにしてまで訓練に駆け付けた一夏が不満そうにしていたが、

しかし本当に急用が出来たのだ。

――緊急の、用事が。

「……」

１０２５号室。

先週までは一夏と箒の部屋であり、今日からはシャルルと一夏の部屋となったそこの前に、己はいた。

周りに人気がないことを確認し、扉をノックする。

「はい」

少し間を置いて、ジャージを着たシャルルが扉を開けて出て来た。

引っ越してきたばかりで荷物の整理をしていたのだろう、量はかなり少ないが、部屋の中には開いたままのバッグがある。

「えーと……井上さん、だよね？一夏から聞いたよ、幼なじみだって」

「……」

荷物整理をしている所に突然訪れ、それでいて口を閉ざしたままでいる己に対し、シャルルはにこやかに話し続ける。

「なにか用かな？あ、一夏ならいないよ。訓練に行くって」

「……否……」

その一夏との訓練を断ってここに来たのだ。ならば己が用があるのは、一人しかいない。

「じゃあ、僕に用かな？なら入って。まだおもてなしはできないけど」
「……」
柔らかく笑って部屋の中に案内するシャルル。
己も続いて部屋に入り、扉を閉め――鍵を、掛けた。
「――え？」
ガチャリという音に、シャルルが振り向く。
己は素早くシャルルに近付き襟を掴むと、大外刈りをかけた。
「うわっ……！」
倒れたシャルルに馬乗りになる。
突然のことに混乱しているシャルルのジャージのジッパーを下ろし――その下に着けられていたコルセットを見て、己の考えが正しいことを確信した。
「……女、か……」
「な、なんで――」
シャルルの疑問も当然ではある。
なにせ転校してきてまだ一日も経っていないのだ。致命的な失敗があったならともかく、上手く振る舞っていたうえ、殆ど接していなかった己にバレるとは考えられないだろう。
「なんで、分かったの……？」
「……一目……」

己は決して頭は良くない。
だが長い間、法律が通用どころか存在すらしないような、企業が支配する世界の中で、傭兵として生きて来た。
自然、権謀術数には鼻が利くようになり、その己が相手にしてきた間者たちに比べれば、シャルルの男装など粗末なものだ。

「……目的は……」
「……聞いて、どうするの？」

時間と共に落ち着いたシャルルが、見下ろす己に問う。
その眼は敵意よりも諦観の色が濃いが、油断はしない。
いくら鼻が利いても決して賢くはない己は、気を抜けば容易く欺かれるのだから。

「……次第によっては……」

一夏を守る。
戦わねば生きられず、戦い続けた果てに全てを失った己（リンクス）たちと、あいつは違うのだから。
箒も、鈴も、セシリアも、本音も守る。
力こそが神であり、奪わねば何も手に入らないあの世界と、ここは違うのだから。
人の欲望がどれほど醜く、そして恐ろしいものであるか、己は良く知っている。
だから、己の友人を欲望を満たすための道具と見ているようならば、許しはしない。

「……学園に、報告する……」

無論、今はまだ、ただの脅しのつもりだが。
シャルルが自らの意思でやったことなのか、止むに止まれぬ事情があってのことなのか、それすらもわからないからな。
それも含めて、「次第によっては」だ。

「……殺す、くらいは言いそうな雰囲気だったのに」
「……」

それは最終手段だ。
ここで殺人など犯せば、瞬く間に捕まるのは目に見えているからな。

「……わかった、話すよ。バレちゃったら、仕方ない」
「……」

諦めたように溜め息をつき、話しだすシャルル。

「けどその前に降りてくれる？このままだと――」

ガチャリ。

鍵の開く音が聞こえ、すぐに誰かが入って来た。
否、誰かなどと言う必要はない。鍵を外から開けた以上、それはこの部屋に住む者であり、その二人のうち一人は今己の下にいるのだから、残りはもう一人の住人しかいない。
つまり入って来たのは一夏だった。

「シャルル？なんで鍵かけ……て……」
「……」

「……」

「「「……」」」

さて、考えてみよう。

一夏はシャルルを男だと思っている。

そして己はシャルルに馬乗りになり、ジャージのジッパーを下ろしている。

一夏からは、ジャージの下のコルセットまでは見えまい。というか見えてもそれを気にする余裕はあるまい。

この状況を見て、一夏はどう考えるか。

――いや、どう考えても己がシャルルを襲っているようにしか見えないだろう。

なんたることか。

こういうのは一夏の役割のはずだ、なぜ己が。

おい一夏、いつまで呆けているつもりだ、さっさと扉を閉めろ、誰かに見られたらどうする。

シャルル、なにを黙っている、なにか言え、なんでもいいから。己は話すのは苦手なんだ、別に混乱のあまり言葉が出ないわけではない。

――どうしてこうなった。

無言のまま胸中に疑問を浮かべつつ、己はこれからすることになるだろう釈明に想いを馳せた。

――この状況、いかにすれば切り抜けられるのやら。

第１５話　不穏（後書き）

サブタイトルほど不穏じゃなかったですね……。
そして一夏の十八番を奪う真改。
次回、真改さんはこの窮地からどう（言い）逃れるのか！？

第１６話　少女の事情／少女の想い（前書き）

シャルの身の上話。
結構ヘヴィな話ですが、あんな過去があるのにあの性格って、かなり凄いことなんじゃないかと思います。

第16話　少女の事情／少女の想い

「あれ、シン。今日は訓練しないのか？」
「……急用……」

そう言ってすたすたと去って行くシン。
なんだよ、せっかくシャルルの引っ越しの手伝いを断ってまで来たのに。

「箒、シンの用って知ってるか？」
「いや、私はなにも聞いてないな」
「鈴は？」
「あたしも知らないわよ。……ていうか、シンにだって用事くらいあるでしょ」
「まあ、それはそうなんだけど」
「確かに気になりますが、今は訓練に集中しましょう。……もうあんな無様は晒しませんわ」

さすがに午前のあれは応えたらしい。
まあ専用機持ち二人掛かりで訓練機に瞬殺されたら、そりゃ代表候補生としてのプライドが傷付くだろう。

「まったくよ。あたしまで巻き込まないでよね」
「……なにやらわたくしのせいで負けたかのような言い草ですわね？」
「その通りでしょうが」
「……ふ、ふふふ……どうやら鈴さんには、どちらが上か体に教えてさしあげる必要があるようですわね」
「じゃあお言葉に甘えて教えてもらおうかしら――――あたしの方が

強いって」

バチバチと火花を散らし始める二人。なんでこうも仲が悪いんだ？

「しばらく終わりそうもないな。……し、仕方ない。二人で訓練するぞ、一夏」

「え？あ、ああ、そうだな、アリーナを使える時間は限られてるしな」

セシリアと鈴は模擬戦を始めてしまったので、箒の提案に乗ることにした。

ん？箒の顔が少し赤いな。

風邪か？体調が悪いなら無理しない方がいいぞ？

「い、いや、体は大丈夫だ。なにも問題はない」

「そうか？じゃあ、始めるか」

「うむ。では、参る！」

「行くぜ！」

「「ちょおぉぉっと待ったあぁぁぁっ！！」」

俺と箒が打ち合いを始める寸前、さっきまで激戦を繰り広げていた二人が同時にすっ飛んで来た。

どうした、もう勝負が付いたのか？引き分けか？

「一夏っ！アンタなにやってんのよ！」

「え？いや、二人とも模擬戦始めたから、俺は箒とやろうと――――」

「箒さん！抜け駆けは許しませんわよ！」

「な、お前たちが勝手に戦い始めたんだろう！」

「「問答無用っ！！」」

「ええい、面倒だ！二人まとめて斬るっ！」

箒が参戦し、一人取り残される俺。
え？なに、この状況？

「一夏ぁっ！何を呆けているっ！手を貸せ！」
「えぇっ！？」
「何言ってんのよ！一夏、手伝いなさい！」
「抜け駆けは許さないと言いましたわ！一夏さん、わたくしとっ！」
「どうしろってんだよ！？」

事態は混迷を極めていて、解決の糸口すら掴めない。
なんでこうなるんだよ、まったく、ああ、こういう時――

「シンがいればなぁ……」

ギシリ。

急に動きを止める三人。
しかし戦いは終わったと言うのに、闘志だけはどんどん膨れ上がっている。

「……真改は私を応援してくれているというのに……」
「……バカ一夏、シンの気も知らずに……」
「……いくら真改さんでも、これだけは……」

な、なんだ？何を言ってるんだ？声が小さくてよく聞こえないぞ？

「おのれ、一夏あぁぁぁっ！！」
「ああもう、頭来た！」
「わたくしだってぇぇぇっ！」

「うおおぉぉっ！？な、なんだいきなり！？」
「「「うるさあぁぁぁぁいっ！！」」」
「ぎゃあぁぁぁぁ！？」

三人掛かりとか、ふざけんな！勝負どころか訓練にもならんわ！
しかしそんな思いは届かない。

結局、俺は数分と保たずに襤褸雑巾にされ、今日の訓練は終わった。

――――――――――

「うう、疲れた……」

実際に俺が訓練したのは普段の十分の一にも満たない時間だったと言うのに、体にのしかかる疲労は数倍である。
ちなみに俺をボコボコにした三人は、そのまま俺を放って帰ってしまった。

……友情って、何だろう？

「……ようやく着いた」

廊下が凄まじく長く感じたが、どうにか部屋に着いた。
今日はもうダメだ、シャワー浴びて飯食って、さっさと寝よう。

そう考えながらノブを回すが――

「あれ？鍵かかってる」

シャルルが部屋で荷物整理しているハズなんだが。

なんだ、飯にでも行ったか？いや、もしかしたら転入したことで先生から呼び出されたのかも。ＩＳ学園はやたら手続きが多いからなあ。

鍵を取り出して開け、再びノブを回す。すると扉の隙間から、かすかに声が聞こえて来た。

なんだ、シャルルいるじゃん。

「シャルル？なんで鍵かけ……て……」

――部屋に入ると、床に仰向けになっているルームメイトと、それに馬乗りになっている幼なじみの姿が。

「……」

「……」

「……」

「「「……」」」

……え？

なに？どうした？なにがあった？

部屋の扉を確認する。１０２５号室。うん、間違いない、俺の部屋だ。

シャルルがいるのは問題ない。ここはシャルルの部屋でもあるからな。

けどなんでシンがいるんだ？急用があるんじゃなかったのか？

――ハッ!?ま、まさか!?

「シンってそういう趣味だったのか……?」

「……否……」

シンにとっても驚きの事態だったのか、無表情のまま硬直していたが、俺が疑問の声をあげるとどうにか動き出した。

シンは溜め息をつき、首を振って立ち上がる。

……なんか呆れてないか?

「……なんだこれ?どういう状況だよ?何があったんだ?」

「……」

とりあえずこのままだと非常にまずいことになる気がしたので、部屋に入って扉を閉める。

するとシンは無言のまま、まだ床の上で固まっているシャルルのジャージ(なぜかファスナーが下ろされている)の襟を掴み、強引に引っ張って立ち上がらせた。

「きゃあ!」

「おいシン!なにす……きゃあ?」

なんか今女の子の悲鳴が聞こえたぞ。

誰だ?

シン……は、有り得ないな、うん。

けどあとは俺とシャルルしかここにいないし――

と、そこで。

大きく開いたシャルルのジャージの下に、胸を覆うようになにかが

着けられていることに気付いた。

「……なにそれ」
「え？……ええっと……」
「……」

するとシンは鋭い目をさらに鋭くしてシャルルを睨む。

「……話すと言った……」
「え？け、けど、一夏には――」
「……」
「う……わかった、話すよ……」

二人の間になにがあったのかはわからないが、とりあえずシャルルはシンの眼力に負けたようだった。

「あ、あのね、一夏」
「な、なんだ？」

意を決したように、けどどこかためらいがちに、もじもじしながらシャルルが話し出す。
……う、なんか可愛い。シャルルは中性的な顔だからな、男とわかっていても――

「実は僕……女、なんだ」
「へえ」
「……」
「……」
「……へえあ！？今なんつった！？」

あまりに予想外過ぎる言葉に反応が遅れ、しかも変な声が出た。
お、女？誰が？え？シャルルが？

「え？マジで？本当に？」
「うん……本当だよ」
「……」

混乱から立ち直れない。
だって突然すぎる。
今日転校してきたクラスメイトが世界で二人目の男のＩＳ操縦者で、ようやくできたＩＳ学園での同性の仲間で、けど本当は女の子で――

「……なんで、男のフリを？」

――そう、それだ。まずは、それを聞かないと。

「……実家の方から、そうしろって言われたんだ」
「実家……ていうと、デュノア社か？」
「そう。僕の父がそこの社長。その人から直接の命令なんだよ」
「……」

――命令。
その言葉が出た瞬間、シンの気配が鋭くなった。
顔は相変わらずの無表情だが、明らかに怒っている。

「命令って……親だろう？なんでそんな――」
「僕はね、一夏。愛人の子なんだよ」

――愛人の、子。

それが何を意味するのか、いくら俺でもわかる。

「二年前にお母さんが亡くなって、父に引き取られたんだ。」

お母さん。

父親を呼ぶ時とはまるで違う、愛情と、尊敬に満ちた声。

それを向ける相手が死んでしまった時、どれほどの悲しみがあったのだろう。

「それで色々検査したら、ＩＳ適応が高いことがわかって、非公式だけどデュノア社のテストパイロットをやることになったんだ」

この時点ですでにおかしい。

検査？母親を失ったばかりの、実の娘に？それで適性があったから、自分の会社のテストパイロットにしたって？

「父に会ったのは二回くらい。最初に引き取られた時と、一度だけ本邸に呼ばれた時。あ、普段は別邸で生活してるんだ」

二回？二年間で？仕事が忙しいからとかじゃなく、普段は違う家に住んでるからだって？

「それでその時、本妻の人に殴られちゃってさ。「泥棒猫の娘が！」ってね。びっくりしたよ。お母さんは僕の父親のことなにも教えてくれてなかったから、もうなにがなにやら」

あはは、と愛想笑いをするシャルル。

――やめてくれ。頼むから、そんな顔をしないでくれ。

「それから少し経って、デュノア社は経営危機に陥ったの」

「……第三世代型ＩＳの開発が、上手くいってないんだっけか」
「あれ、よく知ってるね？」
「……勉強、してるからな」

敵を知り、己を知れば、百戦危うからず。
知識は力なり、だ。

「けどそれがどうして男装に繋がるんだ？」
「簡単だよ。世界でただ一人のＩＳを動かせる男と接触するには、同じ男の方が都合がいいからさ」
「それは、つまり――」
「そう。一夏と、一夏の専用機のデータを盗んでくること。
――それが、あの人が僕に命令したことだよ」

つまりはこういうことか。
会社の経営が上手くいかないから、たまたまＩＳ適性が高かった愛人との子に犯罪行為をさせて、起死回生の一手にしよう、と。

――親である以前に、人として腐ってやがる。

「とまあ、こんなところかな。どうする？井上さん。学園に報告するの？」
「な――おいシン、どういうことだよ！？」
「……」

さっきから微動だにしないシンを問い質す。
学園に報告？なんでだよ、シャルルはなにも悪くないだろうが！

「井上さんは、一夏を心配してたんだよ。なにせ一夏には世界中が注目してるからね。男装してまでルームメイトになった僕が、良く

ないことを企んでるんじゃないかって」
「……」
肯定はしないが、否定もしない。シンはいつものように、ただ黙ってそこにいた。
「それにどっちにしたって、こんな無茶がバレるのは時間の問題だよ。まあそうなったら、フランス政府も黙ってないだろうね。デュノア社は潰れるか、良くて他企業の傘下に入るか。僕は……牢屋かな」
まだ十五歳の女の子が、そんな風に人生を諦めていることが、俺には我慢ならなかった。
だから、腹の底から湧き出てくる言葉を飲み込むつもりなんて、有りはしない。
「――ふざけるな」
「……え？」
「ふざけんじゃねぇ。何納得してるみたいな顔してるんだよ、シャルル」
「い、一夏……？」
俺は今、怒っている。
シャルルの父親に対してはもちろん、今はその父親に抗おうとしないシャルルにも、腹が立っていた。
「親に道具扱いされて、無茶なこと命令されて、挙げ句バレたから牢屋行きだ？
そんな馬鹿な話があってたまるか。納得なんか出来るかよ。出来るわけねぇだろうが」

「納得出来る出来ないじゃないよ。僕には選ぶ権利がない。――仕方がないよ」
「ふざけんなっ！！」
思わず声を荒げてしまう。
俺の怒りは、もはや完全に臨界点を超えていた。
「仕方がない？仕方がないだって？そんなわけあるか、お前はまだ、何もしてないだろうが！」
「な……」
「嫌だったんだろ？男のフリするのも、犯罪紛いのことするのも、父親に従うのも！なら抗えよ！抵抗しろよ！悪足掻きしろよ！なにもしないでただ言われるままにして、それで仕方がないなんて口にするなっ！！」
感情の爆発に任せて言葉を吐き出す。
俺の剣幕に気圧されて、シャルルが怯えていた。
けれど、止まらない。止まるつもりもない。
「だ、だって……僕には、どうすることも――」
「出来なかったって？それ、本当に何も出来なかったのかよ。やらなかっただけじゃないのか？」
震えながら言葉を紡ぐシャルルに、容赦なく辛辣な言葉を浴びせる。
「なにも出来ないのと、なにもしないのは違うだろ。力の有る無しとか、相手がどうとかは関係ない。やる前から諦めるのは、心が弱いからだ」
シャルルは俯いてしまった。

責められるのが怖いのか、それとも苦しいのか、俺と目を合わせようとしない。

――それじゃあ、ダメなんだよ。

「シャルルが言ってることは、全部言い訳だ。お前は、最初から最後まで、諦めてるだけじゃないか」

戦うのは怖い。相手が強大なら尚更だ。
それは俺だって変わらないし、きっと、シンもそうだろう。
傷付くのが嫌なら、逃げてしまうのも構わないのかも知れない。

「世の中には出来ることと出来ないことがあるなんて知ったようなことを言うヤツは、どいつもこいつも負け犬だ。そんな連中より、不可能だって周りから馬鹿にされながらも、最期まで信じて挑み続けて死んだ人のほうが、よっぽど格好いいぜ」

だけど、逃げてもなにも解決しない。
得られる平穏は仮初めで、自分の心には消えることのない後悔が残る。
お前はそんなものを背負い続けて、この先生きてくつもりかよ、シャルル。

「抗えよ、抵抗しろよ、悪足掻きしろよ。なにも変わらないかも知れない。けどこのまま行っても、最悪の結果しかないんだろ。だったら、自分の最期くらい自分で決めろ」

何も変わらないかも知れない。
けど、何かが変えられるかも知れない。
なら、どうせなら、何かやってみた方がいい。

勝てるとは、限らないけれど。
前を向かない者に、勝利などないのだから。

「……のさ……」

そして、シャルルの震えが変わった。
怯えから、怒りに。

「なにが分かるのさ」

俯いていた顔を上げ、キッと俺を睨みつける。

「一夏になにが分かるのさ!!なにも知らないクセに、好き勝手言わないでよ!!お母さんが死んじゃって、他に親戚もいなくて、顔も名前も知らない父親に引き取られて!!抗えとか簡単に言うけど、父は大会社の社長なんだよ!?僕みたいな小娘一人に、勝てる相手じゃないんだっ!!」

喉が張り裂けんばかりの大声で怒鳴るシャルル。
俺にはそれが、悲鳴に聞こえた。

「なにもしなかっただけだって?そうだよ、その通りだよ、僕はただ諦めただけだよっ!!
――僕は一夏みたいに、「強く」ないんだっ!!」

言い終えて、肩で息をするシャルル。
……やっと、本音を言ったな。

「……だったら、助けを呼べばいい」

「……え？」
「弱いから戦えないっていうなら、一人じゃなにも出来ないっていうなら、誰かに助けを求めればいい。これは受け売りだけどな、「言葉は人類最高の発明」なんだよ」
チラリと、それを俺に言った幼なじみを見る。
まったく、どの口でそんなことを言うんだか。
「言葉にすればなんでも伝わるわけじゃない。けど言葉にするだけで伝わることもいっぱいある。だからさ、自分じゃどうしようもないなら、「助けて」って言えばいいんだよ」
俺の言葉をポカンと聞いていたシャルルだが、またすぐに俯いてしまった。
「……けど、僕の言葉を聞いてくれる人なんて……」
「いるだろ。少なくとも、目の前に二人」
「え？」
「……」
またポカンとするシャルルに、ニヤリと笑って見せる。
できるだけ、頼もしく見えるように。
「俺は、シャルルの言葉を聞くよ。シンもな。そりゃあ、全部に応えられるわけじゃないけどさ」
「……はあ……」
「む、なんだよシン、溜め息なんかついて」
「……」
また黙った。お前がそんなだと、俺の言葉に説得力が出ないじゃな

いか。

「僕の言葉を……聞いて、くれるの……？」

不安げに俺に尋ねるシャルル。

一体どれほど拒絶されて来たのか、彼女は他人を頼ることを恐れるようになってしまったのだろう。

その心の傷の痛みは、俺なんかにはわからない。

「ああ、ちゃんと聞くよ。俺は頭悪いから、理解できないこともあるかもしれないけど」

「一夏……」

「だから、言ってみろよ、シャルル。お前はどうしたいんだ？諦めちまっていいのか？このまま終わっちまってもいいのか？」

だけど、一人で出来ないのなら、誰かが助けてやればいい。

誰かを頼ることも知らないで苦しんでいる人の、声なき叫びが聞こえたのなら、こちらから手を差し伸べればいい。

――言葉にしなくても伝わることも、確かにあるのだから。

「……嫌だ」

「……」

「……嫌だよ……」

「……」

「諦めたく、ないよ」

「……」

「まだやりたいこと、いっぱいあるよ。やってないこと、いっぱいあるよ。なのにこんな風に終わるだなんて、そんなの嫌だよっ……！！」

「……」
「……助けて」
「ああ」
「……助けてよ、一夏ぁ……！」
「任せろ。……絶対に、助けてやる」
「……うん……！」

ついに泣き出してしまったシャルルを、そっと抱きしめる。
女の子を抱きしめるのはかなり緊張するが、シンが子供たちを慰めるときよくやってたので真似してみた。

「良く言えたな。……誰かに助けを求めるのだって、立派な抵抗だと思うぜ」
「……ありがとう、一夏」

そうして俺は、シャルルが泣き止むまで、彼女を抱きしめていた。

――――――――――

「けど、実際どうするの？」
「それなんだけどな、実は明確にどうすればいいかわかってるわけじゃないんだ」
「うん、まあ、それはそうだろうね」
「……」

なにやら呆れたような顔をするシャルル。失敬な、別になにも考え

てなかったわけじゃないぞ。

「けど、ここにいればしばらくは大丈夫なはずだ」

「え？」

「特記事項第二一、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする」

「……つまり、卒業するまでは、僕のことは学園が守ってくれるってこと？」

「そーいうこと。……啖呵切っといて他人任せってのも、情けない話だけどな」

「そんなことないよ。自分じゃどうしようもないなら誰かに助けを求めればいい、それだって立派な抵抗だって、一夏が言ってくれたんじゃないか」

柔らかく笑いながら言うシャルル。

……なんか、あれだな、男の割に妙に可愛いと思ってたけど、女の子ってわかるとさらに可愛く見えるな。

「けど良く覚えてたね？特記事項なんて、五十五個もあるのに」

「言ったろ、勉強してるって」

知識は力なり。

その言葉の正しさを、改めて実感した。

「あと三年弱は、デュノア社もフランス政府も、シャルルには手を出せない。それだけ有れば、なにかいい方法が見付かるさ」

「楽観的だね、一夏」

「悲観的になってなにもしないよりはマシだろ」

「……うん。そうだね」

後ろ向きになって、逃げるのは構わない。
だが前を向かない者に、勝利などない。

――今のシャルルは、確かに前を向いている。

「仕方なくなんかない。仕方なら、いくらでもある。ただ見つからなかったり、目を背けていたりしてるだけさ」
「……うん。一緒に、探してくれる？」
「ああ。手伝うよ」
「……ありがとう、一夏」

話はついた。三年という時間が十分なのか不足なのかはわからないが、とにかくタイムリミットが決まったわけだ。
いつ時間切れになるかわからないような状況より何十倍もマシだ。

――それまでに、シャルルを助ける方法を見つけ出す。
そしてそのための人手は、多い方がいい。

「シン」
「……」

ただ黙ってシャルルの話を聞いていた親友。
相変わらずなにを考えているのかわからない無表情だが、俺はコイツが結構義に厚いヤツだと知っている。
シャルルの境遇については、それなり以上に怒りを感じているはずだ。

「俺はシャルルを助けたい。手を貸してくれ、シン」
「……」

「お願いします、井上さん」
「……」

俺とシャルル、両方を見てから、シンは真っ直ぐにシャルルの眼を見て、右手を差し出した。

「……井上真改……」

その女の子らしさが全く残っていない、鉄のような右手を、シャルルは感動したような面持ちで、しっかりと握った。

「シャルロット」

シンの眼を真っ直ぐに見返す。
その瞳には、さっきまでの諦観や絶望はない。
代わりにあるのは、自分の未来を勝ち取るために戦うという、強い意志だった。

「シャルロット・デュノア。それが、お母さんがくれた、僕の本当の名前」

そう言って浮かべた笑顔は、まるで天使のようだった。

「改めてよろしくな、シャルロット」
「こちらこそよろしく、一夏。けど僕のことはシャルルのままでいいよ。まだ他のみんなには、僕のことはバレてないんだから」
「あー、確かに、うっかりシャルロットって呼んだらまずいよな……。けど本当の名前があるのに、偽名を呼ぶのもなあ」

さて、どうしたもんか……。

「シン、なにかいいアイデアは――――」

――――マテ、いまなんかビビっと来たぞ。
そうだ、真改をシンって呼ぶなら、シャルロットは――――

「……シャル」
「え？」
「シャルって呼ぶのはどうだ？これなら不自然じゃないし、俺も呼びやすいし」
「……うん、いいね！それで行こう！」

なにやら凄く嬉しそうにする、シャルロット改めシャル。
なんだ？名前を略して渾名にするくらい日本じゃ普通だけど、フランスじゃそういうことしないのか？

「……愚鈍……」
「うおぉい！？なんかすげえセリフ聞こえたぞ今！？」
「……」
「く、たまに口開いたと思えばグサリとくることばっか言いやがって……」
「……ぷ、ふふふ、あははは！」

突然シャルが腹を抱えて笑いだした。
なんだどうした、俺の心が傷付く様はそんなに面白いか。

「二人とも、ほんとに仲がいいんだね」
「うん？まあ、付き合い長いしな」
「……」
「幼なじみなんだよね？どれくらい経つの？」

「あー、もう十年くらいか。考えてみると本当に長い付き合いだな」
「……」
「へえ。それなら、仲の良さも納得だね」

うん、とひとつ頷いて、シャルはシンの方を向いた。

「ねえ、井上さん。僕も井上さんのこと、シンって呼んでもいい？」
「……」

おお？突然どうした。

「井上さんがいなかったら、僕はまだ一夏を騙し続けていたと思う。もしかしたら、取り返しのつかないところまで行ってたかも知れない」
「……」
「けど井上さんのおかげで、僕はちゃんと、助けてって言えた」
「……」
「一夏も井上さんも僕の恩人だけど、それだけじゃ嫌なんだ。僕は、二人と友達になりたい」
「……」
「だから、僕も一夏みたいに、シンって呼びたいんだ。ダメかな？」
「……」

う～ん、あんなに遠慮がちだったシャルが、随分と攻めるな。
男子三日会わざれば刮目して見よと言うが、女子は三日どころじゃないな。

「……好きに呼べ……」
「……！ありがとう、シン！」
「……」

よかった、二人とも仲良くなれて。最初シンがマウントポジションなんかとってたから、上手くいかないんじゃないかと心配してたけど、これなら大丈夫そうだな。

「……そういやなんであんなことになってたんだ？」

「？あんなことって？」

「いや、俺が部屋入ったとき、シャルにシンが馬乗りになってたじゃん」

「ああ、あれは……」

言いかけて、途端に赤くなるシャル。

え？なに？マジでなにがあったの？

「し、シンって、意外と強引なんだね……」

「……！？」

なんだ？今度はシンが狼狽えだしたぞ？

「思いだしたら、恥ずかしくなってきちゃったよ……」

「……」

確かに、シャルが本当は女の子だったことを考えると、あのジャージの前が半分以上開いていた格好は、いくらコルセット着けてたと言っても恥ずかしいだろう。

「……シン、なにしたんだよ」

「……確認……」

「いや、それじゃわかんねえって。もっと具体的に」

「……」

「……シャル？」
「シンったら、部屋に入って来るなりいきなり僕のこと押し倒して、馬乗りになって、ジャージのファスナー開けたんだよ」
「……え」
そ、それは……なんて大胆な……
「なんでそんなことを」
「……確実……」
「いや、そりゃそうだろうけどさ」
「僕が本当に男の子だったらどうしてたの？」
「……」
「……考えてなかったの？」
「……確信……」
「だったら確認する必要ないじゃん」
「……念のため……」
「つまりちょっとくらいは、間違ってるかもしれないって思ってたんだよね？」
「……」
俺とシャルの波状攻撃により追い詰められていくシン。
俺にはわかる。その無表情の下では、かなり焦っているだろう。
「……話は終わった……」
「いや、終わってないから」
「せっかくだからさ、もっと色々聞かせてよ」
「……」
かなり強引に話を切り上げて逃げようとするシンを捕まえる。
いつもやられてばっかりだからな、たまにはこっちがからかってや

らなくちゃ、釣り合いがとれないってもんだ。

そうして、俺とシャルによるシンいじりは、無言のままキレたシンが俺に飛び膝蹴り（シャイニングウィザード）を叩き込むまで続いた。

……なぜ俺だけ。まあ、シャルが楽しそうだったから、いいけどさ。

第１６話　少女の事情／少女の想い（後書き）

Q：話すのが苦手な真改がどう言い訳するの？
A：肉体言語

サブタイトルについてですが、今回は真改視点が一回も入らないので、二文字ではありません。
二文字のサブタイトルが思い付かなくなるまで、このスタンスでいく予定です。

第17話　黒兎（前書き）

シャルの性別バレイベントも終え、次はラウラのターンです。
真改という強力な護衛がいる状態で、どう一夏や仲間たちに仕掛けるか……やばい、思い付かない。

第17話　黒兎

「おはよう、シン」

ざわ……

教室が静かに震撼した。
シャルの身の上話を聞き、協力を約束した翌朝のことである。

「い、い、今、デュノア君……」
「井上さんのこと……シンって呼んだよね……？」
「どういうことなの……」
「……」

――――迂闊。この事態は、予測して然るべきであった。
シャルが転校して来たのは昨日のこと。その翌日に渾名で呼ばれるなど、何かあったと思わないほうがどうかしている。

「？どうしたの？シン」
「……」
「ま、またシンって呼んだ……！」
「聞き間違いじゃないよね……」
「何があったの……！？」

くそう、このままでは……！おい一夏、助けてくれ、昨日蹴ったことは謝るから、どうにか誤魔化してくれ。

「おはよう、シン。早速シャルと仲良くやってるな」
「……！」

よし分かった、お前は己の敵だ。次があればこの真改、容赦せん。

「さ、さっそく……？」

「ヤってる……！？」

ざわ……ざわざわ……

待て、今発音がおかしい奴が一人いたぞ。

「えーっと……」

教室内の様子がおかしいことにシャルも気付いたようだ。

「き、昨日はありがとう、相談に乗ってくれて。やっぱり知らない土地は不安だったから、友達になってくれて嬉しいよ」

「……」

「な、なあんだ、そんなことか……」

「ああ、私も行けばよかったかなあ……」

ふう、どうにか切り抜けたか。気が利くな、シャルは。一夏とは大違いだ、一夏とは。

「な、なんだよ」

「……」

非難の目を向ける己に怯んだのか、一夏が一歩退がる。

ふん、まあいい。だが覚えておけよ。

「ちょっと、デュノアさん？」

「はい？」

……しまった、まだセシリアがいた。

「どういうことですの？真改さんと、随分親しいようですが」

「え？だから、昨日相談に……」

「ええ、それはわかっていますわ。わたくしが言っているのは、真改さんの呼び方についてです」

……そういえばセシリアは、鈴のことは鈴と呼ぶが、己のことは真改と呼ぶな。

「ええっと、一夏がシンって呼んでるのを聞いて、僕も友達になりたいからシンって呼んでもいいかって聞いたら、好きに呼べって……」

「な……」

なにやらショックを受けているセシリア。意味がわからん。

「そ、そんな……幼なじみだけに許されているのではありませんの……？」

「……」

誰もそんなことは言っていない。

「し、真改さんっ！」

「……」

「わ、わたくしも……そう呼んで、よろしくて？」

「……」

別に許可のいることではないと思うのだが。一夏など初めて会った次の日にはシンと呼んでいたしな。

「……好きに呼べ……」
「……！そ、それでは……」

コホンとひとつ咳払いをするセシリア。
なぜそこまで緊張しているのか。

「……シ……」
「……」
「……シン――――」

ガララ

「席に着け。ＳＨＲを始めるぞ」

絶妙なタイミングで千冬さんが教室に入ってくる。
中断されたセシリアは口を開けた状態で固まっていた。

「オルコット。さっさと席に着け」
「……はい……」

とぼとぼと席に戻っていく。
千冬さんはその様子を訝しげに眺めてから、いつも通りの様子で話し始めた。

「今日の連絡事項を伝える。まずは――――」

まあ、今回は邪魔が入ったが、次の機会はすぐに来るだろう。

そうして、また一日が始まるのであった。

――――――――――

そして四日後。
結局、今もまだセシリアは己を真改と呼んでいる。何故だ。一度機を逸して恥ずかしくなったのか？

「ええとね、一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないからだよ」
「そ、そうなのか？一応わかっているつもりだったんだが……」

今日は土曜日であり、午前は授業があるが、午後は自由時間になっている。
しかし午後は全てのアリーナが開放されるため、ほとんどの生徒が実習に使う。
かく言う己たちも訓練に来ており、今はシャルとの模擬戦を終えた一夏が問題点の指摘を受けている。

「うーん、知識として知ってるだけって感じかな。さっき僕と戦ったときもほとんど間合いを詰められなかったよね？」
「うっ……、確かに。瞬時加速も読まれてたしな……」
「一夏のＩＳは近接格闘オンリーだから、より深く射撃武器の特性を把握しないと対戦じゃ勝てないよ。特に一夏の瞬時加速って直線的だから反応できなくても軌道予測で攻撃出来ちゃうからね」
「直線的か……うーん」

「あ、でも瞬時加速中はあんまり無理に軌道を変えたりしない方がいいよ。空気抵抗とか圧力の関係で機体に負荷がかかると、最悪の場合骨折したりするからね」
「……なるほど」

シャルの説明に頷く一夏。
ようやく教え上手な訓練相手を得て、いつも以上にやる気を見せている。

ちなみに、箒、鈴、セシリアの説明は――

『こう、ずばーっとやってから、がきんっ！どかんっ！という感じだ』
『なんとなくわかるでしょ？感覚よ感覚。……はあ？なんでわかんないのよバカ』
『防御の時は右半身を斜め上前方五度傾けて、回避の時は後方へ二十度反転ですわ』

ひどいものである。
ちなみに己は言葉による説明はしていない。ただ只管打ち合うのみだ。

「けどシンもほとんど射撃武器使わないのに、やたらと上手く避けるよな」
「確かにそうだよね。月影も数撃てば当たるって感じの武器だし、かなり近付かないと撃たないし」

まあ昔はマシンガンを使っていたが。
しかしその頃から、射撃は決して上手くなかった。回避技術に関しては特性を把握しているというより、「撃たれた」経験からくるも

のが大きい。

そしてネクストとＩＳの相違点の中で、己にとって特に重要な要素がひとつある。

「……筋肉……」

「「は？」」

「……体より、先に動く……」

「……えーっと、つまり……」

「筋肉の動きから、行動を先読みしてるってこと……？」

「……」

そう、パイロットが分厚い物理装甲に包まれているネクストと違い、ＩＳの防御力は殆どが皮膜装甲（スキンバリアー）によるものだ。

全身装甲（フル・スキン）もあるが数は少なく、大部分のＩＳは胴や頭部が露わになっている。

そしてパワードスーツであるＩＳの動きは操縦者のそれと連動しているので、筋肉の動きから大体の狙いはわかるというわけだ。

ちなみにこの技術は、昔は護衛を務めることも多かったことから身に付いたものである。

ＩＳと違い、ネクストは緊急時に咄嗟に展開するような真似はできない。

故に、リンクスを殺すのならば生身の時を狙え、というのが常識だったのだ。

自然、生身での技術も磨かれる。

「……やっぱとんでもねえな、シンは」

「うん……。僕もそれはどうかと思うよ」

「……」

失敬な。こんなものは人間が本来持っている機能を最大限使い切っているだけだ。
それよりも、一の鍛錬で十を身に付ける一夏のような「天才」の方が、己からすればとんでもない。

「……ま、まあ、とにかく続けようか。射撃武器の特性を把握するには、実際に使ってみるのが一番だよ。はい、これ」

そう言ってシャルは一夏に、五五口径アサルトライフル〔ヴェント〕を渡す。

「一夏と白式を使用許諾（アンロック）したから、使えるはずだよ。試しに撃ってみて」
「おう。……こうか？」
「えっと……脇を締めて、それともう少し――」

初めて持つ銃器に四苦八苦している一夏に、シャルが丁寧に教えている。
その様子を眺めている己に、セシリアが話し掛けて来た。

「シ、シン……カイ、さん」
「……」

だから何故そんなに恥ずかしがっている。

「デュノアさんと、仲がよろしいですのね」
「……」

確かに仲は良いだろう。

シャルは自分の正体を知っているからか一夏と己には心を許しているようだし、己もシャルには好感を持っている。
シャルの身の上話を聞いた時も、彼女が自分で考え選択することを放棄している「人形」であれば別にどうとも思わなかったが、彼女は確かに意志を持ち、そして「助けて」と口にした。
一夏の言う通り、それは抵抗の第一歩だ。決して「人形」のすることではない。

「そうそう、アンタもう噂になってるわよ、シン。転校生のシャル・デュノアは、あの井上真改にご執心だって」

「あの」とはなんだ。そこまで話題になるようなことをしたつもりはないぞ。

「デュノアは相談を聞いてもらったと言っていたな。本当か？正直、私にはお前が聞き上手とは思えないんだが」

確かに己は聞き上手ではない。ただ黙っているだけで、上手く相槌を打ったり先を促したりが出来ないからな。

「……やはり、それだけではなかったんだな？」
「まあ、シンは嘘は吐かないけど、ほんとのことを言わないことはあるもんね」
「真改さん……なにがありましたの？」
「……」

いくら聞かれても話すつもりはない。
それを態度で示すべく黙秘を続ける己を見て、鈴がニヤリと笑った。
……なんだ、その不吉な笑みは。

「シンってさあ、デュノアみたいなヤツが好みなの？」
「……」
案の定というか、予想通りというか。
とにかく鈴の台詞は想定内のものだったので、無言を貫く。
「な！？なななぁ――――」
しかしセシリアが狼狽えた。成る程、鈴の狙いはこちらか。
「なんていうの？可愛い系？しっかり者の弟みたいな？シン、弟いっぱいいるもんねぇ。やっぱ母性本能くすぐる子が好きなの？」
「なななな何をおっしゃってますの鈴さん！？」
「そうよねぇ、シンも女の子だもんねぇ。好きな男の子のタイプくらいあるわよねぇ」
「ししし真改さん！？どうなんですの！？」
「……」
己への直接攻撃は効果が無いとわかっていたのだろう。鈴はセシリアを中継に使い、間接攻撃を行って来た。
あのれ、小癪な。
「もしかしてデュノアさんも真改さんのことを……！？ああ、わたくしはどうすれば……！！」
「……何もしなくていいんじゃないか？」
箒の的確な助言も耳に入っている様子はない。
セシリアの混乱はまだまだ続きそうだった。

――の、だが。

「ねえ、ちょっとアレ……」
「ウソっ、ドイツの第三世代型だ」
「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど……」

アリーナの入り口。
そこにいたのは、黒い装甲に身を包んだ銀髪の少女。

彼女のことは如月重工に調べてもらった。

ドイツが所持する十機のＩＳの内、三機を配備された、ドイツ軍最強の特殊部隊シュヴァルツェア・ハーゼ、通称〔黒兎隊〕隊長――

――ラウラ・ボーデヴィッヒ。

「おい」

ラウラが開放回線で声を出す。
その対象は、言うまでもなく一夏だった。

「……なんだよ」
「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

ラウラの言葉に、一夏が呆れたような顔をする。

「嫌だ。理由がねえよ」
「貴様にはなくても、私にはある」

ラウラの言う理由とは、恐らくは一夏が誘拐された時のことだろう。
第二回モンド・グロッソ決勝戦当日に起きたその事件のせいで、優勝確実とまで言われていた千冬さんは決勝を放棄、一夏の救出に向かった。
彼女の不戦敗は世界を大きく揺るがせたが、しかし誘拐事件のことは伏せられたため、原因不明の決勝辞退ということになっている。

だが、モンド・グロッソ開催国であったドイツは全てを知っている。
なにしろ一夏誘拐の折、一夏が捕らわれている場所の情報を掴み、千冬さんに伝えたのがドイツ軍なのだから。

その借りを返すためか、千冬さんはドイツ軍で一年ほど教官をしていた。
ラウラとはその頃に知り合ったのだろう。
そしてラウラは千冬さんに憧れ、尊敬し、その経歴に傷が付いた要因である一夏を憎むようになった――

――概ね、こんなところだろう。

「貴様がいなければ、教官が決勝を棄権することもなかった」

しかし、ラウラは気付いていない。
あの事件により一夏を憎んでいる者はラウラだけではない。

――誰より一夏自身が、一夏のことを憎んでいる。

「貴様さえいなければ、教官が大会二連覇の偉業をなしえただろうことは容易に想像できる」
「……」

負けん気の強い一夏が言い返すこともせずに黙っていることを一体どう勘違いしているのか、ラウラは言葉を続ける。

「貴様さえいなければ、教官は現役を引退することもなく、今も世界最強の座に在り続けただろう」

「……」

一夏はラウラと目を合わせず、ガリガリと頭を掻いている。苛立ちをどうにか抑えようとしているようだが、そろそろ限界だろう。

「貴様さえいなければ、教官は――」

「――黙れ」

その声に。

箒が、鈴が、セシリアが、シャルが、そしてラウラまでもが、震え上がった。

声を発した一夏は彼に似合わぬ無表情で、しかしその眼に底無しの憤怒と憎悪を宿らせて、ラウラを睨み付けている。

「外野が知ったようなことほざいてんじゃねぇよ。お前に言われるまでもない。あの時、俺は被害者じゃなく、加害者だった」

一夏は結局ほぼ無傷で助けられた。誘拐なぞされれば心に傷を負いそうなものだが、それは誘拐されたこと自体によるものではなかった。

――一夏自身は、何も失わなかった。

「わかってる。わかってるんだよ。だからどこかに消えてくれ。今は、お前に付き合う余裕はないんだ」
「……」
今の一夏は危険だ。
実力がどうとかではなく、今戦えば、どちらかが死ぬまで止まらないだろう。
それを、一夏本人も自覚している。
「話は終わりだ。俺はお前とは戦わない」
「……ふん。ならば――戦わざるを得ないようにしてやる！」
「！」
ラウラが漆黒のＩＳ〔シュヴァルツェア・レーゲン〕を戦闘状態に移行させる。
ほぼ同時に、左肩に装着された大型のカノン砲が火を噴いた。
「……」
ヴオンッ！
一夏の前に躍り出て、起動した月光の刃で砲弾を切り捨てる。
超高熱に焼かれ、音速を遥かに超えていた弾丸はしかし、己に届く前に蒸発した。
「……」
「貴様……」
今の一夏を戦わせるのは本当にまずい。
我を失い、己や千冬さんの声すら届かなくなる可能性がある。

「――シン」
「……鎮まれ……」
「……」

一夏は大きく深呼吸し、右手で顔を隠すように撫でた。
そして、数秒。

「……ああ。悪い、心配かけた。もう大丈夫だよ」

そうして再び現れた一夏の顔は、まだ多少固くはあったが、いつも通りと言えるものだった。

「……また貴様か。ふん、そんな変態どもの玩具で私の前に立ちふさがるとはな」
「……」

残念だが、挑発合戦をしようというのなら辞退させてもらう。
結果はお前の不戦勝で構わん。
しかしそこで、ラウラは己の左腕を見た。

「……そうか、貴様が……」
「……」

そう呟いたラウラの眼には、羨望や嫉妬など、様々な感情が複雑に入り乱れている。
一応己もあの事件の関係者であるから、ラウラが己を知っていても不思議ではないが、それだけにしては随分と感情が込められた眼だ。

『そこの生徒！何をやっている！学年とクラス、出席番号を言え！』

しばらく睨み合いを続けていたが、アリーナのスピーカーから騒ぎを聞きつけてやってきた担当の教師の声が響く。

「……ふん。今日は引こう」

「……」

己に対し一体何を思ったのか、ラウラはあっさりと戦闘態勢を解除してアリーナゲートへと去っていく。

正直、助かった。今の己では、ラウラを相手に勝てるかはわからない。

「い……いち、か……？」

「うん？」

先ほどの一夏の様子を思い浮かべているのか、怯えたように箒が声をかける。

「だ、大丈夫か……？」

「……ああ、大丈夫だよ」

そんな箒の様子に、一夏も自分が殺気を撒き散らしていたことを思い出したようで、声に罪悪感を滲ませながら返事をする。

「……今日はもうあがるか。アリーナももう閉まっちまうし」

「……そうだな」

「シャル、銃サンキュ。色々と参考になった」

「あ、うん……」

シャルもいつもと違い、返事に快活さがない。セシリアも、一夏を見る眼に怯えが混じっている。

鈴だけは、事件後暫くの間の一夏の様子を知っているからか、それほど動揺してはいなかった。

「あー……じゃあ俺、先にあがるわ。みんな、付き合ってくれてありがとな」

皆の様子の原因が自分であることがわかっているのだろう、一夏は出来るだけ平静を装いながら、アリーナから去っていった。

――――そして。

「……シン？」

「どういうことですの？」

「一夏の様子、ただ事ではなかったぞ」

「……」

気になるのは当然だ。あの状態の一夏は、普段とはあまりにかけ離れ過ぎている。

「……あたしが説明するわ」

「……鈴……」

「アンタが自分だけが関係してることじゃないからって、話したがらないのは分かってるわよ。けどそれじゃみんな納得しないわ」

「……」

確かに、鈴の言うこともっともだ。

ならば、口下手な己よりも鈴が話したほうがよかろう。

「……すまん……」

「いいわよ別に。……友達、でしょ」

「……」

そう言ってもらえると、助かる。

「凰さんは知ってるの？」

「まあね。何度か見たことあるし」

「被害者ではなく加害者だった……一夏さんは、そうおっしゃってましたわね？」

「……どういうことなんだ？」

「順を追って説明するわね。第二回モンド・グロッソの決勝当日のことなんだけど、一夏、誘拐されたの」

「な……！？」

「誘拐！？」

「そしてそれを、決勝を放り出して駆け付けた千冬さんが助け出した」

「……あの決勝辞退の裏に、そんな事情があったんだね」

「けれど確かにそれなら、詳細が明かされないのも納得ですわ」

「ああ。モンド・グロッソ決勝進出者の身内が誘拐され、そのせいで決勝を棄権したなどと知られれば、開催国であるドイツは世界中から責められる」

「……」

そう、あの事件のことは一般には公開されていない。

ただ千冬さんが決勝を棄権したという事実だけが知られている。

そして、当然――その時、己がその場に居たことも、知られてはいない。

「けど千冬さんよりも先に、一夏を助けに行った人がいたの」

「まさか、それって――？」

「そう、そのまさかよ。一夏と一緒にモンド・グロッソの観戦に行

ってたシンが事件に気付いて、すぐに一夏を助けに行った。……そして、誘拐犯たちと戦って、左腕を失った」

「「「……！」」」

己の左腕は、事故で失ったことになっている。

真相を知っているのはドイツ軍関係者を除けば、織斑姉弟と鈴、そして孤児院の者たちだけだ。

「……一夏がシンの左腕に対してどう思ってるか、知ってるでしょ？」

「「「……」」」

クラス代表決定戦の折、堂々と語られた一夏の決意。

あの時のことは学園内では有名であり、後に転入して来た鈴やシャルもすぐに知ることとなった。

「今ではあんなだけど、最初はひどかったのよ。……シンのこと「腕なし女」って言ったヤツに、大怪我させるとこだったんだから」

その時は、己が相手を庇う形で割って入ることでどうにか止めた。

……さもなくば、大怪我どころでは済まなかっただろう。

「それからよ、一夏が強くなることにこだわり出したのは。……ボーデヴィッヒが一夏に色々言ってたけど、あんなのは一夏にとって、言われるまでもないことなのよ」

「「「……」」」

最愛の姉の経歴に傷を付け、幼なじみに取り返しのつかない怪我を負わせた。

そんな自分に対する憎悪こそが、一夏の原動力となっている。

そしてラウラは千冬さんの決勝辞退についてしか触れなかった。それが、一夏には己の左腕を蔑ろにされたように感じられたのだろう。鈴が言ったように、一夏は己が左腕を失ってから暫くの間、己に悪口を言った者に対して何度か暴力事件を起こしかけ、そのたびに己や鈴、弾に止められていた。

だが最近ではそれも収まり、安心していたのだが、どうやらまだ続いていたようだ。

一夏はまだ子供だ。

それがこれほどまでに強く自らを憎んでいては、心に大きな歪みを抱えることになってしまうだろう。

――しかし。

「だけどまあ、心配しなくても大丈夫でしょ。一夏は頑張って立ち直ろうとしてるし、その成果も出てるし。以前だったら、シンが止める間もなく殴りかかってたわよ。

それに、誰にだって触れて欲しくないことくらいあるでしょ？それをああも遠慮なくつつかれたら、誰だってキレるわよ。別におかしなことじゃないわ。

……だから、心配しなくても大丈夫よ。一夏は、バカで鈍感で唐変木で朴念仁な、みんなが知ってるようなヤツだからさ」

「べ、別に心配などしていない！」

「そ、そうですわ！わたくしは一夏さんのことを信じていますもの！」

「うん。さっきの一夏は、ちょっと怖かったけど……誰かのためにあんなに怒れるってことは、優しい証拠だよね」

「……」

そう、心配はいるまい。一夏はこんなにも、仲間に恵まれているのだから。

「ま、あたしが知ってるのはこんなところよ。もっと詳しいことが知りたければ、シンか、それか千冬さんにでも訊くことね」

「……いや、十分だ。お前にとってもいい思い出ではないだろうに、話してくれてありがとう、鈴」

「ありがとうございます、鈴さん。……一夏さんの決意には、そのような事情があったのですね」

「そっか……。だから一夏は、あんなに「強い」んだね……」

「……」

『痛みが人を強くする。傷が人を成長させる。

大人の役目は、子供が傷付かないように守ることじゃない。

傷付いた子供がもう一度立ち上がれるように、真っ直ぐに歩けるように――痛みを、「強さ」と「優しさ」に換えられるように。

そっと、支えてあげることだよ』

唐沢さんが、千冬さんに語った言葉。

罪を背負い、自らを罰するように過酷な鍛錬を続ける一夏を見ていられず、姉として一夏にしてやれることを見失ってしまった彼女の、導(しるべ)となった言葉。

そして傷付いた子供を支えるのは、同じ子供でもいい筈だ。

――子供たちが、支え合うのも、いい筈だ。

「じゃあ、あたしたちもあがりますか」

「そうだな。早く汗を流したい」

「それでは、デュノアさん。わたくしたちはこれで失礼しますわ」

「あ、うん。じゃあね、オルコットさん。お疲れ様」
「……」
そうして、己たちも解散する。男のフリをしているシャルだけ男子更衣室に向かい、他は女子更衣室へ。
シャルの背中から寂しそうな雰囲気を感じる。
……いつか、彼女が正体を隠す必要がなくなることを願う。
彼女もまた、一夏や己の、仲間なのだから。

――――――――――

「強さとは戦闘力のことではない。いくら戦闘力が高くとも、それだけでは真に強いとは言えん」
――なぜですか。いかなる敵をも打ち倒す力が、強さではないのですか。
「そんなものは強さのひとつにすぎん。本当の強さとはそんなものではないし、答えがひとつということもない」
――では、教官は？ブリュンヒルデである貴女こそが、世界最強なのではないのですか？
「戦闘力では、そうかもしれん。だが、私よりも強い者はいくらでもいる」

――理解できません。

「認めたくないだけだろう。……そうだな、ひとつ話をしてやろう。私よりも強い人間の話をな」

――本当に、そのような者が……？

「そいつは年端も行かない少女だった。……ふむ、考えてみれば、お前とも同い年だな」

――そんな子供が、教官よりも強いと？

「ああ。以前から強いとは思っていたが、想像を超えていた。……そいつはその時、瀕死の重傷を負っていた。左腕を失っていて、ＩＳどころか武器もなく、血を流し過ぎて目もまともに見えてなかっただろう」

――そんな状態の者が、強いと？

「ああ、強かった。もっとも、戦闘力という点では話にならん。その時私は暮桜を展開していたし、そもそもあいつは放っておけば確実に死ぬ状態だった」

――ではなぜ、その者が強いと？

「簡単だ。気圧されたのさ、私が。こいつには絶対に勝てないと、理屈なんぞ完全に無視して、魂に思い知らされた」

――そんな、教官が……？

「そうだ。無論、そんなものは錯覚だ。事実あいつは、私が敵ではないとわかった途端に意識を失ったしな」

――理解できません。それではやはり、教官こそが最強ではありませんか。

「わからないか？勝負にならなかったんだよ。私が怖じ気づいているうちに、時間切れになっただけ――引き分けさ。戦闘力では比較にもならない状態で引き分けに持ち込んだ。なら、戦闘力以外の「強さ」が、あいつにはあったということだ」

――……理解……できません。

「そのうちわかるようになる。その時は、お前も「強く」なっているかもしれんな」

――ひとつだけ、教えてください。

「なんだ？」

――その、教官よりも強いという者は何者なのですか？

「弟の幼なじみでな。度を超して無口な、変わったヤツだが、私は気に入っている。

名前は――」

―――――――――

「井上、真改」

敬愛する教官が、ドイツ軍を去る直前の夢。
夢を見るなどあまりにも久しぶりだったので、目が覚めた瞬間、その時に聞いた名を、呟いた。

「……あの女が」

教官の経歴に傷を付けた男――織斑一夏のことばかりに意識がいって、忘れていた。
あの女は確かに教官から聞いた名であり、左腕がなかった。
間違いなく、教官の言う、教官よりも強い者なのだろう。

「……」

しかし、どうしても理解できない。
あの女の戦闘記録を見たが、見るべきものは接近戦の技術くらいで、とても教官よりも強いとは思えない。私でも勝てるだろう。

――なのに。

「……何故だ」

あの女のことを話す時、教官が浮かべていた顔。
弟の話をする時に似た顔。

――私は、教官にそんな顔を向けられたことはない。

「……何故、貴様が……！」

織斑一夏を排除する。

しかしその前に、あの女が立ちふさがるだろう。

――むしろ、好都合だ。

「……認めん」

教官は、あの女が自分より強いと言った。

そんな筈はない。教官は世界最強であり、絶対の力を持つ、完全な存在なのだから。

「私は……認めんぞ」

だから、貴様の「強さ」とやら、この私に示して見せろ。

もしその「強さ」が、教官を誑かす偽物であるのなら、その時は――

「井上、真改――――！」

織斑一夏共々、貴様を排除する――

第17話　黒兎（後書き）

呼び方ひとつであらぬ騒動を巻き起こすシャル、セシリアの扱いを心得てきた鈴、技術力だけでなく情報力も高くて余計不安になる如月重工、そして個人情報ダダ漏れな千冬さん……。

あれ？なんか被害が一人に集中しているような……？

第１８話　憤怒（前書き）

今回ラウラがちょっとえぐいです。お気をつけください。

……と思ったら原作でも最初はけっこうえぐいですね。

第１８話　憤怒

それは、ある月曜日の朝のことだった。

「そ、それは本当ですの！？」

「う、ウソついてないでしょうね！？」

「本当だってば！この噂、学園中で持ちきりなのよ？月末の学年別トーナメントで優勝したら、織斑君と交際できるんだって！」

「「……ごくり」」

鈴とセシリアが息を飲む。

そう、己も今日初めて知ったのだが、現在ＩＳ学園内には、まったくの意味不明な噂が流れている。

曰わく、『学年別トーナメント優勝者は織斑一夏と交際できる』

「……」

思わず箒を睨む。

先日、一夏に交際を申し込んだと言っていたが、確かその時、学年別トーナメントに優勝したら返事をしてもらうと言わなかったか？

「……何故……」

「……いや、その……そういえば、ちょっと声が大きすぎたような……」

何を他人事のように言っている。完全にお前の失敗だろう。

しかしそうなると、今になってひとつの不安が首をもたげてきた。

「……文言……」
「え？」
「……なんと言った……？」
「あ、ああ。ええと……『来月の学年別トーナメントに私が優勝したら――』」
「……」
「『――付き合ってもらう』」

……。

……。

……。

……。

……。

――真剣に、目眩がした。

「……恐らく……」
「え？」
「……通じていない……」
「……はあっ！？」

ガタッと箒が立ち上がる。

「ど、どういうことだ！？」
「……落ち着け……」
「……あ」

教室中の視線が箒に向く。
一夏と交際できるかもしれないという話があがっているところで大声など出せば、注目を集めるのは当然と言える。
――特に。
「……箒？」
「……箒さん？」
「ハッ！？い、いや、なんでもないぞ！？」
この二人は食いつくだろう。
もはや箒の弁明などなんの意味もない。
二人は獲物を狙う猛禽のような気配を発しながら（おかげで他の女子たちは怯えて近付いて来なかったが）箒に詰め寄った。
「どういうことか――」
「――説明してくださる？」
「あ、いや、その、えっと、……し、しんか――っていない！？」
む？呆れのあまり、無意識の内に着席していた。
まあ問題あるまい、鈴とセシリアなら分かるだろう。というか何故箒が分からなかったのかが分からないくらいだ。
「さーあ、教えてもらおうかしらぁ？」
「この噂の、真実を――」
「ひぃ……！」
――数分後。

「ふうん、そういうこと……」
「ふ、ふふふ……箒さん？抜け駆けとは、いい度胸ですわね？」
「……」
洗いざらい吐かされた箒が燃え尽きている。
こんな時ばかり凄まじい連携を発揮する鈴とセシリアであった。
「けどそれじゃあダメなんじゃないかなあ……」
「……え？」
「そうですわね。なにせ相手は一夏さんですし……」
「……ど、どういうことだ？」
まだ分からないのか。さては箒、告白に意識が向きすぎて、一夏の朴念神ぶりを忘れているな？
「だって、一夏よ？」
「『付き合え』と言われても……せいぜいデートくらいにしか思わないのでは？」
「……あ」
ようやく気付いたか。
そう、二人の言う通り、一夏に「付き合え」と言ったところで、それが男女の交際を求めるものとは考えまい。
……正直、逢い引きと思うかも怪しいものだ。そして仮に逢い引きと認識したとしても、そこから交際まで繋げるのは不可能に近い。
「けれど、つまりは――」
「学年別トーナメントで優勝すれば、一夏さんとデートできる、ということですわね？」
「うう……何故こんなことに……」

「……迂闊……」

そしてこの会話は瞬く間に学園中に広がり、噂を書き換えた。

曰わく、『学年別トーナメント優勝者は、織斑一夏とデートできる』と。

己が箒の訓練を手伝う理由が消えた瞬間であった。

――――――――――

「いい加減男子用トイレを用意してくれないかな……」

ＩＳ学園は広い。そりゃもう広い。

なのに男子トイレは学園内に三カ所しかない。

理由は簡単、ＩＳ学園は女子校だからである。

だから俺がトイレに行くときは行きも帰りも全力疾走しなければ休み時間中に教室に戻れないのだ。

しかし俺はまだいい方である。

シャルなど本当は女の子なのに、男子トイレに駆け込まなければならないのだから。

（連れション行こうぜとか言わなくて本当に良かった……）

自らの自制心を誉め称えながら、尚も走る。

「先生は……いないな」

先日、ある先生から「廊下を走るな！」とお叱りを受けたので、見つからないように周囲を警戒しながら走る。気分は忍者、もしくはスネーーーー

「なぜこんなところで教師など！」
「やれやれ……」

ふと、曲がり角の先から声が聞こえた。
足を止めてこっそり近づき、耳を澄ませた。その声がこうも気になった理由はただひとつ。
聞こえてきたのが、ラウラと千冬姉の声だったからだ。

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」
「このような極東の地で何の役目があるというのですか！」

驚いた。あのラウラが、こうまで声を荒げている。
そしてそれは、ラウラが心から千冬姉に憧れていることを意味していた。
ラウラが、千冬姉が俺を助けるために第二回モンド・グロッソ決勝を辞退したことについてあんなに怒っていたのは、千冬姉への想いがそれだけ強いからだ。

（くそっ……俺のせいかよ）

そう、これは、ラウラの怒りは、俺の責任だ。
あの時、俺さえいなければ、誰も、何も失うことはなかった。

シンだけじゃない。千冬姉も、俺のために多くのものを犠牲にしてきた。

（……怒って、当然だよな）

そして、俺には言い訳のしようもない。

ラウラが俺を断罪しようというのなら、甘んじて受け入れただろう。

――――以前なら。

（けど、お前には悪いが、譲れないんだよ）

目標が出来たのだ。

俺の生涯を掛けてでも、叶えたい夢が。

『助けられた命は、失われたもののために使うべきじゃない。遺ったもののために生きるべきだ』

そう言ってくれた人がいたのだ。

だから、もう逃げない。

「そしてあの、井上真改という女……やはり、私には理解できません。あのような者が、教官よりも強いなどと」

（……千冬姉より強い？シンが？）

千冬姉がシンの実力を認めていることは知っていたが、まさか自分よりも強いとまで言っていたとは。

確かまだ、シンが千冬姉に勝ったことはなかったと思うが。

「ほう？あいつと戦ったのか？」
「いえ、対峙しただけです。しかしあの女には、教官ほどの威圧感はありませんでした」
ラウラの言葉を聞き、千冬姉がくつくつと笑う。
「それはお前があしらわれただけだ。あいつはあれで孤児院の年長者だからな。ガキの扱いには慣れている」
「な……！？」
千冬姉の言葉にラウラが絶句する。
「年齢のことではないぞ。今のお前の様は、まるきりガキのヒステリーだと言ってるんだ」
「……っ！」
嘲笑うように言う。
千冬姉とシンは仲が良い。二人とも黒髪黒眼で鋭い目つきに長身と容姿の共通点も多く、それこそ姉妹のようである。
そのシンに対するラウラの物言いに、怒りを覚えたのかもしれない。
「私は……認めません」
「好きにしろ。さて、授業が始まるな。さっさと教室に戻れよ」
「……」
ぱっと声色をいつもの調子に戻した千冬姉に急かされて、ラウラが早足に去って行く。
……あ、まずい。

「そこの男子。盗み聞きか？異常性癖は関心しないぞ」
「な、なんでそうなるんだよ！千冬ね――――」

ばしーん！

「学校では織斑先生と呼べ」
「は、はい……」

これはひどい。弟の頭を叩くだなんて、姉のやることか。妹分のことは叩かないクセに。

ばしんばしんばしーん！

「ふむ、弟の頭は実に叩きやすいな。お前もそう思うだろう？織斑」
「……はい」
「……井上には黙っておけよ」

それは多分、千冬姉がシンを自分よりも強いと言ったことだろう。
元世界最強の意地か？

「いや。……姉貴分の意地さ」
「……」

愛されてるなあ、シン。

「そら、走れ劣等生。このままじゃお前は月末のトーナメントで初戦敗退だぞ。勤勉さを忘れるな」
「わかってるって……」
「そうか、ならいい」

ニヤリと笑みを見せる千冬姉は、今だけは姉として言ってくれているようだった。

「じゃあ、教室に戻ります」
「おう。急げよ。せいぜいバレないように走れ」
「了解」

そうしてまた、教室に向かってダッシュする。

――その、後ろで。

「……姉貴分、か。よくもまあ、抜け抜けと」

千冬姉の、苦々しい声が、聞こえた気がした。

――――――――――

「あ」
「あ」
「……」

放課後、もう箒と訓練する必要もなくなったのでセシリアとアリーナに来たところ、鈴と出くわした。

「奇遇ね。あたしはこれから月末の学年別トーナメントに向けて特訓するんだけど」

「奇遇ですわね。わたくしもまったく同じですわ」
「……」

バチバチと火花を散らす二人。
繰り広げられる女の戦い。
争いとはいついかなる時も醜いものである。

「ちょうどいい機会だし、どっちが上かはっきりさせとくってのも悪くないわね。こないだは決着つかなかったし」
「あら、珍しく意見が一致しましたわ。どちらの方がより強くより優雅であるか、この場ではっきりさせようではありませんか」
「ふ、ふふふふ」
「ふふふ、ふふ、ふふふふふ」
「「うふふふふふふふふふふふ」」
「……」

不気味な笑い声をあげながら対峙する二人。
鈴が双天牙月を、セシリアがスターライトｍｋ?を展開し、構える。

……強さはともかく、優雅さについては最下位決定戦になりそうである。

――と、そこへ。

「……ッ！」
ヴオンッ！
「シンっ！」
「真改さんっ！」

突如飛来した超音速の砲弾を切り捨てる。

弾道を辿ると――――否、そんなことをするまでもなく、そこにいるのが誰であるかはわかっている。

漆黒の装甲、ドイツ製第三世代型ＩＳ〔シュヴァルツェア・レーゲン〕、登録操縦者――――

「ラウラ・ボーデヴィッヒ……！」

怒りの滲んだ、セシリアの声。
そして己を庇うように、鈴が前に出る。

「……どういうつもり？いきなりぶっ放すなんて」

とん、と連結した双天牙月を肩に預けながら、鈴は衝撃砲を準戦闘状態へシフトさせる。
その顔は獰猛に歪んでいた。

「それもあたしの友達に向かってなんて。……八つ裂きにされても、文句はないわよね？」
「ちょっと鈴さん、なにをおっしゃってますの？それはわたくしの役目ですわよ？」
「中国の〔甲龍〕にイギリスの〔ブルー・ティアーズ〕か。……ふん、今は貴様たちに用はない」
「「なんですって……？」」
「井上真改」

いきり立つ二人を無視し、ラウラは己を睨みつけた。

「私と戦え」
「……」

敵意、憎悪、嫉妬……その眼差しには、様々な負の感情が込められている。

――――こんな目は、久しく向けられていなかったな。

「貴様の力とやら、私に示してみせろ」

「……」

さて、何があったのかは見当もつかんが、ラウラはかなり機嫌が悪いようだ。

幼いながらも整った顔立ちが、いつも以上の冷気を放っている。

「さあ、私と戦え、井上真改……！」

「……断る……」

しかしラウラには悪いが、己はラウラと戦うつもりはない。

「……何故だ」

「……無益……」

怒りに任せた今のラウラと戦ったところで、得るものは何もない。

なにより、それは己の役目ではない。

「貴様……」

「そんなに戦いたいなら、あたしが相手してあげるわよ？」

「真改さんの手を煩わせるまでもありませんわ」

「……」

尚も闘志を滾らせるラウラの前に、鈴とセシリアが立ちふさがる。

……気持ちはありがたいのだが。

「……退け……」
「シン……」
「真改さん……」
「……無用……」

今は退いてくれ。
それは、お前たちの役目でもないんだ。

「どういうつもりだ。戦う気になったか？」
「……否……」
「……ふん、専用機を与えられたと聞いていたからどれほどの実力者かと思えば、とんだ臆病者だな」
「……」
「そんな様で、その機体、どうやって手に入れた？体でも使ったか？……ああ、その左腕は、如月の変態どもが好みそうだな」
「……それ以上は、本当に――――」
「――――ブチ殺すわよ？」

二人から濃密な殺気が放たれる。
しかしラウラはまるで気にした様子はない。
嘲りの笑みを浮かべ、尚も言葉を続ける。

「よかったな？傷物に欲情する物好きがいて。専用機が手に入り、体も慰められる。一石二鳥だな？」
「……ああ、もういいわ、アンタ」
「そんな言葉を吐き出す汚らしい口は、引き千切ってさしあげますわ」
「……」

完全に戦闘態勢に入った二人の前に出て、右腕と月輪で押しとどめる。

「……退け……」
「……！ちょっと、シン！？」
「あそこまで言われて、黙っていろと！？」
「退け」

力を込めて、強く言う。
己の言葉に、二人が俯く。その肩は怒りに震えており、歯を噛み締める音が、大きく響いた。

「……ああ、もう……！アンタって子はっ……！！」
「真改さん、わたくしはっ……！！」

己の様子に、納得行かないながらも退がってくれた。

――その目尻に浮かんだ涙が、不謹慎にも、嬉しかった。

「……すまん……」
「謝るなっ！ぶん殴るわよ！？」
「……ありがとう……」
「そんな言葉が欲しいわけではありませんわ……！！」
「……」
「ふん……とんだ茶番だな。そうやっていれば誤魔化せるとでも思っているのか？卑怯者が」

ラウラがそう言うと、シュヴァルツェア・レーゲンのレールカノンが己を狙った。

――警告。ロックオンを確認。

「なら、そのまま消えろ」

「……」

至近距離からの発砲。

並のＩＳならば一撃で墜とすほどの砲弾を、再び月光で切り払う。

「ふん、剣だけは達者だな。ならば――」

三度装填される砲弾。己は月光を構え――

――ようとして、機体が動かないことに気付いた。

「……！？」

「所詮は近接戦闘特化機。教官ほどの実力があるならばともかく、このシュヴァルツェア・レーゲンの敵ではない」

――解析完了。第三世代型兵器、ＡＩＣ（アクティブ・イナーシャル・キャンセラー）と判明。対象の慣性を停止させ、動きを封じる特殊兵装――

見れば、ラウラは己に向けて右手を突き出している。

これにより、ＡＩＣとやらが発動しているのだろう。

「貴様など、この停止結界の前には無力だ」

ガコン、と、レールカノンの装填音が響く。

――その音に、水月の装填音が重なっていることに、ラウラは気

付いていないようだった。

「――消えろ」

「……」

ゴウンッ！！

重々しい炸裂音。

水月の特殊カートリッジが火を噴き、朧月に馬鹿げた運動エネルギーを与える。

「なにっ……！？」

ＡＩＣ――ラウラ曰わく停止結界は、確かに強力な兵器だが、何事にも限界はある。

ＩＳ自体を弾丸並に加速させる水月を抑え切れるほどの出力はないようだった。

発射された砲弾を姿勢を下げて回避、ラウラに肉迫する。

「おのれっ！」

シュヴァルツェア・レーゲンの両腕に取り付けられた袖のようなパーツから、高熱のプラズマ刃が伸びる。

接近戦用の武装。

それを、ジャブのように鋭く突き出して来た。

「……」

月輪を起動し、素早く横に回避。

プラズマ刃の間合いから逃れた己に向け、鋭い刃が付いたワイヤーが射出される。
その数、六。

「逃がさんっ！」
「……」

複雑な機動を描いて己を囲うそれを、月輪により高速回転しつつ月光で切り払った。

「貴様ぁっ……！」

勢いのまま距離をとり対峙した己を、射殺すかのように睨み付けるラウラ。

朧月の主武装が月光であることは誰が見てもわかる。
その月光が届かぬ距離まで自ら退がった己の意図を、正確に読み取ったようだった。

「どうあっても戦わないつもりかっ！」
「……応……」

己の返事に表情を怒りに歪ませ、殺意を剥き出しにし、ラウラが突撃してくる。

「消えろ……消えろ、消えろぉぉぉっ！！」

何がそこまでラウラを駆り立てるのか。
それがわからないままに、己はラウラの猛攻を凌ぎ続けた。

―――――――――

「一夏、今日も放課後特訓するよね？」
「ああ、もちろんだ。今日使えるのは、ええと――」
「第三アリーナだ」
「「わぁっ！？」」

廊下をシャルと並んで歩いているところにいきなり予想外の声が飛び込んできて、俺たちは揃って声を上げた。

「……そんなに驚くほどのことか。失礼だぞ」

声の発信元は、いつの間にか横に並んでいた箒だった。

「お、おう。すまん」
「ごめんなさい。いきなりのことでびっくりしちゃって」
「あ、いや、別に責めているわけではないが……」

折り目正しくぺこりと頭を下げるシャルに、さすがの箒も気勢を削がれてしまったようだ。

「こほん。ともかく、だ。第三アリーナへと向かうぞ。今日は使用人数が少ないと聞いている。空間が空いていれば模擬戦も出来るだろう」

おお、それはいいことを聞いた。やっぱり模擬戦は実戦に近い経験

値が得られるからな。

……けどなんだ？なんかさっきから廊下が慌ただしくないか？
それも、アリーナに近付くにつれて騒がしさが増している気がする。

「なんだ？」
「何かあったのかな？観客席から先に様子を見ていく？」
「……そうだな、ピットから普通に入るより早い」
「どうやら、誰かが模擬戦をしているようだな。しかしそれにしては様子が――」

ヴオンッ！

「あの光は……！」
「月光！？」
「真改か！」

そう、アリーナで戦っていたのはシンだった。
そして、その相手は――

「何故だ、何故貴様が――！」
「ラウラ！？」

あの漆黒の装甲、長い銀髪、左目を覆う眼帯……間違えようがない、俺とシンを敵視している転校生、ラウラ・ボーディヴィッヒだ。

しかし様子がおかしい。いつもの氷のような鉄面皮からは想像もつかないほどに、怒りを顕わにしている。

「認めん、認めんぞ、井上真改――！」

「……ッ！」

対するシンは、よく見れば戦っていない。
ただ只管、ラウラの攻撃を避け続けている。

「はあぁぁぁっ！」

ラウラが操るＩＳ、シュヴァルツェア・レーゲンから、ワイヤー状のブレードが射出される。
複雑に動き回りながら迫るそれを、月輪による変則的な機動で回避。

大型のレールカノンのシリンダーが回転し、砲弾が連射される。
最短距離を正確に、超音速で飛来するそれを、月光から伸びる紫色の光の剣で切り捨てる。

ラウラが右手をシンに向ける。
それが何を意味するのかはわからないが、シンは水月と月輪を使い、何かを避けるように高速機動を行った。

「すごい……！」

鈴やセシリアと較べても凄まじい猛攻を、シンは全て避け切っていた。
機動力に長けているが扱い難い朧月を縦横無尽に操って、アリーナの中を逃げ続ける。
日頃の訓練の成果を遺憾なく発揮しつつ、しかし決して攻撃を仕掛けようとしない。
その素振りすら見せない。

「何故だっ！何故戦わないっ！！」

そんなシンの様子にラウラは益々怒りを強め、攻撃も激しさを増していく。

「……無益……！」
「益はなくとも意味はあるっ！！」
「……不詳……！」
「貴様が知る必要はないっ！！」

しかし一向にシンを捉えられないことに業を煮やしたのか、ラウラの攻撃が次第に荒くなっていく。
精度が落ち、シンの回避にも余裕が出てきた。
よし、これなら――――！？

「危ないっ！」
「きゃあっ！」
「……っ！」

狙いを外したレールカノンの砲弾が、まだアリーナ内に残っていた女子に迫る。
シンは水月を起動、ギリギリその女子の前に立ちふさがって、砲弾を切り捨てた。

――――それを見て、ラウラがニヤリと笑った。

「これで――――！」
「えぇっ！？わああっ！？」

不運にもラウラの近くにいた女子にワイヤーを伸ばし、絡める。
そしてそれを、振り子のように勢いを付け――――

「――どうだっ！」
「うわあああああっ！」
「……！」

シン目掛けて、投げ飛ばした。
さらにはその女子にレールカノンを向け、躊躇うことなく発射。
シンは投げられた女子を抱えるようにして受け止めつつ、砲弾を月光で切り払う。

――そして。

「――捉えた」
「……！」

ラウラが右手をかざすと、シンの動きが止まる。
何があったのかはわからない。
わかったのは、ラウラがシンに何かをしたということ、そして――

――抱えられた女子ごと、シンを撃ち抜こうとしているということだけだった。

「――おおおおっ！！」

俺の中で、ナニカが切れた。
白式を展開、同時に零落白夜と瞬時加速を発動、アリーナを覆う遮断シールドを切り開き、中に飛び込む。
未だかつてない速さで行われた一連の動き。
だが間に合わない。
レールカノンの砲弾が装填され、しかしまだシンは動くことが出来

ず、ラウラが口元を歪ませ――――

――――世界が停止した。

無論、そんなものは錯覚だ。止まったのは世界ではなく、俺とラウラだった。

では何故、俺とラウラは止まったのか？

簡単だ。さっきまで逃げ続けていたシンから、一瞬、心臓がその鼓動を停止するほどに、凶悪な殺気が放たれたからだ――――

「あ――――」

「そこまでっ！！」

アリーナ内に、聞き慣れた声が響く。

千冬姉だ。

同時にシンの殺気が初めからなかったかのように霧散し、俺とラウラの硬直が溶けた。

「ガキの喧嘩と思って黙って見ていたが、第三者を巻き込んだうえ、遮断シールドまで破られては放っておけん。

――――決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

呆れているような、苛立っているような表情の千冬姉の言葉。

余波にあてられただけの俺と違い、シンの殺気を直接向けられたラウラはまだ茫然としていたが、千冬姉の言葉で正気に戻った。

「はっ……教官が、そう仰るのなら」

しかしそれもまだ完全ではないようだった。
ＩＳを解除したラウラに千冬姉が近づき、見下ろすように尋ねる。

「で？理解できたか？」
「……っ！」

いつもなら千冬姉には即答するラウラが、返事を躊躇う。
なんだ？なんのことを言ってるんだ？

「ふん。その様子ならば、わかったようだな」
「わ、私は……」

俯くラウラに構わず、千冬姉がアリーナ中に聞こえるように大声で言った。

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！」

パンッ！と千冬姉は強く手を叩き、去っていった。
ラウラも、心ここに在らずといった様子で去っていく。

「……そうだ、シン！大丈夫か！？その子は！？」
「……無事……」

ＩＳを解除したシンが、こちらもＩＳを解除した女の子を下ろしながら答える。
……うん、本当に怪我はないようだ。

「どういうことだよ？なにがあったんだ？」
「……」

シンは黙ったままだ。こいつはこうなると、まず何も話さない。

と、そこへ、近付いてくる二人の姿を見つけた。

「アイツ、いきなりケンカふっかけてきたのよ」

「鈴……」

なにやらもの凄く怒ってる鈴とセシリアだ。

「いきなりって……いきなりか？何も言わずに？」

「色々言ってましたわ。口にするのもおぞましいような言葉を」

……気にはなるが、聞かないほうが良さそうな気がする。

それくらい二人は殺気立っていた。

「真改！怪我はないか？」

「シン、大丈夫！？」

「……無事……」

箒とシャルも駆けつけ、シンの無事を確認し、胸をなで下ろした。

「はぁ～、ありがと、いのっち。助かったよ～」

あれ？なんか聞き慣れた声が？

「ってのほほんさん！？」

「いや～、びっくりしたよ～」

「……」

どうやら投げ飛ばされた女子はのほほんさんだったらしい。

……どおりで、あの状況でまだあんなとこにいると思ったら。

「むむむ～？おりむー、失礼なこと考えてない～？」

「はっはっは、そんなまさか」

相変わらず見かけや行動のスローっぷりに反して鋭い。油断ならない人物なのである。

そんなやり取りをしていると、シンがのほほんさんに頭を下げた。

「……すまん……」

「？なにが～？」

いきなりのシンの行動に、さすがののほほんさんも少し戸惑っているようだった。

「……巻き込んだ……」

「……いのっちのせいじゃないよ」

「……」

「う～ん、じゃあ、ケーキセットで許してあげるよ～」

「……承知……」

「てひひ、やったあ！ゴチになりま～す！」

おお、シンの扱いを極めている。

マジで油断ならんな、のほほんさん。

「……とにかく、もうあがりましょう。真改さんもお疲れでしょうし」

「そうね。このまま訓練しても荒れそうだわ、あたし」

そして据わった目で言う二人がかなり怖い。
……マジでなにがあったんだ？

―――――――――

アリーナでの騒動から一時間が経った。
訓練もお開きになってしまい、他にやることもなかったので、ちょっと早いが飯にしようということになった。
今はシャルと一緒に食堂に向かっているところである。

「なんだったんだろうな、さっきの」
「うん……凰さんもオルコットさんも、凄く怒ってたよね」
「……怖くて聞けなかった」
「いや、あれは仕方ないと思うよ……」

あの後、鈴もセシリアも一言も話さずに帰っていった。
ニトロ並に危険な状態だったので、誰も声をかけられなかったのだ。

「ラウラかあ……。シンとなにがあったんだかなあ」
「なにかあったっていうより、ボーデヴィッヒさんが一方的に突っかかってる感じだったけど」

そう、シャルの言う通り、シンはなぜラウラがあんなに怒っているのかわかっていなかった。
多分ラウラは、千冬姉を通してシンのことを知っていたのだろう。
それは休み時間での二人の会話からも伺える。

「荒れそうだな、学年別トーナメント」
「大荒れになるだろうね。シンもボーデヴィッヒさんも、間違いなく優勝候補だし」
「まあ、俺だって負ける気はないけど」

そんなことを話しながら歩いていると、なにやら地鳴りが聞こえてきた。
……いや、比喩ではなく、それは本当に地鳴りだった。

ドドドドドドドドッ……！

「な、なんだ？なんの音だこれ？」
「い、一夏っ！あれ……！」

シャルが指差す方を見ると、そこにはヌーの大移動みたいな迫力がある女子の大群が。

「な、な、なんだなんだ！？」

一瞬で飲み込まれる、もとい取り囲まれる俺とシャル。
そして全方位から一斉に、

「織斑君！」
「デュノア君！」
「「は、はい！？」」
「「「私と組んで！」」」
「「……は？」」

いきなりな言葉と状況にビビりまくっている俺たちに、女子一同（

百人くらいいそうだ）が学内の緊急告知文が書かれた申込書を突き出してきた。

「な、なになに……？」

「『今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦闘を行うため、二人組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは――』」

「ああ、そこまでいいから！とにかくっ！」

ざざっ！と一斉に手が伸びてくる。怖い。マジで怖い。さっきの鈴とセシリアくらい怖い。

「私と組もう、織斑君！」

「私と組んで、デュノア君！」

どうしていきなり学年別トーナメントの仕様変更があったかはわからないが、今こうして取り囲まれている理由はわかった。

学園で二人しかいない男子とペアを組むべく、先手必勝とばかりに突撃してきたのだろう。

「え、えっと……」

しかし、シャルは本当は女の子なのだ。

誰かと組めば当然その人と訓練する時間が増えるだろうし、いつどこで正体がバレてしまうとも限らない。

「……」

ちらりとシャルを見る。

彼女は困ったような顔で集まっている女子たちを見回して、そこで俺と目があった。

「あ……」

一瞬目を逸らして、けどすぐになにかを決意したような顔をして、それから深呼吸をひとつ。

『……一夏』

『なんだ？』

シャルからのプライベート・チャネル。

声を出さなくていいので、内緒話にはぴったりだ。

『また、助けてもらって……いいかな？』

『遠慮すんなよ。……仲間だろ』

『うん。……ありがとう、一夏』

シャルは嬉しそうな笑顔を浮かべてから、みんなに聞こえるように大きな声で言った。

「ごめんなさい。誘ってくれたのは嬉しいです。でも僕は一夏と組むことにするよ」

しーん……。

いきなりの沈黙。シャルがすこし後ずさる。が、

「まあ、そういうことなら……」

「他の女子と組まれるよりはいいし……」

「男同士っていうのも絵になるし……ごほんごほん」

とりあえず納得してくれたようだ。
女子たちは各々が仕方ないかと口にしながら去っていく。
それからまた改めてペア探しが始まったようで、ばたばたとした喧騒が聞こえてきた。

「ふう……」
「なんとかなったね……」
「よく言えたな、シャル」
「……うん。一夏のおかげだよ」

そう言ってはにかむシャルがとても可愛かったので、俺はつい目を逸らしてしまう。

「？どうしたの？」
「い、いや、なんでもないぞ。ただ、シャルが可愛かったから……」
「……え、えぇ！？か、可愛い？僕が……？ほ、本当に？ウソついてない？」
「ついてないって。……ていうか、なんでそんなに自信なさげなんだよ」
「え？だ、だって……僕って男口調だし、自分のこと『僕』って言うし……」
「別にそれは大したことじゃないんじゃないか？シンや箒も男口調だし、シンに至っては自分のこと『おれ』って言うし」
「え、そうなの？」
「そうなんだよ。滅多に言わないから、あんまり知られてないけどな」
「へえ……。けどなんか、シンらしいね」
「だろ？だからシャルも、口調とかそんなに気にしなくていいんじゃないか？」

「うん……そうだね」

シャルも大分前向きになってきた。

それを嬉しく思いながら、再び食堂へと歩き出す。

……けど考えてみれば俺、みんなからは男って思われてるシャルに可愛いとか言ったよな、今。

……廊下に誰もいなくて良かった。

――――――――――

さて、そんなこんなで六月の最後の週。

今日から一週間かけて、学年別トーナメントが行われる。

その慌ただしさは俺が予想していたよりも遥かにすごく、今こうして第一回戦が始まる直前まで、全生徒が雑務や会場整理、来賓の誘導を行っていた。

「しかし、すごいなこりゃ……」

更衣室で着替えながら、モニターに映る観客席の様子を見る。

そこには各国政府関係者、研究所員、企業エージェント、その他諸々の顔ぶれが一堂に会していた。

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認、それに一年の将来有望な人材のチェック。優秀なＩＳ操縦者はどこも喉から手が

出るくらい欲しいだろうからね」
「ご苦労なこったな」

あんまり興味なかったので話半分で聞いていたので、返事もおざなりだ。
観客席に見覚えのある変態がいたので不機嫌になったのも、理由のひとつかもしれない。

「……ボーデヴィッヒさんとの対戦が気になる？」
「まあ、な。ラウラはシンのこと襲いやがったし、俺のことも狙ってるみたいだし」

この先もあんな調子で狙われ続けたら堪ったもんじゃない。
早いとこケリをつけたい。

「彼女はおそらく、現時点では一年の中でも最強だと思う。必ず勝ち上がってくるよ」
「……シンはどうなんだよ。この間は、一発ももらってなかったろ」
「あれは逃げに徹してたからだよ。あの猛攻を掻い潜って接近するのは、いくらシンでも難しいと思うよ」

冷静なシャルの分析。
俺はすぐに熱くなってしまうタイプなので、相方が優秀なストッパーなのは実に頼もしい。

「さて、こっちは準備できたぞ」
「僕も大丈夫だよ」

お互いにＩＳスーツへの着替えは済んでいて、ＩＳの最終チェックを終えたところだ。

ちなみにシャルのＩＳスーツは男装用の特別製で、ボディラインの肉付きを男のそれに見せる仕組みらしい。

「そろそろ対戦表が決まるはずだよね」

原因は不明だが、突然のタッグ戦への変更により、今まで使っていた対戦表作成システムが正しく機能しなかったらしい。
なので今朝から生徒たちが手作りによる抽選クジで対戦表を作っていた。

「一年の部、Ａブロック一回戦一組目なんて運がいいよな」
「え？どうして？」
「待ち時間に色々考えなくて済むだろ。こういうのはやっぱ、勢いが肝心だからな」
「あはは、一夏らしいね」

ペアが決まってから今日まで二人で何度も特訓を重ねてきたことで、お互いの性格や考え方はかなり把握出来ている。
シャルも俺の猪武者的なところはわかってくれているようだ。

「あ、対戦相手が決まったみたい」

モニターがトーナメント表に切り替わった。
俺とシャルはそこに表示された対戦相手を確認し――

「……うそ……だろ……？」
「……そ……そん、な……」

――揃って絶句した。

発表されたトーナメント表。

一年の部、Ａブロック一回戦一組目。

織斑一夏と、シャルル・デュノアの対戦相手は。

ラウラ・ボーデヴィッヒ、そして――

井上真改

第１８話　憤怒（後書き）

チーム〔月兎〕爆☆誕ッ！！
経緯は次回で。

チーム〔男子同盟（偽）〕との対決にご期待ください。

千冬さんの苦悩については第３話を参照です。

第１９話　役目（開戦編）（前書き）

今回長くなりそうなので、ふたつに分けます。
いやしかし、ほんとに戦闘描写って難しいですね。

第１９話　役目（開戦編）

井上真改に戦いを挑んだ日の夜。
私は食堂で夕飯をとっていた。

「……」

正確には既に食事は終わっている。
今はなにも残っていないトレイを、呆と眺めているだけだ。

「……」

私がここ、ＩＳ学園に転入する際には、学園そのものに対する興味は微塵もなかった。
意識が甘く、世界最強の兵器であるＩＳをファッションかなにかと勘違いしているような程度の低い者たちに交じって、とうの昔に学び終えた理論を聴く。
それは誇りあるドイツ軍人である私にとって、屈辱でしかない。

「……」

それでも私がここに来たのは、国からの命令であるからというのは当然だが、もうひとつ、私が尊敬する教官が、ここで教師をしているからだ。

「……」

私はかつては優秀な遺伝子強化試験体であり、しかし最底辺まで転げ落ちた末、出来損ないの烙印を押された。

絶望に捕らわれ、深く暗い闇の底へと沈んでいくだけだった私に、
ある日突然、手が差し伸べられた。
それが教官――織斑千冬だった。

「……」

ずっと闇の中に居続けた私に、初めて光が射した。
彼女の言葉に従うだけで、私は再び部隊最強となった。
もしも神のお告げなんてものが実在するとしたら、教官の言葉こそがまさしくそれだった。

「……」

彼女に憧れた。
その強さに、その姿に、その在り方に憧れた。
彼女のようになりたいと、心から思った。
それが、何もなかった私が、初めて持った望みだった。

「……」

だから、時間を見つけては話をしに行った。
いや、話など出来なくてもいい。
ただ教官の側に居られるだけで、私には十分だった。
強く、凛々しく、自信に満ちたその姿を見ているだけで、十分だった。

「……」

世界最強。

あまりにも分かり易く、そして絶対の称号。
この世で最も価値のあるもの。
それそのものである教官は、いかなる宝石も、いかなる芸術も、いかなる絶景も及びもつかない、美しい存在だった。

――なのに。

「……井上……真改……」

教官が語った、教官よりも強い者。
それは私にとってあまりに荒唐無稽な存在であり、教官の言葉だというのに、信じられなかった。
そんな御伽噺よりも、教官の輝かしい経歴に傷を付け、それでいて教官の優しい笑みを受ける、教官の弟の方が許せなかった。

――なのに。

「……井上、真改……」

教官が身を竦ませるほどに恐れたという、その女。
かつて教官から聞いた話をふいに思い出して、その女を実際にこの目で見て、苛立ちが募った。
隻腕という障害を負い、ただ黙ってそこに居るだけの、そんな女が、教官よりも強いなどと。
そんなことは有り得ない、有り得る筈がないと、それを証明するために、奴に戦いを挑んだ。
しかし奴は戦おうとせず、ただ逃げ回るばかりで、仮にも教官に認められた者のその無様な姿に、言いようのない怒りを覚えた。
だからあの女を追い詰めた時、暗い愉悦が私の心を満たした。
ああ、やはり、教官よりも強い者などいないのだと。

――なのに。

「……井上、真改」

身が竦んだ、どころの話ではない。
心が、魂が凍り付いた。
ただ発射を思考するだけで勝てたというのに、それすらも出来なかった。
どんな兵器よりも強力に、あの女は、私の心臓を撃ち抜いた。
紙切れ一枚も貫けぬ筈の、目線で。
それに乗せた、殺気で。

「井上、真改」

教官は言った。
自分が怖じ気づいているうちに時間切れになっただけの、引き分けだったと。
なら、私はどうだ？
もしあの女が、初めから戦いに応じていたら？
決まっている、何もせずに呆けている私を、一刀のもとに斬り伏せていただろう。

――戦いにすら、ならなかっただろう。

「……何故だ……何故、貴様が」

まるで弟の話をしている時のような、教官の顔。
ただ一人、教官が認める存在。

何故、貴様なんだ。

何故――私ではなく、貴様なんだ。

何故――！

「井上、真改――！」

「……何用……」

「！？」

突然の声に驚く。

いつの間にかほとんど人がいなくなった食堂の、私が座る席の前、そこに井上真改がいた。

「な、なんだ！？」

「……」

特に気配を消しているということはないが、全く気づかなかった。

私はよほど深く考えに耽っていたらしい。

「な……何の用だ」

「……」

今まさに井上のことを考えていたので対応が挙動不審気味になってしまったが、しかし井上は気にした様子もない。

「……何の用だと訊いている」

「……」

再度問う私に対し、井上は手に持っていた書類ケースをテーブルに置き、中から一枚の書類を差し出して来た。

「……なんだ、これは」

「……通知……」

言われて、書類を読む。

内容を一言で言えば、学年別トーナメントがタッグ戦になったということだ。

だが、そんなことは関係ない。

私の専用機、〔シュヴァルツェア・レーゲン〕は多数を相手取ることを想定して製作されている。

相手が二人になったところで、問題はない。

「これがどうした？何故わざわざ持ってくる？」

「……」

学年別トーナメントのペアは、締め切りまでに決めなければ抽選になると書いてある。

つまり、放っておいてもトーナメントに出場できなくなるようなことはない、ということだ。

わざわざ、それも井上が持ってくるようなものではない。

疑念の込められた私の視線を受け、井上は書類ケースからもう一枚、書類を取り出す。

「……次はなんだ」

「……」

井上は答えず、目線を書類に向けるだけだった。
仕方なく、その書類の文面を読む。
そこにはこう書いてあった。

『学年別トーナメント参加ペア登録申請書』

「……」

井上を見る。

「……」

無言。
もう一度、書類を見る。
その一番下、二人分の署名欄があり、その内の片方が埋まっている。
そこに書かれている名前は、当然というか、目の前の女のものだった。

「……どういうつもりだ」
「……署名……」
「どういうつもりだと訊いている」

この状況で井上が私に何をしろと言っているのか、わからない者はいまい。
しかし逆に、井上が何故それを求めているのかがわかる者はいないだろう。

「私は貴様を認めない。教官が貴様をなんと言おうと、私は認めん」
「……」

「教官は私闘を禁ずると言ったが……要は、戦いでなければいいのだろう。私は貴様を排除する。たとえ、どんな手を使ってでも」
「……」
それは脅しの言葉。
井上を睨み付け、視線に有りっ丈の殺意を込め、低い声で言う。
しかしその言葉は、井上を前にしては、ひどく軽く響いた。
「私と組むだと？正気か貴様？訓練中、どんな事故が起きるかわからんぞ？」
「……」
唇の端を吊り上げて言う私に、しかし井上はなんの反応も示さない。
それどころか、もう一度、こんな言葉を吐いた。
「……署名……」
その言葉に、私の堪忍袋の緒が切れた。
「ふざ……けるなぁっ！！」
バァンッ！
両手で机を叩き、立ち上がる。
その音に、食堂に残っていた数少ない生徒たちが驚くが、そんなことはどうでもいい。
「貴様は……！貴様はどれだけ、私を侮辱すれば気が済むのだっ！！」
「……」

そう、これは侮辱だ。
私が何をしようとどうとでもなる、私の力では何も出来ない、私如きは取るに足りない存在だと、そう言っているのだ、この女は！！

「力こそが私の全てだ！！教官の教えを受け、それに従い、そうして手に入れた、この力こそがっ！！強者たること、それだけが私の存在意義だ！！それを、貴様はっ……！！」

「……」

闇の中、ようやく見つけた、一条の光。

絶望の底で、差し伸べられた、暖かな手。

何もなかった私が、初めて手に入れた、たったひとつの願い。

――それを、この女は踏みにじった。

「何故だっ！！何故貴様が教官に認められる！！何故私ではない！？貴様の何が、私より優れていると言うのだっ！！」

「……」

「私と戦え、井上真改！！証明してやる、貴様の力など、教官の足下にも及ばないと！！教官こそが最強だとっ！！」

「……」

そうだ、教官は、私よりも遙かに強い。
ならば私が井上を倒せば、教官より強いものなどいなくなる。

――教官こそが世界最強だと、証明できる。

「逃げるなど許さん、貴様の力、私に示してみろ！！その全てを叩き潰してやるっ！！

――さあ、私と戦え！！井上、真改――――！！」

「……」

未だかつて感じたことのないほどの激情。

魂の底から湧き上がる怒りを、そのまま音にして吐き出した、純粋な言葉。

それを受け、井上は――――

「……断る……」

――やはり、戦おうとは、しなかった。

「……き……さ、まぁぁぁっ……！」

憎しみの限りを込めたつもりだったのに、その声は、まるで泣いているかのようで。

私自信が驚いたその声を聞き、井上はようやく話し出す。

「……それは……」

――私と、戦うべきは。

「……己の役目では、ない……」

――井上真改ではない、と。

「……なに……？」
「……」
役目？役目だと？そんなものがあるものか、私と、戦う役目など。
「……一夏……」
「……！」
「……あれは、強い……」
――織斑一夏。私の最初の標的。
それが、強いだと？あの、ただ男でＩＳを動かせるというだけで騒がれているだけの者が？
「織斑一夏が強いだと？本気で言っているのか？」
「……応……」
そんな世迷い言、信じられる筈がない。
だがしかし、続く井上の言葉は、無視出来ないものだった。
「……己よりも、な……」
――ドクン。
心臓が、ひとつ大きく鼓動した。
井上は、自分よりも織斑一夏のほうが強いと言った。
そんな言葉は到底信じられない。
信じられないが――
「私が奴に勝てば、貴様は、私と戦うか？」

「……勝てば、な……」

その言葉に、ニヤリと笑う。
言質をとった。
ならば後は、織斑一夏を倒すだけだ。
そうすれば、井上は私と戦う。
そうすれば、私は証明出来る。

――――教官の、力を。

「……その言葉、忘れるな」
「……」

井上が頷く。
ならば、私は織斑一夏を排除する。
元々それが目的だったのだ、紆余曲折あったが、結局は最初に戻ったわけだ。
私のやることに、変わりはない。

――――しかし。

「何故、私と組む？」

そう、それは私が織斑一夏と戦う理由であって、井上が私と組む理由にはならない。
私と組むということは、井上も織斑一夏と戦うということだ。
織斑一夏を守ろうとしていた井上が土壇場で裏切る可能性は、否定できない。

「……己の、役目は……」

井上が、私と組む理由。
井上が、織斑一夏と戦う理由。
それは――

「……一夏が越えるべき、壁だ……」

――織斑一夏の成長の、礎となるためだった。

「……そんなことのために？」
「……」

私の問いに、頷きもしない。
もはや話すことはないと、その態度が示していた。

「織斑一夏には、私と戦う役目がある。
貴様には、織斑一夏と戦う役目がある。
しかし織斑一夏と戦う前に私と貴様が戦えば、どちらかの役目が果たされなくなる。だから、私と貴様が組む。
……そういうことか？」
「……」

肯定はしないが、否定もしない。
多少の間違いはあれど、概ね正しい、そんなところだろう。

「……貴様が織斑一夏を倒し、私が倒したのではないから約束は無効だ、などとは言わんだろうな」
「……反故にはせん……」

いいだろう、井上の思惑についてはまだ分からないことはあるが、

私のやるべきことは決まった。

織斑一夏を倒す。
その後、井上真改を倒す。
そして、教官の最強を証明する。

それだけだ。他のことなど、私には、どうでもいい――

――――――――

ラウラが書類に署名し、食堂を去って行ったのを確認してから、驚かせてしまった生徒たちに頭を下げ、己も食堂を出る。
と、そこで、聞き慣れた声を掛けられた。

「損な性格をしているな、お前も」
「……」

壁に寄りかかりながら腕を組んで、呆れたような顔をしている千冬さんだ。

「とりあえず、礼を言う。ラウラがああなってしまったのは、私の責任でもあるからな」
「……無用……」

千冬さんから礼を言われるなど、いつ以来か。
妙にくすぐったい。

「私からも、ひとつ訊きたいのだが」
「……」
「何故そこまで、あいつに肩入れする？」
「……」
さて、あいつとはどちらのことか。
ラウラか、それとも一夏か。
「両方だ。そうだな、まずはラウラの方から聞こうか」
「……力だけでは……何も、得られん……」
ラウラは力に取り憑かれている。
そしてより大きな力を求めるあまり、他が何も見えなくなっている。
彼女は言った、『強者たることだけが、私の存在意義だ』と。
そんなことはない。
そんな存在を、千冬さんがこれほど気にかける筈がないのだから。
「流石は孤児院の年長者と言ったところか。道に迷っている子供は、放っておけんか」
「……」
それは買いかぶり過ぎだ。
己は見知らぬ他人など、必要ならいくらでも切り捨てる。
ただラウラの在り方が、昔の自分に重なっただけだ。
「では織斑は？お前のことだ、まさかあれに惚れているなんてことはないだろう？」
「……」

ニヤニヤと笑いながら、からかうような口調で言う。
まあ確かに、己が一夏に惚れることなど有り得んだろうが。

「……弟のように、思っている……」
「……ほう」

千冬さんが、少し驚いたような顔をする。
意外だな、とうに気付いていると思っていたが。

「……役目を奪うつもりはない……」
「……当然だ。あれの姉は案外疲れる。私以外に務まるものか」

嬉しそうな、照れくさそうな、千冬さんの声。
この人がいる限り、一夏が道を外れることはあるまい。
己は精々、千冬さんの立場上手の届かない所を補うくらいだ。

「……信じていいんだな」
「……」

何を、とは問わない。
千冬さんからすれば、己のような訳の分からない者を一夏の側に置いておくのは不安だろう。
一年一組に国家代表候補生が集中していることや、シャルが男装してまで一夏のルームメイトになったことからも分かるが、一夏の利用価値は計り知れないのだから。

――――だと、言うのに。

「……信じるぞ、井上。何時までもうだうだ悩むのは性に合わん。

私はもう、お前を信じることにした」
「……」
そんなことを言えるこの人は、やはり一夏の姉なのだと思った。
「……ありがとう……」
「礼などいらん。むしろ私が言う側だ。
……そして、すまない。お前のことは幼い頃から知っていたと言うのに、私はお前を疑っていた」
「……」
「だが、それももうやめだ。お前は昔から何も変わらん、愚直なままだ。疑う方が馬鹿を見る」
呆れたように言う言葉には、しかし確かに暖かさがあった。
「これからも、宜しく頼む。織斑にはお前が必要だ。私にもな」
「……」
「では、今日はもう休め。放課後の一件で疲れたろう。お前の頑丈さは知っているが、無理はするなよ」
「……承知……」
そうして寮に向け歩いて行く。
その、背中に。
「お前が一夏を弟と思っているように。
……私もお前のことは、妹のように思っているよ、真改」
「……」
優しさの中にも、からかいが含まれた声色。
本心から言ってくれているのは分かるが、同時に己の反応も楽しも

うというのだろう。

……残念だが、そうはいかん。

顔だけ振り向いて、やはりニヤニヤと笑っている千冬さんに言ってやった。

「……おやすみ……千冬姉……」

「……な」

途端、かあっと赤くなる千冬さん。

それを見届けてから、再び歩き出す。

……口元に浮かんでしまった笑みを、見られないうちに。

――――――――――

「一戦目で当たるとはな。これでは井上と組んだ意味がない」

「……」

「……抽選で決まった、ってわけじゃあ、ないんだな」

「シン……どういうつもりなの？」

アリーナ中央で対峙する四人。

織斑一夏――白式。

シャルル・デュノア――ラファール・リヴァイヴ・カスタム？。

ラウラ・ボーデヴィッヒ――――シュヴァルツェア・レーゲン。

井上真改――――朧月。

全員が専用機持ちということで、この試合の注目度は群を抜いている。

さらに学園の生徒にとっては、学園で二人だけの男子のチーム、そして一夏と真改、有名な幼なじみ同士の対決ということもあり、ほとんどの生徒がこの試合を見ている。

かくいう私も、山田君と一緒に観察席からモニターで試合の様子を見ている。

「まさか幼なじみが相手では戦えない、とは言わないだろうな」

「言わねえよ。そりゃショックだけどさ、シンのことだ、何か理由があるんだろ」

「……」

「僕もシンを信じるよ。友達だからね。

……だから、手は抜かない」

開放回線で行われる、四人の会話。

まだ一月も経っていないというのに、デュノアにここまで信頼されるとは、本当に不思議なやつだ。

「どうなりますかね、この試合。ボーデヴィッヒさんと井上さんのペアは、かなりの実力があると思うんですが……」

「ああ、一年では間違いなく最強の二人だ。デュノアがどこまで食い下がれるかな」

山田君の言葉に答える。
軍人として極めて高い能力を持ち、ＩＳの操縦にも精通しているラウラ、そして生身では一年どころか学園でも最強クラスの戦闘力を持つ真改。
この二人は、他のどのペアと比べても圧倒的だ。

「けど井上さんの月光は、織斑君の零落白夜とは相性が悪いですよね？勝てる可能性もあるんじゃ……？」
「山田君は井上を剣士だと思っているようだな。それは間違いではないが、しかし井上はただの剣士ではない。剣が折れた程度では、あいつの力は微塵も衰えんさ」
「はー……。織斑先生は、随分井上さんのこと評価してるんですね」
「む……まあ、私と互角に戦えるのはあいつくらいだからな」

しまった、話し過ぎた。
山田君は最近妙に私をからかってくるので、あまりネタを与えるわけにはいかない。

「んん！とにかく、単純な実力では話にならん。織斑とデュノアがどれだけ連携をとれるかが、勝敗を分けるだろうな」

ラウラの狙いは一夏を倒すことだけだ。
真改と協力するつもりは、おそらくないだろう。

「織斑一夏。貴様を排除する。貴様だけは、私の手で倒す」
「悪いが負けるつもりはないぜ。力じゃかなわないかもしれない。けど足りない力はチームワークで補ってみせる。一人で戦うつもりのお前には負けねえよ。
行くぜ、シン、ラウラ。勝つのは――俺と、シャルだ」
「伝えたいことがあるなら言葉にすればいいって、一夏が教えてく

れた。言葉にしなくても伝わることがあるって、シンが教えてくれた。だから僕は、言葉と、行動で伝えるよ。
――絶対に、勝つ」
「……推して参る……」

そして今。
開戦の狼煙があがる。

――――――――――

試合開始のブザーと同時、まず動いたのは、織斑一夏と井上真改。
お互いに瞬時加速を発動、一瞬で間合いを詰める。

「おおおぉっ！」
「……ッ！」

初撃は互いに居合いの形。
左腰にあてた右腕を、横薙に振り抜く。
零落白夜と月光、必殺の威力を持つふたつの刃が噛み合い――その瞬間、月光が消滅する。

（いける！月光じゃあ、零落白夜とは打ち合えない！）

零落白夜はあらゆるエネルギーを消滅、無効化する武装である。
膨大なエネルギーを刃とする月光にとっては、考え得る最悪の相性といえる。

なにせ敵の刃に触れただけで消えてしまうのだから。

「はあっ！」

一夏は勢いのままに零落白夜を振り上げ、二撃目を放とうとする。
真改の月光は沈黙したまま。零落白夜により刃を失った月光は、再起動までに数秒の時間を要する。
その時間こそが、一夏にとって唯一のアドバンテージである。

――しかしその程度、真改が考えていない筈がない。

ガンッ！
「がはっ……！？」
「……」

一夏が剣を振り上げた瞬間、真改はさらに間合いを詰めた。
そのまま一夏にタックルし、腰に右腕を回してしっかりと抱え込む。

そして水月を起動、抱えた一夏ごと、一気に加速する。

ゴウンッ！
「うおおぉぉっ！？」
「……」

爆発的な加速を受け、一夏の体勢が崩れる。
さらに月輪を噴かし、その光で螺旋を描きながら尚も加速、アリーナの遮断シールドに向け、錐揉みしながら一夏を投げつける。

「なん……のおぉ！」

しかし一夏の反応は速かった。投げられた瞬間に瞬時加速を発動、遮断シールドに激突する直前で停止した。

「いきなり伊綱落としかよ……！」

ＩＳの保護機能により、ブラックアウトはどうにか防いだ。体勢を立て直そうとする一夏に、真改の追撃が迫る。

再起動した月光を振り上げ、上段からの一撃。

翳した零落白夜で打ち払い、続けて胴を薙ぐ。

真改は素早く後退してそれをかわし、月影を起動、散弾の雨を降らせ――ようとして、突然回避行動をとった。

「させないよ！」

背後から放たれた、シャルロットの六一口径アサルトカノン〔ガルム〕の爆破弾を避ける。

一夏への攻撃を中断し、真改は武装をアサルトライフルに持ち替えたシャルロットと対峙した。

「貴様は私の獲物だ！」

「いいぜ、相手になってやる！」

ラウラはシャルロットを相手にするつもりはないようで、一夏に突撃していく。

一夏の援護に向かったシャルロットと、それを止めようともせずに一夏に執着するラウラ。

両チームの連携の差が、すでに大きく現れていた。

「僕が相手になるよ、シン！」
「……来い……！」

友人であり、恩人でもある真改を前に、シャルロットの眼には闘志が漲っている。

（負けないよ、シン！僕は、戦うって決めたんだから！）

月輪による変則機動を繰り返しながら迫る真改に、アサルトライフルを連射。
高い機動力をもつ朧月を牽制しながら、月光の間合いに入れないように下がり続ける。

こうして、試合は早くも、一対一の状況がふたつ出来上がった。

――それこそが一夏とシャルロットの策であると、誰も気づかぬままに。

第１９話　役目（開戦編）（後書き）

学年別トーナメントの決着は次回に持ち越しです。
一夏対ラウラ、シャル対真改の構図ができたわけですが、さて、どうなるか……。

自分で書いててわかりにくいと思ったので説明しますと、最後のほうでシャルがシャルロットとなっていたのは、三人称視点だったからです。

第２０話　役目（激戦編）（前書き）

まずは土下座させていただきます。
ポケットを叩いたら話がみっつになりましいえ嘘ですゴメンナサイ。

なんかやたら長くなってしまったので、当初二話の予定だった〔役目〕を三話にしました。
本当にごめんなさい！次こそ、次こそは終わらせますから！

第２０話　役目（激戦編）

「はあぁぁっ！」

両手に持った六二口径連装ショットガン〔レイン・オブ・サタディ〕を連射する。

僕とシンの距離は、この銃の間合いにはまだ遠い。

けれど威力が落ちるかわりに、攻撃範囲は広くなる。

機動力と攻撃力を合わせもつ朧月を近づけるのはまずい。

水月と月光で一瞬でやられてしまうかもしれない。

だから余裕のある距離から、少しずつシールドエネルギーを削る作戦だ。

――だけど、シンはそれを避け切った。

「ほんと、デタラメだね……！」

「……ッ！」

ショットガンの弾が切れた。

一体どうやって見切ったのかはわからないけれど、シンは弾切れと同時に突撃してきた。

理想的なタイミング。

けれどそれは、僕と〔ラファール・リヴァイヴ・カスタム?〕には通用しない。

「――いらっしゃい」

「……！」

武器をマシンガンに持ち替える。

高速切替（ラピッド・スイッチ）。
ラファール・リヴァイヴ・カスタム？の大容量拡張領域を活かす、僕の得意な技術。
実弾兵器主体の機体が持つ弱点、リロードの隙は、僕には存在しない。

ガガガガガガッ！

至近距離からのフルオート射撃。
だけどシンは、起動した月光の光を盾のように構えて、すべての弾丸を焼き尽くした。

「そんな……！？」
「……ッ！」

ガコン、と、水月の装填音が聞こえた。
この距離じゃ逃げ切れない。
後ろに退がっても、上下左右に避けても、きっとシンは食らい付いてくる。

――――なら……！

「はあぁぁっ！」
「……ッ！？」

逃げられないなら、前に出る！
スラスターを全開にして前進しながら、居合いの構えで突っ込んできたシンの右腕に向けて、右足を突き出す。

ガンッ！

「うあ……！」
「ぐっ……！」

ギリギリのタイミングで間に合った。
水月の加速を受け止めたことで膝が悲鳴を上げたけど、今はそんなことを気にしていられない。
シンの右腕を抱えこんで拘束し、左手に持ったマシンガンをシンのこめかみに突きつける。

「これなら……！」

――外さない。

引き金を絞り、銃弾を撃ち込む。
けれど撃てたのは数発だけで、僕はすぐに吹き飛ばされた。
僕に抱えられたまま、シンが月輪を起動したからだ。

「くぅ！」

腕一本が丸ごとスラスターになってる月輪の推進力は凄まじく、遠心力によって僕は拘束を緩めてしまった。
するとシンは僕のお腹に右肘を叩き込んで引き剥がし、回転の勢いのまま月輪で斬りつけて来た。

ガギィンッ！
「つう……！」

咄嗟に展開した近接ブレードで月輪を防ぐ。
両手でブレードを構えたけど、その両手を痺れさせて僕を弾き飛ばした。

（なんて推進力……！こんなものを制御してたの！？）

再び距離が離れた僕目掛けて、シンが突撃してくる。
マシンガンと再装填したショットガンを連射するけど、衝撃の抜けきってない両手ではシンを追い切れない。
瞬く間に距離を詰めてくる。

（なんとかあの機動を封じないと……！）

朧月の機動力は桁外れだ。
直線の水月と、曲線の月輪。
このふたつを使って複雑で高速な三次元機動を行う。

（空中じゃダメだ！危険だけど、一旦降りる！）

剣士であるシンの技量は、両足をしっかりと踏ん張れる地上でこそ発揮される。
僕の個人的な感覚だけど、地上では空中での倍は剣技が鋭くなる。
けど、朧月の機動力は制限できるはずだ。
懐に入れさえしなければ、抑え切れる。

そう考えて、射線を上にズラしてシンの上昇を封じる。
合わせて僕も高度を下げ、シンを地上に誘い込んだ。

（さあ、真っ向勝負だ……！）

地上に降りたシンは案の定、時々地面を蹴ることでさらに速さを増してきた。
けど僕の目論見通り、上下の動きはなくなった。

（大丈夫、追える！これなら……！？）

失敗に気付いた時には遅すぎた。
やっぱり、いくら狙い難くても空中戦を続けるべきだった。

シンはある程度近付いてくると、突然月光の刃を地面に突き立てた。
何を、と思う間もなく、シンはそのまま月光を振り上げる。

「な……！」

超高熱により一瞬で蒸発した土が爆発的に体積を増し、周りの土ごと巻き上げて僕に迫る。
視界いっぱいの、土砂の壁。
ＩＳの防御力があれば、そんなものは何も怖くない。

――その影に、必殺の剣を構えた侍さえ、隠れていなければ。

どう考えても危険過ぎるそれから逃げるために、全速力で後退する。
けどシンより先に、握り拳くらいの大きさの弾頭が土砂の壁を貫いてきた。

カッ――――！

「……！！？」

凄まじい閃光に、思わず目をつむる。
けどこの光はハイパーセンサーに干渉しているのか、視覚を直接光で埋め尽くしてくる。
本能的に体が硬直した。
時間にすればほんの数秒。

そしてそれは、シンが相手では永遠と同義だ。

ヴオンッ！

月光の音。

それが、真っ直ぐに僕に近付いて来て――――

――――――――――

「おおおぉおっ！」

「はあぁぁっ！」

俺の雪片弐型とラウラのプラズマ手刀が激突する。

軍隊仕込みの格闘術が容赦なく俺に襲いかかるが、俺だってずっと剣の鍛錬を続けていたんだ。

接近戦だけなら、遅れを取るつもりはない。

「ふん、剣一本でよく粘る！」

「優秀な師匠が三人もいるもんでね！」

剣を振るう心は、千冬姉が教えてくれた。

剣を振るう技は、箒が魅せてくれた。

剣を振るう体は、シンが鍛えてくれた。

俺の剣は、俺だけの剣じゃない。

しかしその言葉はラウラの逆鱗に触れたようだった。
ついさっきまで酷薄な笑みを浮かべていたというのに、今では憎悪に歪んでいる。

「貴様まで、教官の教えを受けたと言うのかっ！」
「当たり前だ！千冬姉は、俺の姉さんだ！」
「認めんぞ……！貴様如きが、教官の弟だなどと！」
「そうかい！まあ確かに、俺には勿体ないくらいの姉さんだぜ！」
「貴様ぁぁぁ……！！」

俺の言葉に激昂するラウラ。
シュヴァルツェア・レーゲンから六本のワイヤーブレードが射出された。
俺を囲い込むように複雑に動くそれと、プラズマ手刀で全方位から同時攻撃を仕掛けてくる。

「消えろぉぉっ！」
「おおおぉ！」

プラズマ手刀だけならどうにかなるが、さすがにこれは厳しい。
ワイヤーブレードは数が多いだけでなく、なにより軌道が読み難い。

――だが、これを見るのは初めてじゃないんだ。対策くらい考えてある。

「おらぁっ！」
「なにっ！？」

瞬時加速を発動、突き出されたプラズマ手刀を雪片弐型を縦に構えて捌き、ラウラの右側に抜ける。

この近距離だ、いくらラウラでも反応しきれまい。
俺もラウラ自身に攻撃を仕掛けるほどの余裕はないが、それが目的ではないので問題ない。

――俺の狙いは、ワイヤーブレードだ。

縦に構えたままの雪片弐型が、右腰から伸びる二本のワイヤーブレードを根元から切断する。
そう、先端の動きが読めないのなら、根元を狙えばいい。
ワイヤーブレードは強靭な造りをしているが、対ＩＳ用近接ブレードの斬撃に耐えられるほどじゃない。
ましてや衝撃を逃がすことの出来ない根元ならなおさらだ。振らずとも、加速と重量に任せて押し当てるだけで十分に斬れる。

「これで腕は残り六本！足と合わせて八本だ、烏賊から蛸になっちまったな！」
「おのれ……おのれえぇぇぇぇっ！！」

ラウラが俺に向けて両手を突き出す。
これの正体は鈴とセシリアから聞いた。

アクティブ・イナーシャル・キャンセラー
ＡＩＣ。
対象の動きを止める第三世代型兵器。

俺のような近接戦闘主体の者には天敵といえる兵器だが、今は瞬時加速により距離が離れている。
避けるだけならなんとかなる。

「ちぃっ、ちょこまかと……！」

俺の動きを制限しようと、残った四本のワイヤーブレードが伸びてくる。
さらには肩の大型レールカノンの連射。
中距離はラウラの独壇場だ、一旦距離を取るか、もう一度近付かないと。
だが俺は近接ブレードしか武器がない。
近づかなければ攻撃出来ない。
そしてラウラの攻撃を掻い潜って近付くにはダメージを覚悟しなければならず、距離が離れれば離れるほど、接近の際に払う代償は大きくなる。

そう判断し、俺は前傾姿勢を取り、一気に加速した。

――――後ろへ。

「なに……！逃げるか、臆病者め！」
「言ってろ！」

そうだ、ラウラの罵倒なんて気にする必要はない。

――――なにせパートナーがピンチなのだ、俺のプライドなんて、秤にかけるまでもない。

「シィィンッ！！」
「……！」

地上戦に移り、硬直しているシャル目掛けて振り上げられていた月光に、零落白夜を叩きつける。
そのまま落下の勢いを乗せた蹴りを放つが、それはあっさりかわされた。

俺は攻撃の手を緩めることなく零落白夜を振り上げようとするが、
シンはさらに零距離まで間合いを詰めて、理解の範疇を超えた動き
で俺の右腕を絡めとった。

「ぐあっ……！」

関節技。そして動けなくなった俺に、月影が向けられる。

この距離で月影の連射を浴びれば、一瞬でシールドエネルギーが空
になる。
さらに言えばシンの関節技は完璧で、右腕だけで完全に俺の動きを
封じていた。
まさに万事休すだ。

――――戦っているのが、俺一人なら。

「――――ようやく、動きが止まったね」
「……！」
ドガァンッ！

三連装の砲身が回転を始め、発射寸前だった月影が爆散する。
理由は言うまでもない、硬直から立ち直ったシャルによる攻撃だ。
そう、関節技で俺の動きを止めている間、シンも動きを止めている。
俺一人なら、このまま為す術なく倒れていただろう。
だが俺は一人じゃない。

足りない力はチームワークで補う――――そう言ったはずだぜ、シン。

そう、これこそが俺たちの作戦。
ラウラとシンを同時に相手するのは危険過ぎる。

ならまずは一対一の状況をふたつ作り、機を見て合流、対多数に向いていない朧月を、奇襲でもって先に沈める――！

ドンドンドンドンッ！！

アサルトカノンの連射。

シンはすぐに離脱しようとしたが、今度は俺がシンの右腕を掴んでそれを阻止する。

「逃がすかよっ！」

「ぬぅ……！」

しかしシンはやはりとんでもなかった。

俺に右腕を掴まれたまま、僅かな動きだけで弾丸の直撃を防いだのだ。

「なら……！」

シャルがアサルトカノンを撃ちながら近接ブレードを展開し、突っ込んでくる。

いくらなんでもこれはかわせまい、そう思ったが、シンはどこまでも俺の想像を超えていた。

シンは水月を起動、その加速力でもって、俺に強烈な頭突きを叩き込んできた。

「ぐおっ……！」

「……ッ！」

ＩＳの防御を貫通したのだろう、シンの額から血が吹き出るが、そ

んなことを気にするやつではない。
続いて月輪を起動、俺を斬りつけて弾き飛ばしつつ右腕を引き抜き、目前まで迫っていたシャルを目掛け、光の刃を振り抜いた。

「ぐあああああっ！」
「うわあああああっ！」

シャルは直前で急ブレーキをかけて直撃だけは防いだが、右腕の装甲と近接ブレードを吹き飛ばされた。
俺は重い斬撃を受け、零落白夜の連発もあってか既にエネルギーが三割を切っている。

（くそっ、このままじゃ……！）

見れば、ラウラがもうすぐ近くまで来ている。
今シンを倒せなければ、俺たちの負けだ。
この作戦は二度も通じない。
ラウラはそれでも俺に執着するかもしれないが、シンの方が合わせるだろう。

そうなればもう、打つ手がない。

だから、今、シンを倒さなくちゃいけないのに――――

――――――――――

――強い。

僕たちの作戦はほとんど成功していた。

一対一で戦いながらもお互いの状況を確認、タイミングを図って一夏がボーデヴィッヒさんを振り切り僕を援護、そのままシンを挟撃、一気に決める――

挟撃までは上手くいった。月影も破壊できた。

朧月は機動力重視で、装甲はそれほど厚くない。

だから動きさえ止められれば、集中攻撃で倒せると思ったのに。

――本当に、強い。

技術だけじゃない。

技術ならむしろ、僕やボーデヴィッヒさんの方がシンより上だ。

射撃武器である月影を機動中に撃ってこないのは、使いこなせてないからだ。

シンの技はあくまで剣士としてのものであって、ＩＳの操縦技術そのものは一般生徒と大差ない。

――なのに、こんなにも強い。

シンの強さは、心の強さ――精神面での強さだ。

どんなに有利な状況でも決して油断せず、どれほど不利な状況でも絶対に諦めない。

どんな時も勝利への道を模索し、必要なら自分の身を危険に晒すことも、それによって傷付くことも厭わない。

シンには、どんな技もあっという間に身につけるような才能はなか

った。
シンには、大きさと重さで相手を圧倒できるような恵まれた体はなかった。
だからシンは、どんな逆境にも耐えられて、どんな強敵にも怯まない、不屈の心を手に入れた。

（……勝ちたい）

シンの戦い方は一生懸命で、がむしゃらで、泥臭くて、だからこそ、とても綺麗で。

（シンに、勝ちたい）

シンは普段の様子からは想像もつかないほどに、熱い魂を持っていることがよくわかる。
戦いに対してとても真摯で、その姿は見る人の心をうつ。

（僕は、シンに勝ちたい！）

今もシンはピンチを撥ね除けて、一夏と僕を吹き飛ばした。
そしてそのまま月輪を振り上げ、僕目掛けて突っ込んでくる。

（勝ちたい――――ううん！）

――――これが、最後のチャンスだ。

ボーデヴィッヒさんはもう、すぐそこまで来ている。
合流されれば、消耗したラファール・リヴァイヴ・カスタム?と白式じゃ、あっという間に押し切られる。

ここでシンを倒せなければ、僕たちの負けだ。
けれど、ここでシンを倒せれば――――！

（絶対に、勝つ！！）

スラスター全開、吹き飛ばされそうになるのを全力でこらえる。
上体を捻り、有りっ丈の力を左腕に込めた。

ガシュン、と、左腕に取り付けられていたシールドがはじけ飛び、
中から巨大な杭打ち機が姿を現す。

「行くよっ！！」
「……ッ！！」

それは、第二世代型最強の威力を持つ兵器。
六九口径パイルバンカー、〔灰色の鱗殻（グレー・スケール）〕。
通称、〔盾殺し（シールド・ピアース）〕

――――僕の、切り札。

「あああぁぁっ！！」

左拳を握り締め、渾身の力を込めて叩きつける。
シンが振り下ろした、月輪へと。

ズガンッ！！
「くあああっ！！」
「があっ……！」

大量の炸薬により撃ち出された鉄杭が月輪に突き刺さり、粉砕する。
頑丈な月輪の外郭がひしゃげ、損傷したエネルギーバイパスが圧力に耐えきれず、月輪を爆散させた。

――まだだ。これくらいじゃあ、シンは倒れない――！

「おおおぉぉっ！！」
「……ッ！！」

シンは爆発に体勢を崩されながらも月光を振り上げた。
僕も振り抜いた左腕を引き戻して二撃目を放とうとするけど、間に合わない。

シンの方が一拍速い。
今度こそ紫色の極光が僕を捉え、ラファール・リヴァイヴ・カスタム?を機能停止に追い込むだろう。

（それでもっ！最後まで、諦めて、たまるもんか――！）

そうだ、最後まで、絶対に諦めない。
だって僕には、一緒に戦ってくれる、仲間がいるんだから――！

――――――――――

ほんの少しでも絶望した自分が恥ずかしい。

相棒が必死に頑張ってるってのに、ほんの一瞬とはいえ、俺は諦めかけた。

――ふざけるな、それは、それだけは、俺がしちゃあならねえだろうが――！

「逃がすものか、織斑一夏ぁっ！！」

追い付いて来たラウラがワイヤーブレードを伸ばす。
構うもんか、今はもっと、優先することがある。

「おおぉらあぁぁっ！！」

瞬時加速を発動、シンに最後の突撃をかける。
ワイヤーブレードが、無防備になった白式の装甲を切り刻んだ。

知ったことか、その程度はくれてやる、だからラウラ、俺はお前の相棒を貰う――！

零落白夜を振るう。
この距離からじゃシンには僅かに届かないが、俺の狙いはシン自身じゃない。
俺が狙うのは、シンの右腕から伸びる光の剣。
力を込める必要なんてない。
ただこの切っ先が、ほんの僅かでも触れさえすればいい――！

「行っけぇっ、シャアアァルゥゥゥッ！！」
「おおおあぁぁっ！！」

月影、月輪、月光。すべての武器を失って、それでもシンは足掻き

続けた。右拳を握り締め、一時的にただの金属の塊と化した月光で、シャルを殴りつける。
しかしそれくらいじゃあシャルを止められないことは、シンも分かっている筈だ。
なのに何故、そうまでして足掻くのか。

――簡単だ。たとえほんの少しでもシールドエネルギーを削れば、残されたラウラがそれだけ有利になるからだ。

（ったく。お前ってやつは）

その真面目っぷりに思わず苦笑が浮かぶ。
そんな俺に、シンは一瞬だけ振り向いた。
その口元が、ほんの少しだけ笑っている。
それが、子供の成長を喜ぶ母親の笑みのように、俺には見えた。

ズガンッズガンッズガンッ！！

パイルバンカーの三連撃。
月輪の爆発により既に大きなダメージを受けていた朧月は沈黙、シンは片膝を着いて動かなくなった。

「私と戦え、織斑一夏ぁっ！！」
「てめぇはっ……！相方やられて、言うことはそれだけかっ！ラウラ、ボーデヴィッヒィィッ！！」

プラズマ手刀とワイヤーブレードの波状攻撃を必死に捌きながら、

ラウラへ突撃する。
こいつは俺以外は眼中にない。シンの戦いすらも、こいつにはどうでもいい。

いい度胸だ、その傲慢、身を持って後悔させてやる！

「何故だ、何故貴様なんぞが、教官の弟なのだっ！」
「知るかそんなもん！大事なのは生まれじゃねぇ、生き方だっ！」
「貴様が……！選りに選って貴様が、教官の栄光を汚した貴様が、それを言うのかっ！！」

ラウラの言うことはもっともではある。
だがそれは、言い方は悪いが過去の話だ。
過去を変えることは出来ない。
なにをどうしたところで、失ったものは戻らない。
千冬姉の栄光も、シンの左腕も。

「君は過去のことばかりだ、ちっとも前を向いてない！いつまで同じ所で足踏みしてるつもりなの！？」
「部外者が、口をだすなあ！」
「部外者じゃねえ！俺の仲間だ！！」

合流したシャルの、銃弾と言葉による援護。

知らなかった。一人じゃないってことが、こんなにも心強いとは！

「行くぜラウラ！俺たちは、お前には負けない！」
「君はシンの戦いを侮辱した！絶対に、謝ってもらうから！」
「いいだろう、二人纏めて叩き潰してやるっ！」

状況は完全な二対一になったが、それでもラウラとシュヴァルツェア・レーゲンの能力は脅威的だ。
加えて俺もシャルもかなり消耗している。
決して楽な戦いじゃない。

「さっきから聞いてりゃ教官、教官と！千冬姉はもう教官じゃねえ！」

「黙れ！あの人はいつまでも、私の教官だ！！」

「それが過去のことばかりって言ってるんだ！君は織斑先生に縋ってばかりで、あの人の教えをちっとも理解していない！！」

「黙れ……黙れぇぇぇっ！！」

プラズマ手刀で俺と戦いながら、ワイヤーブレードとレールカノンでシャルを牽制する。
その狙いはどちらも正確で、ラウラの尋常ならざる技量を物語っている。

「貴様に何がわかる！私にはあの人しかいない！あの人から与えられた力しか、私にはない！！」

「ざけんな！千冬姉から力しか与えられなかっただと？！そりゃあ千冬姉に対する侮辱と見ていいんだなっ！！」

ラウラの猛攻に、俺もシャルも攻め切れない。
拮抗状態。この状況は、消耗した俺とシャルに不利だ。いずれ押し切られるのは目に見えている。

だから、強引に攻める！

『行くぞ、シャル！』

『合わせるよ、一夏！』

「「はあぁぁっ！」」

二人で同時に突撃をかける。
その捨て身に近い攻撃で俺もシャルもダメージを受けたが、ラウラとの距離は詰められた。
シャルが武装をショトガンに変更、ワイヤーブレードに貫かれながら、装填された弾丸を一気に撃ち尽くす！

「があぁぁっ！」

それを受け、ラウラのレールカノンが爆散、シュヴァルツェア・レーゲンにも大きなダメージを与える。

「これで五分ってところかっ！」
「このまま一気に行くよっ！」
「ぐううう……！」

ラウラが悔しそうに呻く。しかしその眼に宿る憎悪は増すばかりで、攻撃はさらに激しくなった。

「排除してやる、織斑一夏！貴様さえ、貴様さえいなければ、教官は……！」
「その手の言葉はなあ、とっくの昔に、言い飽きてんだよおぉぉぉぉっ！！」

俺さえいなければ。
そんな言葉は、何万、何億と繰り返して来た。
けれどそれがなんになる？
もしも、たら、れば、そんな言葉にどんな価値がある？
過去がなければ今はない。

けれど過去に縛られていては、未来に向かえない。
失われたもののために出来ることは、それをいつまでも引き摺ることじゃない。

「教官の栄光を奪っておいて、何故貴様はのうのうと生きている！」
「俺だけじゃねえ、みんな同じなんだよ！世界は犠牲の上に成り立ってる！俺たちが歩いている道は、大勢の屍で出来ている！」

歴史を見ればわかる。人類がその発展のために、どれほど多くのものを犠牲にしてきたのか。
それが必要なものだったと割り切れるほど、俺は大人じゃあない。
もっと上手くやれたんじゃないかって、終わったことに対してどうしようもないことを考えることはしょっちゅうだ。

――だけど。

「犠牲があっちゃ全部台無しになるのか！？誰かの屍の上にある幸せは全部嘘っぱちなのか！？そんなわけがねえ、犠牲が出たのなら、誰かが踏み台になったのなら、その人たちの分まで前に進むのが、俺たちの役目だろうが！！」
「いつまでも同じところで足踏みしてるってことは、いつまでも同じ人を踏みつけてるってことだよ！それじゃあ犠牲が無駄になってしまう、犬死にになってしまう！それだけは、許さない――！！」

千冬姉は世界最強の称号を放り出して、俺を助けてくれた。
シンは左腕を捨ててまで、俺を守ってくれた。
その事実は重い十字架となって、俺にのしかかっている。

けれど、だからこそ、誓ったんだ。

あの犠牲は、あの喪失は、決して無駄ではなかったのだと。

俺が、証明するんだ。

「だから俺は、お前には負けない！負けられない！
なにより、負けたくねえんだよ、ラァァァウゥラァァァァッ！！」
「駄々をこねるのはもう終わりだ！織斑先生の教え子なんでしょ、
君にも、前を向いてもらうよっ！！」
「消えろ……消えろ、消えろ、消えろ消えろ消えろ消えろぉぉぉぉ
っ！！」

俺たちの言葉を拒絶するかのように、ラウラはワイヤーブレードを
振り回した。
鋭利な刃が嵐のように吹き荒れ、俺とシャルを吹き飛ばす。

「まだこんな力が……！」

だが、いくらなんでももう限界のはずだ。
そしてそれは、俺たちも同じ。
次で、勝負が決まる。

「おおおぉ！」

雪片弐型を構え、スラスターを噴かす。
フェイントをかける余裕はない、一直線に突っ込む！

「無駄だっ！」

ラウラが右手を俺に向ける。
停止結界。

今の俺には、これを避ける手段はない。

――だから、前に伸ばした左腕で、それを受けた。

「馬鹿め！そんなことをしても、この距離では剣は届かん！」

「そいつは、どうかなぁっ！」

そう、この距離からでも剣は届く。

ＩＳに精通している者にこそ盲点となる攻撃手段が、俺にはまだ残っている。

思い出すのは、シンとセシリアの最初の試合。

あの時、シンが実演してみせたこと。

高速で動きまわるＩＳには投擲攻撃は当たらない。

だが、相手が止まっていれば話は別だ。

そして停止結界を発動したラウラは今、その動きを止めている――！

「行っっっけぇぇぇぇっ！！」

「な……にぃ！？」

ラウラ目掛けて、渾身の力を込めて雪片弐型を投げつける。

回転しながら自分に迫る刃に驚きながらもラウラは停止結界を解除、緊急回避を行った。

雪片弐型は、シュヴァルツェア・レーゲンには当たらなかった。

しかしその左腰から伸びるワイヤーブレードを二本、切り落とす。

残り二本。これなら――！

「「おおおおおっ！！」」

俺とシャルの咆哮が重なる。

シャルが構えるのは、第二世代型最強の威力を持つパイルバンカー、灰色の鱗殻。

俺は無手だが、掴みかかってでもラウラの動きを止める！

「おのれ……！おのれぇぇぇぇっ！！」

ラウラは無理な回避で体勢を崩していて、ワイヤーブレードも二本だけでは俺たちを抑え切れない。

瞬く間に距離を詰め、シャルが左腕を振りかぶり――

――――――――――

「……見事……」

バラバラだった己たちとは対照的に、一夏とシャルは最後まで二人で戦った。

その連携は素晴らしく、未熟な己では抑え切れなかった。

月輪は完全に壊れており、朧月も大破、エネルギーは僅かに残っているが、スラスターと月光を併用できるほどではない。

（……強くなったものだ……）

一夏も、シャルも。

互いを信頼し合い、決して諦めない心を二人は持っている。

一人で戦った己の敗北は、当然の結果と言える。

（……だが……まだ、詰めが甘い……）

では、最後の悪足掻きといこう。

――コード認証。水月、外装をパージ。

受け取れ。これは、己からの教訓だ。

――カートリッジ、残弾十二。……装填完了。

手負いの獣は、恐ろしいぞ？

――全弾、一斉起爆。……プログラム〔月渡（つきわたり）〕、起動します。

それに、ラウラは己の相棒だ。

己はまだ動けるというのに、敵を二人も任せられん。

一人くらいは、道連れにさせてもらう――――

――――――――――――

耳をつんざく轟音が聞こえたのは、紫色の光の剣が僕を切り裂いた後のことだった。

「な……！？」

それがなにかなんて、考えるまでもない。シンと、朧月の月光だ。

一体なにをしたのか、さっきまで地上にいたはずのシンが一気に飛び上がり、すれ違い様に僕に一撃を叩きこんでいった。

最後のエネルギーだったのだろう、シンは減速も出来ずにアリーナの天井に激突、そのままバウンドするように落ちていく。

（……まったく、無茶するなあ……）

けれど、シンらしい。きっと、ラウラの相棒として、役目を果たしたかったのだろう。

（ほんとに、生真面目なんだから）

どうやら朧月はまだ展開出来ているようだ。このまま落ちても大丈夫だろう、シンのことは心配いらない。

（なら僕も、役目を果たすよ！）

ラファール・リヴァイヴ・カスタム?は、今の一撃でシールドエネルギーが底をついた。
地面に落ちるまでは保つだろうけど、もう攻撃は出来ない。
一夏の白式も唯一の武器である雪片弐型を投げてしまった。
あとほんの少しなのに、ボーデヴィッヒさんにダメージを与える手段が残っていない。

――ボーデヴィッヒさんは、そう思っただろう。

「一夏ぁぁぁぁっ！！」

最後の力を振り絞って一丁の銃を展開、一夏に投げ渡す。

五五口径アサルトライフル、〔ヴェント〕。

以前一夏と訓練した時に、一夏と白式に使用許諾を出した銃。

一夏が、唯一使える銃。

「これで、終わりだあぁぁぁぁぁっ！」

銃を受け取った一夏が、マガジン内に込められた十六発の銃弾を発射する。
一夏の射撃は上手くないけど、この距離なら問題ない。
放たれた弾丸は、既に限界だったシュヴァルツェア・レーゲンに致命傷を与え。

勝った。僕がそう思った、その瞬間。

――異変が、起きた。

第２０話　役目（激戦編）（後書き）

以前感想で「ちょっと真改が弱い気がする」とおっしゃる方がいましたので、説明します。

真改は原作ではラスボスの一人、当然それに見合う実力を有しています。

しかしそれは十年以上乗り続けたネクストでの話で、ＩＳには乗り出してからまだ数ヶ月、その扱いにはまだ習熟しきれていません。

今の段階では真改も未熟ですが、逆に言えばこの先強くなる余地が残されている、ということです。

今回も読んでいただいてありがとうございます。

では次回、決着編をお楽しみにっ！

第２１話　役目（決着編）（前書き）

ようやく書けたぜ……。

いや、書くのは楽しいんですけどね？
ただ趣味を仕事より優先するわけにもいかず、けれど仕事のストレスは趣味で発散するしかなく……。

……やっぱ趣味優先でいいかなあ……。

第２１話　役目（決着編）

（活動限界だと……！？どうした、まだやれるだろう、シュヴァルツェア・レーゲン！）

だが、機体は応えない。

シールドエネルギーはほとんど残っておらず、レールカノンと四本のワイヤーブレードを失った。

（もう少し……！あと一息で仕留められるのだ！なのに、ここまで来て……！）

目の前には、憎き男の姿。骨董品の銃を構え、下手くそな射撃で私を狙っている。

そう、織斑一夏の射撃技術はひどいものだ。これでよく銃を使う気になるものだと、普段の私なら思うだろう。

（何故だっ！何故私が負ける！？私が貴様より劣っていると言うのか！？）

シュヴァルツェア・レーゲンはもう限界だった。

たった数発の弾丸が致命傷となるほどに。

その証拠に、機体表面に紫電が走り、強制解除の兆候を見せ始めていた。

（負けるというのか、この私が……？こんな男に、負かされるというのか……！）

それは、嫌だ。

私は、負けるわけにはいかない。
教官の栄光を奪っておきながら教官の優しい笑みを受けるこの男を、
私は認めない。
だから、叩き潰す。
そう決めた、はずなのに――

（……力が、欲しい）

そう、力だ。
力があれば、織斑一夏を倒せる。
力があれば、織斑一夏に勝てる。

力さえ――――教官ほどの力さえあれば、私は、織斑一夏を排除出来る。

『――願うか……？汝、自らの変革を望むか……？より強い力を欲するか……？』

だから。

力さえくれるのならば、相手が誰であろうと、構わない。

力さえ手に入るのならば、何を対価に捧げることになろうと、構わない。

どうせ、私には。

力以外は、何も無いのだから――

Ｄａｍａｇｅ　Ｌｅｖｅｌ……Ｄ．

Ｍｉｎｄ　Ｃｏｎｄｉｔｉｏｎ……Ｕｐｌｉｆｔ．

Ｃｅｒｔｉｆｉｃａｔｉｏｎ……Ｃｌｅａｒ．

《Ｖａｌｋｙｒｉｅ　Ｔｒａｃｅ　Ｓｙｓｔｅｍ》……ｂｏｏｔ．

――――――――

「……醜悪……！」

思わず呻くように呟いた己を、一体誰が責められようか。

それほどまでに、それはおぞましい光景だった。

「あああああああっ！！！！」

始まりは絶叫。

ラウラからそれが発せられると同時、シュヴァルツェア・レーゲンから激しい電撃が放たれる。

「な、なにが……！？」

「これは……！？」

そしてラウラが身に纏うＩＳが泥のように溶け、黒い、深く濁った闇が、ラウラの全身を飲み込んでいった。

「それ」はその表面を流動させながらまるで心臓の鼓動のように脈動を繰り返し、ゆっくりと地面へと降りていく。

そして地面にたどり着くと、急激に形を成していった。

現れたのは、ラウラの体型を模した『何か』。
腕と脚には最小限のアーマーを、頭部にはフルフェイスのアーマーを身につけ、目の箇所には装甲の下にあるラインアイ・センサーが赤い光を漏らしている。

だが、姿形などこの際どうでもいい。
問題は「それ」が、その手に持つ武器。
そして、構え。

「雪片……！」

思わず漏れたのだろう一夏の呟きに反応した、わけではないだろうが、刀を居合いに見立てて構えていた「それ」が、一夏へ向け、必中の間合いから必殺の一閃を放つ。

その一撃は、手にした刀や、構えと同じく。

紛れもなく、千冬さんの太刀筋を模したものだった。

「ぐうっ！」

その一撃を、シャルから借り受けたアサルトライフルで受ける一夏。

しかしアサルトライフルは真っ二つに断たれ、そしてそのまま上段の構えへと移る。

「！」

唐竹の一撃。

得物を失った一夏に、それを受ける術はない。

だから一夏は、素早く後ろへ退がることで避けた。

――その反応は、まるで相手の動きを予め知っていたかのようで。

（……やはり、あれは……！）

たが流石にあの間合いから完全に避けることは出来なかったようで、左腕から僅かに血が流れている。

白式も限界だったのだろう、光とともに解除されていく。

「……がどうした……」

俯いた一夏の呟き。

――まずい、この声色は……！

「それが、どうしたあっ！」

烈火の如き怒り。

最愛の姉を真似る者に対し、一夏は我を忘れていた。

無理もない。己には、一夏の気持ちが痛いほど良くわかる。

およそ、有り得ないことだが。
もし、あれが模しているのが千冬さんではなく、「彼女」であったなら。

己も、正気を保っていた自信はない。

「うおおおおっ！！！」

武器を失い、ＩＳを失い、ただの無力な生身の拳を振り上げて、一夏は「それ」に向かっていった。

理屈など関係ない。
そんなもの、濁流のような感情の前にはなんの意味もない。
そう言わんがばかりの、一夏の激情。

「おおおおあぁぁぁぁぁっ！！」

一夏に最初に剣を教えたのは千冬さんだ。
一夏は己の剣に憧れたと言うが、その根本にあるのは彼女の教えだ。
それを汚され、黙っているなど出来はしないだろう。

だが今の一夏にはなんの武器もなく、なんの防具もない。

ＩＳと戦えば、その先にあるのは、「死」だけだ。

だというのに、己には何も出来ない。
朧月は辛うじて展開出来ているが、シールドエネルギーはもう空だ。
スラスターを噴かすほども残っていない。
ここからでは、間に合わない。

だがそれでも、己にあるのは絶望ではない。
一夏には、共に戦い支えてくれる、仲間がいるのだから。
だから己は、己の役目を果たすとしよう。

――――――――

「一夏、落ち着いて！」
「離せ！あいつ、ふざけやがって！ぶっ飛ばしてやる！」
黒いＩＳに向け振り上げた拳は、しかし敵には届かなかった。
活動限界となりＩＳが解除されたシャルが、タックルで俺を止めたからだ。

だけどそれでも俺の怒りは鎮まらなかった。
鎮まるわけがない。
だってアイツは、千冬姉の真似をした。
それも形だけの、中身の伴わない、空虚な模倣。

剣とはなにか、それを振るう者はどう在るべきか、厳しくも優しく、千冬姉は俺に教えてくれた。
俺の剣の始まり、俺の剣の原点、俺が剣を取った理由。
箒との出逢いも、シンへの憧れも、全ては千冬姉から始まったんだ。
それを、アイツは――――！

「どけ、シャルっ！！」
「うわっ！」

俺にしがみつくシャルを引き剥がし、もう一度黒いＩＳに踊りかかった。
途中、地面に突き刺さっていた近接ブレード、シャルがシンに吹き飛ばされた〔ブレッド・スライサー〕を引き抜く。
その瞬間、今までこちらを見ようともしていなかった黒いＩＳが俺に反応し、雪片もどきを構えて俺に切りかかってきた。
今の俺は生身だ。
武器だけＩＳ用のものを持っていてもＩＳと打ち合えるはずがないが、そんなことはどうでもいい。

今はただ、コイツをぶちのめすことしか、俺の頭にはない――――！

「おおおあぁぁぁぁっ！！」
「――――！」
ガギィンッ！

だが、ＩＳは想いだけでどうにかなるような兵器ではない。
俺は一撃でブレッド・スライサーを弾き飛ばされ、続く二撃目が振り上げられる。
やはりそれは、俺が良く知る、この眼に焼き付いた太刀筋。
だけど、俺にはもう、これを凌ぐ手段が残されていない。

（畜生……ちくしょぉぉぉぉっ！！）

そして、忌々しい紛い物の刃が、俺の頭に振り下ろされ――――

――しゃらん、と。

どこまでも澄み切った、鋼の音が響いた。

「――え？」

「……」

そこに在ったのは、ボロボロの銀の装甲に身を包んだ、俺が憧れる少女の背中。

「……シン？」

それは、俺が投げた雪片弐型を持ち、黒いＩＳの斬撃を受け流したシンの後ろ姿だった。

「……ッ！」

ガギャンッ！

シンは返す刃で黒いＩＳを吹き飛ばす。

先ほどの斬撃を受け流した柔の剣とは真逆の、片腕でどうしてそんな威力が出せるのか不思議なくらいの剛の剣。

しかしそれは、人知を超えた神業でも、人の理を無視した魔技でもない。

地面を踏みしめる両足から得た力を全身でもって増幅しながら、余すことなく切っ先に伝えることで生み出される、ただ只管に鍛錬を

積み重ねることで身に着けた、どこまでも無骨な〔人の技〕だ。
――千冬姉に劣らない、俺の心に焼き付いた剣閃だ。

「……」

シンが黒いＩＳを睨み付ける。
距離が離れたからか、ヤツはこちらへの興味を失ったかのようにその場から動かない。

「一夏、大丈夫！？」
「ああ……」
「……」

心配そうな顔をしたシャルが駆け寄って来る。
シンのおかげで冷静になって、思い出した。俺の身を案じてくれたシャルを、俺は突き飛ばしてしまった。

「ごめん、シャル。俺……」
「……いいよ。けど、説明はしてくれる？」

溜め息ひとつで、シャルは俺を許してくれた。
その姿に、また罪悪感が湧き上がる。

「……あれは、千冬姉の剣だ。千冬姉だけの剣だ。それを、あんな風に真似しやがって……！」
「……空虚……」

そう、何より許せないのは、千冬姉の剣を真似されたことそのものじゃない。
ただ動きだけ再現すれば千冬姉の剣になるという、侮辱以外の何物

でもないその考えだ。

「許せねぇよ。千冬姉の剣は、ただの暴力じゃない。あんな形を真似ただけの偽物、絶対に許さねぇ……！」

「……けど、どうするの？白式はもうエネルギー切れだよ。ひどいことを言うけど、一夏には何も出来ないよ」

「わかってる！わかってるんだよ、そんなことは……！」

「……」

今ここにいる中で、ＩＳを展開できているのはシンだけだ。

しかし朧月ももうシールドエネルギーは残っていないはず。

雪片弐型も朧月の装備ではないから、その性能を発揮できない。

そして、なにより――

『非常事態発令！トーナメントの全試合は中止！状況をレベルＤと認定、鎮圧のため教師部隊を送り込む！来賓、生徒はすぐに避難すること！繰り返す――』

「一夏、ここは先生たちに任せよう。悔しいのはわかるけど、このまま戦っても……死んじゃう、だけだよ」

そう、俺がなにもしなくても、問題は解決される。

むしろ俺は邪魔なだけだ、今すぐここから逃げ出すのが最も正しい選択だろう。

――だけど。

「……わかってねぇ。わかってねぇよ、シャル。俺がやらなきゃならないんじゃない、俺がやりたいんだ。アイツは俺がぶちのめす。先生たちに、くれてなんか、やるものか」

「でも、どうするの？一夏にはもう、戦う力は残ってないんだよ？」

「く……」

問題はそこだ。

ＩＳはない。武器はあるが、ＩＳがなければ意味はない。

黒いＩＳにもさほどエネルギーは残っていないはずだが、攻撃手段がなければ倒せない。

「……一夏、ここは先生たちに任せよう。シンだってボロボロなのに、一夏を助けてくれたんだよ。……これ以上、心配かけちゃいけないよ」

「……シン」

「……」

その言葉に、誘拐された時のことを思い出す。

俺を庇って左腕を失ったシン。

なんの力もないくせに、俺の無謀な行動で彼女を傷つけた。

あの時と、何も変わらない。

強くなってなどいない。

俺はまだ無力なままで、そんなことにも気付かないほどに無知で、身勝手で無謀なガキのままだ。

「俺は……」

「……」

シンが俺に近づいてくる。

またいつものように、言葉少なに俺を諭すのだろうか。

このままじゃ俺だけでなく、シンとシャルも危険に晒すことはわかってる。

それでも心が納得できない。

けれど俺のせいで、誰かが傷つくのにも耐えられない――――

そんな葛藤を続ける俺に、シンは。

「……ここまでが、己の役目……」

手にした雪片弐型を、俺に差し出し。

「……ここからは……」

いつものように、俺の眼を真っ直ぐに見つめて。

「……お前の、役目……」

戦え、と。

俺の背中を、押してくれた。

「シン……!? 本気なの!?」

「……」

「一夏はもう戦えない！白式はもうエネルギーが残ってないんだよ!?」

シャルの言葉に微動だにせず、シンは雪片弐型を差し出し続ける。
俺はまだそれを取ることができず、硬直したままだ。

心では戦いたいと思ってる。
だけどその選択のリスクが、俺を躊躇わせていた。

と、そこに。

『エネルギーがあればいいんだね？』
「「うわぁ！？」」

朧月の開放回線から突然聞こえてきた声。
覚えがある、この、人の神経を逆撫でする声は――

「き、如月社長？」
「如月って、朧月の……？」
『うふふ、久しぶりだねぇ、織斑君。今日はありがとう、おかげでいいデータが取れたよ』
「……」

どうやら朧月を通じて俺たちの様子を見ていたようだ。
外から回線を繋げるのも、こいつからすれば朝飯前なのだろう。

「なんでまだいるんだよ。避難しなかったのか？」
『当たり前じゃないか。これほど面白い事態を、僕が見もせずに逃げると思うかい？』

相変わらずふざけた野郎だが、こらえる。
なぜならコイツはさっき、気になることを言ったからだ。

「エネルギーがあればって言ったな。……あるのか？」
『あるよ。朧月に』
「そんな、もうシールドエネルギーは……」
『シールドエネルギーはね。けど朧月には別のエネルギーがある。シールドエネルギーだけじゃ、月光の出力は支えられないからね』
確かに言われてみれば、あんな大出力の兵器を使うにはシールドエネルギーだけじゃ足りないだろう。
『朧月の第三世代型兵器は、月光じゃないんだよ。強力な兵器ではあるけど、使われている技術は実験段階を終えたものだからね』
「じゃあ、朧月の第三世代型兵器って……？」
『神無月と神在月さ。量子状態のままでエネルギーの貯蓄、供給ができるこのふたつの装置こそが、朧月の実験兵装なんだよ。見たところ神無月にはまだ少しだけ、エネルギーが残ってる。そして神在月なら、それを白式に供給できる』
「なら、それを使えば……！」
いけ好かない男だが、その技術力は本当に凄い。
あれだけ月光を連発して、まだエネルギーが残ってるとは。
『けどそんなに余裕があるわけじゃない。展開する装甲を限界まで絞っても、君の零落白夜が使えるのは一回だけだろうね』
「……そんだけあれば、十分だ」
『ならやりたまえ。データのお礼だよ、僕も協力しよう。井上君、コア・バイパスを白式に繋いでくれたまえ』
「……」
シンは雪片弐型を地面に突き立てると、朧月からケーブルを伸ばし、ガントレット状態の白式に繋げる。

そこから流れ込む、エネルギーの奔流。
それを感じながら、俺は不思議な感覚を受け止めていた。

（これは……初めてＩＳを動かしたときと同じ感覚だ……）

まるでずっと昔から知っているかのような、不思議な一体感と懐かしさ。
そして、まるで世界が生まれ変わったかのような鮮明な視界。
周囲全てを感じられる感触。

「……」

これがなんなのか、とりあえず今はいい。
それよりも、目の前のことだ。

『これで全部だ。シールドエネルギーも渡したから、もう本当に空っぽだよ』

その言葉通り、シンの体から朧月が光の粒子となって消える。
それに合わせて、白式は再度俺の体に一極限定モードで再構成を始めた。

『ふむ、右腕だけか。当たれば即死だけど、まあ当たらなければ問題ないよ』
「ああ、充分だ」

俺は雪片弐型の柄に右手を伸ばす。
しっかりと掴み、引き抜こうとしたら、そこにシャルの手が重ねられた。

「約束して、一夏。……必ず、帰ってくるって」
「心配すんな。あんなやつには負けねぇよ」

シャルが安心するように笑いかけると、シャルは少し顔を赤くしながら手をどけた。

「……勝ってこい……」
「任せろ」

シンがくれたエネルギーだ、無駄にはしないさ。

さて、行くか――と、その前に。

「おい、社長」
『なんだね？』

俺の相当失礼な物言いにも、コイツは全く気にした様子はない。そんなものに興味はないのだろう。

「ひとつ訊きたいんだけどよ」
『なんでも訊いてくれたまえ』
「その機能使って、シンのプライベートまで覗いてねえだろうな」
『では僕もそろそろ避難させてもらうよ。井上君が戦わないのなら、見てる意味もないしね』
「おい待て！覗いてるのか！？覗いてるんだなてめえ！！」

返事はない。あの野郎、マジで逃げやがった！！

「……次に会ったら絶対ぶっ飛ばす」
「シン……今度から、トイレとかお風呂とか着替えのときは、朧月

は外そうね」
「……承知……」
さすがのシンもかなり嫌そうな顔をしている。
今度学園に言って如月重工に注意してもらおう。
「……じゃあ、行ってくる」
気を取り直して黒いＩＳに向き合う。
敵を前にして、俺の心は不思議なほどに凪いでいた。
「行くぜ、偽者野郎」
雪片弐型に力を込める。
イメージするのは、一振りの日本刀。
華奢な刀身に硬さと鋭さを秘めた、折れず曲がらず良く切れる、そんな刃。
俺の意志に呼応して、極限まで研ぎ澄まされた刀を模した、光の刃が形成される。
「……行こうぜ、相棒」
零落白夜を腰に添え、居合いの構えで走り出す。
ただ真っ直ぐに、敵の下へ。
『いいか、刀とはその重さを利用して振り抜くのだ。手にするのではなく、自らの一部と思って扱え。無駄なく、隙なく、油断なく、それを振るえ』
『ええい、どうしてわからんのだ！やってみせるからちゃんと見て

いろ！』

『……一心、一刀……』

俺の剣を支えてくれる三人。

彼女たちの教えは、たとえ記憶から忘れてしまったとしても、俺の魂に刻み込まれている。

だから俺は、この体の動くままに。

ただ、目の前の敵に集中すればいい。

「……」

黒いＩＳが刀を振り下ろす。

それは千冬姉と同じ、速く鋭い袈裟斬りだが、形だけで中身のない真似事だ。

千冬姉が教えてくれた、刀を振るう心が、そこにはない。

だからその一撃は、あまりにも――――

「軽いんだよ」

ギンッ！

腰から抜き放って横一閃、相手の刀を弾く。

そしてすぐさま上段に構え、唐竹の二閃目で断ち斬る。

千冬姉が教えてくれた心。

箒が魅せてくれた技。

シンが鍛えてくれた体。

俺が負ける道理は、存在しない。

「ぎ、ぎ……ガ……」

紫電が走り、黒いＩＳが真っ二つに割れる。
そして、気を失うまでの一瞬に、俺とラウラの目が合った。
眼帯が外れ、あらわになった金色の左目と。

その目は弱り切っていて、まるで捨てられた子犬のように、俺には見えた。

「……自分には力しかないなんて、言うなよ」

ラウラが力なく倒れる直前、その小さな体を、できるだけ優しく抱き止める。

「お前のために、シンはあんなに、頑張ってくれたんだからさ」

それでもまだ、力しかないと思うのなら、自分が空っぽだと思うのなら。
これから、手に入れていけばいいさ。
きっとみんな、色々なものを与えてくれる。

なにせこの学園には、お人好しが大勢いるんだから。

――――――――――

力とは――なにか。

強さとは――なにか。

私が求めているものは――一体、なんなのか。

『強さっつーのは心の在処。己の拠り所。自分がどうありたいかを常に思うことじゃないかと、俺は思う』

……そう、なのか？

『そりゃそうだろ。自分がどうしたいかもわからねーやつは、強い弱い以前に歩き方を知らないもんだろ』

……歩き、方……。

『どこへ向かうか。どうして向かうか、さ』

……どうして向かうか……。

『つまり、やりたいことはやったもん勝ち。つまんねー遠慮とか我慢とか、損するぞ？』

……やりたい、こと……。

『やりたいようにやらなきゃ、人生じゃねえよ』

……では、お前は……？お前はなぜ強く在ろうとする？どうして強い？

『強くねえよ。俺は、まったく、強くない』

……強くない？お前が……？

『強くないさ。俺はまだ、無知で、無力で、無謀な――――ただのクソガキさ』

……あれだけの力を持っていて、強くないと……？

『ああ、強くない。俺が求める強さには、全然足りない』

……お前が求める、強さ……？

『俺はまだまだ、強くならなきゃならない。強くなって、どうしても負かしたいヤツがいるのさ』

……負かしたいヤツ……？誰だ、それは……？

『教えてやらねえよ。俺にだって、意地くらいある』

……意地……？

『そう、意地さ。男が意地をなくしたら、そりゃもう男じゃねえよ』

……男じゃ、ない……？

『今じゃ男は弱いって言われてるけどさ。昔はそうじゃなかった。男は、強かったんだ。だから俺も、強くなりたいのさ』

……強く、なりたい……？

『ああ、強くなりたい。強くなりたいよ。強くなって、どうしても――守りたいヤツがいるんだ』

……守りたい……？負かしたいのでは、ないのか……？

『同じさ。俺の方が強ければ、そいつを守れるだろ？』

……守る……。

『俺のせいで誰かが傷つくなんて嫌だ。俺のせいで、誰かが犠牲になるなんて耐えられない。だから、俺が守りたい』

……守りたい……？

『守りたい。もう二度と、失いたくない。だから、俺の全てを使って、戦うんだ』

……戦う……。

『暴力じゃあ何も解決できない。けれど暴力に対抗できるのは、暴力だけだ。だから、俺が暴力を担う。みんなが、暴力を背負う必要がないように』

……だから、戦うのか……？

『そうさ。剣は所詮暴力だ。人を傷つけ、殺す術が、剣術だ』

……殺す、術……。

『それが真実だよ。だから俺が証明するのさ。暴力でも、何かを為せるって。……剣術は、人を傷つけ殺すだけの術じゃないって』

……証明……。

『あの人たちが持っている力。それが素晴らしいものだって、証明する。――――守りたいんだよ。命だけじゃなく、あの人たちの、誇りを』

……誇り……。

『お前は、自分には力しかないって言ったよな。ならその力を、誇りに想えるように――――一緒に、強くなろうぜ』

……強く、なる……。

『それでももし、お前が、自分には力しかないって言うのなら。お前の力を、俺が証明してやる。お前のことも、守ってみせるよ――――ラウラ・ボーデヴィッヒ』

言われて、私の胸は初めての衝撃に強く揺さぶられる。

そうか、これが……。

これが、この男の、「強さ」か。

なるほど、こいつの前では、私はただの、無力な少女だ。

……強く、なりたい。

こいつのように、織斑一夏のように。

私も、誰かを守れるほどに。

強く、なりたい。

強くなって――こいつに、認めてもらいたい。

私には、まだ、わからないけれど。

この気持ちは、きっと――「恋」というやつなのかも、知れないな。

――――――――――

「う、ぁ……」

天井から降りてくる光を感じて、私は目を覚ました。

「気がついたか」

聞き覚えのある声。

いつどこで聞こうと、それが誰の声か、私は一瞬で判断できる。

私が敬愛してやまない教官――織斑千冬の声。

「私……は……？」

「全身に無理な負荷がかかったことで筋肉疲労と打撲がある。しばらくは動けないだろう。無理はするな」

教官はそれとなくはぐらかしたつもりなのだろうが、私にはわかる。

私は、ずっと教官を追い続けていたのだから。

「何が……起きたのですか……？」

体を起こそうとしたが、全身に痛みが走り動けなかった。

それでも、瞳だけは真っ直ぐに教官に向ける。

眼帯が外れあらわになった、この忌々しい左目――――〔越界の瞳（ヴォーダン・オージェ）〕を。

「ふう……。一応、重要案件である上に機密事項なのだがな」

私がその程度で引き下がる相手ではないことを、教官は知っている。

だから教官は、他言無用であることを沈黙で伝えてから、ゆっくりと言葉を紡いだ。

「ＶＴシステムは知っているな？」

知っている。正式名称、〔ヴァルキリー（ヴァルキリー）・トレース・システム〕。

過去のモンド・グロッソの部門受賞者の動きをトレースするシステム。

だがそれは、アラスカ条約によりどの国家・組織・企業においても、研究・開発・使用すべてが禁止されている。

……それが、シュヴァルツェア・レーゲンに積まれていたということか。

「巧妙に隠されてはいたがな。操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、そして何より操縦者の意志……いや、願望か。それらが揃うと発動するようになっていたらしい。現在学園はドイツ軍に問い合わせている。近く、委員会からの強制捜査が入るだろう」

……願望。

それには、心当たりがある。

「私が……望んだからですね」

あなたに、なることを。

ずっと憧れていた、教官のような、最強の存在になることを。

その言葉は、口にしなかった。

けれど、教官には伝わった。

「ラウラ・ボーデヴィッヒ！」

「は、はいっ！」

突然名前を呼ばれ、驚きと習慣で顔を上げる。

「お前は誰だ？」

「わ、私は……私……は……」

ラウラ・ボーデヴィッヒ。

それが、私の名前。

そして私にとって、名前など……ただの、記号だ。

ならば、私は誰だ？

私は一体、誰なんだ？

「誰でもないのなら、ちょうどいい。お前はこれから、ラウラ・ボーデヴィッヒになるがいい。なに、時間は山のようにあるぞ。なにせ三年間はこの学園に在籍しなければならないからな。その後も、まあ死ぬまで時間はある。たっぷり悩めよ、小娘」

「あ……」

もしかして……励まして、くれたのか？

教官が、私を？

突然のことに混乱して、何を言えばいいのかわからない。

そして教官は、そんな私を置いて去っていこうとする。

「ああ、それから」

そして教官は、ドアに手をかけたところで、振り向くことなく、再度言葉を投げかけてきた。

「井上には感謝しておけよ。アイツは最後まで、お前のために戦った。お前は試合開始と同時にアイツのことを忘れたようだが、アイツは、最後まで――お前の、相棒だった」

――井上、真改。

私が、倒そうとしていた女。

あいつはただ、織斑一夏と戦うために、私と組んだのではなかったのか……？

「生真面目なヤツだからな、井上は。お前と組んだ以上、お前の相棒として、役目を果たしたかったんだろう。

……いや、そんなことは関係ないか」

ふ、と。

教官は、ひとつ笑って。

「放っておけなかったんだろうさ、アイツは。

――お前は、まるきり、ガキだったからな」

それだけ言って、今度こそ教官は去っていった。

「ふ、ふふ……ははっ」

教官が去って数分後、私は急におかしくなって、笑い出してしまった。

まったく、なんてズルい姉弟だろう。

ふたり揃って、言いたいことだけ言って逃げた。

「ははは……ふふ、ふふふ……」

笑いが漏れるたびに全身が引きつるように痛かったが、それさえも嬉しいと感じた。

そうしてさらに数分、笑っていると。

「……失礼……」

急に、井上が部屋に入ってきた。

私の笑い声を聞かれたか、と思ったが、しかし井上相手には関係あるまいと思い直した。

「……何の用だ？」
「……」
井上は黙ったまま、ベッドの横に座る。
沈黙。
それがどういうわけか、心地良くて。
「……敗北……」
「……ああ、負けたな」
そう。
……私の、負けだ。
「……否……」
しかし井上は否定した。
それはきっと、井上にできる、精一杯の即答だったのだろう。
「……己たちの、敗北……」
「……お前、は……」
まだ、私を――
――相棒と、言ってくれるのか。
「……不足……」
「……そうだな。私の――」

――いや。私の、ではない。

「――私たちの、力不足だ」

「……」

私の言葉に、井上は満足そうに目を閉じた。

そしてまた数分が経ち、井上が口を開く。

「……次は、勝つ……」

「ああ。次こそは、私たちが勝つ。……アイツを、負かしてやる」

「……」

そして目を開き、真っ直ぐに私を見て、言う。

思えば、井上は。

いつだって、私のことを――私自身のことを、見つめていた。

「……まだ……己に、挑むか……？」

思わず笑いそうになった。

……いや、私は実際に笑っていただろう。

「まさか。……相棒と戦う理由など、私にはない」

「……」

そして、井上も。

ほんの少しだけ、笑っていたような、気がした。

第２１話　役目（決着編）（後書き）

突然ですが問題です。
次回からラウラは真改をなんと呼ぶでしょうか？
以下の選択肢からお選びください。

１：いのっち

２：しーちゃん

３：シンシン

４：井上和泉守国貞

５：その他

正解者の方にはコジマ粒子一年分をプレゼント。
万一届かなかった場合は宅配業者の方が配達途中に何らかの理由により死亡したと考えられます。
私の責任ではないので悪しからず。

第２２話　役目（場外乱闘編）（前書き）

なんたることか。
真改にレオス・クラインのセリフを言わせたのに、誰にも気付いてもらえなかった。

さて、〔役目〕の４話目、というか後日談です。
原作で活躍出来なかった人たちに頑張ってもらいました。

第２２話　役目（場外乱闘編）

学年別トーナメントの第一戦――つまりは一夏＆シャルロットペア対ラウラ＆真改ペアの試合が終わり、その直後に発生した問題も一応の解決をみせ、さらには医務室での談話を終えてからしばらくして。

ベッドの上で体を休めながら、ラウラは悶々としていた。

（むう……これが恋というやつか……？）

そう、ラウラは恋をしていた。そしてそれを自覚していた。

相手は自らを負かした男、名を織斑一夏。

ラウラが敬愛して止まない教官、織斑千冬の弟であり、世界で唯一ＩＳを動かせる男である。

ちなみにほんの数時間前までは感情の全てを憎しみに染め上げて排除しにかかっていた相手でもあるのだが、それはもう過去の話であった。

（だが、どうすればいい？生まれてこのかた、軍事訓練ばかりに明け暮れていたからな……。見当もつかん）

軍用の遺伝子強化試験体であるラウラは、世間一般の少女たちとはまったく違う人生を送ってきた。

両親などいなかったし、友人と言える存在もいない。

学校に通ったこともなく、必要な知識は全て訓練の一環として教えられてきた。

……当然、恋愛経験など皆無なわけで。
「恋心」という初めての敵、「恋愛」という初めての戦場に、必勝の戦略を見いだせないでいた。

（むう……そうだな、ここは……）

だが今回の敗戦を経て、ラウラは学んだ。
一人で出来ることには限界がある。ならば力を借りればいい。

というわけで、ラウラは自らの専用機、シュヴァルツェア・レーゲンを使い、緊急暗号通信（実際はただのプライベート・チャネルなのだが、その秘匿性の高さは軍用としても十分以上である）を開いた。
通信相手はラウラが隊長を務める特殊部隊、名実ともにドイツ軍最強の部隊である〔シュヴァルツェ・ハーゼ〕の副隊長、クラリッサ・ハルフォーフ大尉であった。

『――受諾。クラリッサ・ハルフォーフ大尉です』
「ラウラ・ボーデヴィッヒ少佐だ」

ラウラが名乗った瞬間、クラリッサの気配が冷たくなった。
自分と千冬以外の全てを見下しているかのような態度のラウラは、部隊内でも好かれてはいないのである。

『ああ……隊長。どうしました？本日はＩＳ学園の学年別トーナメントが開催されていると記憶していますが』
「ああ、その通りだ。先ほど、私の一回戦が終わった」
『そうですか。それで、二回戦の相手は？損耗は問題のないレベル

ですか？』

しかしいくら嫌われていようと、ラウラの実力は部隊内の誰もが認めている。

素人同然の一般生徒や所詮は軍人ではない他国の代表候補生に負けるなど、微塵も考えてはいなかった。

故に、続くラウラの言葉はクラリッサに衝撃を与えた。

「いや、私は負けた。二回戦は、私にはない」

『な……！？負けたのですか！？隊長が！？』

ラウラが決勝、若しくは準決勝などで負けたのなら、クラリッサは散々嫌味を言ってやるつもりだった。しかしそれさえも確率は天文学的なものだと思っていたのに、まさかの初戦敗退。

あまりの驚きにクラリッサはラウラへの嫌悪も忘れて問いただした。

『なにがあったのですか！？相手は……いや、今年のトーナメントはタッグになったのでしたね、ではまさか、味方の裏切りが……！？』

「違うっ！！」

『……！！？』

クラリッサの言葉にラウラは思わず声を荒げた。

その声にクラリッサが、そして声をあげたラウラ自身が驚いた。

『……隊長？』

「……すまない」

『……いえ。ですが、どうしたのですか？裏切り、に反応したようですが……？』

裏切り。
ラウラはその言葉を反芻する。

最初から最後までラウラの相棒として、機能停止寸前まで追い詰められても戦い抜いた、井上真改。
そしてその真改を意識の外に追いやって、一切連携をとろうとしなかったラウラ・ボーデヴィッヒ。

裏切りとは違うかも知れないが、足を引っ張ったのはどちらか、考えるまでもない。

「井上は良く戦ってくれた。負けたのは私の責任だ」
『……ふむ』

クラリッサはそんな風に頷きながら、しかし内心はまだ驚いていた。

（あの隊長が、織斑教官以外の人間を認めるとは）

その驚愕を隠しながら、クラリッサは質問を続ける。

『失礼しました。それでは、隊長の敗因は？それほどまでに、相手は強かったのですか？』
「ああ……そうだな。強かった」
『……そうですか』

負けたというのに、どういうわけか嬉しそうなラウラの声色に何かを感じたクラリッサは、それ以上訊くのをやめた。

『……わかりました。ところで隊長、何故通信を？試合結果については報告書を提出することになっていたはずでは？』

「いや、報告ではないのだ。クラリッサ、実はお前に、個人的な相談があってな」
『……ほう』
なんだろう、すごく、ものすごく興味がある。
人格はともかくとして、容姿は自分の好みどストライクなラウラからの相談。
今までにそんなことは一度もなかったこともあって、クラリッサは大変興味を持った。
『相談、ですか？どういった内容で？』
「うむ、それなんだが、その、な……」
ごにょごにょと言うラウラ。
怪訝に思うクラリッサ。
そして数分。
「……す……好きな男が、出来た……」
『……は？』
「き……気を引く、には……ど、どうしたら、いいんだ……？」
『……ふむ』
クラリッサはひとつ頷いて、ポケットから取り出したハンカチで鼻を拭く。
しかしその鼻から流れる血は止まることがない。
『ごちそうさまでした』
「は？」
『いえ、こちらの話です。……ふむ、男の気を引くにはどうすれば

いいか、ですか……』

そしてクラリッサの頭がフル回転を始める。
その脳内では彼女が今までに視聴してきた作品のセリフ、演出が参考資料として吹き荒れていた！！

『隊長、日本では伝統として、気に入った相手を自分の嫁にする風習があります』
「嫁……？」
『そう、嫁です。そして相手の気を引く一番の方法は、自分の存在を刻みつけることです！』
「き、刻みつけるだと……？」

ラウラは混乱した。
刻みつけると言われてラウラが想像できるのは、物騒なことばかりだったからだ。

『相手の印象に、隊長の存在を強烈に残すのです。そして、そのための手段は――』
「手段は……？」
『――隊長の、ファーストキスを捧げるのですっ！！』

ちゅどーーーん！！

クラリッサの後ろで何かが爆発した、ような気がした。
いや、多分錯覚だと思うが。

「わ、私の……ファーストキスだと……！？」
『そうですっ！多少強引でも構いません、相手の唇を奪うのです、隊長っ！！』

「……！」

『そうすれば、相手は必ず隊長のことを意識します！そしてもし、相手もファーストキスであったなら、その効果はさらに高まりますっ！！』

「そ、そんな手が……！」

ラウラは驚愕した。

そして感動した。

まさかこんなにも身近に、これほど頼りになる者がいたとは……！

「感謝する、クラリッサ！お前の助言、決して無駄にはしない！」

『礼には及びません、隊長。私はあなたの部下です、あなたの力になることは、私の義務ですから』

そしてクラリッサも感動していた。

まさかあの隊長に、こんなにも可愛らしい一面があったとは……！

「うむ、ではクラリッサ、もうひとつ質問があるのだが！」

『なんなりと！お答えします、隊長っ！！』

感動のあまりテンションがおかしいことになっていますがご容赦ください。

「もう一人、気になる相手がいるのだが」

『む……二股ですか？それはあまり感心できませんね』

「いや、この相手は男ではなくてな……」

『……ほほう』

クラリッサはポケットからハンカチを取り出して以下略。

『……百合の花とは、美しいものですね』
「お前はなにを言っているんだ？」
『隊長、気になる相手と言いましたね？好きというわけではないのですか？』

ラウラの疑問も無視して質問をし始めるクラリッサ。
今彼女は、過去２２年の人生の中で最も充実していた。

「好き、というのとは違うと思う。……むう、これは、なんと言えばいいのか……」
『では隊長、その方が気になるようになった経緯からお聞かせください』
「わかった。……そいつは井上真改という名でな、学年別トーナメントで、私の相棒だったのだが」
『相棒、ですか』

その言葉に親愛が込められているのを感じたクラリッサは、すぐさま自分の脳内に検索をかけた。
それと並行してラウラからさらなる情報を聞き出す。

『ふむ……先ほど隊長は、「井上は良く戦ってくれた」と言いましたね』
「ああ。……私は井上と組んでいながら、一人で戦っていた。だが井上は、そんな私のために最後まで戦い、試合のあとも私のことを相棒と呼んでくれた」
『なるほど。つまり隊長は、その井上真改に、自分も相棒として応えたい、と』
「そ、そうだ！まさしくその通りだ、クラリッサ」

ここまで聞いたクラリッサは検索を完了、ヒットした言葉にニヤリ

と笑う。

『隊長、相棒として信頼関係を築きたいのでしたら、ひとついい案があります』

「む……？それは、どんな……？」

『呼び名です。気に入った相手を嫁と呼ぶように、日本には、特に信頼を寄せる相棒に対する呼び方があります』

「おお……是非教えてくれ！」

『それでは隊長、今度からその井上真改を、こう呼んでください』

――こうしてクラリッサは、後に真改から敵として認定されることになるのだった。

――――――――――

『トーナメントは事故により中止となりました。ただし、今後の個人データ指標と関係するため、全ての一回戦は行います。場所と日時の変更は各自個人端末で確認の上――』

「「……なん……ですって……？」」

食堂で夕食を食べながらテレビでその連絡事項を聞いた鈴とセシリアは愕然とした。

「トーナメントが……」

「……中止？」
「それなら……」
「……一夏との、デートは……？」

もちろんなし。
というか元々そんなものはなかった。
だが一回戦の準備をやる気満々で進めているところにトーナメント中止のアナウンスを聞き、なんだよいきなり出鼻を挫きやがってと思いながら避難してきたらこのニュースである。
二人の受けた衝撃は相当なものだった。

……ちなみに一夏に恋心を抱くもう一人の少女、箒は――

「……」

……返事がない。ただの屍のようだ。

そしてこの三人の他にも――

「……優勝……チャンス……消え……」
「デート……無効……」
「……うわあああんっ！」

バタバタバターっと数十名が泣きながら走り去っていった。

「……」
「……」
「……」
「「「……」」」

残された三人はまだ立ち直れていない。
学内ニュースの終わったテレビを魂の抜けた顔で眺めている。

「……デート……」
「……一夏さんとの……」
「……デートが……」

ちなみにこの三人、当然というか、トーナメント参加のためのペアにまず一夏を誘った。
しかし返ってきたのは「悪い、俺、シャルと組むから」という無情な言葉。
しばらく粘ってみたが「けどもう申請しちまったし」とのことで、まあ男と組むならいいかと渋々納得した。
……シャルロットの真実を知ればどれほど怒り狂うか、それは想像にお任せする。

そして一夏にペアを断られた三人は、揃って同じ行動を取った。
つまり、「一夏がダメなら真改と組もう」と考えたのである。

その時の遣り取りを掻い摘んで説明すると――

「シン！学年別トーナメント、あたしと組もう！」
「わたくしと組んでください、真改さん！必ずやお役に立ちますわ！」
「真改、私と共に戦ってくれ！お前となら、優勝も狙える……！」
「……不可……」
「「「な……なんで……！？」」」
「……先約……」
「「「だ、誰と……？」」」
「……」

答えるつもりはない、ということを理解した三人は、真改の頑固さも知っているので諦めることにした。

……しかし真改のペアについて真実を知れば以下略。

「それではわたくしは……一体誰と組めば……」

「ティナと組もうかな……いや、本音とっていうのも……けどあの子って強いの……？」

「……どうしよう……」

「……」

こうして三人はペア探しを始めた。

結論から言うと、戦闘スタイルの相性からセシリアと箒が組み（相手が思いつかずにいた箒にセシリアが声をかけた。ついでに真改のことを色々聞き出そうと企んでいたようだ）、鈴はルームメイトのティナ・ハミルトンが既にペアを決めていたので本音と組んだ。

トーナメントまでの間訓練に明け暮れ、セシリアと箒は優勝した後の一夏とのデート権を巡って度々殴り合い、鈴はマイペース過ぎる本音と組んだことをちょっとだけ後悔した。

そうして準備万端、ようし殺るぞ！と意気込んでいたら、前述の通りトーナメントが中止になったのである。

「ふ……ふふふ……」

「うふふ……ふ、ふふふふ……」

「ふふふふ……ふ……」

「「「あはははははははは……」」」

渇ききった虚ろな笑い声をあげる三人の姿は周囲の生徒たちを怯えさせ、自分たち以外誰もいなくなった食堂で、三人はしばらくの間笑い続けていた。

――――――――――

学年別トーナメント一回戦の翌日。
一夏に頭突きをかました際に切れた額に包帯を巻いた己が教室に入ると、いきなりセシリアと箒が詰め寄ってきた。

「真改さん！どういうことですのっ！？」
「どういうことだ、真改！」
「……？」

お前たちがどういうことだ。説明しろ、意味がわからん。

「聞きましたわよ！学年別トーナメント、ボーデヴィッヒさんと組んだそうですわね！？」
「……応……」
「何故だ！？私とのペアを断ってまで……！」

……ああ、それか。

「……お前のことだ、何かしら理由はあるのだろうが、その理由を教えてくれ」
「是非とも、ええ、是非とも教えていただきたいですわね」

「……黙秘……」
「「な……！？」」

いきなり驚く二人。
なんだ、意味がわからんぞ。

「どうあっても話すつもりはないようだな……」
「ええ、まさかわざわざ言葉にするだなんて……」
「……」

そこか。お前たちは己をなんだと思っているんだ。

さてこの尋問はいつまで続くのか、と思っていると、山田先生が教室に入ってきた。

「み、みなさん、おはようございます……」

山田先生は朝から目が死んでいた。
一体なにがあったと言うのか。

「今日は、ですね……みなさんに転校生を紹介します。転校生といいますか、すでに紹介は済んでいるといいますか、ええと……」

山田先生の話はいまいち要領の得ないものだったが……なるほど、どおりで先ほど、聞き覚えのある足音が教室の前で止まったわけだ。

「じゃあ、入ってください」
「失礼します」

その声は、想像通りのもので。

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願いします」

その姿は、想像通りスカートを履いた、少女としてのシャルであった。

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした、ということです。はぁぁ……また寮の部屋割りを組み立て直す作業がはじまります……」

そんな風に肩を落とす山田先生を余所に、シャルは己と目を合わす。
そして小さく微笑んで、

『これからもよろしくね。……シン』

『……ああ……』

プライベート・チャネル。
これで、ようやく――――素になれるな、シャル。

しかしそんな感動の場面は一瞬で終わった。

「え？デュノア君って女……？」
「おかしいと思った！美少年じゃなくて美少女だったわけね」
「って、織斑君、同室なんだからまさか知らないってことは――――」
「ちょっと待って！昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね！？」
ザワザワザワッ！

騒がしくなる教室。
いつもストッパーとなる千冬さんはまだ来ない。昨日の事後処理で忙しいのかもしれない。

バシーン！
と教室の扉が凄まじい勢いで開く。
……良く壊れなかったものだ、中々に根性のある扉だ。

「一夏ぁっ！！！」

鈴が殴り込んできた。その全身からオーラが見えそうなくらいの殺意を溢れさせている。

「死ねっ！！！」

そして実際に溢れ出した殺意が衝撃砲の弾丸となり、一夏に迫る。

流石にこれはまずいと思ったが、朧月は昨日の損傷が激しくまだ展開できない。
しかたない、危険な賭けとなるが、部分展開した月光でなんとか凌ごうと判断、一夏の前に出たが、その己のさらに前に黒いＩＳが立ちふさがった。
その操縦者は――

「ら、ラウラ……？」

一夏の呆然とした声。
その言葉通り、そこにいたのはドイツ代表候補生、学年別トーナメントにおける己の相棒、ラウラ・ボーデヴィッヒだった。
おそらく、ＡＩＣで衝撃砲を止めたのだろう。

「サンキュ、助かったぜ。……っていうかお前のＩＳもう直ったのか？すげえな」
「……コアはかろうじて無事だったからな。予備パーツで組み直した」
「へー。そうなん――――むぐっ！？」
一夏の言葉を遮るように。
いきなり、ラウラが一夏の唇を奪った。
……流石にこれには面食らった。
「！？！？！？！？」
目を白黒させる一夏。
あんぐりする一年一組一同＋鈴。
この瞬間、たしかにこの教室内の時間は止まっていた。
「お、お前は私の嫁にする！決定事項だ！異論は認めん！」
「……嫁？婿じゃなくて？」
「日本では気に入った相手を嫁にするというのが一般的な習わしだと聞いた。故に、お前を私の嫁にする」
妙に冷静な一夏の突っ込みに、わけのわからない返しをするラウラ。
……誰だ、コイツにこんなことを吹き込んだ阿呆は。
「あっ、あっ、あっ……！」
怒りのあまり声が出ない様子の鈴。しかしラウラはそんなものには目もくれず、今度は己に向き合った。

「井上真改、学年別トーナメントではすまなかった。謝罪させてくれ」

そう言ってペコリと頭を下げるラウラ。

……驚いた、随分素直だな。

「死ねぇぇぇぇっ！！」

「わぁぁぁっ！？バカ、やめろ！！死ぬ！マジで死ぬからっ！！」

「だからっ！死ねって！！言ってんでしょうがぁぁぁぁっ！！！」

「お前は私の相棒としての役目を果たしてくれた。私はお前に、あれだけのことをしたと言うのに」

沈痛な声で言うラウラ。

かつてのことを悔いているのだろう。

「一夏さん？どういうことか、話していただけません？今すぐ、じっくり、根掘り葉掘り、ね……？」

「ひ、ひぃぃぃ……！？」

「過去のことは変えられん。だから私は、これからの行動で、お前に償いたい。

――今度こそは、私も、お前の相棒になりたい」

顔を上げたラウラは、真っ直ぐに己を見て言った。

だから己も、ラウラを真っ直ぐに見返し、話を聞いた。

「一夏、腹を切れ。介錯してやる」

「ざけんなっ！！なんで俺が腹切らなきゃならねぇんだっ！？」

「男だろう、潔く死ね」

「意味わかんねぇよっ！！！」

「私もまだまだ未熟だと痛感した。だから私は、強くなる。お前の相棒として、恥ずかしくないように」

決意の眼差し。
誓いの言葉。
なるほど、やはりコイツは――千冬さんの、教え子だ。

「まったく一夏ったら、悪い子だなあ。人前で女の子とキスしちゃうなんて」
「いや、俺がしたんじゃない！されたんだ！！」
「言い訳までするなんて、これはお仕置きが必要だね。――抉らせてもらうよ、一夏♪」
「ぎゃあああああっ！！？」
「力を貸してくれないか――井上、真改」

差し出された右手。
それを取ろうと、己も手を伸ばす。

互いの手が触れ合う瞬間、ラウラは己の手を取り、同時にその場で跪き――

――己の手の甲に、口付けをした。

「……は……？？」

再び教室内の時間が止まる。己の思考も止まる。

「……誓いをここに。これより私は、お前の相棒として、お前と共に戦う。お前の剣となり、盾となる。これから、よろしく頼む――マスター」

「……」

「「「「「はあああああぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！？？！？！？」」」」」

……誰だ、コイツに、こんなことを、吹き込んだ、阿呆は。

出て来い、斬って捨ててやる。

――――――――――

さて、大変な事態になったが、今日はまだまだ終わらない。

中断されていた学年別トーナメントの一回戦が行われるのである。

戦場は第三アリーナ、対戦カードはセシリア・オルコット&篠ノ之箒ペア対凰鈴音&布仏本音ペア。

試合はまだ始まっていないというのに、目に見えそうなほどの殺気が渦巻いている。

「「「うふふふふふふ……」」」
「お～、みんなやる気満々だね～」

その殺気を直近で浴びている本音はまったく動じていない。
その様子を観客席から見ていた真改は感嘆半分、呆れ半分といった顔をしている。

「アンタたちには恨みは……ちょっとあるけど、でもこれはそんなんじゃない。ただの、八つ当たりよ」
「奇遇だな。私もちょうど、憂さ晴らしがしたいと思っていたところだ」
「わたくしも同じですわ。やっぱりストレス解消には、思い切り暴れるのが一番ですから」
「う～ん、みんな苦労してるんだね～」

にへら、と笑う本音の姿に、観客席に集まったギャラリーたちは一様に思った。

――この娘、ただ者じゃねぇ。

「じゃあ、始めますか」
「ああ、始めるか」
「ええ、始めましょう」
「よ～い、スタート～」

そして試合開始のブザーが鳴る。

「「はあぁぁぁぁっ！！」」

気合いと共に、箒の打鉄と鈴の甲龍が一気に前進、手にした得物をぶつけ合う。

軍配は甲龍に上がった。やはり訓練機では専用機、それもパワータイプと打ち合うのは厳しいものがある。

「貧弱！貧弱ぅッ！」

「ぬぅ……！」

弾き飛ばされる箒、しかしその直後、鈴を五条の閃光が撃ち抜いた。

「わたくしを忘れてもらっては困りますわ」

「セシリア……！」

セシリアのブルー・ティアーズ、その同名の特殊兵器と大型レーザーライフル、スターライトｍｋ？による一斉射撃である。

「やってくれるじゃない……！」

「行くぞ、鈴！」

「お行きなさい、ブルー・ティアーズ！」

鈴は双天牙月で箒の近接ブレードを捌きながら、衝撃砲でセシリアを狙う。

しかし箒の打鉄は性能で鈴の甲龍に劣っているが、箒自身の剣腕は片手間で抑え切れるものではない。

ならばなぜ、鈴が二人同時に相手出来ているかというと――

「えい！」
ドンドンドンドンッ！
――鈴は一人で戦っているのではない、ラファール・リヴァイヴを装着した本音による、援護射撃があるからだ。
「くっ……！」
「ナイス、本音！」
本音の射撃技術はそれほど高くはない。
優れた戦術や戦略眼があるわけでもない。
だがなんというか、鈴が欲しいと思った時と場所に弾が来る、言うなれば「痒いところに手が届く」援護だった。
『ああもうアンタは、トロくてマイペースなくせに、なんでこうまで合わせてくんのよ！』
『わ～ん、りんりんがいじめる～』
『頼もしいって言ってんの！！』
本音の戦闘力は低い。単機ではすぐに落とされるだろう。
だが誰かと組んだ時、本音の気遣いと観察力は大きな力となる。
「なら先に本音さんを……！」
「うわあ！」
セシリアは狙いを本音に定めた。
だがその瞬間、援護の薄くなった箒に、鈴の猛攻が襲い掛かる。
「もらったぁっ！」
「ぐあっ！」

双天牙月と衝撃砲の波状攻撃。
ブレード一本と打鉄の性能で凌ぎきれるものではない。
鈴は箒を吹き飛ばし、その隙にセシリアへ向け衝撃砲を放つ。

「本音はやらせないわよっ！」
「わ～、りんりんかっこいい～」
「緊張感無いわねアンタ！？」

セシリアは衝撃砲をかわすと、レーザーライフルで鈴を迎撃しつつ、ビットで本音を追い立てる。

「く、腕上げたわね……！」
「日々の訓練の賜物ですわ！」

多大な集中が必要なビットを操りながらの正確な射撃は、かつてのセシリアには出来なかったことだ。

「真改さんとの訓練で得た力、とくと味わいなさいっ！」
「上等ぉぉぉっ！！」

セシリアに踊りかかる鈴の背中を、箒が睨み付ける。
中距離射撃特化のブルー・ティアーズが甲龍に接近されては戦いにならない。
故にセシリアを援護すべく突撃をかけようとし――その背中に、銃弾を受けた。

「なに！？」
「失礼しま～す」

本音の攻撃だ。
箒の意図を見抜き、ビットの攻撃を受けつつも鈴の援護に回ったその判断に、箒は幼なじみの姿を重ねた。

「いいだろう、ならばお前から斬るっ！」

セシリアが鈴の攻撃に耐えている間に、一刻も早く本音を墜とす。
そして二人で、鈴を倒す。
本音の援護の厄介さを理解した上での、迅速な判断であった。

『すぐに行くぞ！それまで耐えろ、セシリア！』
『この程度で心配されるなんて……侮られたものですわね。わたくしも、ブルー・ティアーズも』

その言葉にニヤリと笑い、箒は本音に向き合う。
その鋭い眼光に、本音は銃弾で応えた。

「……負けないよ～……」

間延びした言葉。
それに、精一杯の力を込めて。

「私は、いのっちの戦いを、ずっと見てたんだから……！」

最後まで、絶対に諦めない。
たとえそれが、明らかに格上の相手でも。

「そうよねぇ、負けらんないわよねぇっ！！」
「ええ、負けられませんわ！！」

「ああ、負けられん！！」

負けられない。
負けたくない。
たとえ何を得られなくとも、力の限りを尽くして得た勝利そのものに価値がある。

「「「「勝つのは……」」」」

だから、最後まで、全力を尽くす。
そして相棒と、勝利の喜びを分かち合うのだ。

「わたくしたちですわっ！」
「あたしたちよっ！」
「私たちだっ！」
「私たちだよ～！」

猛々しい笑みを浮かべ、四人の少女は闘志を燃やす。
手にした得物を握り締め、一斉に突撃を開始した。

――――――――――

箒は焦っていた。
すぐにでも本音を倒しセシリアの援護に向かわなければならないというのに、本音が実によく粘っているからだ。

「くっ、しぶとい……！」
「はあ、はあ、まだまだ、はあ、行けるよ～」

本音の戦い方は消極的だった。箒が突撃してくれば背中を見せてでも距離をとり、箒がセシリアの援護に向かおうとした時だけ攻撃する。
徹底的に箒の邪魔をし、しかし倒そうとはしていない。

完全に、「負けないための戦い方」だった。

（見掛けによらず、強かなやつだ）

卑怯とは微塵も思わない。
自分の役目、自分に出来ることを正確に見極め、自覚し、全身全霊でそれを為す――――

そんな本音を卑怯と呼ぶなど、箒には口が裂けても不可能だった。

（ならば、私が為すべきことは……！）

ビットの攻撃により本音のラファール・リヴァイヴはかなり消耗しているが、それでも今すぐに倒せるほどではない。
だがセシリアは、もう限界だろう。

（私の、役目はっ！！）

箒は本音に背中を向ける。
すかさず銃撃を受けるが、まだ打鉄のシールドエネルギーには余裕がある。今は無視だ。

「はあぁぁっ！」

近接ブレードを腰溜めに構え、セシリアと戦う鈴に突撃する。
セシリアは既にボロボロだったが、それでも必死に食い下がっていた。

『待たせたな！』
『あら、もう少しで勝てるところでしたわよ？』

その軽口に苦笑を浮かべ、そしてその防戦に報いるべく。

「食らえぇぇぇっ！！」
「きゃああっ！！」
ズガァァンッ！

鈴の背中から、ブレードを突き立てる。
そのまま鈴を羽交い締めにし、セシリアに言った。

「今だっ！！私ごと撃て、セシリアァァッ！！」
「な、アンタ……！？」
「遠慮はしませんわよ、箒さん！！」

セシリアはレーザーライフルを構え、発射し――――外した。

「な……！？」
「りんりんっ！」

本音の射撃により、僅かに照準をズラされたことが原因だった。

『ごめん、りんりん！逃がしちゃった！！』

『今アンタに文句言ったらバチが当たるわよっ！！』

セシリアはすぐさま照準を修正、同時に今度こそ仕留めるべく、ミサイル型のビットを起動。

しかしその、本音が稼いだ一瞬の時間に、鈴の衝撃砲、〔龍咆〕が最大威力までチャージされる。

「りんりんっ！！」
「来るなぁっ！！」

慌てて駆けつけようとする本音を、裂帛の気合いで押し留める。

そう、これはタッグ戦。
どちらか片方でも残れば、勝ちだ。

『りんりん……』
『勝つわよ、本音。あたしと、アンタで』
『……うん……！』

だから、勝利のために鈴を見捨てることも。

本音の「優しさ」であり、「強さ」である。

「「「おおおぉぉぉっ！！！」」」

決して放すまいと、渾身の力で拘束を続ける箒。
逃げられないと悟り、ならばと道連れにすべく衝撃砲を放つ鈴。
その砲弾に怯むことなく、一斉射撃を行うセシリア。

三人の咆哮が重なった。

ドガァァァンッ！！

「……天晴れだ、鈴」

「誉めてもなにも出ないわよ？」

「悔しいですわね、負けるのは……」

『打鉄、ブルー・ティアーズ、甲龍、シールドエネルギーゼロ。……勝者、凰鈴音、布仏本音ペア』

アリーナに響き渡ったアナウンス。

それを聞きもせず、落ちていく鈴に一直線に飛ぶ本音。

「りんりんっ！」

「やったわね、本音。……ほら、あたしは大丈夫だから。アイツに手ぇ振ってあげなさいよ」

「え？」

鈴が指差した方を見ると、観客席に座る親友の姿があった。

「アイツ、アンタが戦う姿を、ずーっと心配そうに見てたわよ」

「……いのっち……」

歓声に包まれるアリーナで、真改は静かに口を開いた。

ハイパーセンサーのズーム機能で、その唇の動きを読む。

『おめでとう。良く戦ったな』

「……うん！ありがとう、いのっち！」

花咲くような笑顔で、疲れた腕を元気一杯に振る本音。

そんな少女に、真改も静かに、手を振り返した。

第２２話　役目（場外乱闘編）（後書き）

ＩＣＨＩＣＡ旅団。
悪の秘密結社、〔亡国機業〕に対抗するため結成された、ＩＳ学園精鋭部隊。
では、そのメンバーの一部を紹介しよう。

Ｎｏ１：織斑一夏
ＩＣＨＩＣＡの顔。実戦不足の天才。やたらとモテまくるので旅団員集めに大いに役立つ。家事万能で旅団員の世話もしている。けど旅団内での立場は低い。
「織斑一夏は既に死んだ。ここにいるのは、ランク１、ＩＣＨＩＣＡだ！」

Ｎｏ２：篠ノ之箒
ＩＣＨＣＡの古株。才能は十分だが精神面が未熟。そのうち化ける。
天才アーキテクトの姉からもらった専用機は鬼性能。けど使いこなせないので攻撃に味方を巻き込むことも。
「姉さんも簡単に言ってくれる。学園を攻めるとなれば、機業の連中も本気だろうに」

Ｎｏ３：セシリア・オルコット
ＩＣＨＩＣＡのお財布。家が貴族で莫大な財力を持ち、機体も後方支援向きなので便利に使われている。その立場に不満はあるが、ちょっとおだてると調子に乗るチョロい人。
「どうしました？亡国機業のメンバーなのでしょう……？」

Ｎｏ４：ラウラ・ボーデヴィッヒ
ＩＣＨＩＣＡの危険物。能力はあるが常識がないのでしょっちゅう

問題を起こす。しかも厄介レベルが高い。けど戦闘では役に立つ。
「あまり手間を掛けさせるな。嫁が待っているのだからな……」

Ｎｏ５：井上真改
ＩＣＨＩＣＡのストッパー。護衛として色んな所について行くが、実は暴走しがちな旅団員を止めるため。胃が心配。普段は大人しいがキレると一番コワイ。
「……茶番……」

Ｎｏ６：凰鈴音
ＩＣＨＩＣＡの特攻隊長。一番槍は大体コイツ。血の気が多くすぐにケンカをふっかけ旅団員も巻き込むが、いざ戦闘になると冷静になる。敵に回すと恐ろしく味方にすると厄介なタイプ。
「まだまだ行けるわよ！一夏ぁぁぁぁっ！！」

Ｎｏ７：シャルロット・デュノア
ＩＣＨＩＣＡの参謀。賢く器用で大抵のことはソツなくこなす優等生。けど少し腹黒い。ボーイッシュな容姿でメンバー集めにも活躍。けど少し腹黒い。
「ＩＳ学園にようこそ！歓迎するよ、盛大にね！」

番外：織斑千冬
ＩＣＨＩＣＡのオペ子。コワイ。超コワイ。けどたまに優しい。つまりツンデレ。そしてブラコン。でもそれを言うとキレる。ＩＣＨＩＣＡの実質的な支配者。でも弟の頼みには弱い。
「お前は私のものだ。そうだろう……？」

唐突に思いついたネタ。

次回、外伝です。

外伝2　自動人形は誰がために踊る（前書き）

注意点

1：時間かかったわりにはかなり荒い

2：場面とか飛びまくり

3：妄想ダダ漏れ

ごめんなさい、頭いいキャラを書くのは、私には無理だとわかりました。
次からは身の程をわきまえます。

外伝2　自動人形は誰がために踊る

「織斑一夏は学園に入学、クラスメイトには篠ノ之博士の妹にイギリス代表候補生。中国、フランス、ドイツも候補生を転入させる準備をしてる……。
やりすぎね、メルツェル」
「良く言う。誰が手間を掛けさせたのか」
「あら、なんのことかしら？」
「まあいい。なんにしても、これで準備は整ったわけだ」
「ええ。さあ、始めましょう？亡霊どもを誘き出して、一網打尽にしましょう」
「……亡霊、か」
「？どうしたの？」
「いや、なんでもない。……では、亡霊狩り（ファントム・ハント）を始めよう」

――――――――――

（……胃に穴が開きそうだ……）

今俺は、世界最強にして女性にしか使えない兵器、ＩＳ（インフィニット・ストラトス）の操縦を学ぶための施設、ＩＳ学園の入学式に出席している。

……ちなみに、俺は男だ。身も心も男だ。断じて女ではない。
なのに何故ここにいるのか。
答えは実に簡単、俺が男なのにＩＳを動かしたからだ。

その圧倒的な性能と女性にしか扱えないという特殊性から、世界を極端な女尊男卑に変えたＩＳ、それを世界で初めて、そして唯一動かした男、それが俺だ。

俺がＩＳを動かしたニュースが流れた時、世界は揺れた。そりゃもう揺れた。本物の宇宙人が捕まった時と同じくらい揺れた。まだ捕まってないけど。

（……胃に穴が……もう開いてるかも）

そんな俺は保護、監視、研究その他諸々の事情により強制的にＩＳ学園に入学させられたわけだが。

当然周りは全員女、そんな中に一人だけ男、その扱いは丸きりＵＭＡであった。

（早く……早く、終わってくれ……）

神聖な式典の最中であるにもかかわらず、周囲から俺に突き刺さる視線。

もはや物理的な圧力があるんじゃないか、これ？なんか体が小さくなった気がするんだが。

『それでは最後に、本日は生徒会長が用事によりお休みのため、代わりに副会長から挨拶をお願いします』

（最後……やっと終わりか……）

ようやくこの視線地獄から解放される……。

そう思ったら、呼ばれて壇上に上がった人物に驚いた。

「――生徒会副会長、メルツェルだ」
「は……？」
その人は、俺の良く知る人物で。
「ＩＳ学園へようこそ。歓迎しよう、盛大にな」
「メ……メル姉……？」
昔から世話になっている近所の二つ上のお姉さん、メル姉ことメルツェルだった。

――――――――――

「久しぶりだな、一夏。最後に会ったのは半年前か」
放課後、突然教室までやって来たメル姉に誘われて、俺は食堂に来ていた。
食事も終わり、今は食後のティータイムだ。
「また少し背が伸びたか？顔立ちも、幾分精悍になったようだ」
「メル姉はあんま変わんないな」
「ふ……」
そう笑ってティーカップに口を付ける様は妙に様になっていた。

メル姉は色素の薄い金髪にシャープなシルバーフレームの眼鏡、理知的な顔立ちの美人である。
キチッとした服装と姿勢、切れ長の眼からは「出来る女」のオーラが放たれている。

「昔からなにかとやらかす奴だったが、流石に今回は驚かされた」
「メル姉こそ、生徒会の副会長やってるなんて聞いてなかったぞ」
「言っていなかったか？」
「雑用係って言ってただろ」
「同じようなものだ」

いや違うだろ、全然。

「女ばかりの環境で大変だろうが、まあ頑張れ。私でよければ相談に乗ろう」
「……サンキュ、メル姉」

知り合い、それも付き合いの長い人がいてくれて助かった。孤立無援で生活するには、ここは厳し過ぎるぜ。

「時間を取らせて悪かった。もう部屋に戻って、荷物の整理をするといい」
「え？いや、俺はしばらく家から通うんだけど」
「いや、お前は急遽寮に入ることになった。これが鍵だ」

そう言って鍵を渡される。どうやらこれはそのための呼び出しでもあったらしい。

「では、またな」
「ああ。会えて嬉しかったぜ、メル姉」

「私もだ、一夏」

そう言って颯爽と去って行くメル姉。その後ろ姿は実にカッコいい。

さて、じゃあ俺も部屋に行くか。周囲の目も痛くなってきたし。

――――――――――

「どうだった？一夏くんは」

「変わらんな。悪事を働けるようには思えん」

「ふ～ん。じゃあそれはやっぱり、私たちの役目かな」

「お前がやる必要はない。それは私が引き受けよう」

「なに？この更織楯無が、友達に汚れ役を押し付けると思うの？」

「お前は学園最強の生徒会長でありロシア代表、比べて私は一介の生徒にすぎん」

「副会長じゃない」

「会長とは天地の差だ。私なら、万一ことが公になっても私ごと切り捨てられる。だがお前では大きな混乱が起きるだろう。そんな隙を晒すわけにはいかない」

「……そんなこと、言わないでよ」

「お前は更織の当主だろう。前線で戦う雑兵に、目的のために死ねと命ずるのも、指揮官の仕事だ」

「……メルツェル」

「これは戦争だ。犠牲なくしては収められん」

「……」

「亡国機業は強大だ。そしてそれだけの力がありながら、その姿を完全に隠している。まるで――」

「……メルツェル？」
「……いや。気にするな、ただの独り言だ。……ともかく、奴らは一筋縄で行く相手ではない。切れる尻尾は多い方がいい」
「……私はこの学園の生徒会長よ。生徒を守る義務があるわ」
「だから、私を切れと言っている」
「……あなたも、この学園の生徒なのよ？」
「私のことはただの人形と思え。目的のために動くだけの、心のない自動人形と」
「……」
「さて、お互いやることがあるだろう。今日はこれでお開きとしよう」

――――――――――

「イギリス代表候補生、セシリア・オルコットか。相手にとって不足はあるまい、一夏」
「不足どころか余りがでるよ」

売り言葉に買い言葉で決まった決闘に、メル姉は駆け付けてくれた。しかしどうも俺、過大評価されてる気がする。

「弱音とは男らしくないぞ、一夏」
「わかってるよ。やるからには勝ちに行くさ、全力でな」

幼なじみである箒の言葉に返事をする。
そう、千冬姉の弟として、無様な戦いは出来ない。相手が格上だか

らと言って、負けるつもりはない。

「メル姉、なんかアドバイスとかないか？」

「ない」

「……即答かよ」

「私の領分は戦術ではなく戦略だ。格上相手と一対一になった時点で、私にとっては負けだ」

なるほど、「勝敗は戦う前に決まっている」というやつか。

メル姉らしい、含蓄のある言葉だ。

「だが勝敗は関係あるまい。お前はまだ素人、実戦経験を得ることが最重要だ」

「関係あるさ、男の意地がかかってるんだ」

しかしその俺の言葉に、メル姉は眉根を寄せて辛そうに答える。

「意地、か。……私にはわからんな。お前の、言うことが」

「メル姉……」

以前メル姉は言っていた。

――私には、ヒトの心がない、と。

「……じゃあしっかり見てなよ。メル姉の分まで、俺が戦ってくるぜ」

「では頼む。私はどうにも戦うのは苦手でな。悪巧みならば、得意なのだが」

そう言うメル姉は、いつものメル姉に戻っていた。

まあ確かに、悪巧みをさせたらメル姉の右に出る者は早々いない。

「勝ってこい、一夏」

「ああ、行ってくるぜ、箒」

さて、行くか。

――負けられない理由が、一つ増えちまったしな。

――――――――――

「雪片弐型……それに零落白夜、か」

「織斑先生と同じね。姉弟だから、じゃあ説明つかないわよねぇ」

「だろうな。二次移行前に単一能力が発動するのも、前代未聞だ」

「う～ん……どういうことかしら？」

「さあな。それについては門外漢だ」

「良く言うわよ、私のＩＳを組んだクセに」

「半分はお前が組んだろうに。……白式の武装の謎はこの際どうでもいい。重要なのは、対ＩＳ戦において一夏は切り札足り得る、ということだ」

「……幼なじみの男の子まで、道具扱い？」

「目的のためには全てが駒だ。一夏も、箒も、鈴も、お前も――――この私も」

「……いつかあなたにも、好きな人が出来たらいいわね」

「気持ちだけ受け取っておこう。……さて、戦力のあては出来た。あとはどれだけ、代表候補生たちを引き入れられるか」

「う～ん、少なくとも、セシリアちゃんはもう大丈夫だと思うわよ」
「そうだな。一夏はそういう面でも役に立つ。亡国機業のことを考えれば、一夏自身はいつでも味方に出来るだろう」
「問題はタイミングね。一夏くんがある程度女の子を落としてからじゃないと、向こうから協力を申し出た、っていう形が作り難くなるもの」
「一夏自身も鍛える必要がある。いくら機体の性能が良くても、今のままでは使えん」
「それについては私がやるわ。折を見て、コーチを買って出る」
「急ぎ過ぎるなよ。あれだけの才能だ、潰すには惜しい」
「……ねえ、メルツェル」
「なんだ」
「あなたが一夏くんを気にかけるのは、彼が戦力になるから？」
「そうだが」
「……そう」
「……なんだ」
「なんでもないわ。ただあなたも、少しずつ、変わっていってるんだな、って」

――――――――――

「――――久しぶりだな、鈴」
「メ、メルツェルさん！？わあ、お久しぶりです！」

転入初日、夜に学園に到着したあたしを、見知った顔が出迎えてくれた。

「相変わらず、元気そうでなによりだ」
「メルツェルさんも、お変わりないようで」
「ああ……変わらんよ、私は」

……なんだろう、少し気になる言い方だ。

「代表候補生になったそうだな。大した才能だ」
「いえ、そんなこと……」

メルツェルさんは所謂「大人の女性」といった感じの人で、昔から憧れていた。
同じく大人の女性な千冬さんは少し……いやかなり苦手だが、メルツェルさんには良くしてもらったこともあって気軽に接することが出来る。

「時間も時間だからな、盛大な出迎えは出来ないが、許してくれ」
「いえ、そんな！メルツェルさんだけで十分ですよ！」
「そうか。では寮に案内しよう」

そう言って歩き出すメルツェルさん。
この人は運動はあまり得意ではないが、背筋をピンと伸ばして歩く姿はカッコいい。その理知的な容姿と合わせて、スーツを着たらきっとすごく似合うだろう。

「けどなんでメルツェルさんが？それもこんな時間に」
「私では不足か？」
「いえ、そういうことではなくて！」
「生徒会の副会長だからな。これも仕事だ」
「……仕事、ですか……」

メルツェルさんが副会長と言うのには、驚く前に納得してしまった。
サポートや裏方は、メルツェルさんの能力を大いに発揮できるポジションだ。
それよりも、あたしを出迎えたのを仕事と言われたことが少しショックだった。

「だが、役得とも言えるな。また会えて嬉しい、鈴」
「あ……あたしも嬉しいです、メルツェルさん」
「IS学園にようこそ、鈴。歓迎しよう」

……うん、メルツェルさんはやっぱりメルツェルさんだ。
この頼りになるお姉さんっぷりは、昔から変わっていない。

「これからよろしくお願いします、メルツェルさん！」

――――――――――――

「随分懐かれてるわね、メルツェル」
「まあな」
「人の心はわからないんじゃなかったの？」
「わからんよ。だから、良く観察している」
「まるきり悪人のセリフよ、それ」
「善人に謀略家は務まらないからな」
「……せめて策士とか言いなさいよ」
「呼び名などどうでもいい。とにかく、今回は幸運にも私の知り合

いだったが、次も上手くいくとは限らん。そして鈴も、まだ味方になったわけではない」
「ことは慎重に運ばないと、ね」
「お前にも手伝ってもらうぞ」
「なんなりと申し付けてくださいな、軍師殿」
「ではまず、妹との関係を改善しておけ」
「うわー……いきなりヘビーね……」
「我々には余裕がない。使えるものは、なんでも使わせてもらう」
「……あんまり、簪ちゃんを巻き込みたくないんだけど」
「安心しろ、戦ってもらうだけだ。……裏のことは、私がやる」

――――――――――

「はあああああ……」

学園に三つしかない男子トイレの個室の中で、深く溜め息をつく。
僕の心は沈みきっていた。

「……いつまで、こんなことを続ければいいんだろう」

男子のフリをして、僕はＩＳ学園に転入した。
父の命令で、世界で唯一の男のＩＳ操縦者、織斑一夏に接触するためだ。
学園で二人だけの男子ということでルームメイトになりもう四日目、それなりの信頼関係を築けていると思う。

――――そしてそれこそが、僕の悩みの種でもあった。

「いつまで……一夏を騙していればいいんだろう」

一夏は優しい。

僕になにかと気を使ってくれて、友達として接してくれる。

僕は最近では友達がいなかったので、とても嬉しかった。

そんな一夏を、僕は騙している。

父の命令で、一夏と一夏の専用機のデータを、盗むために。

「僕……最低だ。一夏は僕のこと、信じてくれてるのに」

友達を裏切ることが、こんなに辛いだなんて思わなかった。

いっそ全部打ち明けて、楽になりたい。その結果牢屋に入ることになったほうが、よっぽどマシだと思う。

「……はあ……」

けど、踏ん切りがつかない。

……いや、僕はただ、怖いだけだ。

本当のことを知った一夏に、罵られるのが。

「……考えてても、仕方ないよね」

そうして、僕はトイレを出る。

一夏を、僕の友達を、騙し続けるために。

「おや、君は……」
「あ……」

トイレを出たところで、三年生の先輩に会った。
前に一度だけ会ったことがある。この人は……

「……副会長？」
「メルツェルと呼んでくれていい。副会長など、大した肩書きでもないからな」

そう言って、生徒会副会長のメルツェルさんは僕と目を合わせる。

「シャルル・デュノア、だったか。学園にはもうなれたか」
「え、あ、はい」
「そうか」

メルツェルさんは僕が転入してくる際に出迎えてくれた人で、一夏からは「頼りになるお姉さん」と聞いている。

「女ばかりの環境で生活するのは大変だろうが、一夏と協力して頑張ってくれ。あれは中々頼りになる」
「は、はい」
「困り事があれば私にも相談してくれていい。出来ることに限りはあるが、協力しよう」
「はい、ありがとうございます」

他の人たちは僕が二人目の男子生徒ということで騒ぐばかりだけど、メルツェルさんは僕のことを気遣ってくれている。
その落ち着いた雰囲気と相まって、なるほど、一夏の言うとおり「頼りになるお姉さん」という感じだ。

「では、失礼する。……ああ、それと、まだ正式に決定されたわけではないが、今年の学年別トーナメントはタッグ戦になるようだ。騒がれる前に組む相手を決めてしまうといい」
「わかりました、ありがとうございます」
うん、いいことを聞いた。今のうちにペアを決めてしまえば、押し掛けられずに済むかもしれない。
けれど僕の心は沈んだままだ。
メルツェルさんのことも、僕は騙しているんだから。

――――――――――

「思った通り、デュノア社の社長には息子はいないわ。記録はあるけど、明らかに最近捏造したものよ」
「だろうな。シャルル・デュノアに会ったが、匂いや骨格が男のものではなかった」
「追い詰められたデュノア社が、一夏くんに近づくために男装させて送り込んだってところかしら」
「本人は乗り気ではないようだ。真面目で、善人なのだろう」
「このこと、フランス政府が知ってると思う？」
「知っているだろう。隠し切れるものではない。黙認しているのか、協力しているのかはわからんが」
「知らないフリしながらそれとなく協力しているってところじゃない？」

「上手くいけば良し、失敗するか、ことが公になれば、デュノア社諸共切り捨てる。そんなところか」
「やることがえぐいわねぇ、いたいけな女の子を利用するだなんて」
「好都合だ。一夏はシャルル・デュノアの境遇に義憤を抱くだろう。そうなれば、シャルル・デュノアも引き入れ易くなる」
「……あなたも大概、えぐいわねぇ」
「誉め言葉と受け取っておこう。……さて、大分、揃ってきたな」
「ええ。あとは、向こうがどう仕掛けてくるか……」
「そして、こちらがどう応じるか。……私は引き続き、戦力を集める。お前は奴らの動向に注意していろ」
「りょーかい。……ねえ、メルツェル。あなたはなんで戦うの？あなたなら、もっと別のことで力を発揮できると思うけど」
「ＩＳは本来宇宙開発のために作られたものだ。今では軍事に使われているが、その必要性を少しでも薄めれば、本来の役目にも使われ始めるだろう」
「そのために、武装組織である亡国機業を潰すってこと？」
「そういうことだ」
「……じゃああなたは、なんで宇宙開発のために戦うの？特にそっち系の道を目指してるようには見えないけれど」
「私が目指す必要はない。私は、そのための地盤を築ければいい」
「……どうして、そこまでするの？あなたは何を望んでいるの？」
「決まっている。

――――人類に、黄金の時代を」

――――――――――――

「ふむ、メイド喫茶か」

夏休みも終わり、そろそろ学園祭が近付いてきた。
俺たちのクラスの出し物はメイド喫茶。発案者はなんとラウラである。

「お前はどうするんだ？執事服か」
「そうなんだよ。……参るよなあ。絶対すごい騒ぎになるぜ」
「だろうな。しかしもう慣れたものだろう」
「んなわけないだろ……」

今俺は学園祭に向けてアドバイスをもらうべくメル姉に相談に来たのだが、メル姉は面白がるばかりで特に役に立ちそうな話はしてくれない。
……困ったことがあれば相談に乗るって言ってたクセに。

「学園祭は言うまでもなく学校行事だ。当然私にも仕事がある。お前にばかりかまけているわけにはいかん」
「そうだろうけどさ、そこをなんとか。アドバイスだけでいいんだよ」
「そう言われてもな。私も、喫茶店の経営など経験がない」

言われてみれば、メル姉はバイトの経験さえなかった。
頭がいいからなんでも知ってるように思ってしまうが、メル姉にだってわからないことくらいあるのは当たり前だ。

「素人考えでよければ、言わせてもらうが」

「お？是非頼むよ」
「特に凝ったことをする必要はあるまい。お前のクラスには目玉となる者が多い。お前を含めて」
「あー……やっぱり？」
つまりは顔で勝負ってことか。
「メイド喫茶というだけで十分だろう。これ以上手を加えても、それに見合う成果は上がらんと思うが」
「うーん、そんなことするくらいなら、接客の練習した方がいいってことか……」
「飽くまで、素人の考えだがな」
「いや、助かったよ。サンキュ、メル姉」
やっぱりメル姉は頼りになる。おかげで方向性が決まった。早速明日から、練習を始めよう。
「ところでメル姉は学園祭、何やるんだ？」
「秘密だ」
「えー……そう言わずにさ」
「学園祭にはわかる。楽しみにしておくといい」
「せめてヒントだけでも」
「何故そうまで食い下がる」
「え？いや、それは……」
いや、だって気になるじゃん。メル姉がメイド喫茶とかやるんなら、行くぞ、俺。
「そうだな。ヒントと言えるかはわからんが、ひとつだけ」
「お？なになに？」

そしてメル姉は一拍置き、ひどく真剣な表情で、こういった。

「――二世一代の、大勝負だ」

――――――――――

「……来ると思う？」

「来るだろうさ。外部の人間がＩＳ学園に侵入する、最大の好機だ。無駄にするほど、愚かな連中ではあるまい」

「どんな手で来るかしらね、亡国機業は」

「我々が戦力を集めているように、奴らもＩＳを集めているだろう。現在、世界で強奪されているＩＳの数は多くない。亡国機業の規模を考えれば、全く足りていないはずだ」

「つまり、ＩＳを狙ってくると？」

「この学園ほど多くのＩＳが集中している場所はない。他に狙うものはなかろう。問題は、数か、質か」

「大量に配備されている訓練機か、代表候補生たちの専用機か。亡国機業がどれだけの技術力があるかによるわね」

「今まで狙われてきた機体は新型ばかりだ。おそらく、今回も狙ってくるのは専用機、それも――」

「一夏くんの白式か、箒ちゃんの紅椿ね。性能でいえばダントツだもの」

「性能は紅椿が上だが、白式には世界で唯一の男のＩＳ操縦者である一夏のことがある。……注目度は五分というところか」

「両方守るしかないわね。分担はどうするの？」

「箒がお前、一夏が私だ」
「あなたが？勝てるわけないでしょう。いくら亡国機業でも大勢は送り込めない、来るのはきっと、精鋭よ？」
「まあ、そうだろうな。……その時は、私が死ぬだけの話だ」

――――――――――

「――――そこまでにしてもらおうか」

突如現れた謎の女。
亡国機業のオータムと名乗るソイツは、第二回モンド・グロッソの決勝で俺を誘拐したのは自分たちだと言い、俺の白式まで奪った。
……許せねぇ。許せねぇが、しかしＩＳを失った俺は、〔アラクネ〕というＩＳを装着したオータムを相手には手も足もでない。
どうすればいい――――そう歯噛みしているところに、聞き慣れた声が聞こえた。

「メ、メル姉……？」
「遅くなったな、一夏。まあ、どうにか間に合ったか」

メル姉は黒い装甲のＩＳを身に纏っていた。
分厚い装甲に、左右の手には大型のライフル、両肩にはタイプの違う二種類のミサイルを装備している。

「ああん？誰だ、てめえ？」

「生徒会副会長、メルツェルだ。ＩＳ学園にようこそ。歓迎しよう、盛大にな！」

そう言って、ライフルを連射するメル姉。

――――助けに来てくれた。

「メル姉っ！」

「下がっていろ。巻き込まれるぞ」

戦闘中だと言うのに、ひどく落ち着いた声。

その冷静さは実に頼りになるが、しかしメル姉の操縦技術はお世辞にも優れているとは言えなかった。

「はっ！大したことねえなあ、副会長さんよ！」

「生憎、頭脳労働担当でな」

メル姉の戦い方は基本に忠実で、それ故に読みやすい。

逆にオータムのアラクネは通常の手足の他に、八本の装甲脚を持つ異形のＩＳだ。その変則的な戦術は、確実にメル姉を追い詰めていく。

（畜生っ！見てるしかできねぇのかよ！？）

「教科書通りの戦い方だなあ！次になにすんのか、手に取るようにわかるぜ！」

「何事も、重要なのは定跡（オープニング）だからな」

「何事もやりすぎはよくないって知らねえのか！？」

「過ぎたるは及ばざるが如し、か。なるほど、覚えておこう」

メル姉の重装甲が見る見るうちに削りとられていく。

どう考えても勝ち目のない相手に、ボロボロになりながら、それでもメル姉は戦い続ける。

――俺を、庇って。

「メル姉、もういいっ！逃げてくれっ！！」

「そうはいかん。これは、私の戦いでもあるからな」

力強い瞳で、メル姉はオータムを睨みつける。

その眼差しに、その言葉に、どんな意味があるのか。

それは、俺にはわからなかったけれど。

――――――――――――

「亡国機業のメンバーを、どうにかして捕らえなければな」

「そうね。追い返すだけじゃ、準備してきた意味がないもの」

「学園側にも手を回す必要があるな。ただ尋問しても、効果はないだろうからな」

「なにかいい情報、持ってると思う？」

「さあな。だが来るのは間違いなく、ＩＳを持つ者だ。恐らくは幹部、若しくは精鋭部隊の者だろう。期待はできる」

「もしそうだとしたら、あなたでも情報を聞き出すのは難しいんじゃない？」

「侮らないでもらおうか。私の業は、お前の比ではない」

「……何者なのかしらね、あなたは。いくら調べても、普通の人生

を送ってきた、普通の女の子のはずなのに」
「普通、か。そんな上等なものではないよ、私は」
「……いつかあなたと、もっと色々なことを話したいわね」
「意味があるとは思えないが」
「あるわよ。すごく、大きな意味が」
「……」
「いつかきっと、わかる時がくる。だからそれまで――生きて、メルツェル」

――――――――――

（お前との約束、守れんかもしれん、楯無）

亡国機業が送り込んだエージェント、オータムのＩＳは第二世代型のようだが、私如きに抑え切ることは出来ないようだ。
元々戦闘は私の領分ではないから仕方ないが、しかし私自身の力不足は痛いところだ。

（一応増援は呼んであるから、時間稼ぎだけでいいのだが……果たして、あとどれだけ保つものか）

私の専用機、〔オープニング〕は重装甲だが、敵ＩＳ〔アラクネ〕の攻撃力は高い。多少の装甲などものともせずにダメージを与えてくる。

（あと一手、欲しいところだな）

せめて逃げ場を塞ぐくらいはしておかなければ、今までのことが無駄になりかねん。それだけは避けたいところだ。

「そらそら、どうしたあ！もうあとが無いぜえ！？」
「ふむ……どうしたものか」
「余裕こいてんじゃねえぞ！」
「性分だ、余裕があるわけではない」
「ムカつく野郎だな、てめえ……！！」

さて、本当に余裕がなくなってきた。
この女の様子を見る限り、私のＩＳが解除されればそのまま殺されるだろう。
まだ死ぬわけにはいかんのだがな。

「そろそろ終わらせるかあ！」
「む……」

八本の装甲脚が一斉に襲いかかってくる。捌ききれず、五本にＩＳを貫かれた。
すぐにライフルをオータムに向けたが、残った脚が翻ってきてライフルを弾き飛ばし、続いて両肩のミサイルも破壊された。

「メル姉ぇぇぇっ！！」
「ふむ……万事休す、か」
「てめえ……ここまで来ても、余裕かよ」
「言ったろう、性分だと。生憎、人並みの感情の持ち合わせがなくてな」
「はん……マジでムカつく野郎だぜ」

潮時か。
幸運にも二度目の生に恵まれたが、そこで私の運も尽きたらしい。
宿願まで叶えることは、できないようだ。

（……いや、宿願などという、上等なものではない。ただの、妄執だ）

感情の欠けた私にある唯一の目的。
人類に、黄金の時代を。
死して尚、私はそれだけに執着した。

（馬鹿は死んでも治らない、か。ヴァオーのことは言えんな）

まあ、悪党らしい死に様だ。
目的を達することなく、志半ばで果てる。ただもう一度、同じ事を繰り返すだけ。

（すまんな、テルミドール。私はまた、届かないようだ）

――――――――――

（畜生、畜生っ！ふざけるな、ふざけるなよ！俺は、メル姉を守りたいのに――）

メル姉は俺が小さい頃から、ずっと世話をしてくれた。
千冬姉が家を空けるようになってから、一人で家にいる俺を良く訪

ねて来てくれた。
二人で下手くそな料理を作ったり、千冬姉が散らかした部屋を片付けたり。
色々相談に乗ってくれたし、勉強も見てくれた。
そんなメル姉が、俺を庇って戦っている。
なのに、俺にはただ見てるだけしか出来ない。

（……力が、欲しい……）

ふざけるな。
俺は、守るって決めたんだ。
俺の大事な人たちは、みんな。

（……力が要るんだよ……）

力を奪われ、無力な俺を守ってメル姉が戦っている。
それは、俺がやらなきゃならないのに。

（……いつまで、そんなところにいるつもりだ……）

有りっ丈の力を視線に乗せて、オータムを睨み付ける。
その手の中の、俺の相棒を。

（……さっさと戻って来い……！）

願う。
ただ強く、ただ一心に。
――――みんなを守るための、力を。

（お前は俺の相棒だろうが！なら、俺と一緒に戦え！！）

だから、まずは。

目の前で戦っている、俺の、もう一人の姉さんを。

（メル姉を、守るためにっ！！）

力を、貸してくれ――――相棒。

「来い……白式いいいいっ！！」

――――――――――

ふと、目が覚めた。

白い壁、白い天井、白いカーテン――――清潔なその空間には、覚えがあった。

「……地獄、ではないようだな」

どうやら私は死に損なったらしい。

あの状況で生き残ったとなると――――

「お前か、一夏」

「……良かった。目ぇ覚めたんだな、メル姉」

ベッドに横たわる私のすぐ横に、弟分の姿があった。
私の声に、心底嬉しそうな笑顔を向けてくる。

「ごめん、メル姉。俺のせいで、無茶させて……」
「私の目的のためにやったことだ。お前が気に病むことはない」
「あのねぇ、一夏くんはあなたを助けて、眠ってるあなたをずっと看てたのよ？感謝くらいしてもいいんじゃないの、メルツェル？」

友人の声。
そちらに顔を向けると、呆れ顔の楯無がそこにいた。

「首尾はどうだ、会長」
「起きてさっそくそれ？仕事熱心ね、副会長」

楯無はひとつ溜め息をついて、話し始めた。

「ごめんなさい、逃げられたわ」
「……ふむ」

一夏を見るが、特に反応を示さない。

「……楯無さんから聞いたよ。メル姉、あいつらを倒すために、俺や箒たちを利用しようとしてたって」
「ああ、その通りだ」
「……話しておいた方がいいと思って」
「だろうな。いつまでも隠しおおせるとは、私も考えていない」

とは言ったものの、予定よりも大分早まったな。
さて、この先どうするか……。

「……言ってくれよ、メル姉」
「なに？」
「隠す必要なんてなかった。言ってくれれば、喜んで手伝ったのに」
……驚いた。
私のやり方は、一夏の好むものではないと思っていたが。
「怒らないのだな。私はお前と接する時、仮面を被っていたというのに」
「関係ねえよ。メル姉はずっと、俺のことを守ってくれてた。何か思惑があったんだとしても、その事実は変わらない。メル姉がいてくれたから、今の俺があるんだ」
私の目を真っ直ぐに見て、一夏は語る。
「手伝わせてくれ、メル姉。あいつらは俺を攫って、千冬姉のモンド・グロッソ優勝を潰した。今回も学園まで殴り込んで来て、メル姉を傷つけた」
「狙われたのはお前だろう」
「……とにかく。俺は、メル姉の力になりたいんだ」
「お前の知る私は、本当の私ではない」
「だからさ、そんなことは関係ねえんだよ。メル姉は、メル姉なんだから」
「……相変わらず、わからんな。お前の、言うことは」
人は理屈だけでなく、感情で動く。
その感情が欠けている私は、他人の言動を理解出来ないことが多い。
だからこそ、人を観察することでそれを埋めていたのだが。
「メル姉、前に言ってたよな。私には、ヒトの心がないって」

「ああ。今も、お前がなにを思っているのか、私にはわからない」
「ねえ、メルツェル。あなたは自分が人形だって言うけど、そんなことないわ」
「……なに？」
「だってあなた、一夏くんの言葉がわからないって言う時……辛そうな顔、してるもの」
……そんな、ことは。
「気づいてなかったのかよ、メル姉。心がないだなんて嘘だ。メル姉はちょっと感情が弱いだけで、ちゃんと心はあるよ」
「……そんなものはない」
「あなた、言ったわよね。前線で戦う雑兵に、目的のために死ねって命ずるのも、指揮官の仕事だって。……そんなの、真っ当な神経なら相当キツいわよ。命令する相手が、大事な人たちなら尚更ね。だけどあなたの目的のためには、そんな感情は邪魔にしかならない。だからあなたは、誰かをリーダーとして持ち上げて、自分は参謀として汚れ役に徹している。……自分の心を、押し殺して」
「……」
かつての仲間たちを思い出す。
クローズ・プランのため、私は多くの仲間を死に追いやった。
その中には、長年共に戦い続けた友人もいた。
彼らが私の策に従い死んだ時……私は本当に、なにも感じていなかったか？
「人類の黄金の時代のため。そんなことを本気で目指すような人が、優しくないわけないじゃない」
「メル姉、知ってるか？メル姉を慕ってる人はたくさんいる。本当に心がなければ、こんなに大勢の人に好かれるもんか」

「……」

かつての私の、最後の戦い。
あの時私に付いて来たあの男は、死の間際、一体なんと言っていた？

『悔いはねえ。……楽しかったぜ、メルツェル』

あの、どこまでも真っ直ぐな男は。
自分が捨て駒であると、わかっていながら。

――私のために、戦ってくれたのでは、なかったか……？

「あなたは、人形なんかじゃない。ひねくれ者で、腹黒くて、抜け目なくて……そのくせ自分のことには気づかない、ただの人間よ。……そして、私の友達よ、メルツェル」

「ついでに言えば、俺にとってはもう一人の姉さんだ。……だからさ、メル姉。自分には心がないとか、自分は人形だとか、そんなこと言うなよ。……メル姉は、人間だ。ちゃんと心のある、人間だよ」

「……そうか。そうかも、知れんな」

相変わらず、こいつの言うことは、わからないが。
いずれ、わかる時が来るのかも知れない。
その時が来れば、私は――

「……人間らしく、なれるかも、知れんな」

外伝2　自動人形は誰がために踊る（後書き）

私の中では、ＯＲＣＡメンバーは約一名を除いていい人です。
人類の未来のために世界と戦って、大勢死なせてしまうことに言い訳せず、死ぬ時は潔く、しかし仲間のことを案じている……

実にカッコいい人たちだと思います。

第２３話　準備（前書き）

前回の外伝で、メルツェルのファンの方が大勢いることが確認できて嬉しいです。
さすがだぜ、メルツェェェェェル！！

というわけで、ようやく三巻に突入です。

第２３話　準備

午前５時。
七月になり、日の出も大分早くなった。
もう十分な明るさとなったＩＳ学園のグラウンドで、己はラウラと対峙している。

「はあっ！」
「……ッ！」

日課である早朝の鍛錬。今日はラウラも参加していた。
己の得物は普通の木刀、対するラウラは両手に短い木剣を、ナイフのように持っている。

「シッ！」

ラウラが左の木剣を振るう。それを木刀で受けると、右の木剣が己の心臓を目掛けて走る。

「……」
「ぐ……！」

ラウラの右肩に前蹴りを叩き込み、それを防いだ。
身長１５０センチ足らずのラウラと１７０センチを越える己ではリーチが違う。
加えて腕と足だ、木剣の長さを考慮に入れてもまるで足りない。

「……ッ！」

そのまま足を振り上げ、踵落とし。ラウラは退がってかわしたが、己は足を振り下ろした勢いのままに刺突を繰り出す。
ラウラは身を屈めてそれを回避、同時に地を蹴って一気に間合いを詰めた。
そのまま連撃へ。

「おおおお！」
「……ッ！」

間合いが広いというのは、裏を返せば小回りが効かないということだ。ここまで深く懐に踏み込まれれば一転してラウラが有利になる。
加えてラウラの得物は二本、己は腕からして一本しかない。
回転の速い連撃を捌き続けるのは容易ではない。

――まあ、不可能というわけでもないが。

「ぬう……！」
「……」

自分に有利な距離である筈なのに攻めきれず、ラウラの顔に焦りが生まれる。

……顔に出すな、相手に焦りを悟らせるなど、罠でなければ自分が不利になるだけだ。

「……」

というわけで、己から罠をかけることにした。
ラウラの木剣を受けた瞬間、木刀の握りを甘くし、弾き飛ばさせる。

飽くまでも自然にやったが、冷静なら気付く程度。
だが焦るラウラの目には、大きなチャンスと写ったようだ。

「もらった！」
「……」

木剣を突き出すラウラ。その動きは大振りで、ラウラの心境を物語っている。

ところで己は、最大の武器は自らの肉体だと思っている。
そこに幾ばくかの精神論が混じっていることは否定しないが、確たる理由も当然存在する。人体の破壊に最も適しているのは、同じく人体だからだ。

「……」
「が……！？」

間合いというのは武器の射程距離だ。
剣ならば長さが決まっているし、銃ならば直線に真っ直ぐ伸びる。
間合いを見切ることは戦闘における基礎中の基礎だ。ラウラもそれを重々承知しているだろう。

そこで先程の人体の話に戻る。人間の体は急激に大きさを変えることは出来ないが、しかし手足には関節がある。
手だけでも拳と手刀では僅かに間合いが変わるし、肘や膝を使えば拳打や蹴りよりも小回りが効く。

つまり己がしたのは、近い間合いを更に詰め、ラウラの鳩尾に膝を叩き込んだのである。

「ぐ、ふう……！」
「……」

肺の中の空気が強制的に吐き出され、ラウラの動きが鈍る。
しかし尚も接近する己に対し、なにもしないわけにはいかない。
ラウラは再び木剣を振るうが、明らかに切れが悪い。
己は回し打ち（フック）でラウラの顎を打ち貫き、振り抜きながら腕を折り畳んで側頭部に肘を叩き込んだ。

「ぐ……あ？」

ほぼ同時に頭部に二連撃を受け、ラウラの脳が盛大に揺さぶられる。
脳から体へ送られる信号が一時的に遮断され、カクンとラウラの膝が落ちた。
己は悠々と木刀を拾い上げ、ラウラの首に添える。

「……王手……」

ラウラは一瞬悔しそうに表情を歪めたが、すぐにふ、と笑い、自らの負けを認めた。

「完敗だ。やはり生身では相手にならんか。……流石だ、マスター」

……その呼び方は止めろ。

――――――――――

「来週は臨海学校ですわね」
「シン、アンタどうすんの？」
「……？」

夕方、食堂でセシリアと鈴に合った。
仲が悪いクセにどういうわけか一緒に行動していることが多いのは、本当は仲がいいからだろう。

……何をされるかわからないので、決して口にはしないが。

「水着よ、水着。アンタどうせ、学校指定の水着しかないんでしょ」
「それではいけませんわ。せっかくの海なのですから、真改さんの魅力を発揮できる水着を着ませんと」
「……」

セシリアはどうやら己を真改と呼ぶことにしたらしい。あれから渾名呼びに挑戦してこなくなった。

……まあそれは置いておくとして、正気か、コイツら？
己に水着など、小夜ですら着せようとしないと言うのに。

「……左腕……」
「ええ、わかっていますわ。当然考えてあります」
「安心しなさい。あたしにいい考えがあるわ」

……何故かはわからんが、その言い方には大いに不安を掻き立てられるんだが。何故かはわからんが。

「というわけで、次の日曜、買い物に行くわよ」

「予定を空けておいてくださいね」
「……」

己の意見は無視か。まあどうせ予定などないから、構わんが。

「私も同行しよう」
「な……！？」
「ラ、ラウラ・ボーデヴィッヒ！？」

突然の乱入者。
それはラウラ・ボーデヴィッヒ。
学年別トーナメントで己の相棒だった少女である。

「なんでアンタが来んのよ……」
「お呼びではありませんわよ」
「なに、相棒が買い物に行くと聞こえたのでな。先月の詫びに、代金くらいは私が持とう」
「……」

己はお前の相棒なのかマスターなのか、そこのところをハッキリさせてくれないか。

「……それくらいで済むと思ってんの？」
「真改さんへの侮辱の数々、忘れたわけではありませんわよ？」
「……それについては謝罪する。すまなかった」

そう言って深々と頭を下げるラウラ。
素直に謝るとは思っていなかったのだろう、二人は毒気を抜かれたようだ。

「償いはする。必ず。……そのための、チャンスをくれ」
「……ま、まあ、そこまで言うのでしたら……」
「そ、そうね。シンはあんまり気にしてないみたいだし、あたしたちだけ騒ぐのも、ねえ……？」
「……」
……根はいいやつらなのだが、素直じゃないな。
「……私の同行を、許してもらえるか？」
「……構わない……」
「そ、そうか！うむ、流石はマスターだ！」
「……」
……もう突っ込むまい。人間、諦めが肝心だ。
「次の日曜だったな。私も予定を空けておく。……楽しみにしているぞ、マスター」
言うことだけ言ってラウラは去っていった。
……以前の周囲全てを拒絶するような雰囲気がなくなったのはいいことなのだろうが。
「……なんであんなに懐かれてんのよ」
「……何をしたんですの？真改さん」
「……」
いや……そう大したことはしてない筈だが。
「まあいいわ。それじゃ日曜、忘れないでね、シン」
「わたくしも楽しみにしていますわ、真改さん」

そう言って、二人も去っていく。
……さて、どうするか。せっかくだ、本音も誘うか。

――――――――――

というわけで、日曜日。あたしたちは駅前で待ち合わせをしているんだけど……。

「……遅いな、マスター」
「あなたが来るのが早過ぎなんですわよ」
「アンタもね」
「あなたもでしょう、鈴さん」
「う……」

かれこれ二十分、シンを待っていた。
せっかく出かけるんだから学園の外で待ち合わせよう、と提案したのは間違いだったかも知れない。

別に待つのは構わない。約束の時間より三十分も早く来たあたしたちが悪いのだから。
あたしが嫌なのは――

「ねえねえ君たち、暇そうだね」
「俺らもちょうどヒマしててさ、一緒に遊ばない？」
「すごい綺麗だねえ、モデルさんかなにか？」

「おい見ろよ、この子人形みたいだぜ！か～わいい～！！」

こういう、見るからに頭の足りてない男どもが寄ってくることだ。

「……見ればわかるでしょ。待ち合わせしてんのよ」

「え？相手だれ？男？女の子？」

「男だったらサイテーだな、こんなカワイイ子たちを待たせるなんてさ」

「女の子ならちょうどいいじゃん！俺ら四人だし」

「どちらにしてもお断りします。わたくしはあなた方のような殿方に見合うほど、安くはありませんので」

「そんなこと言わずにさあ」

「俺ら、けっこうイイよ？ここらへんの遊び場は知り尽くしてるし」

「女の子のことも知り尽くしてるし～。楽しめると思うけどな～？」

「……下種が」

女尊男卑の世の中になってから男の立場は急激に低くなったけど、逆にそれでいい思いをしている男たちがいる。

見た目が良くて女から可愛がられる、いわゆるホストやアイドルのような連中だ。そういうヤツらは女にちやほやされているうちに、自分は女に愛される存在だと勘違いするのだ。

今あたしたちに言い寄っているバカ男たちも、確かにルックスだけはいい。けどあたしたちは、中身のない綺麗なだけのガラクタなんて興味ない。

「……ねえ、どっか行ってくんない？うっとうしいんだけど」

「そういわずにさあ、ね？絶対退屈させないからさあ」

……面倒くさい。もうぶっ飛ばそうかな……。

そんな危ないことを割と本気で考え出したところで――

「お〜、りんりんたちもう来てる〜」
「……」
間延びした声が聞こえたのでそっちを向くと、本音とシンがこっちに歩いてきていた。
「え、なになに？あの子たちが待ち合わせ相手？」
「ヒュ〜♪カワイイじゃん！」
「すげえ、もう一人もめちゃくちゃキレ……イ……？」
シンを見たバカ男たちの表情が固まる。
シンは黒いズボンに白い長袖のブラウスという、シンらしい飾り気のない格好をしているのだが、整った容姿が人目を惹く。そしてまずは顔を見て、次に全体を見て気付くのだ。
――――空っぽの、左袖に。
「う……腕が……」
「やっほ〜、お待たせ〜」
ほわほわした笑顔でとことこ近づいて来る本音に手を振り、出迎える。
「気にしなくていいわよ。あたしたちが早過ぎたんだし」
「あれ〜？りんりんナンパされてたの〜？」
「……まあね」
「……」
シンがバカ男たちを見ると、連中は急に挙動不審になった。

……気に食わない。

「お、おい……行こうぜ……」
「あ、ああ……」
「あら？わたくしたちを遊びに連れて行ってくれるのではないんですか？」
「二言とは、男らしくないな」

そんな様子のバカ男たちに、ただでさえ不機嫌になっていたセシリアとラウラの機嫌がさらに悪くなった。ちなみにあたしも相当不機嫌だ。

「え！？い、いや、やっぱお邪魔しちゃ悪いかな～、って」
「そ、そうそう！あ、そういや俺用事あるんだった！」
「やっべ、俺もだ！いやあ、忘れてたぜ！」
「じ、じゃあそーゆうことで！」

逃げるように――いや、実際逃げていくバカ男たちの背中を睨み付けてから、シンに向き合う。

「……不愉快ですわ」
「まったくだ。外見だけの者は、外見しか見えないのだな」
「……ごめん、シン。やな思いさせた」
「……無用……」

確かにシンはこういうことは慣れっこだし気にしないだろうが、あたしが気にするのだ。シンの内面に触れればシンの良さがわかるのに、大抵の人は左腕がないというだけでシンをさける。
……それが、あたしは気に食わない。

「ま～ま～、せっかくみんなでお出かけなんだし、楽しく行こ～？」
「……そうですわね。あんな方たちのことなんて、気にすることはありませんわね」
「ああ、下等生物を相手にする必要はないな。では行くか、マスター」
にへら、と笑う本音のおかげで、場の雰囲気が和らいだ。この子は本当にすごいとつくづく思う瞬間である。
「……よし！じゃあ気を取り直して、行くわよ！」
「お～！しゅっぱ～つ！」
「……」
そうしてあたしたちは、駅前のショッピングモール〔レゾナンテ〕に向けて歩き出した。
――――――――――
「ほう……随分大きなショッピングモールだな」
「ここに無ければ市内のどこにも無いって言われてるくらいだからね。交通の中心でもあるし、ここより大きいモールはなかなかないわよ」
「けれどここ、どう見ても駅とくっついてますわよね？駅前という表現は正しいのですか？」
「……そこは突っ込んじゃいけないとこよ、セシリア」

レゾナンテに到着すると、ラウラがキョロキョロと周りを見始めた。幼いころから軍で育てられたっていうし、こういう場所に来るのは初めてなのかもしれない。

「水着売り場は二階だったわね。じゃ、行くわよ」

五人でゾロゾロと歩き出す。

中学の時はあたしと一夏、シン、それと弾の四人でよく遊びに来ていたので、どこにどんなお店があるのかは大体把握している。多少は入れ替わりがあったみたいだけど、ほとんどは前のままだ。

「お～、あそこのケーキおいしそ～。あ！あそこのシュークリームも食べたいな～」

「……さっきから食べ物のことばかりだな」

「ほら、本音さん。ちゃんと前を向いてませんと、迷子になりますわよ？」

「平気だも～ん。私には、いのっちナビがあるもんね～」

「……」

シンにひっついてはしゃいでいる本音だが、よく見るとこの子はシンの左腕を周りからさりげなく隠している。

シンは自分がじろじろ見られたり露骨に避けられたりするのはまるで気にしないクセに、それにあたしたちが巻き込まれるのは嫌がっていた。それを本音が知っているとは思えないけど……天然ってヤツかしら？

とにかく本音のおかげで、あたしたちは人目を気にすることなく目的地に着いた。……いや、ほんとすごいわね、この子。

「いらっしゃいませ。水着をお探しですか？」

品の良さそうな店員が話し掛けて来た。
ラウラやセシリアは見るからに外国人なので、この店に不慣れと考え案内しに来たんだろう。

「そ。この子のね」
「え？えーと……こちらの方ですか？」

あたしがシンを指差すと、店員が困惑する。さすがに真っ正面に立たれれば腕のことに気付くので、それが原因だろう。

「そうだけど？」
「なにか問題があるか？」
「ここはお客を選ぶようなお店ですのね」
「ケンカなら言い値で買うぜ～」
「え、あ、いえ、そのようなことは……」

本音がカタツムリにもよけられそうなシャドーボクシングを初めると、店員はいよいよ困り果てたようだった。
それを見たシンが本音の頭に拳骨を落としたあたりで、あたしは店員に助け舟を出した。

「大丈夫、あたしこのお店慣れてるから。適当に探すわ」
「あ、はい、かしこまりました。それでは、ごゆっくり」

あからさまにほっとしたような顔をして、仕事に戻る店員。
チラリと後ろを見ると、シンがほんの少しだけ顔をしかめていた。

「……ほら、なに突っ立ってんのよ。なんか着たい水着とかないの？」

いつも通りの口調を心がけて、シンを促す。あたしたちが連れ出したのに嫌な思いをさせたままだなんて、あたしのプライドに関わるのだ。
シンには、無理矢理でも楽しんでもらわないと。
そんな思いが伝わったのか、シンもいつも通りの無表情に戻り、短く答えた。

「……地味……」
「「「却下」」」
「……」

やっぱりシンにはこういうことは任せられない。ていうか話にならない。

というわけで、急遽会議が開かれた。

「やっぱシンには白が似合うと思うのよ」
「なにをおっしゃるかと思えば。青に決まっているでしょう」
「そりゃアンタの趣味でしょうが」
「黒だな。マスターは肌が白い。黒は髪と同じく、良く映えるだろう」
「う～ん、一理あるわね……」
「ねえねえ、これなんかどお～？」
「「「却下」」」
「ええ～！？」

本音がどこからか（本当にどこから持ってきたんだか）ピ○チュウの着ぐるみみたいな水着を持ってきたので、三人で即座に切り捨てた。泣きべそをかきながら水着を戻しにいく本音を無視し、会議を

進める。

「黒か。……う～ん、確かに似合うわね」

近くにあった黒いビキニをシンの体にあててみる。

……うん、白い肌とのコントラストが良く映える。

「……うん、黒いのを中心に、いくつか試してみましょ」

「では青い水着を見繕って来ますわ」

「話を聞いていたのか？」

「ねえねえ、これはどお～？」

「「却下」」

「ええ～！？」

今度はヨ○シーの着ぐるみみたいな以下略。

「じゃあこれとこれと、あとこれね」

「……」

「あ、真改さん、こちらも」

「むう……選ぶ基準がわからん……」

「ねえねえ～」

「「却下」」

「ええ～！？」

―――――――――――

……というわけで、己は試着室に押し込められた。
籠の中には十着近い水着が入っている。黒を中心に、青と白が少々。
見立てたのは鈴とセシリアで、ラウラはどうすればいいのかわからずにオロオロしており、本音は次々と水着を持って来てはいたが全て却下されていた。

（……やれやれ……）

籠の中身をいくつか取り出して見比べてみるが、己にはどれも同じに見える。つまりはどれでもいい。
だが彼女らはそれでは納得しないだろう。ひとつくらいは実際に着て見せなければな。

「……」

適当にひとつ選んで広げてみる。比較的（飽くまでも比較的、だが）面積の広いそれを着てみることにした。

「……」

流石と言うべきか、彼女らは片腕でも着られる水着を選んできてくれたようだ。

とりあえず、服を脱ぐ。
まずは下の水着を履き、次いでサラシを解いた。元々さして大きくもない胸だが、それでもサラシを巻けば外見はさらに小さくなる。
しかしこの水着は己の体に合っていた。恐らく鈴が選んだのだろう、アイツは己のスリーサイズを知っているからな。

（……ふむ……）

試着室に備え付けられた鏡を見る。
欠けた左腕とそれを覆う包帯以外は、特におかしなところはない。
まあ鈴もセシリアもモデルとして雑誌に載ったことがあるのだから（国家代表候補生には良くあることだ）、水着の見立てくらいはお手の物だろう。

……しかしこの水着、手触りの良い生地といい質素ながら品の良いフリルといい、かなり高価そうな代物なんだが。
……ラウラ持ちだからと調子に乗ったな、鈴。

「……」

さて、着終えたことだし、御披露目といくか。正直気は乗らんが。

そうして試着室のカーテンを開けると、そこには――

「……シン？」
「……」

――どういうわけか、一夏がいた。

――――――――――

「えーっと、水着売り場はここだな」

来週の臨海学校に向けて、俺はシャルと駅前のショッピングモール〔レゾナンテ〕に来ていた。

ここに来れば一度で買い物を済ませられるからな。実に便利だ。

「はあああ……」

しかしどういうわけか、シャルは随分落ち込んでいる。ついでに機嫌も悪そうだった。

「大丈夫か？具合が悪いなら、今日は止めとくか？」

「……ううん、具合は大丈夫だよ。他の理由だから」

「他の理由？」

「自分の胸に聞いてみなよ」

「？？」

なんだ？俺はただ、シャルに「付き合ってくれ」って言って誘っただけなんだが……？

「ところでシャルも水着を買うのか？」

「そ、そうだね……あの、一夏はさ、その……僕の水着姿、見たい？」

なんだ？不思議なことを聞くな。泳ぎたいから水着を買いに来たんじゃないのか？

「そうだなぁ。せっかくだし泳ごうぜ。俺も海は久しぶりだから、結構楽しみなんだよ」

「そ、そうなんだ。じゃ、じゃあ、せっかくだし新しいの買おうか

なっ」

急に元気になるシャル。やっぱり海が楽しみなのだろう。海、スイカ、花火は、日本人の夏には欠かせないからな。シャルはフランス人だけど。

「じゃあ、俺は向こうで自分の探して来るよ」

「うん、じゃあまた後で」

……さて、とはいったものの、俺の買い物なんてあっと言う間だ。なにせ買うのは男の水着、悩むことなどない。手頃な値段の物を適当に手に取り、お会計。所要時間五分。はい終了。

「さて、シャルは……あれ？もう来てる？」

「あ、うん。せ、せっかくだから、一夏に選んでもらおうと思って……」

「うん？ああ、いいぜ。俺が役に立つとは思えないけど」

そうは言ったものの、本音を言うとちょっと気が引ける。だって女物の水着売り場だぜ？男が入るのは厳しいものがあるだろ。だが友達、そうでなくても女の子の頼みには出来る限り応えたい。これくらいは我慢だ。

「じゃ、じゃあ、これなんかどうかな？」

「いいんじゃないか？良く似合うと思うぞ」

「そ、そう？じゃあ、着てみよっかなっ」

そう言ってすぐ近くの試着室に入っていくシャル。

その楽しそうな姿はシャルらしい魅力に溢れており、いつも以上に

可愛く見えた。

（むう……しかしやっぱり、ここは落ち着かない……）

男物とは数も質もまるで違う、色とりどりの水着。……目のやり場に困る。

そんなことを考えていると――

「そこのあなた」

「ん？」

キョロキョロと周りを見るが、ここには俺しかいない。

となると、この声は俺に向けられていることになるのだが。

「男のあなたに言ってるのよ。そこの水着、片付けておいて」

「……」

話し掛けて来たのは名前も知らない相手だった。

そう、まったく知らない相手だ。

ＩＳが普及してからの十年で世界はあっと言う間に女尊男卑になり、今ではこうして見ず知らずの男に命令する女、そしてそれに従う男はどこでも見かけるようになった。

けれど、俺は――

「自分でやれよ。五体満足なんだ、それくらい出来るだろ」

そういうのが大嫌いだ。

世の中には障害があるのに他人のことまで気にかける人がいるのに、

簡単なことをただ面倒だからという理由で他人を使おうとするなど、そういう人たちに対する侮辱に他ならない。

「ふうん、そういうこと言うの。自分の立場がわかってないみたいね」

そう言って女性は警備員を呼ぼうとする。

俺には少なくとも警備員のお世話になるような非はないが、今の世の中は女尊男卑、無実の罪で咎められる可能性はかなり高い。

……ふざけた世の中だ。

「どうしました？」

「あいつよ、あの男よ！さっさと捕まえて！」

「いや、何もしていない人を捕まえるわけには――」

「ああもう、使えないわね！これだから男は――」

「……ちっ……」

そんな遣り取りを眺めながら、俺の機嫌は急速に悪化していった。

……男女以前の問題だ、こういう人間は、どうあっても尊敬できない。

そんな苛立ちを抱えていると。

しゃっ、と、試着室のカーテンが開いた。

シャルか？と思って音がした方を見ると、そこに居たのは――

「……シン？」

「……」

見るからに高そうな黒い水着を着た、幼なじみだった。

「な……なにしてんだよ」

「……買い物……」

そりゃそうか。

……いや、そういうことではなくて。

「水着……買いに着たのか？」

「……応……」

シンは見るからに高そうな黒い水着を着ていた。

失礼とはわかっているが、その全身をまじまじと見てしまう。

シンは長身のわりには胸が小さい。というか全体的に細い。

しかし良く鍛えられた体は引き締まっており、健康的な魅力がある。

……シンが水着を着るなど、左腕を失ってからは初めてだ。

それが、妙に嬉しくて。

「……似合ってるよ、シン」

「……」

さっきまで不機嫌だったのに、一瞬で俺の心は喜びに満たされた。

しかしそれも一転、再び不機嫌になる。

何故ならば――

「ちょっとあなた！なにして……る……」

さっき俺に命令してきた女性が、シンの姿を見てあからさまに顔色

を変えたからだ。

「……あ……あなた……」

「なんだよ、文句あんのかよ？」

不機嫌なままに睨み付けると、女性は男への反発心からか、急に強気な態度に戻った。

「ふん！男がこれなら、飼ってる女も女ね！」

そして。

「こんな、片腕女」

――言ってはならないことを、言った。

「……あ？」

視界が真っ赤に染まる。
思考が真っ黒に染まる。

今、なんて言った？

今こいつは、この女は、シンのことを――

「一夏！」

「……っ！！」

シンの一喝。
それで、急速に頭が冷えていく。

今ここで、暴れるのはまずい。
シンにもシャルにも、店にも迷惑がかかる。
それは、ダメだ。
「……悪い。いや、ありがとう、シン」
「……」
どうにか怒りも収まった。いや、収まってはいないが、大分落ち着いた。
またなにか言われない限りは、大丈夫だと思う。
「ふ……ふん！躾がなってないわね！」
俺がキレたことにさすがにまずいことを言ったと思ったのか、そう言って女性は去っていった。捨て台詞は忘れずに置いていったが。
「……それでは、なにもないようでしたら、私はこれで戻ります」
「あ……すいません、お騒がせして」
わけもわからず呼ばれた警備員の人は、一礼して持ち場に戻って行く。
――その、前に。
「その水着、とても良く似合っていますよ、お客様」
「……」
笑顔を浮かべて、心からの言葉を贈ってくれた。

……そうさ、まだまだ男も、捨てたもんじゃない。

「一夏？どうしたの？」

騒ぎを聞きつけたのか、シャルが試着室から顔を出す。
そして周りを見回し、シンを見つけた。

「し、シン！？わあ、すごく似合ってるよ！」

「……」

言われたシンはそのまま試着室に引っ込んで行ってしまった。
……もしかして、照れてる？

「……」

「……」

「「……ふふっ」」

シャルもそれに気付いたようで、同時に笑い出してしまった。

まったく、素直じゃないなあ、シンも。

――――――――――

「「「「で……出遅れた……」」」」

あたしたちは、ハンガーの影からその様子を見ていた。
次の水着を選んでいる間に起きた事件。
一夏が絡まれているところに颯爽と現れてあの嫌な女を撃退、一夏に借りを作るというシナリオを考えていたのに、シンが収めてしまった。

「どうする？出にくくなったぞ」
「今来たところを装えばいいのでは？」
「けどそれだと間抜けよね……」
「いのっちを助けられると思ったのに～」

本音はシンにも飛び火したあたりで出ようとしていたが、トロいので出損ねた。変なところで失敗するわね、この子。

「っていうか、アレ……」
「……シャルロットさん、ですわね」
「デートだねえ～」
「おのれ一夏、私という者がありながら……」
「「うぬぬ……」」

本音を除く三人で呻く。シャルロットは恥ずかしそうに、けどそれ以上に嬉しそうに、試着した水着を一夏に見せている。
そんなシャルロットを見て、一夏は――

「おりむー、鼻の下伸びてるね～」
「「「……」」」

……よし。

「殺そう」

「やめんか、馬鹿者」
「「うひゃあああい！！！？」」」

殺意を込めてＩＳを部分展開しようとしたら、すぐ後ろから声をかけられた。
聞き慣れた声に心底驚きながら振り向くと、やはりそこにいたのは――――

「お、織斑先生……？」
「凰。決められた場所以外での許可のないＩＳの展開は、校則どころか法律にも違反している。……当然知っているな？」
「は、はい……」
「知っている上でやろうとしたのか。良い度胸だな」
「ひい……」

千冬さんはとても怖い顔であたしを見下ろして――――ふっ、と、突然雰囲気を和らげた。

「……まあ、今は私も職務時間外だ。今回だけは見逃してやる」
「へ？あ、ありがとうございます……」

どういうこと？あの千冬さんが、違反を見逃すなんて……

「それはですね、織斑先生は嬉しいんですよ」
「や、山田先生？」
「いらしてたんですの？」
「……ひどいです」
「え！？あ、いえ、今のはですね！」

しゅんとなる山田先生、慌てるセシリア。

しかしそんな山田先生の様子をまるで気にしない、千冬さん大好きっ娘がひとりいた。

「嬉しい、とは？」

「え、ああ、それはですね……」

「……山田先生。余計なことを言わないで下さい」

「ああ、すみません！」

……気になる。

それは他の三人も同じようで、じーっと千冬さんを見詰めている。

そんなあたしたちの様子に、千冬さんははあ、と溜め息をついて、言った。

「随分、久しぶりだったからな」

「「「え？」」」

「……アイツが、水着を着るのは」

優しい顔で試着室を見る千冬さん。

その中には今、彼女の妹分がいる。

……なるほど、そういうことか。

「アイツが自分から来るとは思えん。お前たちが連れ出したんだろう？」

「……」

「一応、感謝しておく。……精々、着飾らせてやってくれ」

「は、はい！任せて下さい！」

俄然気合いが入ってきた。うん、さっきチラッと見ただけだけど、

水着は結構似合っていた。
後は――

「さて、じゃあ次、探すわよ」
「ええ、アレですわね」
「……アレ？」
「ふふふ……さすがに水着だけで真改さんを海に連れ出すのは、ね」
「……いのっちは、気にしないと思うけどね～」
「周りは気にするだろうな。マスターにはその方が辛いだろう」
「そ、だからもう一つ用意するのよ。……大丈夫、我に秘策有り、よ」

いや、本当は秘策ってほど大したもんじゃないんだけどね。

――――――――――

「さて、シンの買い物も終わったし」
「わたくしたちの買い物をしますか」

というわけで、鈴、セシリア、ラウラ、本音も自分たちの水着を買うことにしたわけだが。

「しかし水着なんて必要なのか？」
「はあ？なに言ってんの、アンタ？」
「必要に決まっているでしょう。なんのために真改さんの水着を探しに来たと思ってるんですか？」

「私は単にマスターの買い物に付いて来ただけだが」

ラウラの言葉に呆れ顔の二人。ちなみに本音は、既に真改を連れて着ぐるみのような水着の並ぶコーナーに突撃している。

「じゃああたしは自分の水着探してくるわ」

「では、わたくしも失礼します。あなたは精々、ひとりだけ学校指定の水着で臨海学校に行ってくださいな」

「む……」

ラウラはセシリアの言い方が気になった。まるで学校指定の水着で海に行くことが恥であるかのような言い方だったからだ。

（むう……一応、聞いてみるか……）

そう決めてラウラは、ＩＳのプライベート・チャネルを開く。

相手はラウラが隊長を務めるドイツ軍特殊部隊〔シュヴァルツェ・ハーゼ〕の副隊長にしてラウラの頼れるアドバイザー、クラリッサ・ハルフォーフである。

『――受諾。クラリッサ・ハルフォーフ大尉です』

「ラウラ・ボーデヴィッヒ少佐だ」

『おお、隊長。どうしました？』

「うむ、すまないが、また聞きたいことがあるのだが」

『なんなりと』

「助かる。それで聞きたいことなんだが、海において水着はそんなに大事なのか？」

『海？ああ、そういえば来週は臨海学校でしたね。……ふむ、隊長、いかなる作戦においても重要なのは、事前の準備というのは当然御存知ですね？』

当然、そんな基礎中の基礎はラウラも重々承知している。

『海においてもそれは同じです。実際に海に行ってからの振る舞いではなく、その前に時間をかけて運動その他によりスタイルを整え、綿密な段取りにより空き時間ができるのを防ぎ、自分の容姿や意中の相手の好みに合う水着を用意する。これこそが、海という戦場に臨むための事前準備です』

「なるほど……つまり水着は、装備というわけだな？」

『その通りです。流石は隊長、ご理解が早い。そう、戦場や敵、部隊構成に合わせた最適の装備を揃える必要があるように、隊長もご自分に合う水着をご用意しなければなりません。水着は女性の魅力を引き立てる効果的な装備、隊長が意中の相手を落とすには、今回の臨海学校、利用しない手はありません』

「ふむ……」

そこでラウラは考えた。

海では当然水着を着る。そして水着は女性の魅力を引き立てる装備だと言う。

ならばやはり、一夏の気を引くには水着の選択も良く考えねばなるまい。

「しかしクラリッサ、どんな水着を着ていけば良いのだ？」

『ふむ。隊長は今、どんな水着を所有しているのですか？』

「学校指定の水着一着だ」

『……話になりませんね』

「な、なに……？」

ラウラは驚愕した。

まさかここまでハッキリとダメ出しされるとは思っていなかったか

らだ。
しかし通信機越しでは流石にラウラも気付かなかった。話にならないとか言いながらラウラのスクール水着姿を妄想したクラリッサが、盛大に鼻血を吹き出していることに。

『いいですか、隊長。確かにスクール水着は素晴らしい。隊長にはとても良く似合うことでしょう。しかしそれでは、どうしても――』

「ど、どうしても……？」

『――――色物の域を出ないっ！！』

「な……！？」

『スクール水着の魅力は通常の水着のそれとは別の物です。そして今回隊長に必要なのは、スクール水着の魅力ではありません！』

「そ、そうだったのか……危ないところだった……」

自らの愚行を未然に防げたことに、冷や汗と共に安堵するラウラ。そして実感する。やはりクラリッサは頼りになる、と。

……その信頼を、クラリッサが半分は自らの趣味のために利用していることに、ラウラは気付かない。

「で、ではどうすればいいのだ……？」

『失礼ながら申し上げますが、隊長は決して恵まれた体とは言えません。豊満なボディで相手を悩殺、という手は使えないでしょう』

「ぬう……」

それはラウラも自覚していた。ラウラの敬愛する教官、織斑千冬のような見事なスタイルは、ラウラにはない。
そして一夏はどうやら千冬のような女性が好みのタイプらしいことも、なんとなくわかっていた。

「ど、どうしたらいい？私は、どうしたら……」
『ご安心を。日本には、こんな格言が存在します。曰わく――』
半ば絶望したような顔で狼狽するラウラに、クラリッサが諭すように語りかける。
そして、その口から紡がれた言葉は――
『「貧乳はステータス」』
色々と終わっていた。
「な……なんという……！！」
しかしラウラはその言葉に雷に撃たれたような衝撃を受けた。
絶望のどん底で一条の光を見つけたような気がした。
『そう、隊長にはナイスバディの女たちにはない魅力があります！ならば選ぶ水着は、その隊長だけの魅力を引き出すものです！』
「まったく、お前というヤツは……！クラリッサ！私はお前の隊長であることを誇りに思うぞ！」
『私も、あなたの部下であることを誇りに思います、隊長！』
そろそろ本格的に洗脳されてきていることに、ラウラはやはり気付かない。
『では隊長、私の言う通りの水着をお探し下さい――』
そしてクラリッサの目が、キュピーンと光った。

第２３話　準備（後書き）

書き終わってから気付きました。
箒が空気だ……！

いや落ち着け、まだ慌てるような時間じゃない、まだまだ挽回のチャンスはある……！

第２４話　臨海（前書き）

海という単語から連想できるものは多くあります。
水着、海鮮料理、マリンスポーツ、ｅｔｃｅｔｃ……

そんな中から真っ先に水没という言葉が思い浮かんだあなた。

もう手遅れです。

第２４話　臨海

「真改、起きろ」
「……」
肩を揺すられ、目を覚ます。
全身に残る疲労のせいか、いまいち意識がはっきりしない。
それでも、己を起こした人物が誰かはわかる。
……否。この己が、「彼女」を間違えるなど有り得ない。
「また訓練中に眠ったのか？前から思ってたんだが、それは寝てるのではなく気絶してるんじゃないのか？」
「……」
昨日はシミュレーターを使っての訓練をしていたのだが、対ネクスト戦を三十回ほど繰り返したあたりからの記憶がない。
そのシミュレーターの記録を確認した「彼女」が呆れ顔になる。
「……馬鹿かお前は。こんな無茶を続ければ、近い内に倒れるぞ」
「……」
「テストパイロットとはいえ、お前もレイレナードのリンクスだ。出動がかからないとは限らない。いざという時疲れて動けない、なんてことがないように、たまには休め」
「……無用……」
己には休んでいる暇などない。ほんの僅かな時間も惜しんで前に進まなければ、追い付くことなど出来はしない。
……己には、「彼女」のような才能はないのだから。

「……そんな暇はない、という顔だな？才能がない分、努力で埋めるしかないと」
「……」
どうやら己の思考など、「彼女」はお見通しらしい。今に始まったことではないが。
「お前にも才能はあるさ。「努力」という才能がな」
「……」
……何を言うかと思えば。
そんな安い慰めなど、「彼女」からは聞きたくなかった。
「……なんだ？納得いかないという顔だな？」
「……」
納得など出来るものか。
己と「彼女」の間には、あまりにも大きな差がある。
この差はそのまま己たちの才能の差であり、それを埋めるためにこうして訓練に明け暮れているのだ。
それでも「彼女」の背中は気が遠くなるほど先にあるというのに、「努力という才能」などと言われても納得など出来る筈がない。
「……そうだな、私は才能とは、他人が真似出来ないことが出来る能力だと思っている」
「……」
それについては同意する。
「彼女」の剣は、「彼女」以外の誰にも真似など出来ない。

「そして私は、お前以上に努力している人間を知らない。私自身、お前以上に努力出来るとは思えない。……そら、やはりお前の努力は、才能と呼べるものだ」

「……詭弁……」

たとえ努力が己の才能だとしても、それが何になる。

努力は、実らなければ意味がないのだから。

「……ふうん、相当深刻なようだな、お前の悩みは」

「……」

溜め息をついて、「彼女」はジト目で己を睨む。うだうだと悩み続ける己の姿は、よほど無様なものなのだろう。

誇り高い「彼女」は、自分の同僚がそんな様でいることが気に食わないのかも知れない。

しかし「彼女」は、唐突にニヤリと笑みを浮かべた。

その顔はまるで、悪戯を思い付いた子供のようで。

「……ふふん。それでは真面目に努力している少年に、お姉さんからご褒美をやろう」

「……？」

言って「彼女」は身を翻し、隣のシミュレーターに乗り込んだ。

キーを叩いて己のシミュレーターとリンクさせ、ロケーションを設定していく。

「一対一だ。「鴉殺し」の忌み名の所以、身をもって教えてやる」

「……！」

――まさか。まさか、まさか……！

「良く見ておけよ？真改。
――私の、剣を」
「……応……！」

我ながら現金なものだ。さっきまでの悩みが一瞬で吹き飛んだ。もはや疲労すら感じていない。

代わりにこの身を満たしているのは、途方もない活力。

――「彼女」の剣が、見られる。それも、最も近い場所で。

ならば疲労など、感じている暇すらない――――！！

「往くぞ、真改。私の剣を見せるのだ、お前の剣も、魅せてもらうぞ――――！」

――――――――――――

「真改、起きろ」
「……！」

肩を揺すられ、目を覚ます。
目の前には、長い黒髪を白いリボンで纏めた、幼なじみの姿。

「そろそろ着く――ど、どうした、真改？」
「……？」

どうした、とは？
今は海へ向かうバスの中、居眠りくらいおかしなことではないと思うが。

「……泣いて……いたのか？」
「……なに……？」

目元を拭うと、確かに濡れている。
……泣いていたのか？己が？

「……夢を見ていたのか？」
「……夢……」

……夢。

確かに見ていた。
昔の夢。

己がまだ、今よりもとても弱くて。

「彼女」がまだ、確たる形を持って己の前に在った頃の夢。

――この己が、焦りながらも、確かに幸福を感じていた頃の夢。

「……！」
「し、真改！？どうしたんだ、一体……？」

はらはらと、涙が零れる。

……なんだ？何故、己は泣いている？夢とはいえ、「彼女」に逢えたというのに――

「……悲しい夢を、見たのだな」

「……かな……しい……？」

……悲しいのか？己は。

失ったモノを。

もう二度と、この手に戻らないモノを。

――また、目の前にしてしまったから。

「……真改」

「……」

ふわり、と。

箒に優しく抱き締められた。

いつだったか、己が箒にしたように。

「すまない。私たちは、お前に頼ってばかりだ。お前にも、辛いことや悲しいことがあるだろうにな」

「……」

「まだまだ私たちは未熟だ。だがそれでも、お前の力になりたい。……たまには、頼ってくれないか」

「……」

……違う。違うんだ、箒。
これは己の問題、それももう終わってしまった問題なんだ。
お前たちには……関係ないんだ。

「……落ち着いたか？」
「……」
「なにかあれば、なんでも言ってくれ。私たちはいつだって、お前の味方だ」
「……」

それはもう、ずっと前から知っている。
箒は己に頼ってばかりと言うが、己の方こそ、今までずっと救われていた。

もう十分過ぎるくらいに、己の力になってくれている。

「……さあ、もう海に着くぞ。準備を――」
「え、ちょ、ほほほ箒さん!?なにしてますの!?」
「はっ!?」

セシリアの狼狽しきった声が聞こえた。
ちなみに己はまだ箒に抱き締められており、しかもその高校一年らしからぬ胸に顔をうずめる形だ。

……これは……まずい……。

「い、いや、これはだな……！」
「く、真改さんの隣の席になるだけでは飽きたらず、その寝顔を独

占し、あまつさえ抱き締めるなどと……！」
「いのっちの寝顔なんて、私も見たことないのに～」
「それはお前の起きるのが遅いからだろう」
「けど珍しいな、シンが昼間に寝るなんて」
「僕も見たかったなあ、シンの寝顔」
「なになに？井上さん寝てたの？」
「誰か！写真撮った人いないの！？」
「く、海なんかに現を抜かしてる場合じゃなかったわ……！」
「迂闊、こんなベストショットを見逃すだなんて……！」
「……」

急激に騒がしくなる車内。
いや、正確には先ほどから騒がしかったのだが、己が騒ぎの中心になった。

……勘弁してくれ、騒がしいのは、苦手なんだ。

「箒さんっ！いつまでそうしているつもりですの！？」
「次は私が抱きつきま～す」
「何を言う、私が先だ」
「あ、じゃあ次僕で」
「そんなサービスはありませんっ！！箒さん、早く離れて下さい！」
「わ、わかった！離れる！離れるから落ち着け！」
「ではでは、その隙に、いえ～！」
「本音さんっ！！」
「じゃあ僕も、いえ～！」
「い、いえ～……」
「「「「「いえ～！！」」」」」
「……なんだこれ？」

本音を皮切りに、次々に突撃してくる一年一組の面々。
もみくちゃにされる己、巻き込まれる箒、虚しく響くセシリアの怒声、激怒した千冬さんによる超高速の連撃、阿鼻叫喚の地獄絵図……。
車内はあっという間に大混乱になった。
いつも通りと言えばいつも通りな光景。
それを前にして、いつの間にか、涙は止まっていた。
……騒がしいのは、苦手なんだが。
だがまあ、決して、嫌いというわけではない。
――――――――――
臨海学校の間お世話になる旅館に挨拶を済ませ、割り振られた部屋に荷物を置き、早速とばかりに本音に連れられ更衣室に行って着替え、外に出ると――
「臨っ！」
「海っ！！」
「学っ！！！」
「校っ！！！！」
「「「「海だあああぁぁっ！！」」」」
「……」

凄まじい盛り上がりぶりを見せるＩＳ学園一年一同がそこに居た。
まったくついて行けないので、己は肩に担いだビーチパラソルを砂に突き立て、その影に座り込む。

「いのっち、泳がないの～？」
「……」

片腕でも泳げるが、特に泳ぐことに魅力を感じない。それよりも、こうして生きている自然を眺めている方がいい。

「じゃあ、私は泳いでくるね～」
「……」

そう言って手を振る本音に頷きを返し、見送る。
さて、ではのんびりするか、と本格的に腰を落ち着け始めたところで――

「うん、やっぱり似合ってるね、シン」
「……」

鮮やかな黄色の水着を着たシャルと……なにか良くわからない物体がそこに居た。

「……」
「……」

それは複数のバスタオルで全身を覆っており、その下にいるであろう人物を完全に隠していた。
……隠してはいたが、バスタオルで膨らんでいてもなお小柄なそれの中身は、恐らくラウラだろう。

……なにをしているのやら。

「シンは泳がないの？」

「……」

「あんまり、泳ぐの好きじゃないの？」

「……」

「う～ん……じゃあ、泳ぎたくなったら呼んでよ。一緒に泳ご？」

「……承知……」

「うん、じゃあまた後でね。……あ、一夏だ。ほら、行くよ」

「ま、待て、引っ張るな。まだ心の準備が……」

声を聞いた限りでは、ラウラ（仮）の中身はやはりラウラのようだ。

前が見えないのだろう、シャルに手を引かれながらよろよろと歩いて行く。

シャルが性別を明かしてから同部屋になった二人は随分と仲良くなったようで、世間知らずなラウラをシャルが良く面倒を見ている。

今回も、まあそんなところだろう。

さて、二人も行ったし、今度こそ――

「はあああ……」

「……」

なにやら重々しい溜め息をつきながらセシリアがやって来た。

そのまま己の隣に座り――

「はあああ……」

「……」

……なんだ、何があった。

「……一夏さんに、サンオイルを塗っていただこうとしたんですが……鈴さんに邪魔されましたわ……」

「……」

それを己に報告してどうするんだ。再挑戦するにせよ鈴に報復するにせよ、己は協力せんぞ。

「せっかくの海、一夏さんにアピールするチャンスですのに……真改さん、なにかいい手はありませんか？」

「……ない……」

あっても教えん。

その方面における己の基本方針は箒を応援することだからな。最初に応援し始めたのが彼女である以上、裏切るわけにはいかん。

「……落ち込んでいても仕方ないですわね。気を取り直して、もう一度行ってきますわ！」

「……」

胸の前で両拳をグッと握り締めて気合いを入れ、セシリアが立ち上がる。

そのまま、いつの間にやらビーチバレーを始めていた一夏の下へ歩いて行った。

では、今度こそのんびり――

「ふむ。なかなか似合ってるじゃないか、真改」

「……」

……やれやれ、己に静かな時間は訪れないのか？

――――――――――

山田先生との仕事の話を終え、束の間の自由時間を満喫するべく海に出る。
私の水着は一夏が選んでくれたものだ。少し気恥ずかしくはあるが、顔には出さない。また山田先生にからかわれかねないからな。

「さて……む？」

海岸をぐるりと見回すと、ビーチパラソルの影で膝を抱えて座る黒髪の少女を見つけた。
あの一件以来、水着どころか半袖の服さえ着なくなった、真改だ。
その真改が以前試着室から水着を着て出てくるのを見かけた時は、随分と嬉しかったものだ。

ふ、と小さく笑みを浮かべ、真改のところへ歩いて行く。真改は泳ぐつもりはないようで、鋭くも優しげな眼差しで、美しく澄んだ海を眺めていた。

「ふむ。なかなか似合ってるじゃないか、真改」
「……」

私の声に、ゆっくりと視線を向けてくる。

真改は黒い生地に華美にならない程度のレースが施された、質素ながらも洒落たデザインのビキニを着ており、その上から丈の短い白いパーカーを羽織っている。
薄手のそれは真改の左腕を隠しつつも細く整ったボディラインはしっかりとわかる造りをしており、丈の下からは臍が、軽く空いた胸元からは黒い水着がチラリと見える。
そしてスラリと長い引き締まった脚は、モデル顔負けの脚線美を描いていた。

「凰の言っていた秘策とやらはそれか。言われてみれば簡単なことだが、確かにお前には良く似合う」
「……」

真改の隣に腰を下ろして、海を眺める。
こいつとこうして海に来るなど、何年ぶりだろうか。

「……バスの中で、泣いていたな」
「……」
「お前の涙など、初めて見たが……ご両親の夢でも見たのか？」

真改が泣く理由など、私にはそれくらいしか思いつかない。
真改の両親――井上国貞と、井上和泉。
真改の名は、自分たちの名前に深く関係するものを付けたのだろう。

真改が孤児院に来てから知り合った私は当然彼らのことを知らないが、真改の部屋に飾ってある写真――無表情の幼子を挟んで幸せそうに笑っているそれを見れば、真改がいかに両親から愛されていたかがわかる。
その頃を、若しくは両親を失った事故のことを夢に見たのではないか、と考えたのだが……。

「……否……」

どうやら、違うらしい。

ならば何故、とは思うが、しかしこれ以上詮索するのも気が引けた。

左腕を失った時ですら気丈に振る舞い続けた真改が泣いていたのだ、よほどのことなのだろう。私の好奇心で思い出させるのは憚られる。

「……まあ、また泣きたくなったら、誰かの胸でも借りるといい。一夏でもいいし、私でも構わんぞ」

「……」

真改は無言のまま、首を振ることもしない。

相変わらず何を考えているのかわからない無表情で、ただ静かに、海を眺め続けていた。

――――――――――

青く澄み渡った美しい海を存分に堪能したあと、大広間を三つ繋げた大宴会場での夕食となった。

目の前には膳が置かれ、その上には宝石のような輝きを放つ刺身が並んでいる。

「……見事……」

「うまうま♪」

「うむ、美味い。刺身だけでなく、鍋も和え物も味噌汁も実に美味い。まさに職人技だな」

両隣に座る本音と箒も絶賛している。

昼食も美味かったし、臨海学校でこれほどの物が味わえるとは、ＩＳ学園は本当に贅沢である。

「……しかし一夏のやつ、鼻の下を伸ばしおって……」

「……」

「うまうま♪」

離れた席でちょうど向かい合う形で座る一夏の両隣には、セシリアとシャルの姿があった。

この旅館は何故か夕食時には浴衣着用なので二人も当然浴衣なのだが、鮮やかな金髪でありながらどういうわけか似合っている。

……美人は何を着ても似合うというヤツか？

とにかく、箒は一夏の隣に座れなかったことが悔しいようである。

「うぬぬ……」

「……」

「うまうま♪」

しかめっ面をしながらも箸は止まらず、一夏を睨んだまま手元を見もせずに料理を口に運んでいる。

……何気にすごいな。

「むっ！」

「……」

「うまうま♪」

箒の目がくわっと見開かれた。一夏が隣に座るセシリアに、「俺が食べさせてやろうか？」と言ったからだ。
一夏の隣に座るために無理して正座を続けるセシリアが（当然その思いに気付く一夏ではない）、先ほどから何度も刺身を取り損ねているのを見かねての発言である。

「おのれセシリア、なんと狡猾な……！」
「……」
「うまうま♪」

パクパクと食べる速度を上げながら呻く箒。
……セシリアがそこまで考えているとは思えないが。

しかしそこで問題が起きた。セシリアの口に一夏が刺身を運んでいるところを、他の女子に見られたのである。
というか見つかって当然だった。

「あー！セシリアずるい！」
「織斑君の隣の席ってだけでずるいのに！」
「ず、ずるくありませんわ！」
「問答無用っ！」
「ていっ！」
「ひゃあああぁぁっ！！？」

セシリアの足を数人掛かりでつつき始めた。顔色が青くなるくらい痺れているところにその攻撃は酷過ぎる。素っ頓狂な悲鳴を上げて倒れるセシリア。

「わあ！？何してんだよ！」

「この隙にっ！」
「織斑君、私にも食べさせて！」
「あーん！」

帰って来た親鳥に餌をせがむ雛鳥と化した数人の女子がぴーぴーと鳴き始める。

食事中のマナーには厳しいと言われる己だが、しかし黙って見ているだけに留めた。
何故ならば――

「お前たち、食事中くらい静かにできんのか」
「ひぃっ！お、織斑先生！？」

――己よりも遙かに厳しい人が、この場にいるからだ。

「随分体力が有り余っているようだな。それでは夜も寝付けまい。よし、私がお前たちの安眠に協力してやろう。
――砂浜を走ってこい。倒れるまで」

ドドドドドド、と効果音が付きそうなオーラを発する千冬さんに睨まれ、蜘蛛の子を散らすように席に戻っていく女子一同。これもいつもの光景である。

「……織斑、騒ぎを起こすな。鎮めるのが面倒だ」
「……はい」

千冬さんの言葉に大人しく従う一夏。無理もない、あんな鬼神の如き御仁に睨まれれば誰だってそうする。己だってそうする。

「というわけで、ごめんな、セシリア。なんとか自分で食べてくれ」
「……ええ、ええ、わかっていますわ。一夏さんは、お姉さんが大事なんですものね」
膨れっ面をしながら言うセシリアに、一夏も罪悪感を覚えたらしい。
セシリアに耳打ちをした。
「悪かったって。代わりと言ったらなんだけど……ごにょごにょ」
「……え!?　そ、それは……！」
一体なにを言われたのか、セシリアが急に真っ赤になる。
そして足の痺れなどもはや感じていないかのような素早い動きで、
一夏の手を両手で包み込んだ。
「はい！　わかりました！　じゅ、準備がありますので少々お時間をいただきますが、必ず！」
「お、おう……？」
満面に幸せそうな笑みを浮かべながら食事を再開するセシリア。
……なんだ、なにを言われた。
「……なんだ？　一体」
「……」
「うまうま♪」
……さあな。だが一つだけ、確実なことがある。
――就寝時間までに、もう一騒動ありそうだ。

―――――――――

夕食後。
いきなり千冬さんが話し掛けてきた。

「真改。風呂に入ってこい」
「……？」

本当にいきなりだった。言われずとも、風呂くらい入るが。

「部屋の風呂ではない。大浴場の方だ。今は男子、つまりは織斑の入浴時間だが、アイツはもう上がったからな。今は誰も使っていない。気兼ねなく、温泉に浸かれるぞ」
「……」

……ふむ、魅力的な提案だ。
元々己は風呂好きなんだが、流石に皆と一緒に大浴場に入るのは気が引ける。
だから学園では、部屋の風呂で我慢していたのだが――

「せっかくの温泉だ。堪能してこい」
「……」

感謝を込めて一礼し、入浴道具を取りに部屋に戻る。
これほどの旅館だ、風呂もさぞ豪勢なことだろう、楽しみだ。

というわけで部屋に戻り準備をしていると、己に話し掛けて来る者

が。

「あれ～？いのっち、どこ行くの～？」
「む、温泉か？しかし今は一夏が入っている時間だろう」

同部屋の本音と箒である。どうせ己が大浴場に入ることはないと思って聞き流していたが、他の皆はしっかりと説明を聞いていたようだ。

……なんだろう、自分がダメな子になった気がする。

「……上がった……」
「む？……なるほど、そういうことか」
「じゃあ私も行く～」
「……そうだな、私も邪魔させてもらうか」
「……」

そして三人で温泉へ。更衣室の暖簾を潜ると、やはり中には誰もいない。

「貸し切りだな。ふふ、存外いい思い付きだったかもな」
「わあ、お風呂広～い！きれ～！」
「……」

浴衣を脱ぐ前に風呂を覗きに行った本音が歓声を上げる。ふむ、さらに楽しみになって来たぞ。

「ほら、早く準備しろ、本音。置いて行くぞ」
「ああ～、しののん待って～」
「……」
「いのっちも待って～」

がらり、と更衣室の扉を開け、風呂場に出る。するとそこには、様々な温度、浴槽の風呂の数々が。

「……おお……」

「素晴らしい。これほどとは……」

「いっちば～ん！」

「あ、馬鹿者！まずは体を洗え！」

女三人寄れば姦しいと言うが、成る程、確かに姦しい。……いや待て、己は数に入れていいのか？色々な意味で。

「いのっち、背中流してあげる～」

「……無用……」

「では私は髪を洗ってやろう」

「……話を聞け……」

己の言葉を完全に無視して湯を掛けてくる二人。……己は子供か。

「思ったよりちゃんと手入れしているんだな」

「私がやってるんだよ～」

「ほう、それは……。大変だろうに、これだけ長いと」

「いやいや～、いのっちは身だしなみに無頓着だからね～。私が面倒見てあげないと～」

「うむ、これからも真改を頼むぞ、本音」

「おまかせあれ～」

「……」

……完全に子供扱いか。納得いかん。

「むむっ！」
「ど、どうした？」
「……しののん、おっきい」
「……な！」
「……おっきい……」
「ま、まじまじと見るなっ！」
「……おっきい……」
「だから見るなと……」

胸の大きさについて盛り上がり始めた二人だが、突然箒の動きが止まった。
……どうでもいいが、洗い終わったのなら早く流してくれないか。
さっきから跳ねた泡が目に入って痛いのだが。

「……そういうお前も、随分……」
「ほえ？」
「……」
「……」
「……この話題は、止めよう……」
「……そうだね～……」

一転して、黙々と己の体を流し始める二人。……そっとしておこう。

そして体を洗い終え、温泉へ。

「「「ふう～～～……」」」
「気持ちいい～……」
「生き返るな……」
「……溶ける……」

やはり風呂はいい。こうして湯船に浸かっていると、体だけでなく心まで癒えていく気がする。

「温泉っていいね～……」
「日本の宝だな……」
「……同意……」

三人でゆっくりと風呂に浸かる。
……魂が抜けそうだ……。

「ねえ……いのっち……」
「……？」
「私も……いのっちの力に、なれてるかな……？」
「……」

……意外に本音が大人しくしているので、不思議に思っていたが。
どうやら本音なりに、気にしていたらしい。

「私も……いのっちのために、何か出来ないかな……？」
「……」
「だって、いのっち、泣いてたもん……」
「……」
「友達の涙なんて、見たくないよ……」
「本音……」
「……」

……そうしてまた、しばしの沈黙。

ゆっくりと流れる時間が、今は妙に物悲しい。

「……ごめんね～、変なこと言っちゃって～……」
「……」
「……私、もうあがるねっ」

立ち上がり、ぺたぺたと歩いて行く。
その背中に、なんの言葉も掛けられなかった。

「……言っただろう？みんな、いつだって、お前の味方だと」
「……」

そうだな。
ならば己も……仲間のために、なにか出来ないだろうか。

――「彼女」には、何もしてやれなかったから。

――――――――――

風呂から上がり、部屋でくつろいでいた時のことだった。

「……シン、箒。織斑先生が呼んでるわよ」
「なに？」
「……？」

……はて、何の用だろう。
本音がどこかに行ってしまったので、己は素振りでもしようと思っていたんだが。

「織斑先生が？なんの用だ？」
「あたしが聞きたいわよ。ああ、それとシンには「例の物を持って来い」って言ってたわよ」
「……」
む……この土産を持って行くには、まだ時間が早いと思っていたが。だがまあ持って来いと言うのなら、持って行こう。
立ち上がり、鞄から臨海学校へのバスに乗り込む直前に如月重工から送られてきた包みを取り出す。
「……なんだ、それは？」
「……」
「ま、なんでもいいわ。行きましょ」
部屋を出て、千冬さんの部屋――教員室に行く。そこにはシャルとラウラもいた。
「お前たちも呼ばれたのか？」
「う、うん……そうなんだけど……」
「……」
なにやら二人とも顔が赤い。というか首まで赤い。
一体なにが、と思っていると――
『あ、んん……一夏さんって、上手ですのね……』
『千冬姉に良くしてたからな』
『ふふ……あっ……もう少し優しく……』
『おっと。……こうか？』
『んんう……気持ちいいですわ……』

『そりゃ良かった。じゃあもっと気持ち良くしてやらないとな』
『ああっ！……す、すごい……』
「……」
「……」
「……」
「……」
「……」
「「「「「……」」」」」
……この声は、一夏とセシリアか？
妙に艶のある声を聞き、集まった一同が揃って俯き真っ赤になる。
初々しいのは何よりだが、お前たちの想像しているようなことは多分……否、絶対にない。
というわけで、己は遠慮なく部屋の扉に手をかける。
「「「「「ああっ！ちょっ……！？」」」」」
「……」
皆が何か言ったが無視する。そのまま扉を開けると、そこには――
「おう、来たか」
「ふえ……？」
「ふう、じゃあここまでだな」
ニヤニヤと笑う千冬さんと、とろけた顔でうつ伏せに寝転ぶセシリア、そしてそれにマッサージをする一夏の姿があった。

―――――――――

「さて、何を想像してたのやら……」
「「「「「……」」」」」

マッサージにより汗をかいた一夏を風呂に行かせ、千冬はニヤニヤ笑いながら集まった一同を見渡す。
真改を除き、その顔は真っ赤だ。

「真改、持って来たか？」
「……」

無言で手に持った包みを差し出す真改。
千冬はニヤリと笑って受け取り、包みを開ける。
その中身は――

「ほう、これが……」
「お、お酒？」
「高そう……」

華やかな絵のラベルが張られた、とてつもなく高そうな日本酒だった。

「感謝するぞ。これほどの酒、そうは味わえん」
「……」

この酒は真改が如月重工に頼んだものだった。学園内では流石に見つかるので、臨海学校に合わせて持って来てもらったのである。

……本当はもっと安い酒を頼んだのだが、如月社長が勝手に奮発したのである。ポケットマネーで。

「さて、お前たちには私が奢ってやろう」

上機嫌な様子で旅館備え付けの冷蔵庫を開け、中から飲み物を取り出し、五人に配る。

「そら、飲め」

「「「「「え？」」」」」

困惑する五人。渡された飲み物を見る。

……どう考えても、口止め料だった。

「「「「「えーっと……」」」」」

「飲め」

「「「「「……はい」」」」」

圧力に負けて飲み物に口を付ける。極めて強引な買収である。

「……飲んだな？」

ニヤリと笑う千冬。

その顔が悪魔のそれに見えたのも無理からぬことであった。

「さて、真改」

「……」

千冬は盃を二つ持って来て、胡座をかく。片方の盃を真改に渡し、日本酒の栓を抜き、トクトクと注いだ。

「では」
「……」

互いに盃を軽く掲げ、中身を呷る。
千冬は大変満足した顔で頷いた。

「……美味い」
「……美味……」
「あのー……織斑先生？」

シャルロットが勇気（？）を出して、千冬に尋ねる。

「なんだ？」
「え、いや、お酒……」
「別に構わんだろう、私だって酒くらい飲むさ」
「いや、そっちじゃなくて！シンは未成年ですよ！？」
「コイツは相当な酒豪だぞ」
「「「「え……！？」」」」

驚きの表情を浮かべる五人。
規則や規律にうるさい千冬が仕事中に酒を飲んだことも驚きだが、基本的に品行方正な真改が飲酒の常習者であったことも驚きだった。

「「「「「……」」」」」
「……」

自分に向けられる視線もなんのその、無表情のまま酒を注ぎ、飲み続ける真改。
……妙に様になっている。

その様子を唖然としながら見ていた五人に、千冬が声を掛ける。

「さて、前座はこれくらいにして……」

とか言いながら、また酒を呷る千冬。そしてまた満足げに頷き、次の言葉を放つ。

「お前ら、あいつのどこがいいんだ？」

あいつ、というのは言うまでもなく一夏のことである。

びくりと反応し、挙動不審になる五人。

真改はまるっきり無反応に、酒を飲み続けている。

「わ、私は別に……ただの、幼なじみですから」

「あたしは、腐れ縁なだけだし……」

「わ、わたくしはクラス代表としてしっかりしてほしいだけです」

順に箒、鈴、セシリアのコメント。

落ち着かない様子でそんなことを言っても、本心からの言葉でないことは明白だった。というかそれで誤魔化してるつもりなのかと小一時間。

「ふむ、そうか。では一夏にもそう伝えておこう」

「「言わなくていいです！」」

その反応を心底楽しそうに笑ってから、また酒を呷る千冬。

「で、お前は？」

「へ？あ、僕――――あの、私は……優しいところ、です……」

千冬の問いに、小さな声でシャルロットが答える。恥ずかしそうな、しかし真面目な顔からは、本心からの言葉であることが伺える。

「しかしあいつは誰にでも優しいぞ。昔から」

「そ、そうですね。そこがちょっと悔しいかなぁ、あはは……」

前の三人と違い、ハッキリと言葉にしたシャルロットに嫉妬の視線が向けられる。

……そんな目をするくらいなら素直になればいいのに、と真改は思った。

「では、ラウラ」

「……つ、強いところでしょうか……」

「いや弱いだろ、どう考えても。なあ、真改？」

「……未熟……」

ダブルでバッサリだった。

しかしその言葉に、珍しくラウラが食って掛かる。

「つ、強いです。少なくとも、私よりも」

「そうかねぇ……」

くぴっと酒を一口。

素っ気ない態度とは裏腹に弟を誉められたことが嬉しいのだろうことが、真改だけは気付いた。

「……で、真改」

「……？」

「お前、好きな男とかいないのか？」

「……」

千冬の言葉に、そんなことかと真改はまた酒に口を付ける。
しかしそれでは済まさない者が約六名。

「あ、それ僕も気になる」
「どんな男が好みなんだ？」
「アンタ全然浮いた話聞かないもんねえ」
「真改さんに見合う殿方なんて、早々いないでしょうからね」
「マスターに見合う男、か……」
「で？どうなんだ、真改」
「……」

さてどう逃げるか、とまともに答える気皆無の真改。
しかし包囲網は既に完成していた。

「否定しなかったな。誰かいるんじゃないのか？」
「アンタ、嘘は吐かないもんね」
「誰なんだ？真改」
「聞きたいなあ。すごく聞きたいなあ」
「教えてくださいな」
「私も気になるぞ」
「……」

答えるべきか、真改は迷った。
このまま黙っていても、きっと彼女たちは逃がしてくれないだろう
ことは容易に想像出来た。むしろ追求の手はどんどん執拗になって
いくだろう。

しかし正直に言うのも問題があった。

好きな者はいる。今も尚、真改は「彼女」を想い続けている。それを簡単な嘘で誤魔化すなど、真改にはどうあっても不可能だった。

だが逆に、この楽しげな雰囲気をぶち壊すこともしたくなかった。

「彼女」は既に故人であり、今はもういないのだ。過去と現在、重きを置くべきはどちらか、真改は良くわかっている。

「彼女」のように、前を向いて生きたかった。

「……」

酒を一口含み、飲み込む。

何故「彼女」の夢を見たのか、その意味を考えて――

「……もう……いない……」

「「「「「「あ……」」」」」」

……やはり、「彼女」への想いは、いまだ強く真改を縛り付けていた。

「……すまない」

何も言えなくなった五人に代わり、千冬が沈痛な顔で謝る。

真改はそのまま立ち上がり、部屋を出た。

静まり返った部屋を背に、自室へ戻って行く。

「……惰弱……」

ギシリ、と奥歯が砕けんばかりに噛み締めて。

自身の弱さを、心底から憎みながら。

第２４話　臨海（後書き）

誰を沈めるか迷っていたら、結局誰も沈まなかった。
何を言っているのかわからねーと思うが、俺も何があったのかわからなかった……。

第２５話　天災（前書き）

いよいよ公式チート二号が登場です。
この人ホント扱い困るわ……敵でも味方でも厄介過ぎる……。

ちなみに一号は千冬さん。

第２５話　天災

「アナトリアの傭兵。お前も知ってるだろう？」
「……」
当然知っている。彼を知らないリンクスなどいない。
現在世界規模で行われている戦争――リンクス戦争。
アナトリアの傭兵はこの戦争で多くのリンクスを討ち倒し、伝説的な活躍をしているリンクスである。
……だが、突然どうした。
「彼が元レイヴンであるのは有名な話だが、最近わかったことがあってな」
「……」
「彼はどうやら、国家解体戦争の時、私が仕留め損ねたレイヴンのようなんだ」
「……！」
アナトリアの傭兵がレイヴン時代にいくつもの伝説を生み出していたことは知っていたが、その伝説は伊達ではないらしい。
……よもや、ノーマルで「彼女」と戦い、生き残るとは。
「彼はレイヴンからリンクスになったわけだが、ＡＭＳ適性は低いと聞いている。お前よりもな」
「……」
「だが彼は、現実としていくつもの戦功を立てている。アナトリアがただのコロニーでありながらこの戦争に参加できているのは、彼

がいるからだ」

「……」

「劣悪なＡＭＳ適性で、何故そこまで戦えるのか？それこそが、お前の求める答えではないか？」

「……」

伸び悩む己を、「彼女」なりに気にかけてくれているのだろう。急に話し掛けてきた「彼女」の意図はわかったが、しかし己の求める答えには繋がらない。

――アナトリアの傭兵は、レイヴンとしての「才能」があった。その戦いの才能こそが、ＡＭＳ適性を補うほどの彼の力なのだろう。

「……後ろ向きなヤツだな。女々しいぞ、真改」

「……」

据わった目で己を睨む「彼女」。何も言っていないのに、どうして己の考えていることがわかるのだろうか。

「……なぜ私は、彼だけは倒せなかったのか。あの時はわからなかったが、今ならわかる」

「……」

聴く者を惹き付ける凛とした声色で、諭すように、語り始める。

「……彼には強い「信念」があった。この私を、分厚い装甲越しに怯ませるほどの、「信念」が」

「……信念……」

「それが私の踏み込みを甘くさせた。装甲は切り裂けたが、その奥にいる彼には、僅かに届かなかった。……つまりは、気圧されたん

だ」
「……」
気圧されただと？
まさか、「彼女」が、戦場で？
それも、高がノーマルに――――高が、レイヴンに。
「彼の戦いぶりを見て、ようやくわかった。……守りたいものが、あるのだろうな」
「……」
「才能などではない。揺るぎない「信念」こそが、彼を強者たらしめている」
「……」
「……お前はどうだ、真改。お前には「信念」はあるか？」
「……」
ある。
己の心に、常に在り続けているもの。
――――己が、追い求めているもの。
「……言っておくが、私に追い付くことが信念だ、などとは言うなよ」
「……！」
「……図星か。まったく……」
はあ、と溜め息を吐く「彼女」。
……心底呆れているようだった。
「お前が目標としてくれているのは光栄だがな。信念とは自身の中

に秘めるモノだ。私に求めるな」
「……」
だが、それでは己には信念などないということになる。
「彼女」に追い付く、それだけしか己にはない。
……そんな様だから、己の剣は、こんなにも軽いのか。
「お前はまだまだ強くなる。どんな試練も、お前なら乗り越えられる」
「……」
「今はまだ、私でいい。だがいつか、お前は私を越えるだろう」
「……」
そんなことは有り得ないと、思ってしまう。
「彼女」を追い掛けていながら、しかし決して追い付けはしないと、心のどこかで諦めている。
――なんたる、惰弱さか。
「お前が私よりも強くなり、共に背中を預けて戦える日が来たら、その時は――」
「……」
こんな己を、何故「彼女」は気にかけてくれるのか。
己などに、一体何を期待しているのか。
……それが己には、どうしても、わからない。
「聴かせてくれ。お前を強くした、お前の「信念」を。

――その先に在る、お前の、「答え」を」

――――――――――――

「むに～……あ」

「……」

目が覚めたら、腹の上に馬乗りになった本音が、己の頬を左右に引っ張っていた。

……なんだ、この状況。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……お、おはよ～、いのっち」

「……」

とりあえず、ぐわしと本音の顔を鷲掴んで放り投げる。きゃ～、と気の抜けた悲鳴を上げて飛んでいく本音。

……なんなんだ、一体。

「いや～、いのっちの寝顔がかわいかったから、つい～」
「……」

本音が何か言ってるが無視。
起き上がり、寝間着代わりの浴衣を脱いで着替える。今日は初日とは真逆の、一日かけてのＩＳの各種装備試験運用だ。集合時間に遅れればなにをされるかわかったものではない。

「ほらほらいのっち、座って～」
「……」

本音に促され、正座する。朝の恒例となった、左腕の傷を隠す包帯である。

「……なるほど、真改の包帯は、お前が巻いていたのか」
「いのっち、こういうの無頓着だからね～。女の子なのに～」
「……勲章……」
「「……はあ～……」」

己の言葉に深い溜め息を吐く二人。
……そんなに呆れられることを言ったか、己は。

「完成～」
「ほう、上手いものだな」
「毎朝やってるからね～」
「……」
「なるほど。じゃあ、朝食に行くか。……遅刻したらどんな目にあわされるかわからん」
「ごはん～。楽しみ～」

「……」

確かに、昨日の食事は大変美味だった。朝食に期待してしまうのも無理からぬことである。

「じゃ～、しゅっぱ～つ！」

「……寝癖くらいは直していけ」

「おお？」

「……」

というわけで、食堂となる広間に向かう。

臨海学校の二日目は、こうして始まった。

広間では周囲が今日行われる試験運用や食事の美味さについて話しているなか、己はまるで別のことを考えていた。

……何故、二日も続いて、「彼女」の夢を見たのか。

それが一体、なにを意味しているのか。

……ただの偶然、己の思い過ごしなら、それに越したことはないのだが。

――――――――――

そして場面はＩＳ試験用のビーチに移る。周囲が切り立った崖に囲まれたここから海に出るには一旦潜り、海中のトンネルから出る必要があるという念の入りようである。……いや、天然の構造であっ

て、決して誰かが作ったというわけではないのだが。

「それでは、各班ごとに振り分けられたＩＳの装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員、迅速に行え」

「はい！」

千冬さんの号令に従い、各自散開。班ごとの持ち場につき、準備を始める。

「ああ篠ノ之、お前はちょっとこっちに来い」

「はい」

己が如月重工から送られて来た装備の点検をしていると、箒が千冬さんに呼び止められた。

「お前には今日から専用――」

「ちーちゃ～～～～～～～んっ！！」

……頭痛がした。

声のした方を見ると、砂塵を派手に巻き上げながら突撃して来る人影が。

青と白のワンピース、頭には兎の耳。常人の理解の範疇を超えた格好をした人影。

己の頭痛の原因はただ一つ。その人影の正体が――

「……束」

――ＩＳの開発者、ただ一人で世界を変えた天才、篠ノ之束だということだ。

関係者以外立ち入り禁止なのだが、そんなことはお構い無しに、この人は堂々と臨海学校に乱入してきた。

「やあやあ！会いたかったよちーちゃん！さあ、ハグハグしよう！愛を確かめ――ぶへっ」

千冬さんのアイアンクローが炸裂、束さんの顔に指が食い込むほどの剛力で締め上げる。

「うるさいぞ、束」

「ぐぬぬぬ……相変わらず容赦のないアイアンクローだねっ」

しかし束さんは万力の如きその握力からするりと抜け出し、何事もなかったかのように箒の方を向く。

「やあ！」

「……どうも」

極めて友好的な束さんとは真逆に、箒はすごく嫌そうな顔をしていた。

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなぁ。おっきくなったね、箒ちゃん。特におっぱいが」

がんっ！

「殴りますよ」

「な、殴ってから言ったぁ……。し、しかも日本刀の鞘で叩いた！ひどい！箒ちゃんひどい！」

箒が日本刀を持ち歩いていることには誰一人突っ込むことはなく、ただポカンと二人の遣り取りを眺めていた。
そんな皆を代表して、山田先生が束さんに声を掛ける。

「え、えっと、この合宿は関係者以外――」
「んん？珍妙奇天烈なことを言うね。ＩＳの関係者というなら、一番はこの私をおいて他にいないよ」
「えっ、あっ、はいっ。そ、そうですね……」

秒殺だった。
相変わらず人の話を聞かない御仁である。

「おい束。自己紹介くらいしろ。うちの生徒たちが困っている」
「えー、めんどくさいなぁ。私が天才の束さんだよ、はろー。終わり」

……己が言うことではないが、ひどい自己紹介であった。

しかしその名前を知らない者などここにはいない。周囲がにわかに騒がしくなった。

「た、束……？」
「まさか、篠ノ之束博士？」
「あの人が……？」
「……やっぱり天才って、変人なのね……」

その意見には同意だが、しかし彼女は天才でも変人でもない。

――超天才であり、超変人なのだ。

「はぁ……。もう少しまともにできんのか、お前は。そら一年、手が止まっているぞ。こいつのことは無視してテストを続けろ」
「こいつはひどいなぁ、らぶりぃ束さんと呼んでいいよ？」
「うるさい黙れ」

飽くまでも調子を崩さない束さんと、心底うんざりしたような様子の千冬さん。
世界で最も有名な二人が旧知の間柄であるということに驚いている面々を置いて、箒がおずおずと束さんに話し掛ける。

「それで、頼んでいたものは……？」

妹大好きな束さんの目がキラーンと光り（本当に光った。人間か？）、芝居がかった動きで大空を指差す。

「うっふっふっ。それはすでに準備済みだよ。さあ、大空をご覧あれ！」

大声で告げられたその言葉に、集まった全員が空を見る。すると――

ズドーンッ！
「のわあっ！？」

砂浜が揺れるほどの勢いで、金属の塊が落下してきた。
間を置かずにそれが開き、その中身を皆に見せ付ける。
そこにあったのは――

「じゃじゃーん！これぞ箒ちゃん専用機こと〔紅椿（あかつばき）〕！全スペックが現行ＩＳを上回る束さんお手製ＩＳだよ！」

陽光を受けて輝く真紅の装甲。
両腰に佩いた日本刀型の近接ブレード。
全スペックが現行機を上回る――事実上、最強のＩＳ。

「さあ！箒ちゃん、今からフィッティングとパーソナライズをはじめようか！私が補佐するからすぐに終わるよん♪」
「……それでは、頼みます」
「堅いよ～、箒ちゃん。実の姉妹なんだし、こうもっとキャッチーな呼び方で――」
「はやく、はじめましょう」

とりつく島もない、といった様子で促す箒。
束さんもあまり気にした様子もなく、紅椿の一次移行を始める。
空中投影型のディスプレイを六枚呼び出し、膨大なデータをなんでもないように処理していく。
瞬く間にフィッティングが終わり、箒の体に合わせて紅椿のサイズの微調整が行われる。
予めある程度のデータが入力されていたのだろう、白式のような大きな形態変化はなかった。

その様子を眺めていると――

「あの専用機、篠ノ之さんがもらえるの……？身内ってだけで？」
「だよねぇ。なんかずるいよねぇ」

己と同じように眺めていた者からの、嫉妬を含んだ言葉。
それを拾い、意外にも束さんが鋭く反応する。

「おやおや、歴史の勉強をしたことがないのかな？有史以来、世界

が平等であったことなど一度もないよ」

「……」

その通り。世界は、いつだって不平等だ。

例えば、運。

例えば、生まれ。

例えば――――才能。

「……いのっち」

「……」

突然、本音が俺の手を包み込む。

そしていつの間にか握り締めていた拳を、優しくほぐしていった。

見れば己の手の平には、爪が食い込んだのだろう、うっすらと血が滲んでいた。

……それほどまでに、強く握り締めていたのか。

「……」

「……」

本音は何も言わず、悲しそうな目で己の手を見詰めている。

「……いのっち、どうしたの～？昨日から、なにかおかしいよ～……？」

「……」

本当に、昨日からどうもおかしい。昨夜の酒の席然り、こんな些細

な言葉にも、異常なほどに反応してしまう。
本当に、おかしい。
――「彼女」の、夢を見てから。
「あとは自動処理に任せておけばパーソナライズも終わるね。あ、いっくん、白式見せて。束さんは興味津々なのだよ」
「え、あ。はい」
どうやら紅椿の方は終わったらしい。
束さんに促された一夏が白式を展開し、束さんはすぐさま機体のデータを確認し始める。
「ん～……不思議なフラグメントマップを構築してるね。なんだろ？見たことないパターン。いっくんが男の子だからな？」
ちなみにフラグメントマップというのは、各ＩＳがパーソナライズによって独自に発展していくその道筋のことである。人間で言う遺伝子にあたるものだ。
「束さん、そのことなんだけど、どうして男の俺がＩＳを使えるんですか？」
「ん？ん～……どうしてだろうね。私にもさっぱりぱりだよ。ナノ単位まで分解すればわかる気がするんだけど、していい？」
「……いい訳ないでしょ……」
「にゃはは、そう言うと思ったよん。んー、まあ、わかんないならわかんないでいいけどねー。そもそもＩＳって自己進化するように作ったし、こういうこともあるよ。あっはっはっ」

……ふむ、束さんなら何か知っていると思っていたが、あてが外れたか。

「……ちなみに、後付装備ができないのはなんでですか？」

「そりゃ、私がそう設定したからだよん」

「え……ええっ！？白式って束さんが作ったんですか！？」

「うん、そーだよ。っていっても欠陥機としてポイされてたのをもらって動くようにいじっただけだけどねー。でもそのおかげで第一形態から単一仕様能力が使えるでしょ？超便利、やったぜブイ。でねー、なんかねー、元々そういう機体らしいよ？日本が開発してたのは」

「馬鹿たれ。機密事項をべらべらバラすな」

手加減抜きで、千冬さんが束さんの頭を叩く。

……しかし、白式を作ったのは束さんだったか。道理で、随分尖った性能だと思ったが。

「あいたた……相変わらずちーちゃんの愛情表現は過激だなあ。……あー！しーちゃん！」

「……」

……まずい、見つかった。

「も～、相変わらず無口だなあ、しーちゃんは。声くらい掛けてくれたっていいじゃないのさ～」

「……」

「ねーねー、しーちゃんのＩＳも見せてよ。どんなの乗ってるのか、束さん興味あるな～」

「……」

見せない。絶対見せない。碌な事にならないのは目に見えている。
断固拒否させてもらう。

「いーじゃん、見せてよ～」
「……」
「しーちゃ～ん？」
「……」
「……しーちゃ～～ん？」
「……」

謎の歩方で接近を図ってくる束さんを間合いに入れないよう、距離を取る。
周りから見れば特におかしなところのない、ただ普通に後退っているだけに見えるだろうが、かなり本気の見切りで間合いを図っていた。

……この人は近付けるととてつもなく厄介なので、決して間合いに入れないことが己の唯一の対処法であった。

そんなことをしていると、鮮やかな金髪が束さんに近付いて行く。

「あ、あのっ！篠ノ之束博士のご高名はかねがね承っておりますっ。もしよければわたくしのＩＳを見ていただけないでしょうか！？」

キラキラと目を輝かせたセシリアだった。有名人である束さんを前にして興奮しているようだった。

だが――

「はあ？誰だよ君は。金髪は私の知り合いにいないんだよ。そもそ

も今は箒ちゃんとちーちゃんといっくんとしーちゃんと数年ぶりの再会なんだよ。そういうシーンなんだよ。」

「え、あの……」

「うるさいなあ。あっちいきなよ」

「う……」

声、口調、表情、目線、態度……いずれも絶対零度の反応を受けて、セシリアがたじろぐ。

そう、束さんは人格に多大な問題があり、その内の一つがこれ。彼女は箒、一夏、千冬さん、そして己以外の人間は、心底どうでもいいのだ。

本人を含めた五人以外の全人類が滅びたところで、何も感じないのではないか――そう思わせるほどに。

それを受け、セシリアは見るからに落ち込んだ様子で引き下がる。

……涙目であった。

「……こっちはまだ終わらないのですか？」

「んー、もう終わるよー。はいできたー！」

箒が促すと、セシリアに対するものとはまるで違う態度で答える束さん。

「んじゃ、試運転もかねて飛んでみてよ。箒ちゃんのイメージ通りに動くはずだよ」

「ええ。それでは試してみます」

紅椿に連結されたケーブル類が外れていく。

箒は瞼を閉じて意識を集中させると、次の瞬間に紅椿は凄まじい速

度で飛翔した。

「うわっ……！？」

「……速い……！」

加速の余波で衝撃波が発生し、爆発的に砂が巻き上がる。よろめく本音を支えながら空を見上げると、二百メートルもの上空まで一瞬で飛び上がっていた。

「どうどう？箒ちゃんが思った以上に動くでしょ？」

「え、ええ、まぁ……」

束さんもＩＳを装備しているのか、オープン・チャネルでの会話を朧月が拾っている。

「じゃあ刀使ってみてよー。右のが〔雨月（あまづき）〕で左のが〔空裂（からわれ）〕ね。武器特性のデータ送るよん」

武器データを受け、箒はしゅらんと二本同時に刀を抜き取る。二刀流は見た目よりも遥かに難易度の高い技術なのだが、そこは流石と言うべきか。

「親切丁寧な束おねーちゃんの解説つき～♪雨月は対単一仕様の武装で打突に合わせて刃部分からエネルギー刃を放出、連続して敵を蜂の巣に！する武器だよ～。射程距離は、まあアサルトライフルくらいだね。スナイパーライフルの間合いでは届かないけど、紅椿の機動性なら大丈夫」

その解説を受け、箒は右腕を左肩まで持ち上げ、構えた。

篠ノ之剣術流二刀型・盾刃（じゅうじん）の構え。刀を受ける力で肩の軸を動かし

反撃に転じるという、守りの型である。
そこから刺突を放つと同時、紅椿の周囲に赤色のレーザー光がいくつもの球体として現れ、順番に光の弾丸となって漂っていた雲を穴だらけにした。

「次は空裂ねー。こっちは対集団仕様の武器だよん。斬撃に合わせて帯状の攻性エネルギーをぶつけるんだよー。振った範囲に自動で展開するから超便利。そいじゃこれ撃ち落としてみてね、ほーいっと」

言うなり、束さんが十六連装ミサイルポッドを呼び出し、一斉射撃を行った。

「れっつごー、箒ちゃーん！」
「――――やれる！この紅椿ならっ！」

箒は空裂を一回転しながら横薙に振るう。すると赤色のレーザーが帯状に広がり、全てのミサイルを撃墜した。

「……！」

圧倒的と言う他ない、凄まじい性能。
全スペックが現行機を上回る――――その言葉に偽りはないようだった。
その光景に、砂浜に集まっている生徒たち全員が魅了され、言葉を失う。真紅の装甲を身に纏った箒は威風堂々と空に佇み、収まっていく爆煙を見ていた。

「やれる……やれるぞ、この紅椿なら……！」

高揚した面持ちで、刀の柄を握り締める箒。

――その顔は、覚えがあった。

『正規リンクスへの昇格、まずはおめでとうと言っておこう。……そしてこれが、今日から君のものになるネクスト――』

「……っ」

「……！」

知らず、また右手を握り締めていた。しかし今度は、爪が手の平に食い込むことはなかった。

――己が右手を握り締めるより速く、本音が己の右手を、指を絡めるように握っていたからだ。

ぎしり、と骨の軋むような音がしたが、本音は呻き声すら漏らさなかった。相当痛かった筈だが、いつもと変わらぬ眠そうな顔で、己ににへら、と笑い掛ける。

「……てひひ、いのっちの手、冷たくて気持ちいい～」

「……すまん……」

「んん～。なんのことかね～？」

「……」

……本当に、昨日から、己はおかしい。

手をほどき、首から提がる指輪を握る。
今はこれが、朧月が己の機体だ。
あの機体は――――「彼女」のパーツを受け継いだネクストは、もう、存在しない。

「たっ、た、大変です！お、おお織斑先生っ！」

山田先生の慌てた声。彼女が慌てていることはいつものことだが、しかし今回はいつも以上の慌てようだった。

「どうした？」
「こ、こっ、これをっ！」

山田先生が千冬さんに小型端末にを渡す。その画面を見た千冬さんの表情が曇る。

「……特命任務レベルA、現時刻より対策をはじめられたし……」
「そ、それが、その、ハワイ沖で試験稼働をしていた――――」
「しっ。機密事項を口にするな。生徒たちに聞こえる」
「す、すみませんっ……」
「専用機持ちは？」
「ひ、ひとり欠席していますが、それ以外は」

小さな声でそこまで話し、それからは軍用の暗号手話で遣り取りを始めた。周囲の生徒に内容を知られないようにだろう。

「そ、そ、それでは、私は他の先生たちにも連絡してきますのでっ」
「了解した。――――全員、注目！」

山田先生が走り去ると、千冬さんはパンパンと手を叩いて注意を引き付ける。

「現時刻よりＩＳ学園教員は特殊任務行動へと移る。今日のテスト稼働は中止。各班、ＩＳを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで各自室内待機すること。以上だ！」

「え……？」

「ちゅ、中止？なんで？特殊任務行動って……」

「状況が全然わかんないんだけど……」

不測の事態に、周囲がにわかに騒がしくなる。

それを千冬さんが一喝して鎮めた。

「とっとと戻れ！以後、許可無く室外に出たものは我々で身柄を拘束する！いいな！！」

「「「は、はいっ！！」」」

怒号と言えるほどのその声に、怯えた様子で片付けを始めた。

――――空気が変わった。

かつて慣れ親しんだ、戦場の空気に。

「専用機持ちは全員集合しろ！織斑、井上、オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、凰！――――それと、篠ノ之も来い」

「はい！」

箒が気合いに満ちた返事をする。緊急事態に相応しい、緊張感のある表情だったが、どことなく浮ついた気配が隠し切れていなかった。

「……」

箒は専用機持ちになった。
ここ数ヶ月の間に学園で起きた、二つの事件。一夏が命を危険に晒してどうにか収めたその事件において、箒は無力だった。
だが、今回は違う。今の箒には、紅椿という力がある。もう、無力ではない。
――一夏の、力になれる。
（……なにも、なければいいが……）
嫌な予感がする。
漠然とした不安を抱えながら、己は千冬さんの下に歩いて行き――
「……いのっち」
――本音に、声を掛けられた。
「……？」
常のものではない、不安の滲んだ声と表情。
「……大丈夫？」
「……」
……わからない。
箒の様子も気になるが、己自身も通常の精神状態とは言い難い。
何かが起こる――そんな、なんの根拠もない確信が、己の心を覆い尽くしていた。

「……いのっち……」

待機を命じられて、本音は他の生徒たち同様、自分に割り振られた部屋で大人しくしていた。

皆は突然の事態に対して様々な憶測を飛ばし合っていたが、いつもならそれに混ざるはずの本音は沈んだ顔で部屋の隅に座っていた。

「……大丈夫……だよね～……？」

本音がこうまで沈み込んでいる理由はただひとつ。ルームメイトである親友、井上真改のことである。

「……」

昨日のバスの中で、真改は泣いていた。一体どんな夢を見ていたのか本音にはわからないし、真改に聞くことも出来なかった。

そして真改の強さを知っている本音には、真改が涙を流す理由など想像もつかなかった。

ただ、想像を絶するような悲しみがあったのだろう――それだけが、本音に考えられる理由だった。

「……いのっち……」

そして、今朝。
本音が真改よりも先に起きた――そんな明らかな異常事態にも、真改は気付かなかった。それほどまでに、真改の様子は普通ではなかった。

「……私……」

本音が珍しく早く起きた理由。
真改が珍しく寝過ごした理由。

――うなされていたのだ。あの、井上真改が。

苦しそうな、悲しそうな顔で、真改は眠っていた。呻き声こそ上げていなかったが、普段は身じろぎすらせずに眠る真改の気配を感じて本音が目を覚まし、真改を起こしたのである。

……真改の寝顔が可愛かったからなど、大嘘だった。

「……私、いのっちに、なにもしてあげられないのかな～……」

本当に大変なのは親友の方なのに、今にも泣き出してしまいそうで、そんな自分が心底情けなくて、本音は抱えた膝に顔をうずめた。

「……無理、しないでね～……」

ひどく、嫌な予感がする。
みんなは、無事に帰って来るだろうか。
真改は、無茶なことをしないだろうか。
そんな心配は勿論ある。だが、何よりも――

――次に会った時、真改は、自分の知る真改でなくなっているような、気がして――

「……そんなこと、ないよね～……」

様子のおかしかった真改。
本音が知らない、真改の悲しみ。
今日の真改は――怖かった。

まるでなにかに……いや、自分自身に怒っているようで。
抑えようとしてはいたようだが、本音には隠しきれていなかった。
それだけの強い怒りは、真改を変えてしまうのではないか。

「……」

思い出すのは、先月のこと。
ラウラがまだ真改を敵視し、戦いを挑んだ時のこと。
ラウラに投げ飛ばされた本音を庇い、しかしその本音ごとラウラが真改を撃とうとした時のこと。

――真改が、あのラウラの動きを止めるほどの殺気を放った時のこと。

あの時本音は真改に抱えられていたのだ。当然、真改の顔を見ていた。

ほんの一瞬だったけれど。

その、殺意一色に染め上げられた顔を。

「……」

あれが真改の本性だとは思わない。

不器用だけど優しくて、素っ気ないけどお世話焼きで、鈍ちんだけどお節介。それが本音の知る、本音が信じる井上真改だった。

けれどあの、殺気の塊のような姿も、真改の一面であることも確かだった。

「……帰って、来てね……」

無事に、帰って来て欲しい。

命だけでなく、心も無事なままで。

またあの、無表情の下に優しさを隠した顔を見たかった。

「……帰って、来るよね……？」

友達の涙も、怒った顔も、悲しそうな顔も、傷付いた姿も、見たくはなかった。

だから、どうか無事に帰って来て欲しい。

膝を抱えて、浴衣の裾を強く握り締めて、気を抜けば零れてしまいそうな涙を必死にこらえて、ただそれだけを祈り続ける。

――――そうしていないと、正体のわからない不安に押し潰されてしまいそうだった。

「……いのっち……！」

縋るような、弱々しいその声を。

聴く者は、誰もいなかった。

第２５話　天災（後書き）

事件解決のため出動する専用機持ち一同、その中には、深い苦悩を抱える真改の姿があった。

戦いに臨む彼女の力になるべく、送られて来る装備と通信。

軍レベルの回線封鎖もなんのその、仮の社員を守るため、世界の平和のため、なにより自分の楽しみのため、あの男が立ち上がる。

「やあやあ井上君、今度の装備はちょっとスゴいよっ！！」

――次回っ！！「天災ｖｓ変態」！！お楽しみにっ！！

……あれ？シリアスにならない気が……

第２６話　福音（初陣編）（前書き）

箒のデビュー戦。
皆さん、水没とか逆流とかは一旦忘れて、応援してあげてください。
前話の感想がその二つに埋め尽くされててビビったので。

第２６話　福音（初陣編）

「私の次の出撃が決まった。相手は、アナトリアの傭兵だ」
「……！」
……ついに来たか、この時が。
リンクス戦争においてレイレナードは多くの戦力を失い、劣勢に傾きつつある。
いや、戦力ではまだ上回っているが、勢いはあちらにある。このままでは、敗色濃厚だ。
だがその勢いを支えているのは、間違いなくアナトリアの傭兵だ。
奴さえ倒せば、レイレナードは再び優勢を取り戻すだろう。
――その大事な一戦に選ばれるのは「彼女」だと、己は確信していた。
「一対一だ。以前は機体の性能差があったが、今回は違う。正真正銘、真剣勝負だ」
「……」
「腕がなるな。アナトリアの傭兵、最後のレイヴンか……。リンクスとしては、一体どれほどの使い手か」
「……」
アナトリアの傭兵は様々な企業のリンクスと戦い、その全てに勝利している。その中にはオリジナル――かつて世界中の国家を解体し尽くした二十六人も多く含まれている。
「彼女」もオリジナルの一人であり、ナンバーは3。ブレードによる接近戦主体でこのナンバーは驚異的な数字であり、「彼女」の卓

越した戦闘力を物語っている。

「ふふ、「鴉殺し」の汚名挽回、と言ったところかな」

「……」

上手いことでも言ったつもりなのか、くつくつと笑う。

自ら忌み名と言う割には、「彼女」は「鴉殺し」という二つ名を気に入っている。

レイヴンという、ネクストが現れる以前の強者、歴戦の傭兵たち。

弱者を殺戮するのではなく、飽くまでも強者との戦いを求める「彼女」にとって、「鴉殺し」とはその生き様を表す名だからだ。

「雪辱戦だな。私にとっても、彼にとっても」

「……」

「しかしよくここまで来てくれた。あれほどの激戦を生き延びるとは、やはり彼は、本物のようだ」

「……」

昂りを抑え切れないのか、「彼女」は先ほどからずっと楽しげだ。

……それほどまでに、彼と戦うのが楽しみなのだろうか。

「彼ほどの強者、そうはいない。強い者との戦いは、戦士にとって喜びだ」

「……」

「特に私は、戦うくらいしか能がないからな。自分の唯一の長所を活かせる。これほど嬉しいことはあるまい」

「……」

自分には戦うことしか出来ないと「彼女」は言うが、そんなことはない。

「彼女」はずっと、己を導いてくれている。

「……弱者をいたぶるなど、私の趣味ではない。やはり戦いとは、対等の者が相手でなくてはな」

「……」

「今まで随分と、レイレナードにはこき使われてきた。だがようやく、私は私の望む戦いができる」

「……」

ネクストの性能は圧倒的だ。それこそ、ネクストに勝てるのはネクストだけと言われるほどに。

故に「彼女」は今まで多くの戦場を切り抜けてきたが、対等な戦いなどほとんど出来なかった。ネクストの装甲に傷一つ付けられない者たちの殲滅を、「彼女」は決して「戦い」とは呼ばない。殺戮という、唾棄すべき浅ましい行いだと思っている。

それでも、企業がリンクスという絶大な戦力を遊ばせておくなど有り得ない。「彼女」は幾度となく、その意に反する命令を下されてきた。

――それに従うことが、「彼女」にとってどれほどの屈辱だったか。

「さて、こうなったらのんびりとはしていられんな。行くぞ、真改」

「……？」

「……シミュレーターだ。決戦に向けて調整する。付き合え」

「……応……！」

「彼女」が待ち望んだ戦い。その為の調整の相手に己を選んでくれたことが嬉しくて、自分でもどうかと思うくらいに舞い上がってし

まう。
総身を気合いで満たし、シミュレーターに乗り込んだ。

そうして何度か試合をしたが、全て秒殺だった。
笑いながらまだまだだなと言う彼女を見上げ、悔しさと共に安堵する。

「彼女」ならば心配ない。必ずやアナトリアの傭兵を討ち果たし、この戦争を収めることだろう。
「彼女」が英雄になると思うと、まるで自分のことのように喜びが込み上げてくる。

そうだ、「彼女」が負けるなど、有り得ない。

――たとえ、相手が誰であろうと。

――――――――――

「……！」

眠っていたわけではない。唐突に、昔のことを思い出した。
フラッシュバック、というやつだろうか。

「真改さん？説明が始まりますわよ？」

「……」

呆としていた己に、セシリアが声を掛けくる。

「……お体の具合が優れないようでしたら――」

「……無用……」

……情けない。己はどれだけ心配を掛ければ気が済むのか。

「……わかりました。ですが、決してご無理はなさらないように」

「……」

頷きすら返せなかった。心配してくれたセシリアを無視する形で、作戦会議室代わりの大座敷の中心に立つ千冬さんに視線を移す。

「では、現状を説明する」

照明を落とした薄暗い室内に、大型の空中投影ディスプレイが浮かんでいる。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働中だったアメリカ、イスラエル共同開発の第三世代型軍用ＩＳ、〔銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）〕が制御下を離れて暴走、監視空域より離脱したとの連絡があった」

……軍用ＩＳ。

競技用に調整（デチューン）された物ではない、本物の兵器――本物の、殺し合いのための道具。

それが暴走した。なるほど確かに、尋常ならざる事態だ。

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここからニキロ先の空域を通過することがわかった。時間にして五十分後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することとなった」

ＩＳに勝てるのはＩＳだけ。通常兵器では相手にならない。故に、ＩＳが大量に持ち込まれているＩＳ学園の臨海学校に白羽の矢が立った。

「教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう」

暴走したのは第三世代型、それも軍用だ。訓練機で抑えられるものではない。
専用機持ちが駆り出されるのは当然と言える。
生徒であろうと、目的のためにより確実である者を使う。
感情や倫理ではない、現実的な判断だ。

「それでは作戦会議をはじめる。意見があるものは挙手するように」
「はい」

すぐさまセシリアが手を挙げる。

「目標ＩＳの詳細なスペックデータを要求します」
「わかった。ただし、これらは二カ国の最重要軍事機密だ。けして口外はするな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と、最低でも二年の監視がつけられる」
「了解しました」

全員が返事ないしは首肯したのを確認し、千冬さんがデータを開示

する。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……わたくしのＩＳと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですわね」

「攻撃と機動の両方を特化した機体ね。……厄介だわ。しかも、スペック上ではあたしの甲龍を上回ってるから、向こうの方が有利……」

「この特殊武装が曲者って感じはするね。ちょうど本国からリヴァイヴ用の防御パッケージが来てるけど、連続しての防御は難しい気がするよ」

「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。持っているスキルもわからん。偵察は行えないのですか？」

「無理だな。この機体は現在も超音速飛行を続けている。最高速度は時速二四五十キロを超えるとある。アプローチは一回が限界だろう」

「一回きりのチャンス……ということはやはり、一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかありませんね」

山田先生の言葉に、全員が一夏と己を見る。

「一夏の零落白夜、それにシンの月光かしら？」

「それしかありませんわね。ただ、問題は――」

「一夏をどうやってそこまで運ぶか、だね。シンはともかく、一夏はエネルギーを全部攻撃に使わないと難しいだろうから、移動をどうするか」

「しかも、目標に追いつける速度が出せるＩＳでなければいけないな。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう」

「……それは確か、送られてきた装備の中にあったぞ」

「……」

それは一夏もわかっていたのだろう。緊張した面持ちで、しかし決して臆することなく応えた。

「……織斑、これは訓練ではない。実戦だ。……覚悟は出来ているか？」

実戦。

その言葉を噛み締めるように目を閉じ、一度頷いてから、決然と言った。

「やります。俺に出来ることがあるなら、やらせて下さい」

「よし。それでは作戦の具体的な内容に入る。現在、この専用機持ちの中で最高速度が出せる機体はどれだ？」

「それなら、わたくしのブルー・ティアーズが――」

『井上君の朧月だねぇ』

「「「「「「うわぁっ！！？」」」」」」

突然響いた声。

それは己の首から提がる指輪――朧月から発せられた。

「き……如月社長？」

『やあやあ久しぶりだねえ、皆さん。お元気そうでなにより』

流石の千冬さんもこれには驚いたようで、若干動揺気味の声で尋ねた。

「……正気ですか。今ここには最重要軍事機密のデータが開示されている。あなたがこの情報を持っていることを知られたら――」

『ああ、そこらへんは心配いらないよ。僕が持ってる情報は軍事機密だけじゃない。アメリカとイスラエル、それに日本のお偉いさん

は、僕に弱みを握られているのさ。もちろん、この三国だけじゃないけどね』

「……」

あまりにもとんでもなさ過ぎる発言に唖然とする一同。

『要は僕が黙っていればいいだけだろう？僕の口の硬さは有名でねぇ、これくらいじゃあ無茶なことはしてこないさ』

「……あなたという人は……！」

呆れるより他にない。如月社長は、国家に喧嘩を売っているのだから。

『じゃあ時間もないようだし説明すると、今回の臨海学校には朧月用の高機動パッケージ、〔月船（つくぶね）〕を送ってある。それを使えばいい』

「待って下さい。まだあなたの参加を認めたわけでは――」

『もう遅いと思うけどねぇ』

「く……」

知ってはならないことはもう知ってしまった。

ならば、今から追い出したところで意味はない。

千冬さんは諦めたように一度溜め息を吐き、如月社長の作戦会議への参加を黙認した。

「……しかし井上は超音速下での訓練はしているのですか？」

『してないんじゃない？けどまあ大丈夫でしょ、水月の加速にも反応しきるくらいだから』

「……いいでしょう。ではパッケージの――」

「待った待ーった。その作戦はちょっと待ったなんだよ～！」

千冬さんの言葉を遮り、いきなり天井から声が聞こえた。見上げると、そこには束さんの首が生えていた。

「……ふんっ」

「いた！いたたたたっ！？」

千冬さんはその顔にアイアンクローを叩き込み、天井から引っこ抜く。

ぐちゃり、と床に落ちる束さん。

「……で？何か他にいい作戦があると？」

何事もなかったかのように尋ねる千冬さん。束さんも当然立ち入り禁止なのだが、如月社長がすでに参加してしまっているので諦めたのだろう。

「モチのロンだよ！ここは箒ちゃんの紅椿に、お・ま・か・せ～♪」

「なに？」

「紅椿のスペックデータ見てみて！パッケージなんかなくても超高速機動ができるんだよ！」

その言葉に応えるように、数枚のディスプレイが千冬さんを囲むように現れる。

そこに映し出される情報の中に、見慣れない単語があった。

「展開装甲……？」

「お？よく気づいたね、いっくん！展開装甲というのはだね、この天才の束さんが作った第四世代型ＩＳの装備なんだよー」

「第……四！？」

その言葉に、この場にいる全員が驚愕する。
それも当然、現在世界各国は、第三世代型ＩＳの開発に心血を注いでいる段階だ。
第四世代型など夢のまた夢、机上の空論にすらなっていないというのに、この人は……！

「ちなみに白式の雪片弐型が最初の展開装甲搭載装備でーす」
「な……雪片弐型に、展開装甲が？」
「では白式も、第四世代型ＩＳ……」

鈴とセシリアの、動揺した声。ただでさえ実験体の色が強い一夏だが、これでは完全にその扱いが固まってしまう。
見ればシャルとラウラ、そして箒も、不安と驚きを露わにしている。

「そしてそして～、箒ちゃんの紅椿には、なあんとっ！この展開装甲が全身のアーマーに使われてまーす！」
「な、ぜ、全身に……！？」
「そんな、それって……！」
「そう！まさに強靭っ！無敵っ！！最強っ！！！」

そう、それは、最強と言うより、他はない。
それこそ、あの男のように――

「……」

右手で顔を覆い、目を閉ざして深呼吸をする。
……落ち着け。今心を乱すわけにはいかない。これ以上、皆に心配をかけるわけにはいかないのだから。

「紅椿なら、今回の作戦は楽勝だよっ！私がやれば、七分もあれば

余裕で調整できちゃうしねっ！」

もはや出撃は一夏と箒で決定――束さんはそう思っただろうが、そこに待ったをかける声が。

『それを言うなら、井上君の朧月はもう調整終わってるよ』

「は……？」

『今話してるうちに終わらせたよ。時間は大事にしないとね』

飄々と言ってのける如月社長だが、ここにいない人物がどうやって機体を調整したのか。

誰もがそう思っていると――

『月船は朧月とデータをリンクさせるだけで使えるのさ。ただ両肩を空ける必要があるから、月影と月蝕は外しておいてね』

「リンクするだけ？そんなパッケージが……？」

セシリアが愕然とした様子で呟く。

束さんは言うに及ばず、如月社長も大概であった。

「……誰だよ君は」

自分の妹、そして専用機の活躍の機会を邪魔されたからか、束さんが不機嫌な様子で如月社長に話し掛ける。

『お初にお目に――は、かかってないか。通信で失礼しますねぇ、篠ノ之博士。僕は如月重工の社長をしている者です』

「そんなことはどうでもいいんだよ。どういうつもりなんだよ。君の作った物が、紅椿よりも優れてると思ってるの？」

『うふふ、別にそう言ったつもりはないんだけどねぇ。僕はただ、

二人よりも三人のほうが、作戦成功の確率が高くなると思っただけさ』

「……」

正論だった。流石に束さんも、これには言い返せなかった。

『確か篠ノ之博士の妹さんと織斑君は、井上君の幼なじみだったよね？連携プレーにも問題ないんじゃないかな？』

「まあ、箒やシンとは、よく一緒に訓練してるし……」

『なら決まりだ。三人で頑張ってくれたまえ』

「けどさあ、ホントについてこれるの？君の作った機体は。紅椿と白式に」

『……うふ。うふふ、ふ。んふふふふふふ』

不気味な笑い声をあげる如月社長。

束さんを除く全員が、一歩引いた。

『僕はねぇ、篠ノ之博士。技術者として、あなたを心から尊敬してる。ＩＳという圧倒的な兵器、そしてその中でも飛び抜けた性能を誇る紅椿……。これらを一人で開発しただなんて、まるで神様みたいだよ』

「……だから？」

如月社長の意図が掴めないのか、束さんが訝しげな顔をしている。

他人に興味を持たない彼女が、嫌悪に近いとしても感情を持って如月社長に接していることは驚嘆に値する。

『けど人間としては、まったく尊敬できない。そもそも僕は無神論者だしねぇ』

「「な……！」」

喧嘩を売っているとしか思えないその発言に、一夏と箒が驚きの声をあげた。

『ＩＳは強力な兵器だけど、動かすのはあくまで人間だ。なのにあなたは、人間というものをまるで理解していない。最強のＩＳは作れても、最適のＩＳは、あなたには作れないんじゃないかな？』

「……ふーん。言うね、君」

『いやいや、それほどでも』

険悪、どころではない空気が満ちる。

目を細めて、己の首から提がる指輪を睨み付ける束さんからは、殺気に近い気配が漂い――――

「では本作戦では織斑、井上、篠ノ之の三名による目標の追跡及び撃墜を目的とする。作戦開始は三十分後。各員、ただちに準備にかかれ」

「ち、ちーちゃん！」

「お前に作戦の決定権はない。紅椿についてはあくまで作戦立案の参考にさせてもらうだけだ」

「でも……！」

「さっさと調整とやらを済ませろ。時間内に終わらなかった場合、篠ノ之を作戦から外す」

「……！」

珍しく狼狽した様子を見せる束さん。

よほど箒に活躍させたかったのだろう。

「……紅椿の性能は凄まじい。だが篠ノ之がそれについて行けるかは別問題だ。……如月社長の言う通りだな。お前は人間を理解して

いない。自分の妹のことすらも」
「……！」
大好きな親友から、最愛の妹についてそこまで言われ、流石の束さんもたじろいだ。
そのまま、極めて珍しいことに落ち込んだ様子で、紅椿の調整に移った。
『それじゃあ井上君、月船の説明をしておくよ。わからないことがあればなんでも質問してくれたまえ』
「……」
そうして己も、作戦に向けて準備を始めた。
――――――――――
時刻は午前十一時半。
七月の空はこれでもかとばかりに晴れ渡り、容赦のない陽光が降り注いでいる。
俺たちは砂浜に並び、それぞれの専用機を起動した。
「来い、白式」
「行くぞ、紅椿」
「……朧月……」
ＩＳが装着され、特有の感覚に全身が包まれる。

見慣れた俺の白式、真紅の装甲が眩い箒の紅椿、そして銀の装甲が陽光を照り返す、シンの朧月。

「……なんか変わってるとこあるか？」

「いや……特に見当たらないな」

「……」

朧月には高機動用パッケージ、月船が取り付けられているはずだが、しかし特に普段と変わったところはないように見える。

『うふふ。ここからだよ』

「「は？」」

如月社長のセリフに疑問符を浮かべていると――――

キィィィィィン……

「……なんだ？この音」

「い、一夏っ！あれをっ！」

「な、なんだありゃあ！？鳥か！？飛行機か！？」

「いや、あれは……！」

『――――あれが、月船さ』

飛んで来たのは、小型の飛行機。それは例えるなら、日本が誇る名作アニメ、〇の〇の〇〇シカの主人公が使っている飛行装置を二回りくらいゴツくしたようなものだった。

とんでもない速度でかっ飛んで来るそれ――――月船は、シンのすぐ後ろまで近付くと素早く形を変え、ガキィンッ！という音を立てて朧月に合体した。

左右の肩、腰、膝に二対ずつ、合計六対十二翼の大型スラスターとなり、朧月を元の三倍近い大きさに見せている。

「か……」

いつもの無表情で佇んでいるシンの背中には、見るからに出力の高そうな、巨大な機械の翼。

いや、先ほどの様子を見る限り、実際にかなりの速度が出るだろう。

だが、俺の意識を惹きつけているのはそんなものではない。

「カッコいい……！！」

「はあ！？そんなことを言っている場合か！」

「馬っ鹿、箒っ！！変形だぞ！？合体だぞ！？これで心躍らなかったら男じゃねえよ！！」

『ふはははは！！そうだろうそうだろう！君ならわかってくれると思ってたよ織斑君！！』

「くそっ、おい、どうしてくれんだよ社長！アンタを嫌いになれなくなっちまうじゃねえかっ！！」

『いやいや、僕のことはいくらでも嫌ってくれて構わないよ！僕の作った物さえ嫌わなければねっ！！』

「男らしいっ！！」

『「ふはははははっ！！」』

「ええい、うるさいうるさいっ！集中しろ、一夏っ！！」

「さあ、行くぜ」

「切り替えが早い！？」

そんな馬鹿な遣り取りをしてから、俺は箒の背中に乗っかった。白式はエネルギーを攻撃に回すために、移動の全てを箒に任せなけれ

ばいけないのだ。

「じゃあ、箒。よろしく頼む」

「本来なら女の上に男が乗るなど私のプライドが許さないが、今回だけは特別だぞ」

そんな不機嫌そうなことを言いながら、しかし声には喜色が滲んでいるように感じた。

（大丈夫か……？）

なにせ紅椿は、さっき箒の専用機になったばかりだ。

同じような状況でセシリアと戦ったことのある俺には、その危険性がよくわかる。

しかし、それ以上に気になるのは――

「それにしても、たまたま私たちがいたことが幸いしたな。私たちが力を合わせればできないことなどない。そうだろう？」

「ああ、そうだな。けど、気ぃ抜くなよ、箒。これは訓練じゃない、実戦だ。何が起きるかわからない、十分注意して――」

「無論、わかっているさ。ふふ、どうした？怖いのか？」

「そうじゃねえって。あのな、箒――」

「ははっ、心配するな。お前はちゃんと私が運んでやる。大船に乗ったつもりでいればいいさ」

「……」

――これだ。

見るからに浮かれている。こういう時は、失敗をやらかす――俺は我が身をもって、それを知っていた。

『織斑、井上、篠ノ之、聞こえるか？』
「「はい」」
「……」
『今回の作戦の要は一撃必殺だ。短時間での決着を心がけろ』
「了解」
「織斑先生、私は状況に応じて一夏と真改のサポートをすればよろしいですか？」
『そうだな。だが、無理はするな。お前はその専用機を使いはじめてからの実戦経験は皆無だ。突然、なにかしらの問題が出るとも限らない』
「わかりました。できる範囲で支援をします」
「……」

千冬姉に対する答えもどことなく浮ついていて、不安になる。
……本当に、大丈夫なのか……？

『――織斑』
「……！」

突然、プライベート・チャネルで千冬姉の声が届く。

『どうも篠ノ之は浮かれているな。あんな状態ではなにかを仕損じるやもしれん。いざというときはサポートしてやれ』
「わかりました。ちゃんと意識しておきます」
『井上君のことも頼むよ』
「如月社長？……え？シンも……？」
『……どうやら、大分参ってるみたいだからねえ』
「な……」

言われて、シンを見る。その姿は、いつもと変わらないように見えるが――

「……本当かよ？」

『みたいだねぇ。まあ、気付いたのは僕じゃないけど』

「は……？」

『篠ノ之博士にはああ言ったけど、僕も人間を理解してるとは言えなくてねぇ。……気付いたのは、朧月さ』

「朧月が？……あるのかよ、そんなこと」

『授業で習わなかったかい？ＩＳのコアには知性があるんだ。……井上君のこと、相当気に入ってるみたいだよ。普段は無口な子なんだけど、必死に訴えてきたんだ。……さっきの通信は、実はそれが理由でねぇ。井上君を助けてくれって』

「そう……だったのか……」

……気付かなかった。シンが、そんなに苦しんでいるだなんて。

『井上君は、戦うってことに特別な思い入れがあるみたいだからねぇ。戦わざるを得ない状況を作れば、そっちに集中して他のことを忘れられるかと思ったんだけどねぇ』

「……ダメだったってわけか」

『そういうこと。というわけで、うちのテストパイロットを頼むよ、織斑君。僕は技術者だから、心理学とかは専門外なんだ』

「……了解」

そして如月社長からの通信も終わり、いよいよ作戦開始。

俺は海の彼方にいる敵を睨み付け、漠然とした不安を抱えながら、戦場に飛び立っていった。

―――――――――

「そろそろだな」

「……」

箒の声に、意識を前に向ける。

遥か先の海上に、本作戦の標的、〔銀の福音〕の姿が在る。

朧月の淡いものとは違う、磨き上げたように輝く銀の装甲。

そして頭部から生えた一対の巨大な翼。

――資料によると、大型スラスターと広域射撃武器を融合させた新型システムだという。同じスラスターでも、ただの斬撃武器を兼ねた月輪とは兵器としてのレベルが違う。

「……接敵……！」

「目標まであと十秒！加速するぞっ！！」

箒は展開装甲の、己は月船の出力を上げる。

凄まじい速度で飛翔する福音を追い、距離を詰めていく。

箒の背に乗る一夏は手にした雪片弐型を強く握り締め、福音を睨み付ける。

零落白夜を発動、八双に構えた。

その刃に触れないように、月光を起動する準備をする。

――そして。

「うおおおおっ！」
「疾……！」

零落白夜と月光、一撃必殺の威力を持つ二つの刃で、福音を挟み込むように斬りつける。

しかし福音はその同時攻撃を、あろうことか最高速度から一気に後退して回避した。

「速いっ！」
「気を付けろ！来るぞっ！」
「……！」

福音はそのまま攻撃体勢になり、己たちを視界に収める。
初撃は失敗に終わった、急ぎ次の対応を考える。
退くべきか攻めるべきか、二つに一つ。

ならば、決まっている。己はただ、寄って斬るのみ――――！

「敵機確認。迎撃モードへ移行。〔銀の鐘（シルバー・ベル）、稼働開始〕」
「……！」

オープン・チャネルから、抑揚のない機械音声が聞こえる。
その声に感情はない。だというのに、明確な敵意だけは感じ取れた。

「はああっ！」

一夏が反転、再び福音に斬りかかるが、福音はミリ単位の精度でそれを回避した。

「くっ、あの翼、月輪より厄介だぞ！」

単純なスラスターとしても、精度の点で月輪を大きく上回っている。出力ならば負けてはいないが、福音は一対、こちらは片翼だ。どちらにしても、勝てる要素はない。

「箒！シン！」

「任せろ！」

「……応……！」

朧月の背中に取り付けられた月船が姿を変える。

肩と腰のスラスターが外れ、膝のそれへと折り畳まれるようにして一体化し、そこで膝からも外れ――独立飛行モードへと変形した。

これが朧月の高機動用パッケージ、〔月船〕の機能。

月船には神無月と神在月を応用した装置が搭載されており、高速、長時間の飛行を可能とする。さらに可変機構により、通常の追加スラスターモードから単独飛行モードへ移行することができ、その際には月船は一種の自立機動兵器となる。

飛ぶ以外のことは出来ないが、強度は折り紙付きだ。故に、こうして――

「……！」

ガンッ！

――空中での足場として使い、急激な方向変換が出来るのだ。

同時に水月を発動、福音に二度目の突撃をかける！

「――ッ！」

一夏の連撃をかわし続ける福音を、背後から強襲。
月光の刃が福音を捉える、その瞬間。

がばり、と。

福音の翼が、文字通り開いた。

「……ちいっ……！」

何故、失念していたのか。
事前に資料で知っていた筈だ、この翼はスラスターであると同時に、広域射撃武器であると――――！

「シン！」
「真改っ！」
「――――ッ！」

放たれたのは、羽のような形をした高密度のエネルギー。
月光で切り払うが、視界を埋め尽くすほどの光弾全てを防ぐことは、さすがに不可能だった。
何割かが朧月の装甲に突き刺さり、次の瞬間に爆発した。

「……づぅ……！」

その破壊力に、体勢が崩れた。しかもその光弾は一度の斉射では終わらず、まるで洪水のように次々と押し寄せて来る――――！

「シン、一旦退がれっ！」
「挟撃するっ！一夏は右をっ！！」

絨毯爆撃のような光弾の雨を突っ切って、月船が飛んで来た。
それに掴まり一先ずは福音の射程距離から離れ、月船を追加スラスターモードへ移行、再び突撃する。

一夏は零落白夜で連撃を繰り出し、箒は二刀の斬撃と刺突、それにより放たれる二種類のレーザー、さらには腕部展開装甲から射出されるエネルギー刃による波状攻撃を行っているが、それだけの猛攻をも福音は避け、あるいは防いでいる。

（……手強い……！）

だが、今は福音も一夏と箒に意識を割いている。
もう一度、今度は月船と水月を同時に使用し、さらなる加速でもって攻める！

「Ｌａ……♪」

唐突に響く、甲高い機械音声。
それと同時に、福音のウイングスラスターが三十六の全砲門を開き、全方位に向けての一斉射撃を行った。

「疾っ……！」

その光弾の雨の中を、一気に駆け抜ける。月船の圧倒的な推力で加速しつつ月光を構え、ウイングスラスター目掛けて振り抜いた。

「――――――」

福音は素早い、しかし最小限の動きでそれを避け――――その僅かな

隙を突いて、箒が斬り込んだ。

「食らえっ！！」

「……！」

己は月船の速度ですれ違ったので、既に福音からは一足の間合いとは言えない距離まで離れている。

月船を分離し、小回りの効く標準状態に戻り反転、一夏と箒を援護すべく三度目の突撃をかけようとし――

「うおおおっ！！」

「一夏！？」

「……っ！」

一夏が全速力で、海面へと向かっていた。

ようやく訪れた好機に一体何を、と思ったのは一瞬、すぐに一夏の意図に気付く。

船がいたのだ。福音から放たれた光弾、その直線上に、一隻の船が。

「海上は先生たちが封鎖したはずなのに――ああくそっ、密漁船か！」

たとえ犯罪者だろうと、一夏は見殺しにはできまい。戦闘に気付いたその船が去って行くのを確認してから福音に向き直り――その手に持つ雪片弐型が光を失い、通常の近接ブレードへと戻った。

――エネルギー切れ。

「くそっ、こんな時に……！」

「……」

こうなれば、己と箒でやるしかあるまい。
チラリと箒を見、呼び掛けようと口を開いて――

「馬鹿者！犯罪者などをかばって……。そんなやつらは――！」
「箒！！」

箒の言葉を、悲鳴のような一夏の声が掻き消す。
そして泣きそうな顔で、諭すように――

「箒、そんな――そんな寂しいことは言うな。言うなよ。力を手にしたら、弱いヤツのことが見えなくなるなんて……どうしたんだよ、箒。らしくない。全然らしくないぜ」
「わ、私、は……」

親に叱られた幼子のように、箒が身を竦ませる。
その際に手にした刀を取り落とし――

それが、光の粒子となり、消えた。

（……具現維持限界……！）

それが意味するものは、紅椿のエネルギー切れ。
……いよいよ追い詰められてきた。

「……！」

見れば、福音は再び攻撃体勢に入っている。白式、紅椿は既にエネルギーがなく、福音の光弾を受ければひとたまりもない。

――ドクン。

だが、己一人で二人を守ることはできない。
ならば、どうする？

――ドクン。

どうする？どうすればいい？一夏と箒、二人ともは守れない。

――ドクン。

守れない。
守れない。
己には、誰も、守れない。

――ドクン。

守れない。
ならば。
守れないのなら。

――ドクン。

……■せ。

――ドクン。

やられる前に、■せ。

――ドクン。

何を恐れる必要がある？
何を躊躇う必要がある？
何度も何度も、幾度も幾度も、繰り返してきたことだろう。

――ドクン。

さあ、■せ。
もとより、お前が身につけたのは、その為の業だろう……真改。

「……ッッ！！！」

ドス黒い思考を振り払い、反転、一直線に箒の下へ向かう。
いまだ呆然としている箒を抱き締めるように庇い、我が身を盾とした。

……これでいい。一夏は福音から、多少とは言え距離がある。どうにか凌げる可能性は高い。
だが先ほどまで福音に切りかかっていた箒は、福音の目の前にいる。
加えて今は呆然自失、防御も回避も望めない。

どちらかしか守れないのなら、今守るべきは箒だ。一夏には自力でどうにかしてもらうしかない。

……そうだ、これでいい。この判断は間違っていない。

これでよかった、筈なのに。

何故お前は、そんなところにいるんだ――――一夏。

「ぐあああああっ！！」

己たちのすぐ前、福音の射線を遮る形で、一夏が仁王立ちをしている。
雨のように降り注ぐ光弾に撃ち抜かれ、爆発に装甲を抉られ、それでも一夏は両腕を大きく広げ、一歩も退かずにそこにいた。
――己と箒を、守るために。
「いち……か？」
やがて光弾の雨も止み、一夏は白式を失って、海へと落ちていく。
それを見て、箒が呆然としたまま声を絞り出し――
「一夏あああああっ！！」
次の瞬間、弾かれたように一夏の下へ飛んで行った。
意識のない一夏を海面ギリギリで抱き止めて、涙を流しながら呼び掛けている。
「一夏、一夏っ！！しっかりしろ、おい、一夏ぁっ！！」
「……」
箒が泣いている。
己が、一夏を守れなかったから。
『作戦は失敗だ！井上！織斑と篠ノ之を連れて、急いで戻れ！福音はまだ、お前たちを狙っているぞっ！！』
「……ッ！」
千冬さんからの通信で、我に返る。その言葉通りに再び砲門を開く福音から逃れるべく、月船を呼び戻した。

一夏を抱えて泣きじゃくる箒を掴み、そのまま一気に戦場から離脱する。

「一夏、すまない……目を開けてくれ、一夏ぁ……」

「……」

箒はまだ、泣き止まない。

一夏はまだ、目を覚まさない。

己は、また――――誰も、守れなかった。

「……ッ！！」

ギシリと奥歯を噛み締める。

千冬さんが待つ旅館へと急ぎながら、己は随分と久しぶりに、思い出していた。

かつて駆け抜けた戦場を。

あらゆる命が死に絶え、枯れ果てた大地を。

滅び行く運命を決定付けられた、世界を。

そこで行ってきた、革命という名の、殺戮を。

「……」

そうだ。思い出せ、自分が何者であるのかを。

己（おまえ）は――――

第２６話　福音（初陣編）（後書き）

朧月の新装備、月船。
変形、着脱、独立飛行ができる、使い捨てじゃないＶＯＢといったところです。
……正直、やりすぎた。

合体してる間はデタラメな速度を叩き出し、分離すれば朧月は通常に戻り小回りが効くようになります。
呼べばすっ飛んでくるので、合体して飛ぶのもよし、足場にして空中ジャンプするもよしな便利アイテム。しかもエネルギーは別個なので、気兼ねなく使えます。

第２７話　福音（剣鬼編）（前書き）

如月重工の株が急上昇中。買い時だぜっ！

その内如月重工で事件が起きるかも。

第27話　福音（剣鬼編）

「聞いたか？「鴉殺し」が負けたらしいぞ」
「ふん、剣なんぞにこだわるからだ。あんな時代遅れの武器で今まで生き残れたことが奇跡なんだ」
「まったくだ。ＡＭＳ適性のおかげで戦えていただけだというのに、調子に乗りおって」
「剣で銃に勝てるわけがない。そんなこともわからんとは、馬鹿な女だ」
「まあ、自分で「戦うしか能がない」と言うくらいだからな。仕方ないだろう」
「なんにせよ、これであの女のためにパーツを作る必要はなくなったわけだ」
「たった一人しか使わないようなパーツのために、我々がどれだけ苦労させられてきたことか」
「だがまあその分は、これから役に立ってもらうさ」
「どういうことだ？」
「あの女の死体が回収された。損壊は激しいが、脳は無事らしい」
「ほう、それは……」
「あれほどのＡＭＳ適性、そうはない。その性能だけでも引き出させてもらうとしよう」

……「彼女」が、帰ってこない。

「……」

「彼女」が出撃したのは昨日のことだ。いい加減戻って来てもよさ

そうな頃だが。

「……」

レイレナードはいまだ劣勢だ。ナンバー1のベルリオーズを始めとする主力部隊がまだ残ってはいるものの、戦力は多いに越したことはない。

生真面目な「彼女」ならば、すぐに次の出撃の準備をするだろうに。

「……」

そして己も、今ではレイレナードの正規リンクスだ、この戦争に参戦する可能性は高い。

そのための実力を身に付けなければならないので、「彼女」の力を借りたいのだが。

「……」

……否、本音を言えば、レイレナードもリンクス戦争も、己にはどうでもいい。

だが、「彼女」との約束がある。いつか「彼女」の隣に並び立ち、共に戦うという、約束が。

「……」

そしてそれは、己自身の夢でもあった。

「彼女」と同じ戦場に立ち、「彼女」の背中を守ることは。

「……」

そう、それが己の夢だった。
「彼女」と出会い、その剣舞を目にした時から、それだけをずっと夢見ていた。

「……」

だから己はこの身を鍛え、技を磨き続けて来た。
「彼女」に追い付くために。
「彼女」に、認めてもらうために。

「……」

そのために「彼女」に教えをこうと言うのも情けない話であるが、しかし弟子が師に出来る最大の恩返しは、師を超えることだと聞く。
「彼女」の剣が学べ、「彼女」に恩返しも出来るのなら一石二鳥だ。
……遥かに先のことになるだろうが。

「……」

そう、「彼女」はいつも、己の目指す先にいる。

「彼女」はずっと、己を支えてきてくれた。

「彼女」はずっと、己を奮い立たせてきてくれた。

「彼女」はずっと、己を教え導いてきてくれた。

「彼女」はずっと、己の目標で在り続けてきてくれた。

「彼女」はずっと、己の憧れで在り続けてきてくれた。

「彼女」はずっと、己の夢そのものだった。

「彼女」は――――

――――もう、いない。

「ご……！？う、ぶ……お、えええぇぇ……！！」

吐いた。

今朝食べたものを、全て吐いた。

それでは止まらず、胃液を全て吐いた。

それでも止まらず、ついには血の固まりを吐き出して、ようやく止まった。

「ぐ、がふ……！」

嘔吐は収まったが、今度は涙が溢れてきた。

体中の水分を全て消費するような勢いで、滝のように流れ続ける。

「ぐ……」

……何故だ。

何故、「彼女」が死んだ。

何故、己が生き残っている。

己が……己こそが、死ぬべきだったのに。

「ぐ、ううぅぅ……！！」

何故、「彼女」を守れなかった。

決まっている、己が弱いからだ。

「彼女」と共に戦う資格がなく、ただ見上げ続けるしか出来ないほどに、弱いからだ。

「……ッ！！」

力が欲しい。

強大な力が。

圧倒的な力が。
絶対的な力が。
……だが、そんなものを手に入れてどうする？
今更そんなものを手に入れてなんになる？
「彼女」はもういない。
「彼女」は、もう、どこにも、いないのに。
「――貴方が真改か」
「……」
唐突に、声を掛けられた。
俯いていた顔を上げ、そちらを見れば、そこには若い――少年と呼べるほどに若い男がいた。
「貴方の力を、借りたいのだが」
「……」
その言葉になんの反応も示さずに黙り続ける己に、しかし男は構わずに話し続けた。
「レイレナードはもう終わりだ。主力部隊でも、アナトリアの傭兵を抑えることは出来まい」
「……」

「だがレイレナードが滅びたとしても、クローズ・プランを潰すわけにはいかない」
「……」
……クローズ・プラン？なんの話だ？
「この世界はいずれ死に絶える。人類の、身勝手な行いによって」
「……」
「これを回避する手段はただ一つ。人類の罪を清算し、閉ざされた未来を――宇宙への道を開く」
「……」
感情の薄い、淡々と話す男の言葉に、己は一切の興味を持てなかった。
……どうでもいい。世界が死に絶えようが人類が絶滅しようが、己にはもう関係ない。
「人類に、黄金の時代を。私達はそのための準備をしているが、戦力が不足している。故に、貴方の力を借りたい」
「……失せろ……」
興味ない。
関係ない。
勝手にやっていろ、お前たちの目的など、己の知ったことではない。
己はもう、何もかもが、どうでもいい。

――だが。

「……回収されたのは、「鴉殺し」の遺体だけではない」

「……！」

――その言葉は、そしてそれに続く話は、無視できないものだった。

「「鴉殺し」のネクスト、〔オルレア〕のパーツも一部が回収され、まだ使える物は他のリンクスに引き継がれることになった。そのパーツの中には、「鴉殺し」の愛剣、〔ムーンライト〕も含まれている」

「……な……に……？」

「彼女」の剣が引き継がれるだと？

一体、誰に……？

「……貴方だ、真改」

「……！！」

「貴方が、「鴉殺し」の後継に選ばれた」

「……馬鹿な……」

己が？己如きが、「彼女」の剣を？

「オルレアの記録に残っていた。貴方しかいない、と。……遺言、だったのだろうな」

「……」

己しかいない。

「彼女」が……そう、言ったのか？

「もう一度言おう。力を借りたい。貴方の力を。
……人類の未来のため、人類の、黄金の時代のために」
「……」
「彼女」を失い、己にはもう、何も残っていないと思っていた。
……まだだ。己にはまだ、この命がある。「彼女」が遺してくれた剣がある。
ならば、己は――
「……協力してもらえるか？」
「……応……」
世界がどうなろうと、どうでもいい。だがここは、「彼女」が生きた世界だ。
――ならば、刻み込んでやる。
「彼女」の生き様を、「彼女」が生きた証を。
この己が、「彼女」の剣で。
この穢れ切った、「彼女」が「彼女」らしく生きることを許さなかった世界に。
そのためならば、己は――
「……真改……」

「メルツェルだ。歓迎しよう、真改。
――――貴方が、五人目だ」

いくらでも奪ってやる。
いくらでも壊してやる。
いくらでも殺してやる。

その果てに何が残るのか、見せてもらおう。

「覚悟はいいか？我々の敵は、世界そのものだぞ」
「……不足なし……」
「ふむ、頼もしい限りだな」

興味ない。
関係ない。
どうでもいい。
知ったことではない。

たとえ相手が誰であろうと、それが世界そのものであろうと。

己はただ、寄って、斬るのみ。

（……良く、見ておけ……）

もう、失うものは何もない。

己の命に大した価値などないのだ、よこせと言うならくれてやる。

だが、その前に。

（……己の、剣を……）

足掻いてやる。

己の命が尽きるその瞬間まで、足掻き抜いてやる。

そして、思い知らせてやる。

お前たちが馬鹿にした時代遅れの戦術で、たった一振りの剣で、一体何が出来るのかを。

だから、見ていてくれ――――

――――アンジェ。

――――――――――――

「……」

忘れていた。己が、何者なのか。

この心地いい世界に、長く居すぎたせいだろうか。

「……」

誰かを守るなど、己には過ぎた望みだ。願うことさえ許されない。

だというのに、身の程を弁えないから――この、様だ。

「……」

旅館の一室。

ベッドに横たわる一夏をみる。体中に重度の火傷を負い、肉は所々が抉れ、骨が何ヶ所も砕けている。

生きていることが奇跡と言えるほどの重傷。

たとえ意識を取り戻したとしても――もう二度と、立ち上がることは、出来ないかもしれない。

「……ぅ……」

「……」

傷が痛むのか、ふと、一夏が呻き声を上げた。

その苦しみを少しでも和らげてやりたくて、髪を撫でようと手を伸ばし――止めた。

……こんな血みどろの手で触れれば、汚れてしまう。

「……」

己が一夏にしてやれることなどない。

己に出来るのは、戦うことだけだ。

「……」

……否。「戦い」と呼べるほど、己のそれは上等なものではない。

己が死ぬよりも先に、相手を殺す。
骨を断たせて首を刈る。
ただ、それだけだ。

「……寝ていろ……」

ここに居ても、意味はない。
ここに居ても、何も出来ない。

――なら、行くか。

「……目覚める頃には……」

敵の下へ。
敵と戦いに。
敵を、殺しに。

あの頃のように。

あの頃と、同じように。

「……全て、終わらせておく……」

……そう、ここにいるのは、井上真改ではない。
この美しく優しい世界に己を産んでくれた両親と同じ姓を名乗る資

格など、己にはない。

ここにいるのは――

「……銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）……」

レイレナードの亡霊、

最悪の反動勢力、

ＯＲＣＡの、第五。

「……素っ首、貰い受ける……」

――ただの、真改。

―――――――――

（まったく、自分が情けないですわ……）

作戦から帰還した三人の姿に、セシリア・オルコットは無力感を覚えた。

初めて、好きになった人。
初めて、憧れた人。
初めて、ライバルと認めた人。

全員が、ボロボロだった。

（わたくしに、もっと力があれば……）

未知の力を持つ敵に立ち向かう三人を、見送ることしか出来なかった。
ただ成功を祈って待ち続け、しかしその祈りは届かなかった。

（本当に、情けない……）

わかっていた筈だ。真改の様子が、普通ではなかったことは。
わかっていた筈だ。専用機とは、訓練もせずにいきなり実戦で扱えるようなものではないことは。
わかっていた筈だ。あの二人に何かがあれば、一夏がどういう行動に出るのかは。

（なのに、何も出来なかった……）

無力。

セシリア・オルコットには、何も出来ない。

（……本当に？）

無力なのか。

セシリア・オルコットには、何も出来ないのか。

（……本当に、そう？）

否。

断じて、否。

（わたくしにはまだ、出来ることがある――）

敵はまだ残っている。一夏を傷つけた敵が。

ならば――真改は、立ち上がるだろう。

ならば――セシリア・オルコットに、出来ることは。

『一夏さんも言っていましたが、わたくしも、真改さんを守ります。貴女が戦う時は、わたくしも貴女の隣で戦います』

（……あの時の誓い、今こそ果たさせていただきますわ）

真改が戦うのなら、自分も戦う。
今度こそ、自分が真改の背中を守る。

それこそが――――セシリア・オルコットの、為すべきことだ。

「さあ、行きましょう、ブルー・ティアーズ――――わたくしと共に」

――――――――――――

（……そっか。そうだったんだ）

瀕死の重傷を負った一夏、それを我が身のことのように見る真改、
そして泣きじゃくる箒。

その光景に、凰鈴音は既視感を覚えた。

（同じなんだ……あの時と）

三年前、モンド・グロッソ観戦から帰って来た二人。
一夏と真改の立場は逆だが、あの時とまったく同じ。

そして、箒は――――

（……あたしだ）

鈴も箒と同じように、泣きじゃくっていた。
体に深い傷を負った真改と、心に深い傷を負った一夏。
それを前に、何も出来ずにただ泣いていた自分――

同じだ。あの時と。

（いや……同じじゃない）

あの時は、何も出来なかった。
今回も、何も出来なかった。

けれど――

（今のあたしには、力がある）

終わったことはもう、変えられない。
けれどこれは、まだ、終わっていない。

――否。

（こんなんで、終わらせるもんか）

この楽しい毎日を、ずっと続けていく。
そのためには、こんなことで終わらせるなんて出来ない。

だから。

（あたしは、あたしにやれることをやる）

親友が傷つくのを、黙って見ていられない。

なら、戦う。

自分の力は、そのために手に入れたものなのだから。

「それじゃ、行きますか。もちろん、アンタも付き合ってくれるわよね――――甲龍」

――――――――――――

（一夏……シン……箒……）

一夏、真改、箒の変わり果てた姿を見て、シャルロット・デュノアは強い痛みを覚えた。

母親を失った時と、とても良く似た痛みだった。

（なんで……こんなことに、なったのかな……）

痛みも、苦しみも、悲しみも、もうたくさんだった。

一夏の無自覚な言動にドキドキして、真改の強さに憧れ追いかけて、箒と一夏を取り合って……。

そんな騒がしくて楽しい毎日を、ずっと続けていたかったのに。

（そんなことも、許されないだなんて……）

ようやく取り戻した、幸せな日々。

それが、また奪われようとしている。

（……そんなこと、させない）

なら、自分が守る。

誰かが奪おうとしているのなら、絶対に守ってみせる。

みんなで笑い続けていられる、素晴らしい毎日を。

（許してくれなくてもいい。僕は、戦って勝ち取る）

戦え。

そう言って、背中を押してくれた。

抗え。

そう言って、心を支えてくれた。

一人で出来ないのなら、誰かに助けを求めればいい――そう、教えてくれた。

（……ううん。みんなで、戦って、勝ち取るんだ）

今の自分には、大勢の友達がいる。

一人でうずくまり、震えて、ただ黙って耐えていた、あの頃とは違う。

（みんなで力を合わせて、この毎日を、守る）

今こそ、立ち上がる時。

今こそ、戦う時だ。

一夏と真改に、恩を返すために。

箒と一緒に、また、笑い合うために。

「行くよ、ラファール・リヴァイヴ・カスタム？――今度は、僕たちが助ける番だ」

――――――――――

（強さとは、戦闘力のことではない、か。……まったく、その通りだな）

初めて出来た、心から信頼できる仲間たちの敗北を知り、ラウラ・ボーデヴィッヒは怒りを覚えた。

軍人たる自分が何もせず、ただの学生に過ぎない者たちを戦わせたことに。

（この痛みから、一夏は立ち直ったのか。……道理で、あれほど強いわけだ）

かつてのラウラであれば、何も感じることはなかっただろう。

だが今は、こんなにも心が揺れている。

（……以前の私ならば、弱くなったと思うのだろうな）

だが、今は違う。この想いが大きな力になることを、ラウラは知っている。

（状況に変化あるまで現状待機、か）

それが、千冬からの命令だった。

軍人であるラウラにとって、命令は絶対だ。命令の前には自分の感情など、邪魔なだけでしかない。

――だが。

（私は、ラウラ・ボーデヴィッヒ。……それ以外の、何者でもない）

何者でもないのなら、ラウラ・ボーデヴィッヒになれ。

千冬の言葉。ラウラにとって、それはどんな命令よりも優先すべき言葉だった。

（教官……いや、織斑先生。私は貴女の命令ではなく、貴女の教え

に従う）

軍人ではなく、魂を持った、一人の人間として。

ラウラ・ボーデヴィッヒとして、自らの心に従う。

（よくも、私の仲間たちを）

罪を償うと誓った。

ならば今立たずして、いつ立ち上がるというのか。

ここで立たねば、ラウラ・ボーデヴィッヒではない。

（命令に背くこと、申し訳ありません、織斑先生。……ですが、やらぬわけにはいかないのです）

この怒りを。

この痛みを。

この、想いを。

呑み込むわけには、いかないのだ。

（軍人としてではなく、私は私として戦う。私らしく、在るために）

だから、この心の赴くままに。

――――いざ、戦場へ。

「行くぞ、シュヴァルツェア・レーゲン――私の、もう一人の相棒よ」

――――――――――

それは、私が小学校二年生の時のことだ。放課後、夕暮れ時の教室で、私は帰り仕度をしていた。
すると、そこへ。

「お～い、男女～。今日は木刀持ってないのかよ～」

いつも私をからかってくる三人組が、いつものように絡んできた。

「……竹刀だ」
「へっへっ、お前みたいな男女には武器がお似合いだよな～」
「……」
「しゃべり方も変だもんな～」

女一人を男三人で囲むなど、臆病者以前の下種どもだ。
相手にする必要すらないのだが、その頃から負けん気の強かった私は無視して帰るのを良しとせず、相手を睨み付けた。

「やーいやーい、男女～」
「……」

しかし子供の眼力などたかが知れている。大した効果もなく、から

かいは続いた。

そんな中、他のクラスメイトがサボって帰ってしまったのに一人真面目に掃除をしていた少年が、私を囲む連中に言い放った。

「うっせーなぁ。てめーら暇なら帰れよ。それか手伝えよ。ああ？」

その少年は、名を、織斑一夏といった。

「なんだよ織斑、お前こいつの味方かよ」

「へっへっ、お前この男女が好きなのか？」

そんな子供らしい、無邪気な悪意に満ちた言葉に、一夏は心底不快そうに顔をしかめる。

「邪魔なんだよ、掃除の邪魔。どっか行けよ、うぜえ」

「へっ、真面目に掃除なんかしてよー、バッカじゃねーの――――おわっ！？」

……馬鹿？今馬鹿と言ったか？

どちらが馬鹿か、真面目に役目を果たす者と、役目を放棄し遊び呆ける者。

一夏が掃除をしなければ誰も掃除をしない、そうなればお前たちも先生に怒られるというのに、そんなこともわからんのか。

……だからその言葉は、黙って聞き流すことは出来なかった。

「真面目にすることの何がバカだ？お前らのような輩よりははるかにマシだ」

「な、なんだよ……何ムキになってんだよ。離せっ、離せよっ」

胸倉を掴み、締め上げる。
しかし仲間がやられているというのに、残りの二人はそれを笑って見ているだけ。

……つくづく、気に入らない連中だ。

「あー、やっぱりそうなんだぜー。こいつら夫婦なんだよ。知ってるんだぜ、俺。お前ら朝からイチャイチャしてるんだろ」
「織斑ー、お前井上と夫婦なんじゃねえのかよー。そういうの、浮気って言うんだぜー」

一夏が私の家の道場に通い始めてからというもの、こういうからかい方をされたのは一度や二度ではない。
いい加減、私も飽き飽きしていた。

「そっか、それでこの間リボンなんかしてたのかよー。男女のくせによー、笑っちま――うわっ!?」

女の子らしく、という望みは私にもあった。だからリボンをしていたのに、それを馬鹿にされればさすがに……少し、傷つく。

だがその痛みに耐える私に代わってか、今度は一夏が怒りをあらわにした。
幼いながらも鍛えられた腕で相手を締め上げ、睨み付ける。

「なんか笑うようなとこあったかよ。ああん?あいつがリボンしてたらなんかおかしいのかよ。すげえ似合ってたろうがよ」
「な、お、おいっ、はなせよっ」
「その前に謝れよ。ごめんなさいって。それくらい言えるだろ、い

くらバカでも」
「こ、このっ――――！」
「――――っ！」

そこで、一人が一夏に殴りかかった。
両手で胸倉を掴み上げている一夏はそれをかわせず、拳が一夏に迫り――――

――その前に、少女が一人、割り込んだ。

「……」
「な、シンっ！」

ガツンと、拳が少女の――――井上真改の頬を打つ。
真改はそれがまるで効いていない様子だったが、友人、しかも女の子の顔を殴られた一夏は激怒した。
掴み上げていた少年を放り投げ、真改を殴った少年を睨み付ける。

「てめえっ！！」
「うわっ！？ちょ、わざとじゃ――――」
「うるせえ！！」

言い訳を聞こうともせずに一夏は拳を握り締めて殴りかかったが、真改に手を掴まれて止められた。

「おい、シンっ！」
「……」

怒りと悲しみと困惑が入り混じった顔で真改に向き直る一夏に、真改は静かに首を振るだけで応えた。

「……ああ、もう！わかったよっ！」
「……」
「へ……へっへっ、やっぱお前ら夫婦なんだ！」
「三角関係ってやつか？どっちがアイジンなんだ？織斑～」

それを見て、再び調子に乗り始めた三人。
だが今度は、真改がそれに反応した。
ただでさえ鋭い目をさらに鋭くし、三人を射抜くように睨み付ける。

「……帰れ……」
「う……」
「……」

真改は顔を横に向け、殴られた頬を見せ付ける。
女の子の顔を、拳で殴ったのだ。その事実を持ち出されて、さすがに三人がたじろいだ。

「……帰れ……」
「……い、行こうぜ」
「じゃ、じゃあなっ」

もう一度言われ、逃げるように去っていく。一夏はそれを睨み付けて見送ってから、真改に向き直った。

「大丈夫か？」
「……平気……」
「……井上、診せろ」
「……」

殴られた頬を確認すると、大したことはなさそうだった。これなら跡が残ることもないだろう。

「……バカ者、顔に傷でも残ったらどうする」
「……勲章……」
「……はあ～……」

一夏と一緒に道場に通い始めた真改がこういうヤツだと知ってはいたが、やはり呆れてしまう。傷が勲章だなどと、小学生の女の子の考え方ではない。

「……すまない」
「……？」
「なんで不思議そうな顔をするんだ。……お前が殴られたのは、私のせいだろう」
「篠ノ之のせいじゃないだろ。悪いのはあいつらだ、一人を複数で囲んでよ、やり方は陰険だしよ、男のクズだ」
「……」
「あんなやつらの言うことなんか、気にすんなよ。前にしてたリボン、似合ってたぜ。またしろよ」
「ふ、ふん。私は誰の指図も受けない」

照れ隠しにそう言ってそっぽを向く私に、一夏は呆れたように溜め息をつく。

「じゃ、お前ももう帰りなよ。俺はまだ、掃除残ってるから」

そして一夏は、教室の机を運ぶ。前の掃除が終わったので、次は後ろを掃除するんだろう。
真改もそれに続き、机を運び始めた。

「……私も手伝う」
「あん？なんだよ、お前掃除当番じゃないだろ」
「……さっきの礼だ」
「そんなの気にすんなよ。俺があいつら気にくわなくてやったことだし」
「お、お前にじゃない。井上への礼だ」
「あっそ。……じゃあ、手伝ってくれてありがとな、篠ノ之」
「……だ」
「うん？」
「私の名前は箒だ。いい加減覚えろ。大体うちの道場は父も母も姉も篠ノ之なのだから、紛らわしいだろう。次からは名前で呼べ。いいな」
「わかった。俺は割と、身近なやつの指図は受ける。――じゃあ、一夏な」
「な、なに？」
「だから、名前だよ。織斑は二人いるから、俺のことも一夏って呼べよな」
「う……む」
「わかったか、箒」
「わ、わかっている！い、い、一夏！これでいいのだろう！？」
「おう、それでいいぜ。……指図じゃなくて頼みなら、ちゃんと聞いてくれるんだな」
「ふ、ふん！」

照れくさくなって、強がりで鼻を鳴らして机を運ぶ。
そうして一つ運び、二つ目に取り掛かろとしたら、そこに真改が立っていた。

「な、なんだ」

「……真改……」
「は？」
「……己の名……」
「そ……そうか」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……し、真改」
「……応……」

それだけ言って、真改は道を空けた。その遣り取りを、一夏は面白そうに眺めていた。

その時私は、変なやつだ、とか、自分のことを「おれ」と言うのか、などと考えていたが――

――今、思えば。

あれは真改なりの、精一杯の言葉だったのだろう。

私に、友達になろうと言ってくれたのだろう。

とても、分かりづらかったけれど。

これ以上ないくらい、真摯に。

真改は、私のことを、友達だと、言ってくれたのだった。

―――――――――

「……」

昔のことを、思い出した。

一夏と真改、二人の幼なじみと仲良くなる、きっかけとなった出来事。

「……一夏……」

あの頃から、一夏は変わらず真っ直ぐだった。

私をからかう者たちから、私を庇ってくれた。

そして、今回も――

「……！」

……一夏は、重傷だ。かなり高い確率で、後遺症が残るほどの。

もう剣を振るどころか、立つことさえ出来ないかもしれない。

「私の……私の、せいだ……」

私が、弱いから。

私の、心が弱いから。

手に入れた力に容易く酔い、溺れ……その結果が、これだ。

「一夏……いちかぁ……」

待機を命じられた部屋の隅、膝を抱えて、一夏の名を呼ぶ。

――目を覚まさない、想い人の名を。

「すまない……一夏……」

こうならないように、剣術を学んでいたのに。
わき上がる暴力への衝動を、抑えられるように。
自分の心を、制御できるように。

――それは全て、無駄だったのか。

「……もう……力なんて、いらない……」

私が力を求めたから、こんなことになった。
なら、力なんていらない。
私が無力でも、一夏は困らない。一夏には、支え助けてくれる人が、大勢いるのだから。

だから、もう――

「あーあー、わかりやすいわねぇ」

突然部屋の扉が開き、鈴の声がした。
しかし私には、顔を上げる気力すらない。

「あのさあ、一夏がああなったのって、アンタのせいなんでしょ？」
「……」

今の一夏の状態は、ＩＳの保護機能によるものだ。
絶対防御の致命領域対応、全てのエネルギーを防御に回すことで操縦者の命を守るこの機能。
これは操縦者がＩＳの補助を深く受けた状態になり、ＩＳのエネルギーが回復するまで、操縦者は昏睡状態になってしまうのだ。

「それで、アンタなにしてんの？そうやってうずくまって泣きべそかいてれば、どうにかなると思ってんの？」
「……」

しかし、私はなんの反応も出来なかった。
だって私には、何も、出来ないのだから。

「……立て」
「……」
「立てって言ってんのよ」

鈴が私の胸倉を掴み、強引に立ち上がらせる。
その小さい体のどこにそんな力があるのか、私の足が床から離れるほどの高さまで持ち上げられる。

――俯いている私と、目が合うように。

「……いつまでそうしてるつもり？そうやってうじうじしてれば、一夏が目を覚ますの？」
「……い……ち、か……」

「黙れ。今のアンタの口からは、アイツの名前を聴きたくないわ」
「……」
……鈴の言うとおりだ。私には一夏の名を呼ぶ資格も、隣に立つ資格もない。
「もう一度訊くわ。いつまでそうしてるつもり？一夏を傷つけたヤツを放って」
「……福……音……」
「そう、そいつよ。……ぶちのめしに行くわよ」
「……そんな……」
「あ？」
「……そんなことをして……なんになる……」
「……」
一夏は、重傷だ。
もう、治らないかもしれないほどの。
「……一夏は……」
「……」
「一夏は、もう……立てないかも、しれないんだぞ……」
「……」
一夏が、立てない。
もう、一夏は剣を振れない。
あんなに頑張っていたのに、あんなに、強かったのに――
「……だから？」
「……な……に……？」
「立つわよ、一夏は。立たないわけがないでしょうが」

「……」
「立てないかもしれない？バッカじゃないの。たとえ1パーセントしか可能性がなくても、アイツならやるわよ。……絶対に、やり遂げる」
「……一夏……」
鈴の言葉には、強い力と、一夏を信じる心が込められていた。
なのに、私は……。

「あたしたちが信じなくてどうすんの。アンタが信じなくてどうすんのよ。一夏は立つ。必ず元通りになる。……アイツはそういうヤツだって、アンタも知ってるでしょうが」
「……いち……か……」
……一夏。

一夏、一夏、一夏……！

「だから、あたしたちで福音をぶちのめす。目を覚ました一夏が、また無茶をしないように」
「……」
「さあ、行くわよ。――――敵が、待ってる」
「……だが、私には……その、資格が……」
「――――いい加減にしろっ！！」
激昂した鈴が、私の頬を殴りつける。
手加減抜きの、本気の拳。
その威力に吹き飛ばされ、受け身も取れずに倒れる。
「資格！？資格ってなに！？そんなものが必要なの！？」

「な……」

「一夏はなに!?神様かなんかなの!?そんなんじゃないでしょうが、アイツはただの男の子でしょうが!!」

「……!」

「資格なんか必要ない!必要なのは想いよ!アイツのことが本気で好きなら、それだけで十分でしょうがっ!!」

……ガツンと、頭を鈍器で殴られたような衝撃を受けた。

……資格なんか、必要ない。一夏が好きなら、その感情に何も恥じるところがないのなら。

――それだけで、十分だ。

「戦わないって言うなら、それでもいいわ。そのかわり、二度と一夏に近づかないで」

「……ふざけるな……」

私は、一夏が好きだ。

剣を続けていたのも、自分を律するためだけでなく、一夏への想いがあったからだ。

「誰が、戦わないと言った」

私の剣は、なんのために。

「私は、一夏が好きだ」

私の想いは、なんのために。

「誰にも、否定させない」

そんなもの、決まっている。

「一夏は、私が守る。私が一夏を支える」

私の剣は。

私の想いは。

「そのためなら、戦う」

ただ、一夏の隣に立つために。

「いくらでも戦ってやる！何度でも立ち上がってやる！今度こそ――」

これからも、一夏と一緒にいるために。

「――私が、一夏を守るっ！！」

もはや先ほどまでの絶望や無力感など、欠片も残っていない。

あるのはただ、溢れんばかりの闘志だけ。

――もう、迷わない。

「……なに言ってんの？それはあたしの役目よ」

「ふん。くれてなどやるものか。欲しければ、力ずくで奪ってみせろ」

「――上等」

お互い、ニヤリと笑う。

……鈴には、感謝しなくては。この頬のことは、それでチャラにしてやる。

「じゃあ、行くわよ」

「だが、どこへ？福音の居場所は――」

「わかったぞ」

突然割り込んできた声。

そちらに目を向けると、ラウラ、シャルロット、セシリアの姿が。

「……みんな」

「ここから三十キロ離れた沖合上空に目標を確認した。ステルスモードに入っていたが、どうも光学迷彩は持っていないようだ。衛星による目視で発見した」

「さすがドイツ軍特殊部隊。やるわね」

「ふん……。お前の方はどうなんだ。準備できているのか」

「当然。甲龍の攻撃特化パッケージはインストール済みよ。シャルロットとセシリアの方こそどうなのよ」

「とっくに終わっていますわ」

「僕も、いつでも行けるよ」

全員が、その眼に闘志を滾らせている。

……いじけていたのは、私だけか。

「なら、残りの問題は――」

「ああ。……マスターだけだ」
「……真改？真改がどうかしたのか？」
「……来ればわかると思うよ」
「……？」

そうしてみんなに連れられ、砂浜に出た。
そこには――

――――――――――

オオオオオ……

……世界が、悲鳴を上げていた。

そこに立つ人物から逃げるように、空気がこちらに押し寄せてくる。

……当然、そんなものは錯覚だ。だがそれを、ここに居る全員に感じさせるほどに、圧倒的な気配を放っていた。

「……誰だ、あれは」
「見りゃわかるでしょ。……シンよ」

そう、そこにいるのは間違いなく真改だ。その姿を見間違える筈はない。

筈は、ないのに。

「あれが……真改だと？」

「帰って来てからというもの、あの様子です」

「一夏のこと……相当、気に病んでるみたい」

「マスターにとって、それだけ大事な存在なのだろう。……左腕を、捨てるほどにはな」

私たちの会話が聞こえたのか、真改がゆっくりとこちらを向く。そして目が合い――

――ずるり、と。私の首が、滑り落ちた。

「――っ！！？」

「落ち着いて。……錯覚だよ」

「く……！？……はあっ」

シャルロットに支えられて、どうにか倒れ込むことは防いだ。

……大丈夫、首はちゃんと繋がっている。

しかし、なんという殺気か。

それ以上に驚いたのは、あの真改が、誰彼構わずに殺気を撒き散らしている――

「……何処……」

地獄の底から溢れ出てきたような声。
それを受け、ラウラが手にしたブック端末を見せる。

「……ここから三十キロ離れた沖合上空だ。今から作戦会議を――」

「……」

そこまで聞くと、真改はＩＳを展開、月船を呼び装着し、そのまま一気に飛んで行ってしまった。

「ば、ちょ、待ちなさいっ！！」
「しまった、場所を知ればこうなることは目に見えていただろうに……！」
「シン、一体どうしちゃったのさ……！」
「そんなことより、追いますわよっ！」
「待って、作戦は――」
「そんなことを言っている場合かっ！！どちらにせよ、マスターがあの調子では作戦など無意味だっ！！」
「真改っ……！！」

全員がＩＳを展開し、急いで真改を追う。
しかし月船の出力は凄まじく、見る見るうちに離されていく。

（真改っ！お前を一人で戦わせはしない！必ず……必ずみんなで、一夏の下へ無事に帰るっ！！）

そうだ、一夏だけではない。
真改もまた、私の大事な幼なじみであり、私の憧れなのだ。

（頼ってくれと言っただろう！そんなに……そんなに、私たちは頼りないか！？お前の力にはなれないのか！？）

守る。

必ず、守る。

これ以上、お前を傷つけさせはしない――――！

（頼む……不出来な主で申し訳ないが、私にはお前が必要なんだ……！だから頼む、私の友達を、守るために――――）

「一緒に行こう！私に、力を貸してくれ――――紅椿っ！！」

第２７話　福音（剣鬼編）（後書き）

ブチ切れモードの真改さん。今こそ皆さんのトラウマを抉る時。

いやあ……何度両断されたことか……

第２８話　福音（報復編）（前書き）

季節の変わり目、天気により暑かったり寒かったりする最近ですが、皆さんは元気にお過ごしでしょうか。

なぜ突然こんな話題を出したかというと、ネタが思いつかなかったからです。

第２８話　福音（報復編）

殺せ。
殺せ。
殺せ。
殺せ。
男を殺せ。
女を殺せ。
子供を殺せ。
大人を殺せ。
赤子を殺せ。
老人を殺せ。
愚者を殺せ。
賢者を殺せ。
罪人を殺せ。
偉人を殺せ。

軍隊を殺せ。

企業を殺せ。

人間を殺せ。

世界を殺せ。

殺せ、殺せ、殺せ、殺せ。

敵を、殺せ。

己を、殺せ。

――――――――――

海上２００メートル。

銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）は胎児のように体を丸めて膝を抱え、頭部から伸びる巨大な翼で体を守るようにして、そこに居た。

「――――――？」

ふと、福音が顔を上げる。

福音の各種センサーは、まだ何も感知していない。

だが何か――とても危険な何かが、近付いて来ている。

「――――――」

非科学的な、第六感による警鐘。

だがそれは、他のどのデータよりも信用に値する――否、信用しなければ自らを滅ぼすだろうと、福音に確信させた。

――そして。

「――――――！」

凄まじい速度で一直線に、あまりにも明確な殺意を撒き散らしながら、敵が迫ってくるのを確認した。

「Ｌａ――――♪」

福音はマシンボイスを発しながら、頭部の大型スラスターを開く。

そこに備え付けられた三十六の砲門を前に向け、敵に狙いを定める。

銀の鐘（シルバー・ベル）の最大火力による、一点集中の一斉射撃。

過剰とも言えるその攻撃力をもってしても、福音は心中の不安を拭いきれずにいた。

――まるで足りない。この程度では、「アレ」は墜とせない――!

「――――――!!」

――見えた。

輝くような自分のそれとは印象の違う、淡く静かな銀色の装甲が、弾丸すら置き去りにするような勢いで突っ込んでくる。
射程距離に入る直前、攻撃開始。

「アレ」を近付けてはいけない。エネルギーのロスは多くなるが、最大射程から削り切る――!

降り注ぐ、光弾の雨。分厚い弾幕に加え、一発一発の威力も申し分ない、嵐のような攻撃。
海上に轟音が響き渡り、衝撃波が海面を震わせる。

その、中で。

「――不足」

静かに呟かれた、その声が。
やけにはっきりと、聴こえた。

「――――――！」

爆風を切り裂いて、銀色の装甲――――月船を装着した朧月が、福音に迫る。

その操縦者、真改は、血と臓物で出来た底無し沼のようにどす黒く濁り切った瞳で、福音を射抜いた。

「……銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）……」

圧倒的な危険を感じ、福音は全速力で後退しながら銀の鐘の照準をさらに絞る。
だが密度を増したその攻撃も、足止めにすらならない。
爆発に装甲を抉られ、白い肌と黒い髪を焼かれながら、それらを一切意に介さず直進してくる。

「……素っ首、貰い受ける……」

交錯は一瞬――――の、筈だった。
前回の交戦で、福音は朧月の機動力と月光の間合いを見切っていた。
故に、針に糸を通すかのような精度で真改の攻撃を避けることが出来るのだが、正体不明の危険信号に従い大きく避けた。
スラスターを全開に噴かし、海面へ向け急降下する。剣術は下からの攻撃に弱いという定石に則った、反撃を視野に入れた適切な判断だった。

故に、福音の落ち度はただ一つ。
真改の反射速度が、音速を遥かに凌駕するということを知らなかったことである。

ガンッ！

分離した月船を踏みつけ軌道を変え、月輪によって半回転、瞬時加速で急停止し、水月で再加速――――その一連の動きを、コンマ一秒にも満たない刹那の内に実行する。
福音からすれば超音速から一切減速せずに、ほぼ直角に曲がったように見えるほどの超絶の機動。
当然、いくらＰＩＣによる保護があっても、そんな動きに人体は耐えられない。骨格や筋肉、内臓に莫大な負荷が掛かり、派手に吐血した。

――――だが。

「……」

それでも真改は、眉一つ動かさない。

自ら吐き出した血を顔に浴び、凄絶な化粧として、なおも無表情に福音に斬り掛かる。

「――――――――!!」

その姿に。

機械である筈の福音は、確かに恐怖を感じた。

ヴオンッ!!

紫色の極光。ＩＳの防御力をもってしても、一撃で両断されかねないほどの圧倒的な熱量。

その斬撃を、福音は紙一重で回避する。

真改の剣を見切ったのではない。全速力で避けた結果、本当にギリギリのタイミングで月光の間合いから逃れることが出来ただけだ。

だがどちらがより無茶な機動をしたかと言えば、明らかに真改の方だ。その証拠に、初撃を外した真改の動きは止まっている。

その奇跡を無駄にせず、福音が即座に反撃に出る。

再びの一斉射撃。目の前の敵に出し惜しみなどすれば一瞬で敗れると、たった一度の攻防で悟った。

一対の翼を大きく広げ、真改を挟み込むように光弾を撃ち出す。

たとえ殺すことになったとしても、この好機になんとしても仕留める――――そんな決意の籠もった攻撃は、しかし。

ゴウンッ！

重々しい炸裂音と共に、かわされた。

「――――――――!?」

「……温い……」

真改が水月を起動、体勢を崩したまま、無理矢理加速したのである。

それだけではない。真改は次いで月輪を噴かし独楽のように回転、ジャイロ効果により機体を安定させ、さらに二度連続で水月を起動した。

正三角形を描くような軌道で、一瞬の内に福音の背後に回り、斬り掛かる。

「――――――――!」

福音は驚嘆に値する反応速度でもって、死角からの一撃を全速力で前に出ることで回避、そのまま距離を取りつつ反撃のため振り返り――

「――――――――!?」

その目の前に、真改がいた。

福音に攻撃をかわされた瞬間、瞬時加速と水月の同時使用により、ぴったりと背後について行ったのである。

「……」

ヴオンッ！！

再び、光の剣が振るわれる。
その刃は迷うことなく、真っ直ぐに、福音の首に迫る。

当たれば、死。

福音が、ではない。

福音の、守るべき主が、死ぬのだ。

「――――――ッ！！」

そんなことは、許せない。
だから福音は、なんとしてもその一撃をかわさねばならない。
たとえ、自身の象徴とも言える翼を失うことになろうと。

首を体ごと傾け、月光の軌跡から逃がす。
その際、ウイングスラスターの片方が逃げ遅れ、根元近くから斬り飛ばされた。

「――――――！！！」

声無き悲鳴をあげながら、それでも福音は攻撃の手を緩めない。
残ったスラスターを開き、その砲門を真改に向ける。

「Ｌａ――――♪」

半減した火力で、しかし全力での攻撃。
これほどの近距離でそれを浴びればひとたまりもない。

だから、真改は。

「……っ！」

福音との距離を、さらに詰め。

「――――――！！？」

開いたスラスターの中に、右腕を、突っ込んだ。

「……！！！」

「――――――！！！」

月光と銀の鐘が、同時に起動する。

ぶつかり合う、膨大なエネルギー。

それが内側で炸裂したことで、福音のウイングスラスターが完膚無きまでに破壊された。

そしてその爆発を全方位から浴びた真改の右腕も、ただでは済まず。

装甲が吹き飛び、肌が弾け、肉が千切れ、骨がひしゃげ――しかし埒外の頑強さを持つ月光だけは、大きく破損しながらも機能は失わず。

それだけあれば、真改には十分過ぎた。

ヴオンッ！！

月光を起動。ボロボロの、もはや形だけしか残っていない右腕を、

得体の知れないナニカで動かす。

両の翼を失い、膨大なエネルギーの爆発を間近で受けた福音には、既に防御力は残されていない。

月光で斬られれば、確実に、死ぬ。

福音が、ではない。

福音の、守るべき、主が死ぬのだ。

……そんなこと。

そんな、こと。

許せる、筈がない――――

「シ――――」

だが、福音にはもう、打つ手がない。

自身の攻撃力と機動力を支える翼は、両方ともが失われている。

試験稼働中であった福音には通常の武装は搭載されておらず、あるのは――――否、あったのは、たった今失われた銀の鐘（シルバー・ベル）のみ。

だから、今の福音にはなにも出来ない。福音の力では、どうにもならない。

「――――ネ」

だから、どうにかなるとすれば。

「――ダメだあああぁぁぁっ！！」

福音以外の者による、介入があった場合だけである。

――――――――――

「――見えましたわっ！！」

「くそ、やはりもう、始まってる……！」

専用機持ち達の中で、強襲用高機動パッケージ〔ストライク・ガンナー〕を装備したブルー・ティアーズ、そして展開装甲の調整により機動力特化機となった紅椿――すなわちセシリア・オルコットと篠ノ之箒が、他の三人に先行して真改を追った。

そして、真改と福音の姿をハイパーセンサーが捉えられる距離まで近付いて――

――真改の、我が身を省みない戦いを、見た。

「真改さんっ……！」

セシリアが、泣きそうな声で真改の名を叫ぶ。

真改は月輪と水月、ただでさえ体に負担のかかる二種類のスラスターを連続して、時には同時に発動し、福音に食らいついている。

明らかに、無茶をしていた。朧月の装甲も所々にダメージが見受けられるが、操縦者にまで届くほどではない。

だというのに、真改の顔は血まみれだった。そして今も、口から大量の血を吐きながら、その血を顔に浴びながら、それをまるで気にもせずに攻撃を続けている。

「もうやめてください、真改さん……！」

圧倒的な機動力で逃げ続ける福音に、真改が追いすがる。

本来、そんなことは出来ない筈だった。

軍用ＩＳである銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）は、性能面で競技用ＩＳである朧月を上回っている。

操縦者の技量でいっても、ミリ単位の精度で機体を操る福音に真改は遠く及ばない。真改の技は飽くまで剣士としてのもの、つまりは見切りや読み、そして剣技であり、ＩＳの操縦とは関係ない。

動きに無駄があり、その無駄が体に余計な負荷を掛けると同時に機動を阻害し、それを補うために更なる無茶をする――その悪循環が真改の体を破壊していくのが、この距離からでも見て取れた。

「真改……！お前の剣は、そんなものじゃないだろうっ！！」

性能で劣り、技術でも劣る。

そんな相手と互角以上に戦っている。

そこに、無茶がない筈がない。

それが、箒には我慢ならなかった。

「お前の剣は……！」

箒が憧れた、真改の剣。

真っ直ぐだった。

いつだって、相手の目を真っ向から受け止め、見返していた。

気高かった。

いつだって、勝利のために全力を尽くし、その勝利を誇っていた。

そして、優しかった。

決して過剰な暴力は振るわず、余計な怪我をしないように気を使っていた。

なのに、今は――

「させない……！お前に、そんなことを、させるものか――――！！」

月光が、福音の翼を片方、斬り飛ばす。

次いで捨て身の一撃で、もう片方の翼も破壊した。

それで十分だ。福音はもう、戦う力を失った。

もう、十分だろう。

だから。

「――――ダメだあぁぁぁっ！！」

その刃を。

振り下ろさせては、いけない。

――――――――――

月光を振り下ろす直前、横から衝撃を受け、止められた。

（……？）

見れば、真紅の装甲――――箒が、抱き付くようにして、己の右腕を止めている。

「もういいっ！もう十分だ、真改っ！！」

「……」

痛みを堪えるような顔で、箒が叫ぶ。

……なんだ？何故泣いているんだ、箒。

「もういいんだ、真改！それ以上やれば、殺してしまうっ！！」

また何か、嫌なことでもあったのか？

それでまた、黙って耐えたのか？

……偉いな、箒。己とは大違いだ。

「それはダメだ。お前の剣は、そんなものじゃないだろう、真改っ……！！」
「……」
お前はまた、そうやって、己を助けてくれるのか。
いつも心配ばかり掛けてすまない。
いつも支えてくれて、ありがとう。
「お前がそんなことをする必要はないっ！そんなことを、お前にさせるものか……！！」
「……」
……ありがとう。そして、すまなかった、箒。
だが、もう、大丈夫だ。
「もういい。もういいんだ、真改。お前が、そこまでやる必要はないんだ」
「……」
大丈夫だ。
もう、大丈夫。
己は、今度こそ――
「――邪魔」

――確実に、止めを刺すから。

――――――――――

ざわり、と。

不意に、寒気を感じた。

真改が、凄絶な血化粧を施した無表情で、私を――私の後ろを、睨み付けている。

「箒さんっ！！」

焦ったような、セシリアの声。

後ろを向くと、そこには。

失った筈の翼を、

光り輝くエネルギーで再生した、

銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）が、そこにいた。

「――――邪魔」

真改が私を突き飛ばし、福音に躍り掛かる。

新たな翼を大きく広げて迎え撃つ福音。

真改は月光を起動、ボロボロの右腕を動かして構え、

（ダメだ……やめろ……）

紫色の光の剣を、福音の胸を目掛け、真っ直ぐに――――

「――――真改あああああいっ！！」

「……！」

ほんの、僅か。

真改の一撃が、逸れた。

福音はその隙を見逃さずに攻撃をかわし、真改の右腕を抱える。

そして動きの止まった真改を翼で包み込み、零距離、全方位からの一斉射撃を浴びせた。

「――あ」

全身をズタズタにされ、真改が落ちて行く。

――――また、だ。

「あああああぁぁっ！！！」

また、私のせいで――――！！

『『『『違うっ！！』』』』

「……！！？」

不意に、プライベート・チャネルから、みんなの声が届いた。

『お前のせいじゃないっ！お前のおかげだっ！！』

『箒のおかげで、シンは殺さずに済んだんだよ！？』

福音は軍用ＩＳ、操縦者も当然軍人だ。

いかなる理由があろうと、殺してしまえば確実に厄介なことになる。

……いや、たとえなんのお咎めもなかったとしても、真改の心はさらに傷付いただろう。

真改を、守ると誓った。

ならば今すべきは、後悔ではない。

――――そうだ、私はもう、迷わない。

『大丈夫、真改さんは無事です！右腕も、きっと良くなりますわっ！！』

海面に激突する寸前、セシリアが真改を抱き止めた。
朧月はまだ展開されている、最低限の保護は、まだ残っているだろう。

するとどこからか月船が飛んできて、セシリアの前で停止した。

『……真改さんを、おまかせします』

その上に、真改をそっと横たえるセシリア。
物言わぬ機械である月船は、真改を気遣うようにゆっくりと、戦場を離れていった。

（お前も、真改を守りたいのだな……朧月）

真改が意識を失っている以上、月船を動かしているのは、月船とリンクしている朧月ということになる。
主思いなのだろう、もしかしたら先の一撃は、朧月が外させたのかもしれない。

真改の心を、守るために。

直後に受けるだろう苛烈な反撃に、耐えきる覚悟と共に。

「お前も、私たちの仲間というわけか。……安心しろ、福音は私たちが倒す。お前は、真改を守ってくれ」

返事などある筈もないが、それでも言わずにはいられなかった。

朧月には、この言葉はきっと届くだろうと、思うから。

「……貴様を倒す理由が一つ増えたな、福音」

「さあ、始めますわよ。存分に、踊ってくださいな」

『あたしたちもすぐに着くわっ！出番を残しときなさいよっ！？』

「保証はできませんわっ！！」

「精々急ぐんだなっ！！」

「Ｌａ……♪」

二刀を構え、一気に突撃。その私を後ろから掠めるように、しかし決して当たることなく、強力なレーザーが追い抜いていく。

セシリアによるストライク・ガンナー用の大型レーザーライフル、〔スターダスト・シューター〕の連射だ。

ブルー・ティアーズの強襲用高機動パッケージ、ストライク・ガンナーは、六機のビットをスラスターとして使っている。その分低下する火力を補うため、スターダスト・シューターは普段装備しているスターライトｍｋ?を大きく上回る威力を持つ。

その閃光を避けながら、福音は私目掛けて突撃してくる。

威力と数を増した光弾の雨を雨月と空裂のレーザーで迎撃しながら、剣の間合いに踏み込んだ。

「ゼェイッ！」

繰り出した一撃を避ける福音。相変わらず凄まじい機動力だが、しかしそれにも慣れてきた。

返す刃で福音を追う。

「Ｌａ――――♪」

反撃に降り注ぐ光弾を距離をとり回避、再び突撃をかける私を、セシリアが援護する。

「はぁっ！」

閃光が福音を撃ち抜いた。僅かに福音の体勢が崩れ、その隙に斬り込む。

紅椿の機動力ならば、福音を追える。体勢が崩れていても、全身の展開装甲から噴き出すエネルギーにより斬撃に十分な加速を与えられる。

前回はこれに振り回されていた。今も扱いきれているわけではないが、その隙はセシリアが埋めてくれる。

「はあああっ！！」

少々の隙など気にせず攻撃する私に、福音が押され始める。

それにより、福音は一旦大きく距離をとり、先ずは援護射撃を潰そうとセシリアに躍り掛かった。

「くっ！」

「セシリアっ！！」

スターダスト・シューターは二メートルを優に越える巨大な銃だ。

取り回しに難があり、近づかれれば為す術はない。

――だが。

「――――――――！？」

『遅くなったな！』

一キロ先からの砲撃が、福音を阻む。
砲戦パッケージ、〔パンツァー・カノーニア〕を装備したラウラによる狙撃である。

「よくも、マスターを……」

ラウラは両肩に装備した八十口径レールカノン、〔ブリッツ〕による砲撃を続けながら、福音を睨み付け、吼えた。

「よくも、一夏をっ！！」

反動が大きいために機動と両立することは出来ないが、攻撃力と射程距離に優れている。
これだけ離れた距離からでも脅威的な威力と命中率を維持しており、後方からの火力支援としては理想的だ。

「この装備では接近されれば対処できんっ！ここから援護するっ！！」

「了解した！」

「頼みますわよ！」

ラウラの砲撃で福音の動きが止まった隙に、セシリアが距離をとる。
だがセシリアが再び攻撃を仕掛けようとしたところで、福音が動く。
両の手足、合計四ヶ所から発動する瞬時加速。
ストライク・ガンナーの高速機動に易々と追い付き、光弾を放った。

「くぅ……！」

「ちぃっ、速すぎて狙えん……！」

セシリアは必死に逃げているが、福音は執拗に食らいついてくる。
引き離すことが出来ず、ついに両の翼に囲まれた。

「「セシリアっ！！」」
「きゃあああっ！！」

セシリアが光弾の洪水に飲み込まれ、爆煙でその姿が隠される。
敵を一機撃墜し、福音は次の獲物としてラウラに狙いを定め――

「――おまたせ」
「――――――！？」

背後から、ショットガンの連射を浴びた。

「助かりましたわ――シャルロットさん」
「二度目は勘弁ね。シールドをほとんど持ってかれたよ」

煙が晴れ、中から実体シールドとエネルギーシールドを二枚ずつ装備したシャルロットが現れる。
リヴァイヴ専用防御パッケージ、〔ガーデン・カーテン〕により、福音の攻撃を防いだのだろう。

「「はあああっ！！」」

セシリアとシャルロット、レーザーと実弾による連射から逃れるべく、福音が再び瞬時加速を発動して距離を取る。
囲まれつつある状況から脱するために、包囲の薄い箇所を見定め、そこを目掛けて一気に加速し――

「――いらっしゃーい」

紅蓮の炎の雨により、その逃げ道を塞がれた。

「随分派手にやってくれたじゃない……」

機能増幅パッケージ、〔崩山〕により衝撃砲を四門に増設した、鈴の甲龍による攻撃だ。

「倍返し程度で済むだなんて、思ってないでしょうねえっ！？」

普段は不可視の筈の砲弾が、崩山により赤い炎を纏っている。その連射を受け、さすがの福音もたまらずに後退した。

――私たちの、包囲の中心に。

「全員、揃ったな」

「もう好きにはさせませんわよ」

「油断するな。攻撃力も機動力も桁外れだ」

「身を持って味わったよ。それでも、負ける気はないけどね」

「関係ないわ。ボコボコにして、海に沈めてやる」

「――――――」

全員から溢れる闘志。

必ず、倒す。

絶対に、勝つ。

これ以上、真改を傷付けさせないために。

私たちが大好きな、一夏を守るために――――！

「行くぞ、銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）。お前には、ここで果ててもらう――――！！」

――――――――――――――――

ざぁぁぁん……ざぁぁぁん……。

「……どこだ？ここ……」

遠くから聞こえる波の音に誘われるまま、俺はどこともつかない砂浜の上を一人歩いていた。
じりじりと照りつける太陽の日差しを感じ、今が夏だとわかった。

「――――。――――♪～～♪」

ふと、歌声が聞こえた。
とてもきれいで、とても元気な、その歌声。
なぜだか無性に気になって、その歌声の主を一目見ようと、声のする方に歩き出す。

「ラ、ラ～♪ララ♪」

少女は、そこにいた。
波打ち際、わずかに爪先を濡らしながら、その子は歌うように踊り、躍るように謡う。

眩い輝きを放つ、純白の髪を揺らしながら。
髪と同じ白色のワンピースを、風の吹くままに舞わせながら。

（ふむ……）

どういうわけか、声をかける気にはならなかった。
俺はぼーっと突っ立ったまま、その少女の歌を聴き、踊りを眺め続ける。

打ち寄せる波の音。
時折吹く優しい風。

それらが、とても心地よくて。
俺はただただぼんやりと、目の前の光景を眺めていた。

――――――――――

「おおおおおっ！」

箒が二刀を振り上げ、斬り掛かる。
福音は高く上昇してそれを避け、光弾の雨を降らす。

「させないっ！」

シャルロットが箒の前に割り込み、光弾を防いだ。箒の紅椿はエネルギーの消耗を抑えるために展開装甲のエネルギーを機動力に割り振っているため、防御力が低下しているのだ。
しかしガーデン・カーテンのシールドは既に大きく消耗しており、長い時間は耐えられない。
だが、一瞬あれば十分だった。

「食らえっ！」
「釣りはいらんぞっ！」

鈴とラウラによる十字砲火。広範囲を埋め尽くす衝撃砲と、弾速と精度の高い砲弾が福音に襲い掛かる。

「Ｌａ――――♪」

福音は更に上昇しながら、一層激しく光弾を放つ。包囲を抜けることを最優先とした動きだった。

しかしそこへ――――

「どちらへ行かれるのですか？」

素早く回り込んだセシリアが、精密射撃の連射を浴びせた。

「今日はここが、貴方の寝室ですわよ？」

次々と放たれる閃光。左右からは砲撃の嵐、そして下からは、箒とシャルロットが福音を追って来ていた。

「ここで仕留めるっ！」
「一気に行くよっ！」

箒はレーザーを連射し、シャルロットはアサルトカノンを乱れ撃つ。
五人の猛攻を受け、福音はエネルギーの翼で身を守るように全身を包み込んだ。

「くっ、硬い……！」
「それならっ！」

福音の防御を破るため、シャルロットが接近する。
左腕に力を込め、盾の下に隠したパイルバンカー、第二世代型最強の破壊力を持つ〔灰色の鱗殻（グレー・スケール）〕を準備する。

「これで――――！？」
「！？シャルロット、退がれっ！」

間合いに入る直前、突如福音が翼を広げる。
翼の下から現れた装甲は所々がひび割れ、そこから小さな翼が伸びている。

――――そして全ての翼から、全方位に一斉に光弾が放たれた。

「うわあああああっ！！」

目の前まで接近していたシャルロットが、光弾の直撃を受ける。
咄嗟に構えた四枚のシールドを紙のように貫かれ、海へと落ちて行った。

「シャルロットさん！」

「セシリア、後ろだ！」
「！？」

爆煙で視界が遮られた隙に、福音がセシリアの背後に回っていた。

「包囲が……！」
「馬鹿、逃げろ！」

セシリアは福音に銃を向けるが、遅い。
銃身を掴まれ、光弾の斉射を受けた。

一瞬で、ブルー・ティアーズのシールドエネルギーが枯渇する。

「おのれっ！」
「よくもっ！」

鈴とラウラが砲撃の密度を上げた。
しかし福音は、主翼からの高速連射で衝撃砲の弾雨を、小型の翼からの精密射撃でレールカノンの砲弾を撃ち落とした。

「そんなっ！？」
「なんという……！」

驚愕の隙を突き、福音が鈴に迫る。
咄嗟に双天牙月を展開して迎撃しようとするが、主翼によって薙払われ、機体ごと吹き飛ばされる。

体勢が崩れたところで光弾の雨を受け、撃墜された。

「おおおおっ！」

雄叫びを上げ、箒が突撃を掛ける。
雨月と空裂を振るい、降り注ぐ光弾を切り払いながら福音に迫る。
しかし福音の手数は圧倒的で、二刀では捌ききれない。
それを見たラウラは瞬時加速で距離を詰めてから、再び砲撃を開始した。

「援護する！行けえっ！！」
「おおおあぁぁっ！！」

ラウラは有りっ丈の砲弾を撃ち込み、それにより出来た隙に箒が紅椿を滑り込ませる。

そして、ついに――

「はあああぁぁっ！！」
「――――――！」

――剣の間合い。

二刀と全身の展開装甲から伸びるエネルギー刃を振るい、猛攻を仕掛けた。
福音も同じように、全身の翼から光弾を放ちつつ間合いからの離脱を図る。

「ぜえええああああっ！！」

無茶な機動、無理な体勢からの攻撃により、全身の骨が軋む。その激痛を気合いで抑え込みながら、機体を更に加速させた。

「あああぁぁっ！！」

捨て身の踏み込みで、ついに福音の懐深くに入り込んだ。
両腕を大きく広げ、左右から挟み込むように二刀の斬撃を繰り出す。

紅椿の全推進力を乗せた、渾身の一撃。

必殺の意志を込めたそれは、しかし。

無数の小型翼に腕ごと絡め取られ、止められた。

「な……にぃ！？」

拘束を振り解こうともがくが、びくともしない。
ならば蹴りで、と脚部の展開装甲からエネルギー刃を伸ばそうとするが、いつの間にかその脚も絡め取られていた。

「箒っ！！くっ、射線に……！」
「構うな！撃てえっ！！」

だが、撃てない。
紅椿を盾にされては、福音まで砲弾は届かない。箒を傷付け、それで終わりだ。

「く……そおおおぉぉ！！」

福音は翼をラウラに向け、光弾を放った。
パンツァー・カノーニアにより機動力の低下しているラウラにはかわしきれず、直撃。黒煙を上げて撃墜される。

「ラウラ……！」

――全滅。

ただ一人残っている箒も、身動きがとれない。

そして福音の両腕が、ゆっくりと箒の首を掴み、締め上げる。

「ぐ……か、は……」

「――――――」

光輝く翼が、箒を包み込んでいく。

薄れ行く意識の中で、それでも箒は反撃の一手を模索していた。

（決めたんだ！必ずみんなで、一夏の下へ帰るとっ！諦めない、絶対に、諦めてたまるかあっ！！）

しかし、その想いも虚しく。

福音の翼が、少しずつ、その輝きを増していった――

――――――――――

「……」

目が覚めると、そこは既に戦場ではなかった。

「……」

どうやら己は、月船の上で眠っていたらしい。出力を絞った月船が、ゆっくりと海上を飛んでいる。

「……」

視線を巡らせると、遥か彼方に光が見えた。
爆発とマズルフラッシュ、エネルギーの煌めき。

――戦の、光。

「……」

ならば、行かなくては。

戦うのは、己の役目なのだから。

己には、それしか出来ないのだから。

「……？」

月船に指示を出すが、どういうわけか従わない。
戦場に戻ろうとせず、ただ真っ直ぐ飛び続ける。

「……」

朧月の損傷は激しい。月船とのリンクに何かしらの不具合が生じたのかもしれない。

……仕方ない、置いて行くか。

「……」

月船を降り、朧月のスラスターで飛行する。

しかし、戦場に向かう己の前に――

「……？」

――月船が、立ちふさがった。

「……」

スラスターの一部を下に向け、己の前でホバリングしている。

……どうやら本格的に、故障しているらしい。

「……」

月船を押しのけて再びスラスターを噴かそうとするが、またも月船が己の前に出た。

「……」

……邪魔だな。斬り捨てるか。

そう考え月光を起動すると、月船は逃げるように飛び去って行った。

「……？」

……なんだったんだ、一体。

まあいい、とにかく邪魔はいなくなった。

「……」

では、行くか。

敵の下へ。

敵と戦いに。

敵を、殺しに。

あの頃のように。

あの頃と、同じように。

「……」

なぜなら、己は。

ただの、真改なのだから。

第２８話　福音（報復編）（後書き）

今日の真改さん

１：チートとしか思えないブレードホーミング

２：殺る気に満ち溢れたストーキング

３：目が、目がぁ……！

４：ガトリング？グレネード？月光一発でチャラでしょ？

５：敵に背中を見せるほうが悪いよね♪

以上、私が真改に対して持っている主なトラウマでした。

第２９話　福音（覚醒編）（前書き）

如月の株価と比例するかのごとく下がっていくヒロインズの株価。

おのれ、狙ったか、社長！

第２９話　福音（覚醒編）

『ほら、見て？この目、あなたにそっくり』
『鼻は君にそっくりだ。将来はきっと美人になるよ』
『ふふ、まだ産まれたばっかりなのよ？気が早いんじゃない？』
『そんなことないさ。あっという間に大きくなる。これから毎日、大変なんだから』
『そうね。ふふ、今から楽しみだわ』
『うん。元気に、真っ直ぐに育ってほしいな』
『大丈夫よ。あなたと、私の子だもの』
『……やったね。よく頑張ってくれた』
『うん。すごく頑張った。すごく痛かったわ』
『代われるなら、代わってあげたかったよ』
『嫌よ。出産の痛みは、喜びと等価だもの。母親の特権よ』
『だから代わってあげたかったのさ』
『あら、ひどい人。ふふっ』
『あははは』
『ふふ、ふふふっ。……ねえ、名前は決まったの？』
『うん。実はね、ずっと前から決めてたんだ』
『そうなの？』
『君と僕の子だからね。僕たちの名前を、付けたいんだ』
『私たちの名前？』
『そう、僕たちの名前だ』
『……？』
『江戸時代に、井上和泉守国貞っていう名前の刀工がいたんだ。大阪正宗って呼ばれるくらいの腕前で、彼の鍛えた業物は重要文化財に指定されてるんだ』
『和泉守国貞……。私と、あなたの名前ね』
『すごい偶然だろう？知った時には驚いたよ』

『じゃあ、この子の名前は、守？』
『いや、和泉守は彼が受領したもので、国貞っていうのは父親から継いだ名前なんだ。だけど彼は、後に自分だけの名前をもらって、その名前を刀に彫っている。つまりは銘だね』
『じゃあ、その名前をこの子に？』
『うん。せっかくだから、あやかろうと思って』
『ふふ、単純な人。……それで、なんていう名前なの？』
『シンカイ。真を改めると書いて、真改』
『真改……。男の子みたいな名前ね』
『けど、綺麗な響きだろう？』
『うん。素敵な名前だと思う』
『よし、なら決まりだね。今日から君は、井上真改だ――』

――――――――――

ざぁぁぁん……。
ざぁぁぁん……。

「……ん？」

ふと気付くと、少女は歌を終えていた。
踊るのもやめて、じぃ、と空を見つめている。

「……？」

不思議に思って、少女の隣まで歩いていく。

その俺の爪先を白波が濡らした。

「どうかしたのか？」

声をかけるが、少女は空を見つめたままだ。
そんな少女に倣い、俺も空を見上げた。

しばらくそうしていると、少女の声が耳に届いた。

「呼んでる……行かなきゃ」
「え？」

隣に視線を戻すと、いつの間にか少女はいなくなっていた。
きょろきょろと左右を見るが、どこにも人影は見あたらない。
歌も、聞こえない。

ただ波の音だけが、静かに響いていた。

「うーん……」

しばらく辺りを見回してみても、やっぱりどこにもいない。
一体どうなっているのか、うんうん唸りながら考えていると――――
背中に、声を投げかけられた。

「力を欲しますか……？」
「え……」

急いで振り向くと、波の中、膝下までを海に沈めた女性が立っていた。
白く輝く甲冑を身に纏った、純白の騎士。

大きな剣を自らの前に立て、その上に両手を預けている。
その顔は目を覆うガードに隠されて、下半分しか見えない。

「力を欲しますか……？何のために……？」
「ん？んー……。何のために、ね……」

その質問の答えは、もう知っている。

俺がずっと追いかけてきた、たった一つの答え。

「守るために。友達や家族、そういう、俺の大切な人たちを」
「大切な人たち……」
「ほら、世の中ってさ、結構色々戦わないといけないだろ？人によって違うだろうけど、みんながみんな、戦ってる」

夢を追いかけて走り続ける人。

平和な毎日を謳歌する人。

それだって、立派な戦いだと思う。
みんな、戦っているんだと思う。

「けどさ、不条理っていうか、道理のない暴力って、あるだろ？それに巻き込まれると、自分の戦いが出来なくなっちまう。

そういうのから、守りたいんだ」
「そう……」

女性は、静かに答えて頷いた。

優しげな微笑みを浮かべるその姿を見ていると、またしても後ろから声をかけられた。

「たとえ我が身を犠牲にしても、か？」

「うん？」

振り返ると、波打ち際のギリギリ濡れないところに、女性が立っていた。

肩の高さに切り揃えられた金髪。

深い青色の服。

どことなく見覚えがある鋭い目で、射抜くように俺を見ている。

「守るためならば、自らが傷付くことを厭わないか」

「んー……」

凛とした、鋭い声。

ひどく真摯なその声は、不思議と心地よく響いた。

「そうだな、ちょっと前まで、そう思ってた」

「ならば、今は違うと？」

「ああ、ようやくわかったよ。誰かを守るなら、大前提として、自分のことを守れなきゃいけないんだ」

「……」

自然と、気負うことなく言葉を紡ぐ。

これが俺の本心なんだと、この人に伝えたくて。

「自分を犠牲にして、他人を守る。言葉にすれば立派でかっこいいことかもしれないけど、それじゃあダメなんだ」

「ダメ、とは？」
「それじゃあ守れないんだよ。命は助けられても、心は守れない。自分が負った傷が、そのまま守った人の心の傷になる。それじゃあ、ダメなんだよ」
「……」
女性は俺の言葉を一言も聞き逃さないように、真っ直ぐに俺を見つめている。
だから俺も、俺の言葉がすべて届くように、真っ直ぐに女性を見返した。
「……そんなこと、とっくに知ってたのにな。知ってるだけで、わかっちゃいなかった」
「……」
「けど、ようやくわかった。俺はみんなを守りたい。命や体だけじゃない、その心も。そのためには、まずは自分を守れるくらいには強くならなきゃな」
「……」
「だって、俺には――俺のために、泣いてくれる人が、いるんだから」
「……」
女性は俺の言葉を噛み締めるように一度目を閉じる。
そして目を開け、また真っ直ぐに俺を見て、問うた。
「そのために、力を欲するのか」
「ああ。大切な人たちの涙なんて、見たくない。俺のせいで涙を流させるなんて耐えられない」
「……」

「みんな、俺を守ってくれてる。だから俺も、みんなを守りたい。そうやってみんなで力を合わせて、助け合って守り合って。……そういうのは、きっと素晴らしいことだと、思うから」

「……そうか」

女性は満足そうに頷いた。

鋭い目にどことなく優しげな雰囲気を滲ませて、小さく微笑みを浮かべて。

「……お前になら、任せられる」

静かに、そう呟いた。

「え……？」

気付けば、もう女性はいなくなっていた。

そしてまた、騎士の女性からの声。

「……守りたい。そのための力が、欲しいのですね……？」

「ああ。……いや、ちょっと違うな」

「……？」

「守りたい、じゃない。守るんだ。絶対に、守る。守り抜いてみせる」

「……なら、行かなきゃね」

今度は白い少女の声。

俺の隣に立ち、小さな手を俺に伸ばしている。

俺は迷わずに、その手を取った。

途端に、世界が眩い白い閃光に包まれる。
視界が光に飲み込まれる直前に、白い少女と騎士の女性が並んで立っているのが見えた。

そうして、ふと気付いた。

俺はあの、白い騎士に、なんとなく見覚えがあるような気がする――

――――――――――

「か、ふ――――」
「――――――」

福音は箒の首を締め上げながら、翼にエネルギーを送り込む。
零距離、全方位から銀の鐘（シルバー・ベル）を浴びせ、一息に止めを刺すつもりだった。

（まだだっ、まだ、なにか――――）

酸欠により薄れて行く意識で、箒は必死に考える。
この状況を脱する一手を。
福音を倒す手段を。

だが。

（――ま、――だ――）

視界が暗くなり、思考が閉ざされる。
限界が近づいていた。そして福音の翼は、今にも光弾を放とうとしている。

「Ｌａ――――♪」

勝利を歌うように、福音がマシンボイスを発する。
為す術のない箒に、一斉に光弾の雨を浴びせようとして――

ズガンッ！！
「――――――――！？」

――背中から、強烈な鉄杭の一撃を受けた。

「箒を……」

ガーデン・カーテンの四枚のシールドを犠牲にして致命傷を避けていたシャルロット、その左腕のパイルバンカー〔灰色の鱗殻（グレー・スケール）〕による攻撃である。

「放せぇぇぇっ！！」

ズガンッズガンッズガンッ！！

灰色の鱗殻のシリンダーが回転し、立て続けに鉄杭を撃ち込む。
その猛攻に福音は箒を放し、エネルギー翼をシャルロットに向けた。

「セシリア、箒を！」
「わかっていますわ！」

意識を失った箒を、シャルロットから分けられたシールドエネルギーでＩＳを再起動したセシリアが抱き止めた。
箒の頬を数回張り、呼び掛ける。

「箒さん！起きてくださいっ！」
「セ、シ……リア？無事、だったのか……？」
「ええ。……ブルー・ティアーズが守ってくれましたわ」

自らを包む装甲を誇らしげに撫でる。
それに応えるように、陽光を浴びた装甲が、一瞬だけきらりと光った。

「……戦えますか？」
「……当然だ。いくらでも戦ってやる。何度でも立ち上がってやる」
「その意気ですわ。悔しいですが、わたくしにはほとんどエネルギーがありません。機動と攻撃を両立できません」
「……だから？」

まるで悔しくなさそうな顔で言うセシリアに、箒も唇の端を釣り上げて聞いた。

そしてセシリアはニヤリと笑い、

「ですから、ここから援護射撃をさせていただきます。まあ、わた

くしが狙われた時は、わたくしが墜とされるだけの話ですし」
「安心しろ。お前がやられている隙に、福音の背中を切り刻んでやる」

お互いに不敵な笑みを浮かべて、二人はそれぞれの役目に着いた。
箒は二刀を構え、福音の猛攻を必死に凌ぎ続けるシャルロットの援護に向かう。

「シャルロット、策はあるかっ！？」
「翼だ！どうにかあれを切り落とさないとっ！！」
「わかった、私は右を狙う！左は――」
「あたしがもらったあああっ！！」

猛々しく吼えながら、鈴が双天牙月を投擲する。
巨大な刃が高速で回転しながら飛翔し、福音の翼を片方切り落とした。

「「鈴っ！！」」
「甲龍の燃費を舐めんじゃないわよっ！！これだけあれば、アンタをぶちのめすには十分なんだからっ！！」

投げられた双天牙月がブーメランのように戻ってくる。
鈴はそれを前進しながらキャッチし、そのまま福音に躍り掛かる。

だが福音は切られた翼を瞬く間に再生し、再び光弾を放つ。

消耗している箒たちには苛烈に過ぎる攻撃。全力で防御し、どうにか凌いだものの、いよいよ後がない。

「ぐうっ、翼を再生するとは……！」

「ホントにとんでもないね……！」
「次食らったらさすがにヤバいわよ！」
「一か八かだ、一気に……！？」

まだ食らいついてくる箒たちを振り払うべく、福音は翼を大きく広げ、その場で回転を始めた。
翼に打ち据えられ、弾かれる。

そして体勢の崩れた箒たちに翼を向け――

「悪いが、それはもう見た」
「――――――！？」

ステルスモードで至近距離まで近づいていたラウラによる、レールカノンの連射で吹き飛ばされた。

「ふん、ようやく隙を晒したか」
「ラウラ、よく無事だったな」
「パンツァー・カノーニアは砲戦用パッケージだぞ？遠距離攻撃に対する防御くらい、あって当然だろう」

その言葉通り、パンツァー・カノーニアには狙撃対策として、左右と正面を守る分厚いシールドが取り付けられている。
それにより、すんでのところで撃墜を免れたのだ。

「もっとも、二度目は保たんだろうからな。機を待たせてもらった」
「ラウラ、僕たちを囮にしたの？」
「ああ。なんだ、文句でもあるか？」
「いや、むしろ礼を言いたいくらいだ」
「僕たちなら耐えられるって、信じてくれたんだね」

「……ふん」
「なに照れてんのよ。素直になりなさい、後でナデナデしてあげるから」
「お前は私をなんだと思ってるんだ」
そんな遣り取りをしながら、全員が油断なく福音を睨み付ける。
「さっさと止めを刺さなかったこと、後悔させてやる」
余裕のある者は誰一人としていない。光弾に当たれば即撃墜となりかねない。
「出し惜しみは一切なし。全弾撃ちきるつもりで行くからね」
そしてこれは訓練ではない。撃墜とは、すなわち死を意味している。
「援護はお任せになって。わたくしの底力、見せて差し上げますわ」
だが、誰一人として怯まない。
死を恐れていないのではない。
死ぬのは怖い。とても怖い。
「もう許さない。ボコボコのギタギタのケチョンケチョンにして、海底に沈めてやる」
それでも。
みんなで戦うと、決めたのだ。
全員で帰ると、誓ったのだ。

「遠距離から撃ってもどうせ当たらん。今度は私も前に出る」

それには、全員の力が必要だ。誰が欠けても勝てない。

それを全員が理解していた。

だから、決して怯まない。

この戦いには、必ず勝たなければならないのだから。

――――――――――

「……」

見えてきた。

福音と、箒たちの戦いが。

「……」

やはり月船がなければ長距離飛行には時間がかかる。朧月のダメージも深刻なので、消耗は抑えたかったのだが。

「……」

まあ、無い物ねだりをしても仕方あるまい。いざともなれば、己の命を薪代わりにくべればいい。

「……」

右腕の調子を確認。

……問題ない。まだ動く。

続いて月光。

こちらも問題ない。流石は如月製、頑丈だ。

「……」

ここから見た限りでは、福音が優勢。

筈たちも必死の反撃を繰り返しているが、決定打がない。

「……」

先ほど剣を交えてわかったが、福音はただ暴走しているわけではないようだった。

何か明確な意志がアレの戦闘力を支えている。そう感じた。

「……」

関係ない。

己はただ、寄って斬るのみ。

意志も、想いも、願いも、祈りも、信念も、諸共に斬り捨てるのみ。

「……」

忘れるな。

己が何者なのか。

間違えるな。
己の為すべきことを。

自惚れるな。
己に、誰かを守る資格などない。

「……」

だから、殺せ。
火の粉が降りかかる前に、殺し尽くせ。

彼らと同じ道を歩めると想うな。

安らかに笑うことなど願うな。

人らしく生きたいと祈るな。

「……」

やるべきことはただ一つ。

敵という敵を道連れに、地獄へと墜ちて逝け。

――――――――――

「おおおおっ！！」

雄叫びと共に斬り掛かる。
紅椿のエネルギーは残り少ないが、みんなはそれ以上に余裕がない。
私一人残っても仕方がないのだ、ならばここで使い切る覚悟で挑まなければならない。

「せいっ！」

私の斬撃を、福音は後ろに退がってかわした。レーザーによる追撃も光弾に撃ち落とされる。

「はあっ！」

鈴が福音に背後から斬り掛かる。衝撃砲を撃つ余裕がないのか、双天牙月による攻撃だ。

「ちぃっ、やっぱ速いっ！」
「無理はするなっ！」

回避行動をとる福音を、ラウラの砲撃が追い立てる。正確かつ強力な連射を受け、福音の機動が一層激しくなった。

「これならどうっ！？」
「こちらも差し上げますわっ！」

シャルロットがマシンガンにより弾丸の雨を降らす。
単発の威力の低下を、セシリアの狙撃が補う。
少なくない弾丸が命中するが、それでも福音はとまらない。

「いくらなんでもタフ過ぎるよ！」

「軍用とはいえ、異常ですわ……！」

装甲の強固さだけでなく、再生する翼、圧倒的な機動力と火力。確かに異常と言う他ない性能だ。

こちらはまだ学生とは言え全員が専用機、私を除く四人が代表候補生であり、ラウラに至っては現役の軍人だ。更に言えば福音は連戦だというのに、まだ余力がある。

だが、それでも。

「負ける……ものかあっ！！」

雨月と空裂のレーザーを連射しながら突撃する。

逃げ場を塞ぐように攻撃を放ち、機動を制限された福音をラウラが狙い撃つ。

反撃に放たれる光弾を撃ち落とし、落とし切れなかったものを歯を食いしばって耐える。

「ぐ、う、おおおあぁぁっ！！」

狙うのは、福音の頭部から伸びる翼。

全身から生えている小型の翼も恐るべき攻撃力を持っているが、機動力を支えているのは主翼だ。それさえ奪えば、動きを封じられる。

「チェェェストオオォォッ！！！」

「――――――――！！」

両の刀を振り上げて、渾身の力を込めて振り下ろす。

だがその一撃は、翼を重ね合わせることで防がれた。

「あああぁぁっ！！」

しかし私は刀を退かず、スラスターを全開に噴かして力ずくで押し込める。

福音の翼と二刀のエネルギーがぶつかり合い、派手な火花を散らした。

「Ｌａ――――♪」

二刀を受け止めながら、福音が光弾発射の準備をする。

この距離だ、食らえばひとたまりもないだろう。だがここで退いてもジリ貧になるだけだ、このまま押し切るしかない。

私一人では不可能だろう。

だが私は、一人ではない。

「これで――――！」

「――――どうよっ！」

頭上から、人影が二つ。

シャルロットと、鈴。

二人は一気に降下しつつ、シャルロットは左の、鈴は右の拳を握り締めている。

そして、すれ違い様に。

シャルロットは灰色の鱗殻の鉄杭を、雨月の峰に。

鈴は全衝撃砲の最大威力を拳に乗せて、空裂の峰に。
それぞれ、叩き込んで行った。
「「「行っっっけえええぇぇっ！！！」」」
二人の力を受け取った刃が、福音の翼を断ち切った。
「――――――――！！」
「はあああっ！！」
私は二刀を振り抜いた勢いのままに一回転し、紅椿の爪先から伸ばしたエネルギー刃を踵落としのように叩き込む。
その一撃は、福音の装甲を切り裂いたが――
「ちぃっ、浅い……！」
「Ｌａ――――♪」
即座に反撃に出る福音。
全身から生える小型エネルギー翼の数をさらに増やし、その全てが眩い輝きを放つ。
だが、主翼はいまだに再生されていない。
今が最後の好機、ここを逃せばもう後はない。
――――だから、今しかないのに。
「エネルギー切れ……！？くそっ、ここまで来て……！！」

紅椿の装甲が輝きを失う。
雨月と空裂もただの刀に成り下がり、悪足掻きに振るった一撃は容易く弾かれた。

目の前には、一層輝きを強める福音の姿。
次の瞬間に放たれる光弾の嵐は、私を跡形もなく消し飛ばすだろう。

ここまで、来て。

あと一手、届かない――――

そう、私の心が折れかけた、その時。

福音が、急に視線を上げた。

あまりに急だったので、私もついその視線を追ってしまう。

すると、そこには――――

「真……改……！？」

傷だらけの体で、それでもなお衰えぬ殺意を纏った真改が、一直線にこちらへ向かって来ていた。

「キアアアアア……！！」

福音が獣のような声を上げる。
翼の輝きが一気に増し、迷わず真改に狙いを付ける。

そして、一斉射撃。

「……！！」
「――――――！！」

真改と福音の視線が交錯する。そこには、お互いを殺すという意志だけが込められていた。

「真改っ！」

朧月はもう限界だ。光弾の連射に耐えられる筈がない。
だというのに、真改はただ真っ直ぐに、弾幕の中に飛び込んで行った。

「なんて無茶を……！！」

水月を連射し、弾丸よりもなお速く。
月光の光が尾を引きながら飛翔するその様は、さながら彗星のようだった。

そして、ついに間合いに踏み込む。

真改は振り上げた月光を、福音を両断するべく振り下ろす。

福音は光弾では真改を止められないと考えたのか、全身から生えた翼を殻のようにして身を守る。

光の剣と、光の盾。

その激突は、盾が勝利した。

紙一重のタイミングで主翼を再生した福音は、小型の翼と主翼で二重の盾を作り、その間で炸裂させた光弾のエネルギーで月光を相殺したのである。

「そんな、月光が……！」

それは言うなれば、捨て身の防御。自ら大きなダメージを受け入れることで致命傷を回避する、苦肉の策であった。

だがそれは、現状における最高の一手だと言える。

なぜなら真改は、今の一撃で全ての力を出し切ったからだ。

「……っ！」

「真改っ！」

月光が輝きを失う。

スラスターも水月のカートリッジも使い果たしたのか、朧月はもう浮いているだけで精一杯の様子だ。

「Ｌａ――――♪」

そこに、福音が翼を向ける。

三度立ち向かって来た敵を、今度こそ仕留めるために。

「真改あああいっ！！」

「……！」

なけなしのエネルギーを使い切り、真改の下へ向かう。

抱きかかえるようにして、福音の射線から隠した。

（お前は、こんな……！こんな細い体で、ずっと……！）

真改は私を振り解こうともがくが、碌に体力も残っていないのだろう、抑えるのは容易かった。

「すまない、真改……。だが、お前だけでも……！」

「……放せ……！」

放さない。

これ以上、傷ついて欲しくない。

だから、絶対に、放さない。

「Ｌａ――――♪」

そして、光の洪水が――――

―――――――――

閃光、轟音。

海上に紅蓮の花が咲き、海面が打ち震える。

その中心にいる真改と箒、二人の命が絶望的であると全員が確信したが、誰一人として認められない。

戦闘の最中でありながら、ただ呆然と、爆煙を眺めている。

事実を受け入れられず、なんの反応もすることが出来ず、ただ、呆然と。

――その時。

「……雪？」

それは、その場にいる全員の呟きだった。

雪が、降っていた。

七月の上旬に。

しんしんと、優しく。

輝くような、白雪が。

爆煙が晴れる。

その中心に、それは在った。

「……間一髪。どうにか間に合ったな」

傷一つない、純白の装甲。

「もう大丈夫だ。これ以上は、やらせねえ」

その装甲の周りを漂う、白色の結晶。

「俺の仲間は、誰一人としてやらせねえ」

手にしているのは、最強の名を継ぐ、一振りの刀。

「だから、さ」

幼なじみの少女たちを、その背に庇い。

「安心して、よく見とけよ」

新たな決意の象徴、白式第二形態〔雪花（せっか）〕を身に纏った。

「俺の、剣を」

織斑一夏が、そこにいた。

第２９話　福音（覚醒編）（後書き）

やっちまったぜ、白式魔改造……！

雪花の詳細は次回で。

ちなみに雪花とは雪片を花にたとえて言う言葉で、雪の結晶のことです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0183w/

ＩＳ　―イノウエ　シンカイ―

2011年11月16日21時13分発行